



愛の言葉



月之野 誠

愛の言葉

「ねえ、あたしのこと愛してる？」

と女は言った。

「うん、愛しているよ」

少し間を置いて、微笑みながら男はそう言った。

それからというもの、その男と女はしばらくお互いを見つめ合ったまま黙ってしまった。

窓の外では冷たい風が吹き抜け、時折何かを報せるように窓を叩いていく。分厚い灰色の雲は威圧的に世界を見下ろし、それに萎縮するように街は静まり返っていた。もしかしたら怯えているのは住人だけで、街自体は白く染まるのを息をのんで待ちわびていたのかもしれない。そんな静けさが辺りにしんしんと漂っていた。

時計の長針が綺麗な半円を描き切る頃、女がようやく口を動かす。

「ねえ、愛をもっと明確に表現出来ないの？」

落ち着いた表情とは裏腹に、女の声は思ったよりも鋭く部屋に響き渡った。そして思ったよりも穏やかに、男はその言葉を受け入れた。

男はじっと宙を眺め、目の前のコーヒーカップが立ち上らせていた湯気の姿が無いのを確認すると、ソファから腰を浮かせた。そして優しく女の頬に口づけをした。

「これ以上明確な表現があるとは思えないけど」

男は女に最大限の敬意を払いながらそう言った。

再び長い沈黙が訪れる。

気が付くと男と女は揃って窓の外を眺めていた。雪が降り始めていたのだ。しかし二人が見ている景色は全く違うものであった。片方には、それは宇宙の神秘のような壮大で幻想的な景色に映っていたであろう。そしてもう片方には、それはただの現象にしか映っていなかったのだ。

ある。

男は目の前のカップに初めて口をつけ、熱の冷めたコーヒーを胃に流し込んだ。女はその様子を静かに眺めている。そして男は慎重に口を開いた。

「君は愛を明確に表現出来るって言うのかい？」

そしてゆっくりと革張りのソファに身を沈めた。

男の身体がそのソファに完全に馴染むのを確かめてから、

「ええ、出来るわ」

女は立ち上がり、

「さようなら」

そう一言だけはっきりと言い残し、部屋から出て行ってしまった。

男は女に振り返ることも、その姿を追い掛けることもせず、ソファに身を沈めたまま窓の外を眺めている。

「この雪ほど明確なものはない」

男は一人そう呟いて立ち上がり、部屋の扉を開け、女とは違う方向へ歩き出した。

雪は止むことなくひっそりと降り続いていた。

僕は静かに本を閉じた。

「ね？面白いでしょ？」

隣で歩美が僕の顔を覗き込むようにして言った。

「うーん。よくわからないや」

僕は本の表紙を眺めながらそう答えた。作者の名前は聞いたこともないし、森の広場みたいな綺麗な風景画が表紙には描かれていたが、残念なことに主張の強過ぎる題名がそれを台無しにしていた。

「ねえ、高志はさ、雪が幻想的に見えていたのはどっちだと思う？」

「うん」

僕は頭の中でもう一度その短編小説なるものを振り返り、「女の人かな」と、自分自身に何度か確認しながらうなずいた。

「やっぱりそうよね」

期待した答えと違ったのか、歩美はそう言うと短いため息をひとつついて、窓の外に顔を向けてしまった。

「歩美は違うの？」

僕は気にしているのを悟られないよう、さり気なさを装いながら聞いてみた。

「あたしは男の人だと思うわ」

一つ間を置いて、歩美は外を見つめたまま優しく微笑んだ。

窓の外では穏やかな午後がゆっくりと流れている。空から白い雪が舞っていたのならもう少しロマンチックだったかもしれないが、もう季節は春で、そこには長い冬を乗り越えてようやく身

体を伸ばせると、そう大きく伸びをしたような爽快な四月の空が広がっているだけだった。

「今年は雪が降らなかったね」

歩美はそう言って窓ガラスの向こうにある街並を少し寂しそうに見つめた。

まだ風は少しひんやりとしていたが、空から降り注いだ陽光が街を優しく照らしている。春が来たんだな、と僕も一緒にその街並をしばらく眺めていた。

僕と歩美は高校の同級生で、今年の冬に高校を無事卒業し、歩美は第一志望の大学、僕は残念ながら第一志望の大学には落ちてしまったが、二人とも大学進学という目標は何とか果たせた。つまり、今はそれまでの束の間の休息で、僕と歩美はいよいよ明日に迫った大学の入学式の前日に、こうして都内の喫茶店で名もない肩書きの最後の余韻に浸っていたのである。

「ところで高志。竜彦にはちゃんと言ったの？」

「まだ言っていない」

竜彦とは同じ高校の同級生で、一応僕の大親友だ。

「どうして言わないの」

「ほら、あれだよ。タイミングがさ」

人差し指を宙で遊ばせながら、僕はしようがないという顔をした。

「またタイミングだって。あのね高志、何度も言っているけど、タイミングっていうのは自分で掴むものなのよ」

「それってチャンスじゃなかったっけ？」

「どっちも同じ」

その人差し指を止めなさいと、歩美は無言で僕の指を睨みつけた。

「明日会ったらどういう顔をすればいいのよ」

「いつも通りの顔をすればいいさ」

「それが出来れば苦労はしない」

カタカナで明記された文を読むようにして歩美はテーブルに顔を伏せてしまった。

「それに高志が一番そういうの苦手じゃない。あなたの嘘は子供でもわかるわ」

歩美はテーブルに重ねた手の甲に顎を乗せ、再び外の景色を見つめた。

僕らはこの春休みと呼べるかどうかわからない短い期間のあいだ、ほとんど毎日一緒に過ごしていた。親友の竜彦の誘いもほとんど断っていたから、僕も明日竜彦に会うのは久しぶりなのである。つまり僕ら三人は、同じ大学に合格し、気持ちは違えどそこに進学することを決めた、いわば腐れ縁という何とも薄気味悪い関係なのである。そう言えばこの腐れ縁が決まった時竜彦が、

「何か気持ち悪いな」

「何が？」

「みんな腐れ縁って言うけどさ、縁が腐っているのになんで離れられないの？」

「それ、これから大学生になろうとしている奴が言うセリフ？」

「じゃあ高志、お前はわかるっていうのかよ」

「わかるよ」

「言ってみろよ」

「ほら、あれだ。もともとの腐れ縁というのは、くさりえんと呼ばれていて、昔は鎖のように切れない縁って意味だったらしいんだ。それがどこかで関係が腐っているのに全然離れられないという意味に変わって、腐れ縁と呼ばれるようになったんだよ」

「お前よくそういうのすぐに思いつくよな」

「思いつく？」

「だって嘘だろ？」

「どうしてわかんだよ」

「お前が嘘をつく時、右手の人差し指がぐるぐる回るからさ」

竜彦はそう言って僕の目の前で自分の人差し指をぐるぐる回していた。

なるほど。僕は自分の人差し指を見つめて、すべてはお前のせいだったのかと睨みつけた。それを見て歩美が目の前で笑っている。

「何してんの？」

「別に」

僕もテーブルの上で重ねた手の甲に顎を寄せ、伏せるような格好で外の景色を眺めた。

腐れ縁ねえ、と誰に言うでもなく呟く僕は、実はこの一連の出来事が腐れ縁でもなんでもないと知っていた。

僕は歩美のことが好きだった。

彼女と初めて会ったのは高校一年生の時。僕の名前は塚本で、歩美の名前は吉岡。当然、入学時は出席番号で席順が決まる。これはもはや常識である。名字があ行で始まる生徒は若い番号になるし、わ行の生徒の多くは最後ということになる。僕はだいたいいつもクラスの人数のちょうど真ん中辺りで、席もだいたい真ん中だった。そのことに別に不満はない。だけど僕はいつも最初になる彼らが少し気の毒に思えた。彼らとはあ行で始まる人のことで、その中でも相内という名前が僕の中で最強だった。実際に小学校から中学校まで一緒だった相内という奴がいて、そいつは必ず出席番号が一番だった。何をするにも一番最初で、先生に指された回数もおそらく一番だったであろう。これが戦国時代であつたら、相当な実力の持ち主じゃないと生き残れない。名字があ行の武将から最前線に送り出され、もちろん陣形の最前列もあ行の武将。当時それは名誉なことだったかもしれないが、それは地位の高い武将か実力者に言えることであり、徴兵された平民にしてはたまったものじゃない。そしてその相内は運動の出来る武将でも、頭の働く参謀でもなかった。至って普通の平民だったのである。一番というレッテルを貼られ、何かハマをする度にみんなから少し残念な目で見られ、中には同情する奴らなんかもいた。僕もその一人で、新しい学級になる度に、僕はその相内に頑張れよと声を掛けなくなった。しかし実はそうじゃないということを僕は知ることになる。中学三年になる時だった。新しい学級になって浮かれている僕らの前に先生が転校生を連れてきた。みんなの前で紹介され席につく転校生。なんとそいつ

は相内の席の前に座ったのだ。僕は驚いて黒板を見つめると、そこには愛秀雄という名前が書かれていた。驚いたのは僕だけじゃない、クラスのほとんどが会話を止めていた。そして僕は相内の顔を見た。その時の彼の顔は今でも忘れられない。驚きと落胆と嫉妬が入り混じった複雑な顔をしてその転校生の背中を見ていた。そしてそれを隠そうと取り繕う表情が、一層歪なものに変えていた。彼は喜んでいなかったのである。彼は一番になることに嫌気がさしていたわけではなかったのだ。学級委員が決まっていない時期は仮という名目でクラスをまとめなくてはならなかったし、体育の時間などでは彼の記録が目安となる。社会に出る前からどうにもならないことと戦い、敗れ、受け入れる道を選んできた彼にとって、むしろそれは彼のステータスの一部となっていたのだ。僕のようなだいたいの奴にはわからないことなのだろう。その時のことを僕は思い出さずにはいられなかった。何故なら、その相内とは高校も同じで、そして今僕の前に座っているのだ。

「常識に捕われてはいけない」

新しい担任は自己紹介の後そう言って、まずは席替えからだなど、目が点になっている僕らに綺麗に折り畳まれた紙を渡していく。

「そこに書かれた番号が君たちの新しい番号だ」

そう言って早く席を移動するよう促した。

僕は紙を開き、その紙に書かれた番号を確認して席を移動する。そして新鮮味のない見慣れた景色に佇んでから、ひとつため息をつく。最初に座った席からほとんど移動していなかったのだ。僕は出席番号順でも、唐突な席替えでも、結局はだいたいな場所に落ち着くだいたいな奴なんだと項垂れていると、その相内が僕の目の前に座った。僕は何だか複雑な気持ちになった。彼に残念だったなと声を掛けてやりたかったが、一番残念なのは僕な気がして何だかやりきれない気持ちになった。

僕はもうひとつため息をついて、教室の窓の外に目を向けた。その時僕の目に止まったのは、澄み切った空でもなく、窓から見えるまだ見慣れていない新しい景色でもなく、隣で僕と同じようにして空を優しく見つめる女の子だった。

そして今日の前にいる歩美がその女の子だったのである。僕は彼女を三年間思い続け、卒業を機に告白をした。それは長い道のりであったかもしれないが、彼女がうなずいてくれた時、そんなことはすぐに忘れてしまった。報われるとはこういうもの何だろうか。ふいに頭を過る僕の高校生活は今ではキラキラと輝いたものになった。こうして今一緒にいられるのも、僕が第一志望の大学にわざと落ちたからなのだろうと思うと、本当に良かったと思う。というよりも、僕の第一志望は最初から歩美と同じ大学で、それを言うのが恥ずかしく僕はずっと違う大学を目指している振りをしていた。だから僕には竜彦や歩美と違って腐れ縁なのではなく、成るようにして成った結果なのである。まさか竜彦までも同じ大学になるとは思っていなかったが、それによってこれから始まる大学生活も一層楽しみになったことは事実だ。

とは言うものの、こんな不純なことで大学を決めていいのだろうかと頭を痛めているのも事実である。そんな複雑な顔をしていると、

「高志はサークルとか決めた？」

春の陽射しを悩ましそうに見つめる僕に、歩美が声を掛けてきた。

「まだ決めてない」

「良い所が見つかるの良いね」

「歩美は決めたの？」

「内緒」

そう言っていたはずなのに微笑む歩美。大学生活が終わる時、またこうして目の前で歩美が微笑んでくれていたら良いなど、僕はすっきりと晴れ渡る四月の空に一人でそう願いを込めた。

乗ってくかい？目の前の車の窓ガラスが突然開き、その中から誰かが話しかけてくるのが聞こえた。乗ってくといいよ。また別の誰かが車の中から話しかけてくる。訪れた夜が辺りを万遍なく暗闇で塗りつぶし、それが一通り終わると同時に今度は限らない沈黙を連れて来ていた。その暗闇を申し訳無さそうに照らす街灯の下で男は一人戸惑っていた。突然開いた窓ガラスの向こうからいきなり話しかけられたからではない。その言葉に誘われるようにして、今にも自分が車に乗り込みそうになっていたからだ。ちょっと待てよ。男は寸前の所で立ち止まる。一体自分はここで何をしているんだ。車の中からはケタケタという音質の違う2種類の笑い声が聞こえてくる。ここで何をしているんだ。頭の中で突如鳴り響いた警戒音に男は顔を強ばらせる。そして後部座席に向けられた足に緊張感を注ぎ込み、直前までの記憶を辿ろうとゆっくりと頭を持ち上げた。

男は女と別れてから白い雪で埋め尽くされた街を彷徨うように歩いていた。項垂れるようにしてまだ街に馴染んでいない柔らかい雪を一步一步、その新雪の余韻に浸りながら足を進めていく。今自分は一体何に失望しているのだろう。男は肩に積もる雪もそのままに、心の中に浮かび上がりつつある感情を捉えようと内なる自分と向き合っていた。男は確かにその時何かに失望していたのだ。喪失感と言ってもいい。しかしそれが何なのかがよくわからなかった。まるで地面を覆い尽くしている真綿のような白い雪が頭の中を浸食しているかのようだった。男はその何とも言えぬ感情の出生を見つめようとするものも、どこを探したらいいのかもわからなくなり、静寂に包まれた街をただぼんやりと歩いているに過ぎなかった。

電柱に取り付けられている街灯は、老人のような佇まいで先程よりも弱々しく辺りを照らしていた。男はさらに記憶を遡ろうと頭上にある空を見上げた。昼間停滞していた雨雲は既にこの街を去り、開けた夜空には冬の星座がいくつも点在している。ペテルギウスやシリウスなどが空にくっきりと光の跡を残し、凜として輝いているのが見える。男はそれらの星座を空でしっかりと区分することが出来た。あれがオリオン座でその下にあるのがおおいぬ座、という風にくつもの星を丸で囲むようにしてその所在を明らかにしていく。春だろうと夏だろうとこの街で見つけられる星座のほとんどを男は知っていた。しかし男は決して参考書の手順に従って星と星を線で結び、星座の姿を露にさせるようなことはしなかった。それは何だかナンセンスなことだと男は思っていたのだ。線で結び明確に提示しないとわからないということは想像力の乏しさを証明するようなものだったし、何よりロマンチックじゃなかった。大昔の人はもっとたくさんの星座を導き出していたに違いない。きっとそれぞれがそれぞれの星座を夜空に描き、毎日違う空を見

ていただろう。現に男にも自分で勝手に作った星座がある。ひな鳥座に猫の手座、それからクリップ座。ウィスキーに見立てたジャックダニエル座なんてのもある。昨日見つけた星座を発見することもあれば、全く違うものに見える時もある。男はそれこそがロマンチックなことではないかと思っていたのだ。すべてを明確にする必要なんてない。そして男にとって愛というものもそういうものであった。

男はふと昼間の女との会話を思い出した。女は執拗に愛を求めてきた。しかもその愛を明確に表現しろと言ってきた。そして自分はそれに答えることが出来なかった。よく理解出来なかったのだ。愛を明確に表現するとは何なのだろう。一体どういうものが明確な表現と言えるのだろうか。そしてひとつため息を夜空に吐き出し、もう一度冬の星座たちを見つめた。

一つ一つの想いがきらきらと輝いて、それぞれが歴史を物語っている。その形なんて様々だし、何も無理にこれとこれが繋がるからそれが正しい星座なんだと示す必要はない。愛も同じである。もし必要なら丸で囲むぐらいでちょうどいいんだ。男はそんなことを考えながら、昼間女と別れてからも今と同じようなことを考えていたことを思い出した。そして失望感とも喪失感とも言える感情はそこから生まれていたことも思い出した。さらにそれから、その丸で囲むという行為は何なのかということに考えを巡らせていたことも思い出した。必要なら丸で囲むと言ったが、それはどういうことなのか。またそれをどう表現するのか。確かそんなことを考えながら街を歩いていたことを今はっきりと男は思い出していた。そして気付いたら、いつの間にか訪れた夜の街に溶け込み、名前もわからない通りで一人立ち尽くして、さらには車に乗ったわけの分からない男たちに絡まれているのだ。

男は目の前に止まっている車に再び視線を向けた。丁寧に磨かれた漆黒の車体は薄明かりが差す暗闇の中でも煌々と輝き、アイドリングしている車のエンジン音は滑らかに夜の静寂に溶け込んでいる。男からしたら、それはとても紳士的な振る舞いのように映っていた。きっと高級車なのだろう。男は車のことに詳しいほうではなかったが、高級車とそうでないものの区別ぐらいはついた。手入れが行き届いている、というのは持ち主の問題であり、そういうレベルの話ではない。高級車とはその存在や立ち振る舞いからしてもう既に他とは違う高貴な存在感を放ち、なおかつそれを自負しつつも紳士的であるものこそが高級車であると男は考えていた。しかし今日の前に止まっている車が本当に高級車であったとしても、それは男がその車に乗ろうとしていた理由にはならない。どうして自分はこの車に乗ろうとしたのだろうか。男は声の聞こえてきた運転席のほうを見つめた。開けられた窓からは黒革のグローブが嵌められた手がハンドルに乗せられているのが見える。訝しがりながらも男は窓ガラスから中を覗いてみた。

中を覗くと運転席には黒いスーツの男が座っていた。黒のシルクハットを被り、皺一つないスーツからは滑らかな光沢が放たれている。ネクタイにしろワイシャツにしろ、どれもこれもが見たことのない艶を出していた。そして革のシートに沈めた運転席の男の身体は意外にも細かった。それだけいろいろなところに手入れが行き届いているのならば、肉体も当然鍛え上げられていると思っていたから、男には見た目以上に痩せ細って見えた。しかし脆弱という感じはしない。むしろ研ぎすまされた結果そうなったという感じの細さで、それは痩せているというよりも細身

の体型と呼べるような種類の細さだった。細身の男は窓から覗かれていることに気が付いている、といった感じで、視線をフロントガラスに向けたまま話し始めた。

俺は何度も同じことを言うのは好きじゃない。伝わってなければそれでもいい。ただ、俺らは君を待っている。

細身の男は苛ついてもいなければ、怒ってもいなかった。ただ現在の状況を的確に説明しただけに過ぎない、というような温度の低い言い回しで淡々と話した。そして細身の男が言い終わると同時に、助手席に座った男が、どうするんだい？と席から身を乗り出し、こっちをしっかりと見つめてそう言った。

助手席に座った男は運転席の男と対照的に太っていた。しかし太っている割には、その肉付きのいい身体は余りにも最もな理由でその男を支配しているといった感じで、献身的にそこに居座っていたのだ。その男もそれがお気に入りの様子で、肉付きのいい身体を絶妙に着こなしているというセンスさえも窺えた。簡単に言うと、太った体型がとてもよく似合っていたのである。そして窓越しの男を見つめる顔もどこか愛嬌があり、それが作られた笑顔でないことを男は一目で理解した。すべてがとても自然であり、その太った男に窮屈なものは助手席のシートだけといった感じだった。

この車は何処に向かうのか。男は細身の男にそう聞いた。

どこに行くかは大した問題じゃない。前方を見つめたまま細身の男は続ける。

それに君だって、君自身にしたってどこに行くのか決まっているのかい？

決めちゃいなよ。太っちょがそれに続く。

確かに男にはこの後どこに行けばいいのかがわからなかった。家に向かうとかそういう話しじゃない。これから先自分はどこに行くのか。どこに向かえばいいのか。人生という長い道のりの上をなんとなく歩いている自分の存在に気がついた。そしてその男の言っていることは一理あった。行く先を聞いたところでその答えがどこであろうと、それを判断する基準みたいなものがそもそもないのだ。細身の男は続けて話す。

乗るか乗らないか。最終的な問題はいつも二択問題なんだよ。細身の男は何かを見透かすようにそう言った。

二択問題。太っちょは満面の笑顔で繰り返す。

何を迷っているのかわからないけれど、何が待ち受けているか、何が起こるのか、それはどこに行ったらって同じことだ。

誰にもわからない。

いいかい。俺たちは君を待っている。しかも好意的にだ。ほら見てみなよ。また雪が降ってきたじゃないか。

白い雪。

気がつくと車のボンネットに降りた細かい雪が、徐々にその姿を現し始めていた。

俺たちはこの雪が降り積もる前に出発しなければならない。

ならない。

時間は限られているんだよ。

でも少しあるよ。

男は黙って二人の話しを聞いていた。太っちょのオウム返しのような言葉が何故か安心感を与えてくれている。しかし男はまだ決め兼ねていた。これからどうするか、というよりはどうしたいかがよくわからなかったのだ。

細身の男がそれを見て（実際には見ていないが）頭に手を抱え、

一体何がわからないんだい？何を明確にしたいんだい？

明確。

男はその明確という言葉にはっとした。そして女のことを再び思い出す。自分は何を明確にしたいんだろう。

いいかい。何かを形作るといのは、何かをはっきりさせるかもしれない。だけどある一方では、それはあまりにも多くのものを曖昧にってしまうんだよ。

そんなもんさ。

細身の男はさらに続ける。例えば空を見てご覧よ。今は夜だから見えないけど、どれくらいの電線が道の上に張り巡らされていると思う？今度見てみるといい。俺たちはその存在をほとんど知らない。気付かないと言ったほうがいい。その遥か上には空があるからね。そしていつも雲の形や天気のことばかり気にしている。確かに虹が架かった空は、それは最高に気分が良いものだけれど、電線の存在にはやはり気付かない。気付くとすれば雨や雪や風が強い日だ。それもものすごく強い日にね。激しくたわむ電線を見て、その存在が露になる。いつも見上げている場所にこんなに電線があったんだって。そして住宅を結ぶ電線を辿ったりして、この家の電気はここから供給されているんだとか、ここの電線が切れたら何処までが停電になるのだろうかとか考えているうちに、それまで見ていた空の存在がすっかり曖昧なものになってくる。俺が言っているのはそういうこと。

そういうこと。太っちょはフロントガラスから空を見上げている。

何かを明確にするというのはそういうことで、それが怖いんだったらこの車には乗らないことだ。これは忠告だよ。

忠告、忠告。

男はもう迷っていなかった。乗らないという選択もあっただろう。しかしどちらにしろ行く先は決まっていない。何が起こるかもわからない。それにこの細身の男には何か惹き付けられるものがある。少なくとも悪意のようなものは感じられない。男は意を決して後部座席のドアを開け、車に乗り込んだ。運転席の細身の男はドアが閉まるのを確認すると静かにアクセルを踏み、雪がまだそれほど積もっていない舗装された道路にわずかながらの痕を残しながら、車は高層ビルが立ち並ぶ市街地に向けて音もなく走り始めた。

「第二章」

「そこの新入生！もうどこのサークルに入るか決めた？是非我がテニスサークルに入って、同じ汗を流し、共に有意義な大学生活を送らないか？」

「ねえねえ君達。あら、二人ともカッコいいじゃない。もし良かったら少しでも話し聞いてくれない？あそこの教室で今説明会をやって…。あつ、ちょっと待って！」

「なあ高志。俺らちょっとした有名人みたいだな？」

「ここにレッドカーペットが敷いてあったら、あるいはそうかも知れないな」

幾度となく続く勧誘活動。優勝パレードさながらに騒がしい沿道。紙吹雪のように舞う桜の花びら。避けられそうもない渋滞。そして大学本館へと続く一本道。僕は、人生における選択肢の中で大学受験という道を選び、何度もつまずきそうになりながらもその門をなんとか開いて、今まさにその大学の一員としての門出の瞬間にいる、ということに噛み締めずにはいられないほどの華やかな光景が目の中に広がっていた。

「さっきアメフト部の奴と、柔道部の奴がもみ合いになってたぜ」

隣でさっきから馬鹿みたいに浮かれているこの男は竜彦と言ひ、高校の同級生だ。

「思ったんだけどさ、アメフトと柔道どっちが強いと思う？」

「防具を付けていたら、きっとアメフトの奴の方が強いだろ。タックルで一発だ」

「わからないぜ。柔道は寝技もあるからな」

そんなどうでもいい話しで盛り上がるのは僕らのいつもの習慣で、竜彦こと大久保竜彦とは、高校時代から良いことも悪いことも含めていつも何かをする度に行動を共にしていた。

僕らはいつも、「人と同じことをしても面白くない」とか「普通って言われるのが嫌だ」という合い言葉みたいなものを行動基準としていて、この大学に入る時も、「大学のサークルはさ、いかにも女の子と仲良くなりたいです、みたいな雰囲気のところじゃなくてさ、もっと刺激的な、何コレ？面白そうじゃん的なサークルに入りたいよな。テニスとかスノーボードとかを売りにしているところ程、実際は飲み会だ、旅行だとか、スポーツを名目に遊んでいるだけなんだって。確かに、辛い受験シーズンを乗り切って、その反動で遊びたくなる気持ちもわかるけど、そいつらと同じことをしていたら、それこそ普通の大学生になっちゃう。だから俺たちは、本当にこれだってものを探して、普通とは違う大学生活を送ろうじゃないか」と、何に対しての反骨心なのか、実際そんなサークルがあるのか、期待と不安で揺れまくっていた僕らだったが、僕自身が求めているものも竜彦と全く同じで、そんなサークルなのであった。

長い冬の季節を終えて、冬眠から目覚めたかのような街並と、新しい後輩を新鮮な目で迎える

上級生、そして今まさに新しい人生の一步を踏み出した新入生の期待に胸躍らせるたくさんの眼差しが、より一層この大学に流れる空気をきらきらと輝かせていた。

僕と竜彦は大学本館でいくつかの事務手続きをした後、構内を散策しがてら偉大なる一步となるサークル探しをすることにした。

二人の目的は、簡単に言うなれば、『比類無きサークル』を探し出すことである。しかし実際、大学構内の掲示板に張り巡らされた広告を見てみると、いわゆるオールラウンド系と呼ばれるサークルが似たような活動内容に手法を凝らし、もはや判断材料が内容ではなく芸術性やユニーク性それから言論に長けた広告へと変わっていて、それらの擬態した広告が掲示板を大いに賑わせていた。

「どれもぱっとしないな。結局は何でもありってことでしょ」

隣で竜彦が早くもぼやき始めた。

「みんな消費者の意見に寄り過ぎなんだよ。興味がない奴は来るな、そんな頑固サークルがあってもいいよな」

サークルの話しなのか、ラーメン屋の話しなのか、よくわからない。でも要はそういうことだよなど、竜彦の意見に賛成しかけた時、後ろから誰かが近寄ってくるのを感じた。

「二人ともどこのサークルに入るか決まった？」背後から女性の声。これで何回目だろうか。半ば強引さを増してきたサークル勧誘にとにかく疲れきっていた僕らは、食い入るように見ている広告から目を離し、うんざりした様子で振り向いた。

「すみません、僕らもう決まっちゃったんです...」

竜彦の声が止まる。

「あれ？歩美？歩美じゃんか」

勧誘かと思われた声の主は歩美だったのだ。

「なんだよ、びっくりしたじゃねえか」

「ひさしぶり竜彦」

「おう。そういえば歩美も同じ大学だったんだな」

「うん。たまたま通りかかったら二人が面白いくらい真剣に壁と見つめ合ってたから、ついいたずらしたくなっちゃって」

そう言うと歩美はいたずらそうな笑みを浮かべた。

「もう終わったの？」

「うん、今ちょうど終わった。高志たちは？」

「俺らも終わって、今サークルを探してるよ」

「そうなんだ」

歩美はそう言って掲示板に並んだポスターを物珍しそうに見つめている。

「ところで歩美は何学部に入ったんだよ」

「心理学部よ。二人は、経営学部だよ」

「そうそう」

竜彦はそう言って、そうかそうか、と僕に怪しむような笑みを送ってきた。

「これだけあるとどこにするか迷うよね」

歩美は何かを探している様子で、順々に掲示板の広告をチェックしている。

「歩美はもう決めたの？」

竜彦が歩美の背中越しに聞く。

「えっとね……。あ、あった」

歩美はそう言うと、ある一枚のポスターを指差した。

「ここ。私はここに入る予定」

僕と竜彦は歩美が指差した広告に目を向ける。

「あいことば？」

僕はその食事の合間にでも書かれたような乱雑に表記されているサークル名を、頭で理解するより先に言葉に出していた。

「実は私もよく知らないの」

当然のここのように言う歩美に対して、僕と竜彦は自然と目が合った。

「どれどれ」

竜彦は活動内容に全く触れていないそのポスターをじっくり眺めて、駄目だ、何にもわからない、と言って肩をすくめた。

「合い言葉を作るサークルってのもおかしいし…」

「わかった！」と竜彦が突然声を上げた。

「何がわかったの？」

「愛の言葉だよ。若い男女が暗い部屋に籠って愛の言葉とは何ぞやと、その真意を確かめるべく古い書物から偉人たちの言葉を引用して、現代における愛の言葉を模索しささやきあう。どう？」

「違うと思うね」

「そうね」

「もしそうならこんな手書きで雑な広告は出さない。言葉が大事なら、言葉で惹き付けないと。それこそ偉人たちの言葉を引用してでも」

「そうかなあ。わかった！じゃあこういうのはどう？あいこ、とば」

「何それ」

「愛子、鳥羽。鳥羽愛子って人がやっているサークル」

「馬鹿じゃないの？」

歩美は笑い出した。

「鳥羽愛子。何か占い師みたいだな」竜彦は目を輝かせている。

もし全国で仮に、鳥羽愛子なる人物がいたとして、こんな風に馬鹿にされたように名前を呼ばれていたとしたらきっと憤慨するに違いない。

「とにかくこれだけじゃ何もわからない。どうして歩美はこのサークルに入りたいの？」と僕は言った。

「会いたい人がいるの」

「会いたい人？」

「男か？」

竜彦はまたしてもにやにやしている。

「そうだけどそうじゃない。とにかく私はこのサークルに入ると決めたの」

「それがどんどころでも？」

「そう。それに高志たちが想像しているようなサークルではないことは確かだわ」

「どうしてわかるんだよ」と竜彦が言った。

「私にはわかるの」

歩美の目からは決意が滲み出ている。少なくとも半信半疑で言っているような感じではなかった。

「じゃあさ、行ってみようぜ。鳥羽愛子に会いに」

全国の鳥羽愛子さんに悪びれる様子もなく、竜彦は淡々としている。

「俺たちも？」と僕は言った。

「いいじゃんか。俺たちは見学。それに歩美も一人よりは心強いだろ」

「ありがとう竜彦。でも私一人でも…」

「わかった行こう！」

僕は歩美の言葉を遮るようにしてそう言った。

「ここで探しても俺たちが求めるサークルは見つかりそうもないし」

「何よりミステリアス」

「そうミステリアス。竜彦わかってるじゃん」

僕と竜彦は目を合わせて笑った。

「そうと決まれば…」

僕はその「あいことば」と殴り書きのように書かれた文字の下に目をやる。

『経営学部 B棟 麴町 学』

とこれまた乱暴に書かれた文字を見つけた。

「B棟、麴町学？」

「またしても謎だな」

竜彦はまるで探偵の気分にもなったように顎をさすりながらにやけている。

「高志、私…」

「大丈夫。歩美の邪魔はしない。竜彦も言ってたように、みんなで行ったほうが安心だろ？」

「うん…わかった」

歩美はそう言うと、早くも先を急ぐ竜彦の後を追い掛けるようにして行ってしまった。僕はその後ろ姿を目で追い掛けながら、心の中に沸き出している不安をようやく露にすることが出来た。歩美が会いたい人とは誰なのだろう。僕が遮った歩美の言葉の続きは何だったのだろう。僕はそれが怖くて聞けなかった。そして無意識に僕はその言葉を遮っていたのだ。僕はその臆病とも言える自分の行いをぐっと飲み込んで、先を急ぐ二人の後を追った。嫉妬心だけではない何かが、廊下に差す午後の強い陽射しに混じって僕の周りでざわざわと騒ぎ立てているような気がして

いた。

この大学には、九つの学科が存在し、全部で十一にもなる建物が、主に事務手続きや本校に在籍する教職員が使用する本館へと続く大きなメインストリートの両脇に並んでいる。そのほとんどが、この大学の歴史を感じさせるような古い洋館さながらで、そのため学生以外の来訪者が多く、年中構内は人で賑わっていた。

僕らが通う経営学科は所属している学生が多い為か、二つの建物に分かれていた。

僕ら新生が使用するのはA棟で、就活、そして卒業を控えた上級生が使用しているのがB棟である。

僕らが使用するA棟は、最近新しく改築されたらしく、この場にまだ馴染みのない僕らと同様の格好で、正門から本館へと続くメインストリートの並びに建っている。歩美の通う心理学部の校舎も同じくメインストリートの並びにある。そして僕らが向かう先B棟は、この通りの端、正門に近いところに位置している為、僕らは再びあの狂喜乱舞と化したメインストリートを横切らなければならなかった。

「ずいぶん人が減ったな」

予想が大いに外れ、メインストリートにはどこか戸惑いながら歩いている新生のいくつかの集団がいるだけで、少し前まではピンクの紙吹雪だった桜の花びらも、春の穏やかな風に乗って僕らを優しく迎えてくれていた。

「なんか高校生だったのが懐かしいな」

「まだ早いだろ」

「でもそうね。この前まで高校生だったのに、もう懐かしんでるかも」

「ところで高志、昨日まで何してたんだよ。連絡しても全然返事がないし」と竜彦がふてくされるようにして言った。

「ごめんごめん。ちょっと色々あってさ」

僕は右手の人差し指を何とか抑えながらそう言った。

「そうか。俺も準備とかで忙しかったからあれだけど、せめて連絡ぐらい返せよな」

「悪い悪い」

僕はそう言って歩美の方を見た。すっかりふくれた顔をしていて、僕と目を合わせようとしな

。

「歩美は何してたんだよ」と竜彦が言った。

「誠実で嘘をつかない素敵な男性と会っていたわ」そう言って僕を軽く睨みつけてきた。

「そ、そうか」竜彦も何だかわからない様子で、困惑するように僕を見ている。僕はどういう顔をしていいかわからずぎこちない笑みを浮かべたまま、この場に留まった微妙な空気を退けようと、「まあ何にしろ、これからもよろしくな二人とも」と二人を交互に見ながらそう言った。

「そうだな、よろしく」竜彦もそれに笑顔で応える。

「よろしくね」歩美は僕とは一度も目を合わせることなく竜彦に向けて微笑んだ。

僕は歩美のたまに見せるそういう子供のような態度が好きだった。また後でいろいろ言われるかもしれない。でもそうやってやりとりが出来ること自体が嬉しかった。あとでちゃんと謝ろう。春の優しい風が吹き抜けるB棟まで5分ぐらいの距離を、僕はそんなことを考えながら歩いていた。

気がつくやうに大学の正門が見えてきた。竜彦が何か物珍しそうに見ているその方角に目を合わせると、ひとつの建物が見えた。そこには建物全体が蔦で覆われ、外壁に不気味な影を落とし、埃と汚れで曇った窓ガラスの向こう側は全く見えず、日が当たっているのにも関わらず暖かさは感じられない。そんな古色蒼然たる趣の館が、由緒正しき正門の威圧感に隠れるようひっそりと身を潜めるようにして建っていた。

「あれがB棟？」

「幽霊とか出ちゃったりして」

「あり得るな」

「まじか」

冗談で言ったつもりが冗談になっていない。その証拠に三人の顔からは笑みが消えていた。窓から光が入り込む余地も無いと思うぐらいびっしりと絡み付く蔦を見つめながら、

「俺たちもあと二年したら収容されちゃうんだぜ」

と、竜彦のあながち間違っていない指摘は、数秒前までの煌々たる僕らの未来への期待感を、実刑の決まった犯罪者のような憂鬱なものに変えていった。

「とにかく入ってみようぜ」

この場にずっといたら建物の雰囲気完全に飲み込まれてしまうんじゃないかと、僕は恐る恐るその薄暗いB棟の入口に足を踏み入れた。

長年外気にさらされ続け老朽化した木材のカビ臭い匂い。蔦の合間を縫うようにして入り込んできた細い光の線。その中を泳ぐようにうごめく埃の群れ。すべてが華やかなキャンパスとは対照的で、春の暖かさをまだ受け入れていない様子の館内はただただひんやりとしていた。

「やけに静かだな」

自分では決して大きな声を出したつもりではなかったが、自分の声がびっくりするぐらい建物全体に響き渡り、それが人気のなさを何より表していた。

「どこに行けばいいんだっけ？」

後ろから完全に人任せになった歩美の声がまたも館内に響き渡る。確か、張り紙には『経営学部 B棟 麴町 学』と書いてあったけど、何階なのか、どの教室なのか、何も目的地を示すものが書いてなかったのを思い出した。

「まだ間に合うぜ」

と、僕の後ろに隠れる歩美の、その後ろにいる竜彦が、この建物に入って初めて口を開いた。

「何が間に合うって？」

「引き返せるってこと」

もう冗談が言えなくなった竜彦は、完全にこの建物の雰囲気完全に飲み込まれている様子だった。

入口から続く廊下の先にはいくつかの部屋があり、その向こう側、突き当たりからはキャンパ

スの光が漏れていた。

「向こうからも入れるみたいね」

歩美が廊下の先を指差した。僕らが建物の構図を頭に入れようとしていると、突然、上の方から何かの軋む音が聞こえてきた。

入口から入った左手に木造の階段が見える。その軋む音が階段からであると気付くと同時、そこから一人の男がゆっくりとその木造の階段から現れた。

「お、新入生？もしかして迷ったの？」

そのあか抜けた上級生らしき人物の様子に、三人の中に浸食していたこの建物がもたらす不気味な何かが、少し和らいでいった。

「あの、あいことばっていうサークルを探しているんですけど…」

「あ、それならこの階段を三階まで上って、廊下の突き当たりにあるのがそうだよ。もしかして、あのサークルに入るの？」

まるで珍しいものでも見つけたかのように、その上級生は僕らを見ている。

「え、えっと、ちょっと見学をしに…」

狼狽える竜彦を見て、

「ありがとうございます」

僕はその先輩に一礼をして、そそくさとその階段を上り始めた。

「何かさ、やばいところに来ちゃったみたいだぜ」

最後尾から響き渡る竜彦の声。階段の手すりに付いた埃を手で払い、うわっ、と一人で奇妙な声を上げている。僕は三階まで吹き抜けとなったその上層部を見上げながら、

「ホラー映画を撮影するならベストなロケーションだよな」

「やめてよ高志」

などと言って強がって見せたが、内心、冗談を言っていないと不安に打ち勝てない状況だった。

三階まで上りきったところに小さい踊り場があった。三人はその踊り場のほぼ中央に立ち、周りを見渡した。窓の向こうの光はこの階の干渉をもう諦めたかのように外の世界だけを照らし、孤立したこのフロアには埃と湿気が入り混じった空気だけが漂い手厚く僕ら三人を出迎えてくれていた。

「廊下の突き当たりって、この廊下の一番奥の部屋だよな」

踊り場から一本だけ伸びている廊下の先は、昼間なのに目を凝らさないとよく見えない。

「ここまで来たら、行くしかないよな」

と、引き返すにはもったいないくらいの思いで乗り越えてきた道のりを背に、三人は突き当たりの部屋へと歩き始めた。

廊下の両脇にはいくつか部屋があるが、どう見ても人がいる気配はなく、物置の部屋にでもなっているかのように静寂に包まれていた。

「あれ、少し光ってないか」

竜彦が指差した突き当たりの部屋のドアの窓から明かりが漏れている。

「誰かいるのかもな」

と、ここにきて初めて人の気配を確認出来たと安堵しているとその部屋から、

「だから言ったのよ。私たちもやるべきだって」

「仕方ないよ。去年だってやってないし、部長も今年もやらないって言っているんだから。そんなこと俺に言われても困るし、部長が帰ってきたらそう言ってみなよ」

と、何やら男女の口論らしき声が、この廊下全体に響き渡った。

「なんか、入りづらい雰囲気だな」

「だな」

「部屋に入ったら、帰してもらえなくなるんじゃないかな」

「かもね」

「VIP待遇で迎えられらるって可能性もあるぜ」

「だといいな」

三人でそんなひそひそ話をしているうちに、その部屋の扉の前まで辿り着いてしまった。

「ちょっとノックしてみろよ」

「なんで俺なんだよ」

「いいからさ」

「お前が行こうって言い出したんだぜ」

「頼むよ～、高志」

竜彦がもし刑事という職業に就くとなったなら、署内一犯人を挙げられない刑事のレッテルを貼られるんだろうなど、今はどうでもいい彼の未来予想図を想像しているその背後から突然、人の気配を感じた。

「あの一、何か御用ですかな？」

その内に屈もった低い声と、心臓を突き刺すかのような鋭い存在感が三人の動きを止めた。

ライオンに睨まれたウサギさながら、逃げても殺される、振り向いても食べられる、どうしようもない状況で、とにかく様子を見るのが一番と、生命活動以外のすべての行動を止め、後ろから迫り来る脅威にすべての神経を集中させた。

「何か御用ですかな？」

と、再び繰り返された台詞がどこかで聞いたことのある言葉で、それは今さっき聞いたばかりなのだが、それはどういうわけか安心感へと変わり、三人は同時にゆっくりとその声の主の方へ振り向いた。

最初に目に飛び込んできたのは、その男の右手に持たれた受け皿付きの炎を灯したロウソク。そして次に二メートルはあるんじゃないかと思わせるような巨体。思わず見上げてしまうその巨体の頭部が、ゆらゆらとロウソクに灯されて暗闇に浮かび上がった。

「……………！」

言葉にならない叫び声を上げたと同時に、僕の目の前は真っ暗になった。

気がつくとはぼんやりとした意識の中で、そこが暗闇であると認めるのに数秒かかった。

その闇は、窓のない倉庫でいきなり部屋の明かりが消えるような現実的な闇ではなく、どこか

非現実さを感じさせる闇だった。

その証拠に、今自分がどこにいるのかさえもわからない。自分がどこかにいるという概念さえも浮かばない。目の前には、ただただ闇が広がっている。

次第に意識が躍動し始め、自分が自分であることを確認するように過去の記憶を取り出し始める。

どうなっているんだ？

誰でもない自分に問いかけた言葉が、脳の中で反芻される。

どうなっているんだ？

その問いは同時に、自分はどうかになっている、ということを表し、脳がフル回転でその問いの答えを探し始める。

次第に意識が耳にも届き始める。

耳からは何も情報が入って来ない。全くの無音だ。例え完璧な防音設備を備えた部屋の中でも、自分の鼓動、部屋の空気を吸うことによって起こる口元の摩擦音、服が擦れる音、自分が存在することによって、完全なる無音の状態は作れない。

しかし、そこには完全なる無音が存在している。

僕は存在していないんじゃないか。

自分に問いかけた問題の答えも出てきそうにもない。

首をすこし傾けてみる。頭に重力を感じ、それを支えるように首に緊張が走る。

次は手だ。指に意識を向け、人差し指の第一関節を曲げてみる。目には見えないが、ぴくっと反応するのを感じ取れた。

身体の反応をひとつひとつ確かめるように、腰、膝、最後に足と、脳からの信号がちゃんと送られていることを理解すると、右手を曲げ、胸に手を当てた。それが胸であるかどうかは別として、右手は確実に何かを捉え、胸の付近からは何かに触れられたという信号が返ってきた。

僕はどうやらここに、意識だけでなく物体として存在していることを感じる。しかし相変わらず目の前は真っ暗だ。

そこで、目の方に意識を集中してみる。

目を左、右と順番に、二つの眼球を左右にゆっくり動かしてみる。二つの眼球がしっかり連動するのを確かめ、その暗闇を見つめようと意識を傾けてみる。

すると、目に集まった意識があなたは今日目を閉じていますよと教えてくれた。そこで初めて、今まで自分は目を閉じていたのだという事実を知ることになった。

そしてゆっくり瞼を上げてみる。

そこには見たこともない景色が目の前に広がっていた。さっきまでの色のない世界から突如現れたカラフルな世界。大木からいくつも伸びる枝葉は他の大木と重なり合い空を覆うようにして、ドーム状の緑の空を描いている。地面からは赤、黄色、オレンジ、紫、二十四色のクレヨンでも足りない程の色とりどりの花達。メルヘンの世界を思わせるその光景に、僕は思わず見とれていた。

目の前には一本の道が続いている。その先には土手にある野球場ぐらいの大きさの広場が見える。僕は自然とその広場に向け歩き始めた。

意識が朦朧としているわけではない。足は確実に土を踏み込み、そこに地面があると教えてくれる。肌には、暖かくやわらかな風が通り抜け、鼻には、新緑の懐かしい香りが注ぎ込まれる。五感は何一つ欠けることなく正常に反応しているのに、意識だけが少し離れた場所にある感じがして僕はとても妙な気持ちになった。歩いているのではなく体が僕を運んでいるという感じがした。

広場に近づくとつれ無音だった世界に賑やかな声が響き始める。それは歌のようでもあり、誰かの笑い声でもあった。だけどそれらを理解することは出来ない。そこにあるものをただただ感じるだけで、理解しようとするとその世界が崩れてしまいそうな気さえしてくる。ボリュームが少しずつ上がり始め、そのリズムに呼応するかのようになり足は地面を踏みしめ僕を広場に運んでくれている。誰かに操られている感覚でもなくそれはごく自然な行いで、当たり前のようにして僕は広場に出た。

広場にはウサギや熊やリス、森に住んでいる野生動物がそれぞれ思うがままに、踊り、歌い、そして何かを話したりしている。誰かが描いたようなアニメの世界ではなく、そこには確かなリアリティがあった。そして僕は自然にその輪の中に入る。誰も僕を拒もうとしないし、逃げ出したりしない。むしろ歓迎してくれているかのように、そのボリュームは最高潮になっていく。

人、動物、自然、同じ世界にいるのになかなか共有出来ない現実世界とは違い、そこでは同じ歌を歌い、その歓びを共有し、ひとつの固まりとなって広場にひとつの和を作り出していた。

周りを見渡してみる。小鳥が熊の肩に乗り、熊が狸の頭を撫でている。オオカミは疑うことを止め、ライオンは謙虚さを持ち、オウムは自らの想いを奏でている。欺瞞も、威厳も、統率もない。誰もが相手を思いやり、誰もが笑っている。新しい世界の始まりのようであり、それと同時に終わりのようでもあった。そんな不可思議で、何とも穏やかな光景を眺めていると、その広場の真ん中にログハウスのような建物が目に入る。正面にはドアがあり、デッキには短い階段が備えられている。外壁には四つに区分された大きな出窓がひとつ見えた。幾つもの丸太を組み合わせ精巧に作られたそのログハウスは、その広場と一体化していて、そこから森が広がっていったかのように、この広場の象徴として存在していた。

すると突如そこから、ひとりの女性が現れた。白いドレスを身に纏い、周りを見渡している。しかし顔の部分だけが光の加減なのか、ぼやけて見える。それが誰かなのかがわからない。そして表情が見えないのにも関わらず、彼女は泣いているように思えた。涙を流しているわけではなく、何かを訴えているわけでもない。ただ彼女は泣いていると、僕にはわかった。何故わかったのかはわからない。それを事実として受け入れたのではなく、ただそう感じたのだ。

とにかく僕は彼女のもとへと近づいた。その涙のわけを知りたかったし、何より僕を引きつけるには十分な魅力があった。外見ではなく、内側に秘められたその何かに引き寄せられるように僕は彼女の前に立った。

デッキから広場を見渡す彼女を見上げるようにして、僕はゆっくりと彼女の顔を覗き込む。次の瞬間、

「起きて！」

僕は目を開けた。そこは、古びた部屋の中だった。

「やっと起きた」

知らない誰かの声が聞こえてきた。

「あれ、ここどこだ？」

振り向くと、竜彦がいた。

「う～ん」

歩美もいる。

「部長、もう大丈夫だね」

また知らない声が聞こえる。今度は男の声だ。

「あれ、俺どうなっちゃたんだ」

竜彦は誰に言うでもなく、その言葉を繰り返している。

「ここはどこ？」

歩美も同じく、今の現状がわからない様子で、周りを見渡している。

「確か俺たち、部屋の扉まで辿り着いて……」

「そう！そこから真っ暗になったの！」

歩美がめずらしく興奮している。

「そう！俺も真っ暗になって、しばらくしたら、何処か知らない部屋にいたんだ！」

「部屋？」

「赤い絨毯の部屋だよ」

「私はずっと暗闇の中において、もう出られないかと思ったわ」

どうやら、みんな別々の何かを見ていたようだ。

「高志は大丈夫だった？ってか、ここはどこ？」

大きなリビングぐらいあるその部屋には、本棚が壁一面を覆っていて、たくさんの本でびっしりと埋められていた。窓からは、蔦がその影を潜ませ不気味に映っている。蛍光灯で照らされた部屋の真ん中には、ソファが2つ対面に置かれている。そのソファで僕らは寝ていたようで、その僕らを見下ろすように三人の男女がソファの周りに立っている。

「あっ」

竜彦は何かを思い出したかのように呟いた。

「高志、あの人、見たよな？」

竜彦が耳元で囁くその先に、見たことのある巨体が立っていた。

「お前も見たのかよ。ってことは、あれは夢じゃないな」

記憶が呼び戻される。

「俺たち、B棟まで来て、三階の突き当たりの部屋……」

「そうか。ここがその部屋か」

もう一度辺りを見渡す。木造の床には、この建物の歴史を感じさせられるような傷跡がいくつも刻まれ、確証は持てないが、そこはおそらく僕らが目指していたB棟の部屋だった。

「ここは、B棟ですよ？」

おそるおそる僕は目の前に立っている三人組に尋ねた。

「そうよ」

一人の女性がそう答える。

「僕ら『あいことば』というサークルを探しにきたんですけど、ここがその『あいことば』ですか？」

「正解」

細い体型のほうの、少しチャラそうな男が答える。

「ごめんなさい。突然そちらの方が……」

歩美が巨体の主の方を見て、

「びっくりして、そこから記憶がないんです」

記憶がない。僕は記憶がないと言えないほどリアルな夢を見ていた。何が夢で、何が現実かわからないほどだった

「俺もさ、いきなり誰かが現れたかと思ったら急に辺りが暗くなったんだよ。最初もしかしたら死んだのかと思ったけど、しばらくしたらどこかホテルの、それも豪華なホテルの部屋みたいなところにいてさ」

竜彦はまだ整理されていない頭の中をほじくるように、現実と夢の境界線を探っている。

「とにかく、ようこそ『あいことば』へ」

美人とは言えないが、背筋がピンと伸び、キリッとした目元の女性が笑顔で、

「君たちが今いるのは、その『あいことば』の活動拠点よ」

と、どこかのツアーリストを彷彿させるような振る舞いで僕らを見渡している。

「そうだよ。俺らも去年そんな顔してたっけ」

その隣で、その端正な顔を崩し、愛嬌たっぷりに細身の男が笑っている。

「あんただけよ」

咄嗟に女ガイドのするどい突っ込みが入った。

僕は目の前で起きていることが、だんだん現実味を帯びてきていることを感じていた。さっきまで見ていた、あの不可思議でメルヘンな世界は実は夢で、現実では、僕らは気絶してこの部屋に運び込まれたのだと、説明のつかない出来事を今の現実結びつけることで、ようやく我に返ることが出来た。

「それよりさー、なんで三人はここに来た訳？他にもいろんなサークルがあるし、普通の学生はまず来ないよね、こんなわけの分からないところ」

細身の男は、不思議がっている様子ではなく、興味深く僕らを見ている。僕は思わず、「あなたもそこに来ているんですよ」と突っ込みたくなるのを我慢した。

「僕たちはその普通の大学生になるのが嫌で、どこか面白そうなサークルを探していたところ、偶然、ここのサークルを見つけたんです」

どうやら竜彦も、我を取り戻した様子だった。

「それなら正解ね。本当に普通の大学生活は送れなくなるよ、きっと」

その言葉が何を意味するか、その時僕らにはまだわからなかった。ただ、さっき見た夢のような世界といい、この館の雰囲気といい、その言葉が僕らを納得させるには十分な意味合いを持っていることは確かだった。

紅茶の甘い香りが部屋の中に流れ出す。目の前の机には人数分のカップが置かれている。どのカップからも等しく湯気が伸びている。この部屋に佇む家具達も、その香りに癒され、疲れ切った身体をほぐすかのように、部屋を1トーン明るく染める。

目の前のソファーには、『あいことば』に所属している先輩三人が座っている。それと対面して、同じくソファーに座っている僕ら三人は、先輩がその紅茶に口をつけるのを待っていた。

「いきなり驚かせてごめんね」

先ほどツアーガイドしてくれたのが、本多沙織先輩だ。

「それにしても、よくこんなとこまで来たよな。だいたいの人はこのB棟の入口で引き返すよ」まだ笑い足りないのか、終始豪快に笑っているこの人が、伊藤康之先輩。そして、僕らを驚かせた張本人、このサークルの部長の麴町学先輩が、その隣で大きな身体のわりにはつぶらな瞳で、僕ら三人を見ている。

「しかし驚いたよな。あんな経験初めてしたよ」

竜彦は、そのノミのような心臓をさつきからしきりに撫でている。

「ひととおり自己紹介も終わったことだし、何か聞きたいことはある？」

「このサークルの活動内容が知りたいです」歩美が躊躇なく僕らの本題を切り出した。

「う～ん、ちゃんと説明するのは難しいんだけど、簡単に言うと言葉について学んでいるの」

「言葉、ですか？」

「そう、言葉。例えばあなた達三人も、今まで生きてきた中でたくさんの言葉と出会っているはず。その人生を振り返る中で、印象的だった言葉を挙げなさいって言われたら、何が浮かぶ？」

僕はその唐突な質問に応えるように、今までの人生を振り返ってみた。

「今言う必要はないんだけど、それってたぶん誰にでもあると思うの。その言葉によってこれまで支えられてきたとか、その言葉のせいでこうなってしまったとか、いろいろ。そうやって出会う言葉、会い言葉って意味からこのサークルが生まれたの。その人の人生を彩る言葉ってなんだろう、同じ言葉でも相手を喜ばせたりも傷つけたりも出来る、そういった言葉の重み、そんなことを日々感じて、見つけ、みんなで語りあったりして、言葉の大切さを学んでいるの」

「一応学生だしね」

「あんたは黙ってて」

「三人はどんなのを想像してた？俺はね、愛の言葉を囁いて女の子を口説いていこうみたいなのを期待して来たんだけどね」

「最悪」

最悪だって、竜彦。

「それにね、うちの部長、ある有名人の息子なのよ。銀次郎って知ってる？」

銀次郎と言えば、いま巷を騒がせている占い師で、見てもらった人に言わせれば、その占いは確実に当たると評判だ。大のテレビ嫌いで、メディアには一切顔を出さないことが話題に拍車をかけ、今じゃ五年後の予約さえも難しいと言われている。その素顔は、見てもらった人にしかわからないが、かなりのイケメンらしい。

「すげえ、あの銀次郎の息子さんなんですか、部長は」
さっきまで赤っ恥をかいたような顔をしていた竜彦が、急に目の色を変えて、「俺も占ってもらってもいいですかね？」と、完全に舞い上がった様子ではしゃいでいる。

「まあそんな感じで、日々言葉について学んでいるサークルなのよここは。だいたい分かってくれた？」

完全にミーハー目線で部長を見ている竜彦をよそに、

「だいたい分かりました。ありがとうございます。だけど、どうして言葉なんですか？この大学のほとんどのサークルがなんでもありみたいな感じでやっている中、どうして言葉を学ぶ、いわば専門的なことをやっているのか疑問に思っ」

と僕は言葉を選びながら慎重に答えた。

「それはね、まあ、おいおい話していくって感じかな。少なくとも、ここにいる私達三人には言葉にまつわるストーリーがあるのよ」

そのストーリーこそが僕の知りたいことであつたが、まだ会って間もない僕らに、すべてを語れるほど軽いものではないことは間違いない。

「私は……」

唐突に歩美が話し始めた。

「私にも、そんなストーリーがあります。ここでは言えないですけど、いつかそれが話せたらいいと思っています」

僕の知らない歩美がそこにはいた。

高校の時にお兄さんを亡くしてずっと落ち込んでいた歩美をなんとか励ましてやろうと、歩美の笑顔を取り戻すためにいろいろやってきた。その落ち込みようはひどかったものだが、彼女は真摯に現実と向き合い、無事に高校を卒業し、こうして大学にも進学した。僕には心を開いてくれる、そうずっと思っていたが、まだ僕の知らない歩美がそこにいるようで、僕は複雑な気持ちになった。

「もちろん、今言う必要はないし、このサークルに入る入らないはあなたたちが決めることよ。ただ……」

そこで一度言葉を止め、沙織さんは部長の方を見た。

「あなたたち三人は、このサークルに必ず入ることになる」

帰り際、「待ってるね」と、片目でウィンクをして送り出してくれた沙織さんの最後の言葉がずっと頭から離れず、B棟から出た後も僕の頭で悶々と繰り返されていた。そして、あの部長。入口で話しかけられた以外、何一つ喋っていない。言葉を学ぶサークルの部長としては、あまりに無口すぎる。仮に、言葉に重きをおき、必要なこと以外喋らない、そんな武士みたいな人が

いるとしよう。言葉とはコミュニケーションを取る上で大切な要因の一つであると同時に、人を洗脳し、殺めたりもする危険なものでもある。そういうことを経験したり、学ぶことによって、慎重に慎重を重ねた結果、言葉が出てこないというのはあることだと思う。しかしあの部長は、言葉話すことよりも、他の何かに神経を削っていたように見えた。あの大きな顔に埋もれた小さな瞳。そこからは、僕らを射抜くような鋭い視線が注がれていたし、僕らを見ているというよりは、じっくり観察していたというほうがしっくり来る。占い師の息子だから見える世界があるのか、それとは違う能力を備えているのか、実は僕の思い過ごしで、ただの恥ずかしがり屋なのか、その実体がまるで掴めない。さらに最後沙織さんは、部長を一度見てからあの台詞を吐いた。「あなたたちは、このサークルに必ず入ることになる」あの口調は、予想などというものを凌駕していた。そう、予言に近いものがあったのだ。確信的な沙織さんの口調の裏には必ず何かがある。そう感じさせるほど、今日の出来事は強烈すぎた。いきなりの暗転からのメルヘンな世界。そこは現実離れした世界であったが、今いる世界よりもリアリティがあった。あれがもし気絶した時に見た夢だとしたら、目覚めた時にそれが夢だったと思うに違いない。その現実と夢との境界線が、僕には引けなかった。今も尚、引けていない。そんなことがこれまであっただろうか。人生で一度くらいそんな夢を見ますよ、と誰かが教えてくれたらこんなに楽なことはない。逆に、あれが別次元の世界だったとして、白いワンピースを着た女性やひとつの和を作り出している動物達が実際に存在していたとしたら、それはそれで怖い話である。歩美はずっと暗闇だと言っていたが、竜彦は豪華なホテルの一室にいた。そこに何があったのかは、実際見た人にしか分からないだろう。説明するにはあまりにも現実から離れ過ぎている。なんにせよ、僕は今日の出来事の真相が知りたくなっていた。それが彼らの狙いだったのか。巧みな心理戦を制し、入部者を獲得する。そんなサークル聞いたことがない。あったとしても、持ち出す相手を間違えている。妄想が妄想を超え、想像が想像を超え、まだ起きていない出来事に臆病になり、相手を傷つけてしまう。僕の悪い癖の一つだ。考え過ぎは良くない。確かなことは、僕の心はあのサークルに引き寄せられているということだ。僕の想像を超えた何かがあると、魂がそう叫んでいる。

次の朝、目覚めるとそこには確かに正常な朝が待ち構えていた。窓から漏れる光が生々しく朝の訪れを伝え、いつもと変わらない日常が、僕の意識を徐々に呼び戻す。昨晩はなかなか寝付けなかった。あんなことがあった後で、ぐっすり眠れるほど僕の神経は鈍感じゃないらしい。とにかく、僕は朝の光の中で、変わらない日常が動き始めたことに胸を撫で下ろした。

「お兄ちゃん、早くしないと遅刻しちゃうよ」

妹の千尋の声が、下の階から聞こえてくる。時計に目をやる。七時五十二分。どうやらあと二十分で支度を済ませないといけならしい。

「まだ寝てるの？」

千尋が部屋のドアを勢いよく開け、顔を出した。

「今起きる」

その人ごとのような感覚に、自分の意識を刷り込ませる。自分の深い部分にいる自分に向けて語

りかける。定例化した朝の儀式のように、上体を起こしたまましばらく動かない僕を見て「先に行ってるね」と千尋はドアを閉めて行ってしまった。僕は簡潔に、そして念入りにその儀式を無事に済ませると、

「やばい、急がないと」

勢い良く部屋を飛び出し、洗面所へ直行。顔を洗い髪を整え歯を磨く。

するとその横から母親が「はいこれ」と昼食代を渡してくる。「ん」歯ブラシを口に含ませたまま受け取ると、母親は行ってしまった。父親の姿がリビングにないのを見ると、もう出勤してしまっているようだ。

外に出ると、通勤者で賑わう通りは朝の光に照らされ、どこか生き生きとしていた。自然と気持ちが高揚してくる。僕は新しい進学路となった道のりを、ゆっくりと味わう時間がないことを思い出し、急ぎ足で大学に向かった。

大学に着くと、昨日までとはいかないが、お祭りのようなサークル勧誘は相変わらずその熱を保ったままだった。

無事に教室に辿り着くと竜彦の姿があった。竜彦は僕の姿を見つけると、

「おい、高志」そう言いながら隣の席を勧めてきた。

「今日どうする？」

竜彦はこれから始まる授業そっちのけの様子で、

「俺は決めたぜ。あそこに入る。お前はどうするんだよ」

あそことは、『あいことば』のことだろう。

「俺は……」

そう言いかけた時に、先生が入ってきた。

「授業を始める。みんな席について」

そう言って、さっそく黒板と向き合う教師。

隣の竜彦は、とりあえずおとなしくしている様子で、僕はさっき言いかけた言葉の続きを探していた。

授業が終わり、みんな一斉に席を立つ。結局、探していた言葉の続きは見つからなかった。次の授業は選択科目の為、竜彦とはここでお別れだ。

「とりあえず、あとで」

そう言うと、次の教室目指して竜彦は行ってしまった。僕も次の教室に向かおうかと教室を出ようとした時、ポケットに入れてあった携帯が震えた。見ると歩美からのメールで、「今日の放課後、昨日のどこ行こうよ」そうシンプルに送られてきた文章を見て、竜彦も歩美も既にあのサークルに引き寄せられているように感じた。さらに二人とも、その目的の対象が抽象的になっていて、それが昨日の出来事の不可思議さを強く表していた。そして、僕にしてもそれは同じだ。昨日の出来事は、『あいことば』とは全くかけ離れたイメージを僕らに与え、それをなんと表現していいかわからなかった。単純に『あいことば』と呼ぶには、何故だかわからないが抵抗があるのだ。その真相を知りたいから、僕らは引きつけられているのだろう。昨日の沙織さんの言葉が思い起こされる。そして、その予言には抗えそうにもないと、僕は思い始めていた。

放課後、僕と竜彦と歩美は、正門付近で待ち合わせをしていた。B棟の前でもよかったのだが、あの建物の前にずっといると、一人では心もとないというか、夕方になり一層不気味さを増した建物がもたらすオーラに負けてしまいそうで、誰もそう言い出さなかった。

「昼間より明るってどういうことだ？」

正門から見えるB棟に目を向けながら竜彦が待ち合わせ場所に現れた。

夕闇に沈むように佇む建物から、早くも明かりが漏れ始めている。

「あの館がようやく目を覚ましたんだよ」

「お前さ、ホラー映画の見過ぎだよ。館が目覚ますって何だよ。おかしいだろ」

おかしいと言ってるにも関わらず、竜彦の顔は一切笑ってない。

「遅くなってごめん」

歩美も少し遅れてやってきた。

「昼間よりやばいね」

彼女もB棟のほうにさっそく目を向けている。

「遅くなるとあれだから、行こうか」

三人はひっそりと佇むB棟目指して歩き始めた。

「ね、そうなったでしょ？」

扉は突然開いた。僕らはこの前と同様、入口から直接階段を上り、3階の踊り場から一直線に部室に向かったのである。取り立て大きな音を立てることなく、部屋の前まで辿り着いた矢先、扉が待ち構えていたように開いたのである。

「どうしてわかったんですか？」

「だから言ったでしょ、そうなるってわかっていたからよ」

沙織さんはそう言うと、扉を開けたまま奥に行ってしまった。僕は他の二人の顔を覗き込んでみたが、僕と同じくその言葉の本質を全く飲み込めない様子だった。

「みんな座って」

沙織さんが中でソファに座るよう促した。部長も伊藤先輩も、すでにソファに座っている。僕らは何を信じていいのか、何を疑うべきなのか、そういった自分たちの世の中に対する常識的な基準というもののバランスを、うまく保つことが出来なくなっていた。そんなアンバランスで地に足がつかない状況のまま、三人はソファに座った。

部屋の時計が夕方六時を指している。僕はまだ不思議でたまらなかった。確かに沙織さんの言う通りすべてが決まっているかのように物事が進んでいる。僕たちが思い通りになるまいと、今日この場に来なかったならばどうなっていたのだろうか。いやきっと、僕らはそう出来なかったのだろう。この運命に抗う術を持ち合わせていないのだ。それと同時に、少し怖くなった。この部屋の時計が指す数字にも何かの意味があるんじゃないかと思うぐらい、僕らはすべての物事を信じられなくなっていた。

「さてと、それでどうしてここに来たのかな？」

伊藤先輩がにやにやしなから聞いてきた。

どうしてここにやって来たのか。その答えをみんなとつくに知っているはずなのに敢えて聞いてみた、そういう注釈的な意味合いを含めた顔で僕らを覗き込んだ。すべからく伊藤先輩という人はそういう人なのだ。

「降参です。もうすべてが謎だらけで、このサークルに入ってその真相が知りたいです」僕は投げやりだった。どうせ見透かされているのなら、素直にそう答えるしか方法が見つからなかったからである。

「俺もです」

「私も」

竜彦も歩美も同じくそう答えた。

「分かったわ。それでは改めて、ようこそ『あいことば』へ」

沙織さんはそう言うと、一冊のノートを取り出した。

「みんなここに名前を書いて。大丈夫、変なことには使わないから」

沙織さんは優しく微笑みかけてくる。変なこととは一体なんなのであろう。普通一般の常識が崩れかけている今、その言葉が何を意味しているのか、もうさっぱりわからなくなっていた。僕は用意してくれたペンを使い、その言葉に操られるような格好で、渡されたノートに名前を書こうとした。

「それと、みんなの好きな言葉を書いて欲しいの。何文字でもいいし、一文字でもいいから。みんながそれぞれ気に入っている言葉を、名前の横に書いて」

急にそんなことを言われても、と僕はペンを止めて、言葉を思い浮かべてみることにした。

歩美がさっそく何か思いついたように、そのノートを手に取りペンを走らせた。続いて竜彦もそれに倣ってペンを走らせる。僕はまだ決められずにいた。

高志、早くしろよ、そういうような目つきで竜彦がノートを回してくる。この儀式的な何かを早く終わらせたい、竜彦はそんな風に宙に視線を戻した。

僕は何となく部屋を見渡してみる。書棚に並べられた本のタイトルの文字以外、文字というものは何も見当たらない。僕はとりあえず自分の名前を書くことにした。そうすることで、何か浮かぶのではないかと思ったからだ。沙織さんの隣で、部長が僕を見ている。前を見なくてもそれが分かる。今僕の考えていることまで見透かされているのだろうか。僕は過去を振り返るようにすべての引き出しを片っ端から開けていった。そして名前を書き終えた。結局何も浮かばなかった。

竜彦は僕を急かすようにか、足を小刻みに揺すり始めた。ペンは進まない。僕は壁にかけてある誰かの肖像画のような絵を眺めてみる。その絵に描かれた外国人までもが僕を急かすように睨みつけてくる。

どれくらい時間が経っているのだろうか、僕は昨日の夢のような世界の出来事を思い出してやることにした。動物達が手を取り合い、ひとつの和を創り出していたあの森の広場の光景だ。思えばあの時から、誰かに操られているような感覚が離れない。僕の思考が止まっているわけでは

なく、その思考までもが操られている、そんな感じがして冷や汗が流れてくる。その時、突然思い出したように僕はペンを走らせた。頭に何か浮かんだというよりは、何かを書きたい衝動に駆られたという電気みたいな信号が身体を走り抜け、ペンを走らせた。僕はそこに『和』という、回りの人からしてみればなんの変哲もない、一文字を書いて沙織さんにノートを渡した。何故『和』なのか。きっとあの広場で感じたことなのだろうが、うまく説明できない。別に好きな言葉でもなければ、大切な言葉でもない。それを書きたい衝動に駆られ、気がつくまで書いていた。そこにどんな意味があるのか、僕が知りたいぐらいだ。

「時間がかかってすみません」

僕はそう一言付け足して、みんなを見渡した。

「これに何の意味があるんです？」

竜彦は僕が書き終わったのを確かめるとすぐにそう尋ねていた。

「そのうち分かるわ」

沙織さんはノートを閉じて僕たちを見渡し、

「とにかく、みんな揃って入部してくれて嬉しいわ。きっといろいろな疑問があるでしょう。

ただ、その疑問をみんな大切に抱えていて欲しいの」

そう言うと沙織さんはノートをしまった。疑問を大切に抱えるとはどういうことだろう。答えを急ぐな、いずれ分かる。そう言われたのであれば、納得は出来ないが期待が持てるものを、「大切にしまっていてね」というようなニュアンスで言われてしまっただけでは、なんとも歯切れが悪い。そして僕は聞いてみる。

「どうして僕らがこのサークルに入るということがわかったのですか？それも大切に抱えていってことですか？」

自分が少し挑発的になっていることに驚いたのだが、

「私もそれを早く知りたいです」

歩美が僕に加担してくれた。

「そうねえ。どうする部長？」

沙織さんは部長を見る。

部長はというと、その問いかけが聞こえていないのか、身動き一つせず、さっきまでノートが置かれていた机の上を見ている。しばらく時間が止まる。沙織さんも伊藤先輩も部長を見ているものの、その答えを急かそうとしない。正確に言うと、沙織さんの問いかけが部長に届いていないのではないか、ちゃんと聞いていたのだろうか、という懐疑的な目は一切向けられていない。むしろ、そこには確かな信頼関係が見て取れて、二人とも部長の答えを待っているし、その答えがなんであろうと受け入れる、そういった様子で二人とも部長の言葉を待っている。

そのあと少しして、部長は口を開くのだったが、それは結局質問の答えにはなっていなかった。

「うん。みんなで合宿に行こ～」

男を乗せた車は住宅街を出て市街地を走っていた。三車線から成る大通りの真ん中のレーンを悠々と車は進んで行く。思えば先程から信号機はどれも青を点灯させていて、こんなことが本当にあるんだと、男は映画で見たワンシーンを思い描きながら街を見渡していた。

夜も深まり無人化した街にはいくつものイルミネーションが群れをなすように輝いている。寂しさを紛らわす為なのか、それともそれらは人間の果ての姿なのだろうか、深夜に一際綺麗な光を放つイルミネーションたちは誰もいない街を懸命に照らし続けていた。

車内では出発してからというもの、何一つ会話が生まれていなかった。男は渴いた空気で喉を詰まらせ時折咳き込んだりしていたが、それが唯一の生まれた声であり、運転席の細身の男も助手席の太っちょも、一言も喋らないどころか身じろぎ一つせずここまで来ている。男はその一挙一動を観察していたからそれは確かだった。彼らは出発した時から何も発していない。それは人間的ではないというのと同時に、彼らはとても我慢強い生き物であるということを確認ざるを得ないことだった。特に太っちょに関しては、助手席に収まり切らない大きな尻をどうして動かさずにいられるのか、男にとって不思議でならなかった。血流が滞って人体に支障はないのだろうか。男はその太っちょのはみ出した尻を見ては自分の体勢を整えていた。そうしないと自分までもがこの後部座席のシートの一部になってしまうのではないかという懸念に押し潰されてしまいそうだったからである。それぐらい前に座る二人はこの車と一体化していた。男はその不自然さが、これから起こる出来事を一層暗鬱なものに変えてしまっているように感じて、その度に窓の外を眺めては、自分と世界との立ち位置を何度も確認していた。

さあ着いた。ここで間違いないな。

間違いない。

車はゆっくりと地面に吸い付くように止まり、細身の男が太っちょに向かって確認するようにそう言った。

さてと。細身の男はそう言うとバックミラーから男を覗いた。

ここでも二択問題だ。

二択問題。

降りるか、それとも降りないか。

どうしようか。

男の答えは決まっていた。それはこの車に乗った時から決まっている。行く先が何処であろうと車から降りなければどこへも行けない。それとも次の行く先というものがあるのだろうか。結局そんなことは考えてもわからない。

降りる。男は簡潔にそう言った。

潔いね。気に入った。細身の男が言った。

しかしね、この後君はきっと多くのものを失うことになる。細身の男はハンドルに乗せた手を離し、黒革のグローブの質感を確かめるように何度も手を握りしめながらそう言った。

あやふやになると言ったほうがいいかもしれない。さっきも言ったように、何かを明確にするというのはそういうことだ。

そういうこと。太っちょが続く。

それでも構わないというなら俺らは喜んで君を案内するよ。ところで、何を明確にしたいんだっけ？細身の男は鋭い目線をバックミラー越しに投げかけてきた。

…愛だと思う。男は少し考えてからそう言った。それに明確にするというよりは、明確に表現する方法を知りたいんだ。

そりゃまた難題だね。そう思わないかい？

細身の男の問いかけに男はうなづく。

俺が思うに、細身の男は初めて座席に預けていた体を起こし、そしてまたゆっくりとなじませるように座席に深くその体を沈みこませた。

これはあくまで俺個人の意見だが、愛を明確に表現する方法なんてものがあるのかわからない。

わからない。太っちょは首を傾げながらそう言った。

もし仮に見つけたとしても、個人個人の解釈によって簡単に愛の形は変わっていくものだ。だからそれを上手く明確に表現した所で、相手がそう捉えてくれるかどうかかわからない。

わからない。太っちょは今度は逆の方向に首をひねった。

だからこそ慎重に、そして丁寧にそれらを手渡さなければならない。俺らが君にそうしているように。

はい。太っちょは両手で何かを包むようにしてその手を差し伸べてきた。

俺は何度も同じことを言うのが好きではない。それでも君に釘を刺さないといけない。これがどういうことかわかってくれたかな？

男は小さくうなづいた。

わかった。それでは行こう。目の前にある塔が君の求めている場所だ。

行こう行こう。

塔？男は後部座席の窓から目の前にあるビルを覗いた。いくつもの高層ビルの中で一際高いビルが目の前に建っていた。しかしそれをビルと呼ぶにはいささか勇気のいることであった。コンクリートでもなくベニヤでもなく、薄茶色の粘土で出来たような、頑強とは言いにくい造りをした建物が男の目の前にそびえ立っている。それは細身の男の言うように、完全に塔だった。所々に窓のような穴が点在していて、それらは効率よく建物の中に風を運んでいるように見えた。窓

ガラスなんてもちろん張られていない。こんな都心部にこのような塔がいつから建っていたのだろう。その異端者にも見える塔を見上げるが、頂上が高すぎるせいでその全貌をここからでは見ることが出来ない。どこまで続いているのだろうか。男はただただそこに堂々と佇んでいる塔を見上げるしかなかった。

気がつくとき細身の男も太っちょも車から既に降りていて、塔の入口だと思われる大きな空洞の前で待ち構えていた。男は一度大きく息を吸い込んで、それから短く息を吐き出し車から降りた。

塔の入口では、大きく開いた空洞を挟みこむようにして二つのランプが灯っていた。ゆらゆらと揺らめいているのを見ると、それは電気ではなく本当のランプのようだった。そのランプに怪しく照らされる二人の元へと、男はゆっくり近寄っていく。細身の男が言っていたように慎重にならなくては。男はそう自分に言い聞かせていたが、言い聞かせずとも体は自然にそう動いていることに気がついた。二人の元へ辿り着くのと同時に細身の男は喋り始めた。

これから君はこの塔の頂上を目指すことになる。そうだな。細身の男は一度塔の上の方を見上げてから、わかりやすく言うところの塔を君の愛だとしよう。もちろんそれはひとつの比喩表現だ、と言った。

ずいぶん大きいね。太っちょはさっきからずっと塔を見上げている。

そしてこの塔の頂上は言わば君の愛の表面ということになる。明確にするということは、姿形を明らかにしなくてはならない。だから君はこれからその表面を確かめに行く。そういうことになる。

大変そうだ。太っちょは塔を長く眺め過ぎたのか、首を抑え渋い顔をしながらそう言った。

だからここはその入口ということになる。愛の深層部とでも言おうか。その証拠にここにいるのは君一人だ。この街には、いやこの世界には君以外の人間は一人も存在しない。俺らはただの案内人。

案内人。太っちょは嬉しそうに飛び跳ねている。

愛とは孤独から始まる。違うかい？細身の男はしっかりと噛み締めるようにそう言った。

男は辺りを見渡した。確かに細身の男の言うように誰もいない。それにここまで人の気配を感じなかったことも思い出した。しかし男は現に今一人ではなかった。だから細身の男の言っていることがあまりピンときていなかった。

さっき俺はこの塔は君の愛だと言った。君の心そのものだと言ってもいい。そして何度も言うようだけどここまで君を連れて来たのは俺らの好意だ。プレゼントのようなものだよ。そのプレゼントを君が快く受け取ってくれないと俺らはこの塔に入ることが出来ない。全くの他人に勝手に心を干渉されたら君だって嫌だろう？

男はうなずいた。

それと同じことだ。君が認めてくれるのなら喜んで案内しよう。君は今一人だ。間違いないね？

男はさらにうなずいた。

では中に入ることにしよう。

しよう。

そう言って細身の男と太っちょが塔に開いた大きな穴の中に入って行くのを確認してから、男もその塔へと慎重に足を踏み入れた。

塔の内部は大きな円形の空洞になっていて、壁に横一列に並ぶように取り付けられているランプ以外何もない。壁に塗られた粘土はざらざらとした粗い表面を露にしている、辺りにはまとわりつくようなカビ臭い匂いが漂っていた。天井は異様に高い。ビル三階分の高さがあるだろうか。古代人の遺産とも言うべきこの塔の存在とその造りに、本来ならば敬服の念を抱くのが普通だろう。この塔を立てるのにどれくらいの労力と知恵が使われたことだろうか。全く想像がつかない。しかし男の目にはそうは映らなかった。これだけ近代的な高層ビルが建っている中に、古代ローマを思わせるような内装をした塔が建っていること自体異様であったし、それが自分の愛だと言われたから、何だか自分自身が異端者と言われているような気がして居たたまれない気持ちになっていたのだ。

奥の方に細身の男と太っちょが立っているのが見える。二人は扉を挟んでその両側に、腕を後ろに組み男が来るのを待っていた。男は二人に近づくとつれ、その扉がエレベーターの扉のような様相をしていることに気がついた。階数を表示する液晶ランプもなければ、開閉ボタンもない。しかし棟の体積を考えた時にそこに新たな部屋があるとは考えにくかったし、他に適当な階段も見当たらない。塔の上に行くにはそこにエレベーターがあるというのが何だか妥当な考えのような気がしていたのだ。二人に近づくと待っていたとばかりに細身の男が話し始めた。

これから君はこのエレベーターに乗る。その前にいくつか話しておかなければならないことがある。

いくつあるの？太っちょも興味深そうにその話しに耳を傾けている様子だ。

まず始めに、このエレベーターの仕組みだ。このエレベーターは普通のエレベーターと違って扉の開閉ボタンもなければエレベーターの現在地を示す表示板もない。それは君も気付いたことだろう。それは君にとって、俺らに取ってもいささか不親切なように思えるがここでは必要のないことなのだ。何故ならこの塔には階というものが存在しないし、このエレベーターを使用するのは君だけだ。だから階数を表示する必要もなければ、開閉ボタンを押してエレベーターを呼ぶ必要もない。君が必要だと思う時にこのエレベーターは自動的に作動する。そして君を乗せたなら自動的に扉は閉まり、塔の上に向けて君を運んで行く。そのことに関しては君にとってとても親切であり、尚かつシンプルだ。何一つ難しいことはない。このエレベーターの前に立ち君が望むのなら扉は開く。どうだい、一度試してみるかい？

見たい見たい。太っちょは男の手を掴むとエレベーターの前まで引っ張って行き、嬉しそうにエレベーターが作動するのを待っている。男がエレベーターの前に立つと扉が両側にゆっくりと開いた。

簡単だろ？細身の男が言った。

簡単簡単。太っちょが手を叩いて喜んでいる。

まだ乗らなくていい。実はここからが厄介なんだ。細身の男は言葉を丁寧を選ぶようにして話

しを続けた。

このエレベーターの内部にも階数ボタンや階数を表示する液晶板はない。要するに君がこのエレベーターを自在に操作することは出来ないということだ。

じゃあどうするの？太っちょは首を傾げて細身の男にそう言った。

このエレベーターは当然君の求める塔の頂上を目指して進んで行く。しかしボタンが無いからといって一気に頂上に辿りつくわけではない。その為にはいくつかの手順を遂行する必要がある、それらすべてを達成した時、君は頂上に辿り着ける。それ以外に頂上へ行く方法はない。つまり君はその手順をすべてこなさないと頂上へは辿り着けないということになる。

ふうん。太っちょはわかったようなわからないような顔でその話しを聞いている。

次にその手順だ。君はここから先、ひとつひとつの感覚を失っていくことになる。感覚とは一般的に五感と言われるものであり、知っていると思うが、それらは視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚の五種類だ。それらを代償として君は上へと進んで行ける。これがさっき言った手順であり、君はひとつの感覚を失うごとにさらに上へと行けることになる。だから今君がこのエレベーターに乗ったとしても動くことは無い。

うん。太っちょはわかったというようにうなずいた。

そこでだ、まず最初に君にしてもらわなければならないのは、その五感の中から代償となる一つを選ぶということだ。その選択権は君にある。君自身がそれを選ぶことによって、選ばれた感覚はこの場所に留まり、エレベーターは君を乗せて次の場所へと動き出すだろう。次の場所とは俺らにもよくわからないが、それは君にとって必要な場所であることは間違いない。問題はその選択だ。どれを選ぶのが正しいのかははっきりと言えない。俺らが正しいと思うことが君にとったら間違いになることだってある。その選択に寄っては頂上まで辿り着けないかもしれない。仮に辿り着いたとしても君の求める答えが見つかるとは言い切れない。その選択によって君の辿り着く先は変わっていくだろう。だから君は慎重にそれらを選択しなければならない。今回は五択問題ということだ。

五択問題。太っちょは目を輝かせている。

ここまでわかってもらえたかな？細身の男は自分の説明に手応えがあったのか、満足した表情で男の反応を確かめている。

わかったと思う。男は煮え切らない表情でうなずいた。しかしどうして五感を失わなければいけないのか。それらを失ったとして、どうやって愛を明確に表現出来るというのか。それがよくわからない。男はそう言った。

何度も言うようだが、何かを明確にするというのは同時に何かを曖昧にするということだ。今回その曖昧になるのが五感というだけで、俺にはとても理にかなったことだと思うがね。細身の男はそう言った。

失ったそれらはちゃんと戻って来るのかな。男は言った。

君が望むなら。

望むなら。太っちょは開いたエレベーターの扉の仕組みを確かめるように、建物とエレベーターの間に出来た空間を覗きながらそう言った。

一つ言い忘れたけど、君が頂上に持って行ける感覚は一つだけだ。つまりこの先四つの感覚を失うということになる。そのこともふまえてじっくり考えて欲しい。時間ならたくさんある。細身の男はそう言うとポケットから煙草を取り出し、それに火をつけた。

男は細身の男が吐き出した煙を眺めながら、まずは必要な感覚は何なのか、消去法によって最初の一つを選ぼうと、その五つの感覚の必要性について考えを巡らしていた。

何が一番大切だろうか。男はそれを考えた時浮かんだのは、視覚と聴覚だった。単純に暗闇の中を手探りで進むのは嫌だったし、音が聞こえないのは何かと不便だ。とりあえずその二つは外せない。あとは触覚と嗅覚と味覚だ。触覚もないと困る。触ったり触られたり、その感覚がないというのは自分の意識だけで動いているという感じがして、それがどういうものかはよくわからないけれど、何か気持ちが悪いことのように思えた。それに触覚がないということは痛覚も反応しないということだ。痛み自体が無くなるのは良いが、それは一緒に危険回避能力を失うということになりこれも外せない。残るはあと二つ。嗅覚と味覚だ。

もう一つ言い忘れたけど...細身の男は何か気付いたように男を見つめた。

嗅覚を失うということは同時に味覚も失うということになる。そう言って手のひらで器用に煙草の火を消し、それをポケットに戻した。

だからここで言う味覚とは舌の感覚、すなわち言葉を失うということになる。男はそう言うとも早くも二本目の煙草に火を付けた。

吸い過ぎじゃない？太っちょは心配そうに細身の男が吐き出した煙草の煙を見つめている。

ということは…。男は必然的に残った一つを男に告げた。

それで良いのかい？細身の男は二本目の煙草を消して、再びポケットにそれをしまった。男はうなづく。

それじゃあ行こうか。細身の男は太っちょを引き連れてエレベーターに乗り込んだ。男は試しに鼻から思い切り空気を吸い込んでみた。そして口を開かないことには空気を吸い込めないことに気が付き、同時にそれはもう既にその感覚を失ったということを表していた。男はそれを確かめると二人が乗っているエレベーターに向けて足を踏み出した。何だかたくさんのが失われたような、そんな感覚がして、男は自分の体を温めるようにコートの襟を首元にしっかりと引き寄せエレベーターに乗り込んだ。

春から夏に向けてその季節のバトンを渡す時、毎年まとまった雨が降る。僕らはそれを梅雨と呼んでいるが、僕にはその毎年行われる儀式的なものが本当に必要なのか疑問に思う。しかし、

その儀式を終えた途端に嘘のような快晴が続き、信じがたい暑さが続く。その儀式を終えないことには夏はやって来ないとでも言っているかのような曇り空。僕は今、そんな一面灰色の空を見上げながら、部長の両親が所有しているという軽井沢の別荘に向かっている。部長の「合宿に行こう」という一言で始まった今回の合宿だが、学校のない土日を使っての強行スケジュールで、さらにはこの天気。雨足が弱いから良いものの、別荘に向かう足取りは決して軽いものではなかった。

「軽井沢のさ、別荘と聞いたからさ、てっきり高原を見渡せるようなさ、高台にあって、近くにテニスコートとかもあったりしてさ、セレブ御用達のレストランとかでさ、のんびり週末を送れるかと思ってたら、なんなのさ、この森の中をハイキング的な感じは」

さっきから隣にいる竜彦が、上り坂で息が途切れてそれどころではない様子なのに、それでも愚痴をこぼさないことには耐えられないといった様子で話している。

「まだ晴れてたらさ、森の空気が美味しいねとかさ、小鳥のさえずりが可愛いねとか、耳を傾けたり出来ただけさ、一体この雨はなんなのさ」

竜彦はシューズに付いた泥を嫌がりながら、ゆっくりと歩いている。

「さっきからうるさい、竜彦。しょうがないじゃない。たまたま梅雨の時期と重なったんだから。雨の日を受け入れるのも、人生を長く楽しむ為の秘訣よ」

後ろから沙織さんが竜彦をたしなめる。その隣には歩美がいる。

「だってさ」

まだまだ愚痴の言い足りない竜彦を、全く気にも止めない様子でどんどん前に進む部長。「まあでも、愚痴が言えるくらい元気ならまだいいわよ。後ろを見てご覧よ」

後ろを振り返ると、最後尾に少し離れて伊藤先輩が見える。

「あいつの愚痴は、別荘に着いてから始まる」

ぬかるんだ地面と、湿気のせいでまとわりついてくるような草木の匂い、さわやかとはほど遠いこの森林浴なら、愚痴のひとつやふたつ飛び出してもおかしくはない。

「部長、まだですか？」

僕らの気持ちを代弁した竜彦の心の叫びは、木々を打つ雨の音でかき消されたのか、部長の耳には届いていない様子であった。

しばらくすると、少し空けた場所に出た。

雨が降っていなければ、森に住む動物が集まって、木漏れ日に包まれながら昼食を楽しむような、そんな集会場になっているのだが、もちろん動物なんていないし、ケータリングされた昼食も置いていない。

「あれがうちの別荘だよ～」

部長が立ち止まり、向こうに見えた別荘を指差している。

「すげえ」

竜彦が驚いて立ち止まっている。その別荘は、一般的に見れば普通の別荘なのだが、知り合いの別荘なんか行ったこともない僕らにとっては別荘という存在だけでなく、言葉の響きだけでも圧

倒されてしまうのだ。

「これ以上濡れたらたまらないから、早く入ろう」と沙織さんが口にするのと同時に、後ろから彗星のごとく現れた伊藤先輩が、我先にの勢いで別荘に入っていった。

別荘の中は、しばらく留守にしていたからなのか突然の侵入者に驚いたような妙な緊張感のある静けさで、湿気と埃が入り混じったあのB棟の雰囲気似ていた。

「やっと着いたあ」

伊藤先輩は、玄関で靴を脱ぐと共に奥の部屋へさっさと行ってしまった。

玄関からリビングに向けて一本の廊下があり、その左手に2階に続くと思われる階段が見えた。

「さあ、みんなもとりあえずリビングに行きましょう」

沙織さん先導のもとりビングの扉が開かれ、よくテレビで紹介される著名人が建てた別荘のリビングの様子と同じような光景が目の前に広がった。そのリビングの広さに、僕はしばらく見とれていた。

「相変わらず広いよね」

沙織さんはカーテンを開けながら、僕らを部屋の中央のソファに早く座るよう促している。

「落ち着くなあ」と早くもそのまま眠りそうな勢いで、伊藤先輩はソファでくつろいでいた。

「まずは、少し落ち着いたら掃除ね」

「いきなり掃除ですか？」

竜彦は、「ひどい仕打ちだ」とでも言いたそうな表情で、

「空気を入れ替えないと気持ちが悪いし、この家を借りるんだから、礼儀として当たり前のこと」

「そうですよね」

歩美も同調している。

「女ってさ、こういう時に一番盛り上がるよな」

「わかる、わかる」

伊藤先輩と竜彦も、何故か気持ちをひとつにして、

「俺と竜彦は2階の空気を入れ替えてくるよ」と言いながら、二人とも廊下の方へ行ってしまった。

「じゃあ、私と歩美は食材を整理するから、部長と高志は1階の空気を入れ替えてね」

そう言って、女性陣はキッチンのほうで早くも食材の整理を始めている。

「部長、やりますか」

僕と部長は、とりあえずリビングの大きい窓を開けて、空気を入れ替えた。

リビングには大きな暖炉があり、冬が来たらこれで暖をとりながらロウソクを灯して、外にしんと降り積もる雪を見ながら恋人と過ごす、そんな明確なイメージが沸き上がる程、庶民が抱く理想的な作りになっていた。

「高志、働きなさい」

と、キッチンのほうからせつかくのロマンティックな妄想をぶち壊す声が聞こえ、渋々ながら部

屋の掃除を始めることにした。

1階の廊下には、二つドアがあり、一つはトイレで、もう一つは浴室になっていた。そして、リビングにはもう一つ扉があり、その扉を開くと小部屋のような部屋が現れた。

「部長、この部屋はなんですか？」

ドアの横に付いたスイッチを押すと、部屋に明かりが点いた。部屋の中には窓が一切なく、四畳半ぐらいの部屋の真ん中に長い背もたれ付きの椅子がひとつあるだけで、壁に目立ったインテリアもなければ、照明も天井に取り付けられた電球ひとつだけであった。

「何の部屋でしょうかね～」

自分の家の別荘じゃないのかと思わず突っ込みたくなる返答にいささか苛立ちを覚えたが、部長自らその部屋の扉を閉めてしまったので、これ以上の追求がしづらい状況になってしまった。

1階の掃除もあらかた終わったところに、2階を掃除していた二人が戻り、女性陣もキッチンから戻って来た。

「お茶入れたから、みんなどうぞ」

歩美が人数分のカップをトレイに乗せ、机の上に並べている。

「しかし、あれだな。この別荘は何回来てもいいよな。雨の日は雨の日で、趣がある」

「そうっすよね」

さっきまであれだけ愚痴を言っていた二人のこの豹変ぶりに、他の4人は目を合わせ笑ってしまった。

若葉の頃を過ぎ、逞しく成長した葉に勢い良く雨が当たり弾ける。そしてそのしずくが地面に落ちる。外ではリズムカルな演奏が繰り返され、それに刺激されるように僕らの会話も弾んでいった。

「じゃあさ、ここら辺で連想ゲームでもやらない？」

『連想ゲーム』とは、沙織さんがお気に入りの遊びで、誰かが決めたお題を言い、その言葉から連想するものを、みんながそれぞれ感じたまま言っていくという遊びだ。

「じゃあね、うーんと、空」

沙織さんがお題を出す。

「水色」

「いや、青でしょ」

「自分を映す鏡」

「シド」

部長以外の全員が即座に答える。この遊びを部室で始めた当初、僕ら新入生軍団はすぐに返答出来ないでいた。しかししばらくすると、お題に出されたものを即座に頭の中でイメージ化し口に出すという新しいバイパスが脳に形成され、僕らはみんなが何を言うのかもそうだけど、自分がどう考えているかということが改めて分かりそのゲームを楽しむようになっていた。

「あははは。えーっとまずね、竜彦の水色。それってそのままじゃない？」

沙織さんが可笑しそうに笑っている。

「だって水色じゃん」

「いや、だから青だって。おまえがそんなこと言うから、思わず突っ込んじゃったよ」

「でも、二人とも間違っていないわよ。もともと空の色って太陽光から出来ているの。太陽光は七色あって、虹なんかが良い例だけど、その中で特に青色が大気中の細かい塵を他の色よりも拡散するんだって。だから、私たちの目には青に映る」

「へえ〜」

「まあ、雲が浮かんでいたら、青と白がミックスして水色にも見えるってところかしら。ただ、二人とも率直すぎる。小学生じゃないんだから」

「小さい子の方が、もっと柔軟な答えを出しそうですけどね」

そう言いながら歩美も笑っている。

「はいはい、俺らはどうせお固い頭のお猿さんですよ」

「な、高志」と、同類を見つけて喜ぶ猿が隣で意地汚く笑っている。

「それに比べて、歩美の答えは面白いよね。それってどういう意味なの？」

「そうですね、空って晴れの時もあれば曇りの時もあるし、雨にもなる。そういうたくさんの顔を持っていて、私たちはそれに影響を受けやすい。例えば、雨の日には気持ちが落ち込んだり、約束をすっぽかしたり。でも本当は雨のせいなんかじゃなくて、自分の心の中を映していると私は思うんです。例え雨の日でも、空が私に送りつけた挑戦状だとか、雨の日だからこそ素敵な思い出が出来るとか、心持ちで気分を変えられる、というかその時の自分の心境が反映される。だから私にとって空は鏡のような存在なんです。って、わかります？」

少し戯けた表情の歩美に対して、竜彦は「わかる、わかる」と何度も首を振っているが、きっと何もわかっていないだろう。

「鏡かあ。面白いね。このゲームやってると、本当にその人の考え方や感じ方がわかるし、やっぱり人それぞれに感じ方って違うんだなと実感するね」

「表面にはない部分も見えて来て確かに面白いですね」

沙織さんと歩美がしみじみ語っている。

「えっと…」

「ん？何か？」

沙織さんが伊藤先輩を睨みつけてる。

「ドレミファ空シド。なんでもないです」

伊藤先輩は何事もなかったように、お茶を飲み始めた。僕的には面白い柔軟な解答と思ったのだけれど、女性陣からは明らかに白い目で見られている。

「女って怖いね」

「ですね」

「男って空気読めないよね」

「ですよね」

ふざけて良い時と、ふざけちゃいけない時の判断基準は、男女で違うんだろうか、ということを実際に考えようとしたが、「女ってさ…」とまだやりとりしてる二人を見て、そもそもの判断基準を誤ったと、ばかばかしくなって止めた。

「そろそろ、夕飯の準備しようか」

そう言って、慣れた手付きで腕をまくり上げ、沙織さんと歩美はキッチンの方へ行ってしまった。

「そう言えば」僕は忘れていた何かを思い出すように、

「部長が連想する空ってなんですか？」

急に部長の存在を思い出したかのように、三人の視線が部長に集まる。

「…空虚」

その言葉通り、とでも言うべきか、その場に流れていた時間と時間のわずかな隙間に大きな沈黙が入り込んで来た。

「空虚ですか…」

くうきよ、くうきよ、頭の中で繰り返す。何もないということ。空を見上げる。確かに、雲ひとつない空を見上げれば、何もないってことにはなる。だけどそこには無限に広がる世界の可能性があったり、晴天に限らずに言えば、必ず何かの存在がある。部長はそれを空虚と言う。それが深いことなのか、それとも僕らみたいに言葉の表面をぼっさり切り取っただけなのか、僕には全くと言って良いほどわからなかった。それぐらい、僕はまだ部長のことをそれこそ表面だけしか切り取れていなかったのだ。それどころか、薄皮一枚がいいところだ。

気がつくと、辺りは徐々に暗くなり始めていた。

「みんな、お待たせ」

テーブルの上には、いつの間にか料理が並べられていて、歩美が「これとこれは私が作ったの。で、あっちが沙織さん」と親に褒めてもらいたいが為に自己アピールする子供のように料理を指差している。僕はどうやら眠ってしまっていたようだった。

「ほら、高志も準備手伝って」

少し眠そうに動き出している竜彦や伊藤先輩を見てみんな寝ていたのかと思い、僕もソファから立ち上がり夕飯の準備を手伝うことにした。

「それでは、いただきますか」

「いただきまーす」

机の上には、5人では到底食べきれない量の料理が顔を揃え、勝ち誇ったような満面の笑みで僕らを迎えていた。

カレーライスにサラダ、パスタにグラタン。そして洋風かと思いきや、簡単な漬け物と豚汁。「カレーライスと豚汁はどうなの」と、始めに少し論争になりかけたが、何も手伝っていない男子に勝ち目はなく、その後は賑やかに食事を終えた。

食事が終わると、もちろん片付けは男子の仕事で、さらに言う则一番下っ端の僕と竜彦の二人の仕事で、重たくなったお腹を全身で支えるようにしながら綺麗に後片付けをした。

みんながそれぞれ落ち着いた頃には、時計の針は十時を指していた。

「部長、そろそろ始めましょうか」

沙織さんが頃合いを計るように突然切り出した。

「始めるって、何をですか？」

僕はうすうすとはこの合宿に潜んでいる意味合いみたいなものを感じ取ってはいたが、とうとう来たかというような様子で聞いてみた。

「あんまり驚かないでね」

「びっくりするぞ」

伊藤先輩も沙織さんも、早く僕らの驚く顔が見たいというように、うずうずした様子で、「部長、誰からにします？」と、部長をさっそく急かしている。

「う〜んと、竜彦」

いきなり呼ばれた竜彦がびくと背筋を伸ばしたが、それよりも部長が僕たちの名前を呼んだのが初めてだったので、そのことに僕は驚いた。

「はい！」

いつもなら、ここで「えー俺っすか？」などと言って騒ぐ竜彦も、この時ばかりは緊張の為かそのような余裕がない様子で立ち上がった。

「じゃあ〜、こっち来て」

と、部長がゆっくりとリビングで昼間掃除の時に見つけたあの謎の部屋に入っていく。

「竜彦、がんばれよ」

僕は他に言葉が浮かばず、今から戦場に向かうような顔つきの竜彦に向かって励ましの声をかけた。

「がんばれ〜、負けるな〜」

伊藤先輩は完全に面白がっている様子で、そんな竜彦を茶化している。

「俺は負けません」

果たして勝ち負けというものがそこにあるのか知らないが、そうとだけ言って、竜彦はその部屋に入ってしまった。

竜彦が部屋に入ってから十分くらいが経過した。時計の針の進む音が無機質に時の経過を知らせてくる。誰も何も喋らない。どこかの病院の待合室で竜彦の安否を気遣っているような、そんな重たい空気が流れている。

そうこうしている内に竜彦が部屋から出てきた。何事もなかったような顔をしているが、その興奮をうまく隠し切れていない。案の定「どうだった？」と聞くと、「それがさ…あつ」と、それを口止めされているのか、わざわざ手で口を塞ぐ素振りを見せて、次は僕が部屋に行くようにと手だけでそう促してきた。

僕は竜彦がどうだったのか、あの部屋で一体何が起こったのか気になったのだが、竜彦にそれを話してくれる様子はなく、また僕自身もそれは知らない方が良いのだと、訪れた緊張感と共に部長の待つ部屋へと向かった。

部屋の扉は開いたままだったので、そこから中が覗けた。部屋の中の明かりは消されたままで、とにかく真っ暗だった。リビングから差し込む光だけが、唯一その部屋の内部の輪郭を形作っ

てくれている。部長の輪郭も確認出来た。部長がその四畳半の部屋の真ん中に立っていると、その部屋は余計に小さく感じ、僕が入ることで部屋のすべての役割が完結してしまいそうなほどの圧迫感がそこにはあった。

僕は部屋に入り、長めの背もたれが付いた椅子の近くに立った。そして部長を見た。何故部長を見たかという、このままドアを閉めてしまったら当然真っ暗になって、椅子も部長も自分の姿さえもわからなくなってしまうのではないかと不安になったからである。そんな僕の気持ちを察してか、部長は軽く椅子を引いて、そこに座るようにと目だけで示してくれた。僕は落ち着かない様子で椅子に座る。僕は、竜彦は何を見たのだろうかとか、沙織さん達は何を知っているのだろうかとか、そういったことはもう気にならなくなっていて、そんなことよりも、これから迫り来る暗闇に対しての恐怖心と闘うことで精一杯だった。

そして部長が扉に近寄ったのを目で確認して覚悟を決める。そしてゆっくりと扉は閉められた。

予想通り、目の前が真っ暗になった。ただこの前に体験した暗闇と違い自分の存在が確認出来る。自分の息づかい、椅子に座っている感触、背もたれに支えられている安心感、それらすべてが僕が今ここに存在しているということを教えてくれる。一つ呼吸を試みる。肺から吐き出された二酸化炭素が唇をかすめて部屋に広がっていく。目の前には暗闇が続いている。どんなに目を凝らしても何も見えない。見えるのは闇だけだ。もしかしたら辺り一面に真っ黒な何かが覆い被さっていて、僕はそれを必死に見つめているのかもしれないが、それを確認する光もないし、この部屋でわざわざそうする意味もない。そしてふと、部長の存在が気になった。さっきから自分の存在は確認出来るのだが、部長が後ろにいるのか、扉のところにまだいるのか、嗅覚と聴覚でその存在を確認しようとするが、どこにも部長の息づかいや衣擦れの音は聞こえてこない。

「部長」

僕はたまらずそう囁いていた。すると、大きな固まりが目の前に覆い被さってきた。それが部長の手だと分かる頃には、さらに深い闇が僕を襲ってきた。

その深い闇にまたしても意識だけが浮かんでいる。どうしてそれが闇は闇でも、深いとわかるのか。僕は以前にも経験していたからである。自分の存在がひとかけらも感じられない闇。無と言っていいかもしれない。僕は前と同じように、自分のパーツをひとつひとつ念入りに、その闇から奪われた肉体を取り戻すかのように確認していく。そして最後に目を閉じているということに気がつく。最初から目を開けてしまえばいいのだが、どういう訳か、必ず確認事項でいう、最後の項目になってしまう。「順番が大事なんだよ」と誰かに言われるように。

そして僕は目を開ける。目を開ける頃には、部長の存在や、あの別荘の中にある暗い部屋にいるということは忘れていて、その代わり、僕の目の前にはこの前見た森が広がっていた。

空は背の高い木が伸ばした木の葉たちで完全に覆い隠されている。しかしそこには光の差し込まない真っ暗な森があるのではなく、木の葉で作られた穹窿天井がある森のように、中は暗いどころか黄緑や深い緑といった具合にその色彩は鮮明に映し出されている。目の前を見るとその森

に一本道が続いている。制作者の意図が全く感じられず利便性だけを追求したような人工的な道ではなく、その森の一部であるかのように、そこにその道があって初めてひとつのアートが完成するような必然性を伴った一本道が僕の目の前に伸びている。そして僕は足を踏み出す。自らの意思で歩くのではない。僕の足が僕を運んでいくというような感覚で、どこか客観的に物事が進んでいく。

思えば、その客観性は絶えず続いているように思えた。どこか遠くで、時にはこの目を通して僕が僕を見ている。そんな感覚がこの森に入ってから離れない。

やがて大きな広場が見えてきた。しかし、僕が予期していた広場がそこにはなかった。動物達もあのリズム感のある音楽も、何も見当たらなければ、何も聞こえて来ない。そこにはただただ静まり返った大きな広場があるだけだった。僕はその広場に立ち尽くす。ここにあるはずの和が見当たらないことに、僕はとても不安な気持ちになった。盛大なパーティーが終わったあのような寂しい静けさがさらに僕を孤独にさせた。

「パーティーは終わったのだ！」

地獄からの使者が舞い降りそう告げているようだった。反対に、もしかしたらパーティーはもともと行われてなかったのかもしれない。僕が見たのは幻で、誰一人立ち入ることの出来ない広場だったのかもしれない。そう考えてみたものの、どこかその静けさはこの森にマッチしていないように感じられた。さっきまでそこにあったものがないという違和感よりも、生物が発する生命の息吹のようなものが一切感じられない妙な静けさがそこにはあった。僕は辺りを見渡す。すると広場の中央に以前もあったログハウスが姿を現した。

現れたログハウスに近づき、入口まで続く階段を上る。人がいる気配は全くない。どこかから突然姿を現すのではという疑念もない。さっきも感じた通り、そこに何かしらの生命は存在していないのだ。小さい窓が扉のすぐ横にあるのが見える。僕は中を覗く。もちろん人影は見えない。しかしその作業が僕には必要なことであるかのように、僕は目を凝らして中を見渡す。そしてゆっくりと扉を開けた。

部屋の中はがらんとしていて、目に留まるようなものは部屋の中央にある階段以外は何もない。僕はその階段に近寄っていく。そして躊躇することなく階段を下り始めた。それはとても洗練された動きで、今まで何度もその階段を下りていたかのように無駄な動きは何一つなかった。階段は曲がることなくまっすぐに地下を目指している。僕は一段一段リズムカルに階段を下りていく。それに合わせるようにして、暗闇がその深さを深めていく。手すりも灯りもないが、階段を踏み外すことはない。僕はこの階段の段差だとか、そのひとつひとつの面積だとか、そういったものすべてを熟知しているのだ。階段は終わることなく続いている。

しばらくすると、足が階段以外の何かを踏みつけたことに気付く。それが水だとわかるのに時間はかからなかった。なぜならいつの間にか僕は裸足になっていたからだ。もしかしたら最初から裸足だったのかもしれない。とにかく、そのひんやりとした水の中にもう片方の足も踏み出す。ちょうど膝に掛かるか掛からないかぐらいの深さの水の中、僕はしばらく立ち止まる。相変わらず辺りは真っ暗なままだ。自分の感覚だけを頼りにまた歩き出す。

ここはどこなのであろうか。意識だけが身体からちよっと離れた場所でその一部始終を見て

いる。僕がどこに向かっているのか、それはわからない。ただ、迷っているのではなくどこかに向けて歩いているということは、その歩く姿から見て取れる。僕は今、どこかに向かっている。そんなことを考えていると、青白い光がぼんやりと辺りを照らし始めた。一步踏み出すと、水の波紋が辺りに広がっていくのがわかる。左右には黒い壁があり、見上げると天井が見えた。その圧迫された空間は小さな洞窟のようになっていて、天井はきらきら水のきらめきを映している。その青白い光の発光体は、水の中にあるようだ。僕が足を踏み出すたびに、天井に映し出されたそのきらめきは形を変え、気がつくとは何かを形作ろうとしているのがわかった。光が重なり合うように何かを描写し始める。天井に映し出されたものをじっと眺める。次第にそれが何なのかがわかってくる。そこには僕が映っていた。天井に映し出された光は僕の姿を形作っていたのだ。そして今の僕というよりは、少し前の僕だ。その証拠にその映像の僕は高校の時の制服を着ている。もしかしたらそれは僕の勘違いで、高校の制服を着た今の僕なのかもしれない。しかしそれが勘違いではないとその後すぐにわかった。映像が動き出したのだ。

青白い光とともに映し出された映像は、次第に僕を過去へと誘う。僕は笑っている。その笑い顔はどこかぎこちなく、照れ笑いのようにも感じた。どうして照れているのか、僕は思い出した。歩美と初めて話した時の映像だったのだ。隣にいる歩美が映し出される。高校に入学して歩美と同じクラスになり、その時初めてかわした会話。それがなんだったかは覚えていないが、とても照れていたのは覚えている。その映像は、音声までは流してくれないので二人が何を話しているかはわからない。そこにいる二人はとても初々しかった。あの頃の感情が蘇る。僕は一目で歩美を気に入っていた。一目惚れというやつだ。歩美も少し照れくさそうにしているのがわかる。そして映像はもとの青白い光へと変わっていった。

どうしてその映像が急に流れたのだろう。僕は懐かしさのあまりそこで起きた現象を知らぬ間に受け入れていたのだ。その映像はどこから流れているのだろう。そういった疑問が一気に押し寄せる波の様に僕を飲み込み始めた。しかし考えたところで何もわからないし、何も変わらない気がした。今僕は何処に向かっているのかさえもわからないのだ。僕はただ疑問を浮かべるだけだ。そして僕は天井を見上げる。次はどんな映像が流れるのか。またはこれで終わりなのか。期待を込めた視線を天井に向けていると、またしても青白い光が何かを形成するようにうごめき始めた。

歩美が泣いている。どこかの公園だろうか。僕はとなりで歩美が泣き終わるのを待っている。これは、歩美のお兄さんが亡くなってしばらくした頃の映像だ。お兄さんが亡くなった当時、歩美はずっと放心状態だった。涙一粒も流せないほど彼女はショックを受けていた。そしてこれは、歩美がやっと涙を流せるようになった時の映像だ。僕はかける言葉が見つからず、ただただ歩美が泣き終わるのを待っている。歩美がやっと感情を露にして僕も一緒に泣き出したい気持ちだったが、そうすると歩美が素直に泣けなくなりそうだったから、僕はなんとか涙をこらえている。あの頃の僕は、歩美が元気を取り戻す為に必死になってやっていた。歩美が学校に行けるようになったのも、毎日歩美の家まで行って、彼女が家から出るのを待ち続けた結果だと思っていたし、彼女が悲しそうな顔をする度に馬鹿をやったり、歩美が笑えるならいろいろな言葉を投げかけていた。次第に歩美は元気を取り戻すのだが、僕は彼女に対して、自分が出来ることすべて

をあの頃はやろうとしていた。多忙を極める歩美の両親に、もう少し彼女のそばにいてやって欲しいと訴えたり、女同士なら分かり合えるのかもと級友に声を掛けたり、僕一人の力で出来ることには限界があると感じた時は本を読んだりしてその限界を少しでも広げようと努めていた。自分の無力さに落ち込んでいる暇はなかった。そして彼女もまたそうであった。自分の無力さに苛立つものの、なんとか前に進もうと必死になっていた。今では歩美も僕も、冗談を言い合って馬鹿みたいに笑っているが、その笑顔の裏にはそういった悲しみがあり、憤りがあり、その映像は、僕と歩美が駆け抜けてきた歴史を僕に思い出させてくれた。

その後も、僕と歩美の過去の映像が続けて映し出された。忘れていたものもあれば、はっきりと記憶しているものもある。忘れていたものに関しては、流れた映像がきっかけとなり、当時の記憶とリンクさせることが出来たし、覚えていたことに関しては、さらに僕を深い追憶の世界へと連れ込んでいった。ただひとつ言うなれば、そのどれもが僕と歩美だけの記憶であり、僕と歩美だけしか知り得ないものだった。誰かが介入してきた物語はひとつもない。それじゃあ、ここに流れている映像は誰が流しているのか。その答えは、僕と歩美、二人のうちのどちらかでしかなかった。もしかしたら人ではない何かなのかもしれない。しかし、その何かについて考察出来るほどの知識を僕は持ち合わせていない。その何かから次に進むことは出来ないのだ。そうするとその映像を流しているのは、僕と歩美に絞られてくる。この状況の中、そこまで考えられること自体が奇跡に近いのかもしれない。だけど僕はそう考えずにはいられない。というより、その答えを知りたがっているのだ。今の状況を理解する為に必要な確認作業なのである。流れる映像をさらに吟味するように眺めてみる。僕と歩美の映像はまだ終わることなく続いている。同じ映像は繰り返し流されない。それは同時に、二人の歴史はそれくらい濃厚であったということを示していた。そこで僕はあることに気がつく。その映像に映る歩美は、どれも悲しそうな顔をしているのである。歩美が見せる表情は当時と変わらない。僕が記憶しているものとなんら変わりはないのだが、彼女はとても悲しんでいるように思えた。笑顔の裏の悲しみではなく、その笑顔自体が悲しみを表現しているのだ。どうしてそう思うのだろうか、僕は思い出す。あの時部室で見た彼女の表情。僕の知らない歩美がまだいて、それが僕にそう感じさせているのではないか。そして、この映像こそが、僕のその不安を反映させているのではないか。僕はそう思い始めていた。

僕の知らない歩美がいる

この事実は、僕を奈落の底に突き落とす。普通に考えればそれはごく当たり前のことで、他人のすべてを知ることなど到底不可能なのである。自分のすべてを知るだけでも大変なのに、それが他人のこととなるとなおさらだ。しかし、僕は自分のこと以上に彼女のことを考えてきた。だからもしそうであったとしても、僕にとってはそれは衝撃的な事実なのである。

すると突然映像が途切れた。二人の過去のすべてを流し終えたからという感じではなく、青白い光が流星のように散り散りに弾け映像が消えたのだ。そして僕は驚いた。今まですぐ近くで流れていたと思っていた映像が、気がつかぬ間に、どこかの貯水庫のようなとてつもなく広い空間に映し出されていたことに気付いたのだ。先ほどまで通ってきた小さなトンネルは、知らぬ間に拡張していき、このような大きな地下空間を作り出していたのだ。僕はそこに向けて歩いていた

のかもしれないが、その青白くきらめく巨大空間は僕に何も告げてはくれなかった。

それでも僕は止まることなく歩いている。映像を見ている間もずっとそれだけは変わらない。しばらくすると、前方に大きな四角い箱のようなものが見えてきた。それがどれくらいの大きさかはわからないが、辿りつくまでにまだ時間がかかりそうだ。とにかく僕はそこに向けて歩いている。さっきの映像はなんだったのだろう。今僕には懐かしむ感情よりどこか寂しい気持ちでいっぱいだった。もしかしたら彼女はずっと悲しい表情をしていたのかもしれない。僕が笑っていると思っていた彼女は実は泣いていたのかもしれない。僕は僕の判断を信じられなくなっていた。彼女に対する想いが本当だからこそ、僕はそれがとても悲しかった。僕が彼女にしてきたことは何だったのだろう。僕が正しいと思ってきたことは実は彼女の為にはなっていなかったのだろうか。彼女の僕に対する気持ちにさえも不安になってきた。彼女は僕を必要としてくれている。それこそが僕の生きる源のようになっていたのに、果たしてそれは真実なのだろうか。一度生まれた疑いの芽が、次々に花を開いていく。僕は彼女を信じている。そう自分に言い聞かせる。彼女も僕を信じていてくれるのだから。僕は僕を勇気づける。次第に、前方の大きな箱が近付いてくる。

そこでようやく僕は立ち止まった。後少し歩けば箱の前に辿り着く。僕はそこに行きたがったが身体が反応しない。ぼうっとその箱を眺めている。そうしているうちに、青白い光が辺りを強く照らし始めているのがわかった。徐々に光が強まり、僕は目の前に襲ってくる強い光を手で遮るようにしてその光の根源を見つめている。

箱の下の部分、その中央から人が現れるのが見えた。強い光が逆光となり、黒い影となった人と思わしき影はこちらに向かってくる。すると次第に光が弱まってきた。僕はそれが何であるか目を細めて確認しようとする。しかし光が強すぎてまだ見えない。僕がその物体を見たいという想いが膨れ上がるのに呼応して、光はその光量を落としていく。そして、その人影はゆっくりとその姿を露にしていく。

その人影はあの広場で見た白いワンピースを着た女性であった。その白いワンピースの裾をはためかせながら尚も近付いてくる。

顔はまだ光の加減で見えない。しかし、僕はその女性の正体がわかった。肩越しまである髪の毛の長さ、ほっそりとした体型、透き通るような白い肌、なんであの広場でそれに気付けなかったのだろう。その人影の正体は歩美だったのである。

彼女はもうすぐ僕の手の届く位置まで辿り着く。何故こんな深い洞窟の奥底に彼女がいるのか。その白いワンピースは何の為に着ているのか。その理由は何一つわからなかったが、今日の前に彼女がいる。そして彼女が歩みを止めると同時に、光はもとの青白い光に戻っていた。僕は彼女の顔を覗いてみる。

彼女は泣いていた。

そこで僕は目を覚ます。目を覚ましたんだと気がつくまでに少し時間がかかったが、ここが現実であると、僕にはすぐに分かった。手足に重力を感じ、意識はちゃんとこの身体に戻っている

。それらは経験から学んだのではなく、経験の方から僕に寄り添うように、現実と夢の見分けかたをそっと教えてくれる。

僕は四畳半のあの小さな部屋にいたことを思い出す。部長はどこだろう。そう思い、後ろを振り返る。暗くて見えないが、部長の存在をはっきりと感じ取れる。

「どうでしたか？」

部長はそうはっきりと呟いた。

「どうでしたかって言われても…」

僕はそれを言葉では表現出来なかった。頭がまだ混乱していたし、整理したところでうまく説明が出来る気がしない。僕がその答えに戸惑っていると、

「今見たのは、全部、君の心の中で起こっていることですよ～」

部長はそう言うと部屋の扉をゆっくりと開けた。外から光が溢れてくる。しばらくぶりに見た光に僕は自然と目を細める。どのくらいこの部屋にいたのだろうか。徐々に視力が回復していくのを確かめると、部長が手を扉の向こうに向けているのがわかった。そして、僕がそれに従い部屋を出ようとする時、

「まだみんなには～内緒に」

とだけ言って、また部屋の中へと戻っていった。

僕はまたしても、現実にもうまく溶け込めずにいた。リビングにみんなの姿を確認出来たし、時間だって一秒一秒しっかりと刻んでいる。前回の経験があったからこそ、受け入れられることも多かったのだが、何となく意識がすぐに身体から離れていきそうで不安定にならざるを得なかった。

そんなふわふわした状態のまま、リビングに置かれたソファに座る。みんなが僕を見ているのが分かるが、僕はそれに応えられずに宙を見ている。とにかく、いろんな出来事を一回きちんと整理しないことには、僕は自分の発言の信憑性を確かめられない気がした。

そんな風に僕が宙を見つめるようにしていると、

「じゃあ次は歩美ね」

と、沙織さんが僕の変わりに言ってくれた。

歩美が席から立つ。僕を心配そうに見つめる歩美の目は不安でいっぱいだった。僕がそうさせているのかもしれないが、どうしたら何でもなかったと言えるのか、また、彼女に対する配慮にまで気が回らないほど自分のことでいっぱいだった。冷静に判断をしようとしているのだが、身体はどこか一部分が熱を持ち僕をそうさせまいとしていた。歩美が部屋に向かっていく。僕はその姿を見送ることしか出来なかった。僕は彼女を勇気づけてあげられるのだろうか。僕の言葉は彼女に届くのだろうか。それすらもわからなくなっていた。

リビングに置かれた置き時計は、十一時を指している。僕は次第に意識が明瞭になっていくのを感じていた。となりでは竜彦が伊藤先輩となにやら話し合っている。その内容までは聞き取れないが、楽しそうに会話をしているのはわかった。竜彦は一体何をあの部屋で見たのだろうか。そして歩美は今、あの部屋で何を見ているのだろうか。みんなきっと自分の心の中を見ているの

だろうが、それはどういうものなのだろうか。竜彦は前に、豪華なホテルにいたと言っていた。それが竜彦の心を象徴するものなのだろうか。もしくは、心の中を見せられているのは自分だけで、竜彦や歩美はただ単に夢を見ていただけなのであろうか。しかしそれはないとすぐわかった。それが夢であれば、夢のような臃げなものであれば、二人ともこうは執着しないであろう。そこに確かなリアリティがあったからこそみんなこのサークルに入ったのだ。じゃあ、竜彦はなぜそんなに楽しそうにしているのだろうか。竜彦の心の中には何があったのだろうか。そう思うが、すぐに考えるのを止めた。今の竜彦を見る限り、きっとそんなものだったのだろうと思った。それに、あいつに重苦しい雰囲気は似合わない。それよりも歩美が心配だ。彼女の心の中はきっと僕の想像を超えた深さや重みがあると思うからだ。

僕は、今まで歩美のことを理解しているつもりになっていたのだ。僕が知っている彼女は、氷山の一角に過ぎず、彼女自身も知らない彼女が、きっと今目を覚ましているに違いない。彼女が出てきた時、僕はなんと声を掛けるのだろうか。楽しそうに出てきてくれれば、それで良い。しかし、以前のような心を閉ざしてしまう歩美はもう見たくない。そう願うように扉を見つめる。すると、

「きやあああつ！」

歩美の叫び声が聞こえてきた。最初、その叫び声が歩美だとわからなかった。あの部屋から聞こえてきたとわかってから、それが歩美だと気付いたのだ。扉が勢いよく開いた。部長が顔を出す。

「沙織さん、ちょっと来て」

部長が沙織さんと呼んでいる。辺りに緊張が走る。竜彦も伊藤先輩も話しを止め部屋のほうを見ている。沙織さんが急いで部屋に向かい、中に入る。僕はその場に立ち尽くす。どうしていいかわからなかった。そして、それよりも恐怖で身体が動かなかった。

今まで聞いたこともない歩美の声。その声自体、人のものとは思えなかったし、何より空気を切り裂くようにしてこの部屋に緊張感を走らせた。その緊迫した空気は尚も続いている。何が起こったのか。しかしこの部屋にいる全員がそれを知っているのである。彼女はあの部屋で何かを見て、そして叫んだのである。しばらくするとぐったりとした歩美が部長に抱きかかえられるようにして部屋から出てきた。

側で沙織さんが「大丈夫だから」と、声を掛けていた。

歩美の意識は朦朧としているようだった。沙織さんの声掛けに反応はするものの、何も答えられずにいた。僕は心配でたまらなかった。しかしなんと声を掛けて良いのかわからなかった。僕はその光景をただ見ていることしか出来なかった。何か出来ることはないかと僕はキッチンに駆け寄った。そしてタオルを水で濡らし、既にソファで横になっている歩美のもとへと持っていた。

「ありがとう」沙織さんがそれを受け取り歩美の額に当てた。彼女はひどくうなされているように見えた。竜彦も伊藤先輩も僕も、それをただ見ていることしか出来なかった。沙織さんが頭を撫でるようにして見守っている。僕は部長の姿がないことに気がつく。すると部長が廊下の方から姿を見せた。沙織さんがそれを確認すると、歩美からゆっくり離れた。部長がもう一度歩美を

抱きかかえる。そのまま二人は玄関に続く廊下の方へと姿を消してしまった。僕らはまだ立ち尽くしている。

少ししてから、沙織さんがリビングに姿を現した。

「今、二階で寝てるから」

そう言ってソファに座る。僕たちもそれに倣ってソファに座った。

「歩美はとりあえず大丈夫。少し横になれば落ち着くだろうし、部長が今側で見てるから」

「何があったんですか？」

僕はたまらずそう聞いていた。

「私には詳しいことはわからないし、みんなもだいたいの察しはついてるはず。歩美の中の問題なんだろうけど、触れてはいけないものに触れてしまったのかもしれないわね」

僕は愕然とした。彼女の触れてはいけないもののおよその見当はつくが、それが今回のこととうまく結びつかない。彼女は過去とちゃんと向き合ってきたし、触れないようにしていたとは思えない。それとは別に、彼女の中に触れてはいけないパンドラの箱のようなものがあったのだろうか。僕はここでも思い出す。僕の知らない彼女がやはりいるのだ。あの世界で見た歩美は、大きな箱から出てきた。今回のことと関係しているのか僕にはわからないが、少なからず無関係だとは言いきれない。僕が見た僕の中の世界と今の状況はどこか繋がりがあのように感じられた。しばらくすると沙織さんがリビングを出て行き、代わりに部長が姿を現した。

「もう心配ないから大丈夫。明日の朝には普通になっているよ。もう遅いし、みんな寝よ～」

そう言って、部長はまたリビングを出て行ってしまった。伊藤先輩は僕と竜彦を見て、

「まあそういうことなら」

とキッチンの電気を消し、

「とりあえず、部屋に行こうか」

と僕らを二階の寝室に案内してくれた。

僕と竜彦は同室で、他に、部長と伊藤先輩、沙織さんと歩美、といった具合に三部屋に別れて寝ることになっていた。

「歩美大丈夫かな」

竜彦が部屋に敷いてある布団の上で横になり、天井を見上げながらそう呟いた。

「部長も沙織さんもいるから心配ないよ」

と僕は、自分の心情とは裏腹なことを言って部屋の電気を消した。

竜彦の寝息がさっそく聞こえてくる。僕もすぐ眠れるくらい身体が疲れていた。だけど神経だけが異様に立っているのが分かる。

今日の出来事を整理しようとするのだがなかなかうまくいかない。説明の付かないことになんらかの説明を付けるというのは、本当に大変な作業なのだなとつくづく思う。それに歩美のことが心配でたまらない。部長も沙織さんも大丈夫だと言うが、僕にはそうは思えない。二人はみんなが心配しないように言っているに違いないが、そんなことはどうでもいい。僕は、今日僕が見た世界と歩美が倒れた一件はやはり繋がっていると考える。そこには切り離せない何かがあるのだ。

その何かはきっとあの白いワンピースの女性、歩美本人なのだが、彼女が泣いていたこと、そして悲しみに溢れ出していた僕の記憶の映像。それらが歩美の倒れた原因と密接に関係していると考えれば、すべてつじつまが合うように感じられる。彼女の中に僕の知らない歩美がいて、その歩美は悲しみに溢れている。触れてはいけない何かがある。それらをきっちり結びつけることによって僕にようやく睡魔が訪れた。僕は今日初めて、自分の心の中を覗いた。誰にでも経験出来るものではないのだろう。そしていろいろなことが、氷山の一角が少し浮いた程度かもしれないが、見え始めていた。そして、僕はこんなにも歩美のことを想っているのかと、自分のことだから知ってはいたが、ちゃんとわかっていなかったのかもしれないということに気がついた。僕の心の中は歩美で溢れている、その事実には僕は感動すら覚えた。明日目を覚ました時に、彼女がいつもの歩美に戻っていることを願いながら僕は眠りについた。

翌日、歩美はいつもどおりの歩美に戻っていた。昨日のことをうまく隠しているのか、それとも全く覚えていないのか、僕にはそれがうまく判断出来なかったが、普段通りの笑みで僕に微笑みかけてくれた。僕はとりあえず安心したが、心配、不安の種は消えたわけではなかった。むしろ彼女が微笑めば微笑むほど、その芽は急速な成長を遂げていくのである。

そして僕は再び歩美が倒れているのを目撃することになる。

昨日よりも深い場所で、僕は彼女を見失ってしまった。

男はどこかの部屋にいた。それは見たことのある部屋だったが、何故だかうまく思い出せない。男はコートを脱ぎ、それをソファの背もたれに掛けて、そしてそれからそのソファに身を深く沈めた。

窓の外では低く垂れ込めた雲が不機嫌そうな顔をして地上を見つめている。男はその情景に見とれるものの、そこに渦巻いている何かは男に何も語ってはくれなかった。男はただその景色を眺めているだけだった。

耳元で陶器が擦れる音がした。男はその音のする方に振り向き、そこで初めて女がいることに気がついた。女は湯気の出た二つのカップをトレーに乗せ、それを持ち男が座るソファの方まで歩いてきている。そして目の前のテーブルに慎重に二つのカップを置くと、男の目の前の別のソファにゆっくりと腰掛けた。

女は男を見つめている。男はその顔に見覚えがあったが、いつどこで会ったか、男の頭の中に浮かぶ何人もの女の顔とその女をうまく結びつけることが出来なかった。忘れていたわけではない、覚えているもののその女を特定することが出来なかったのである。女は目の前のカップに手を伸ばし、慎重に口元まで運ぶとそれを一口飲んだ。男は自分の前にあるカップを覗いたが、その黒い液体がコーヒーであることに気が付くまで少し時間がかかった。そして男は思い出す。自分は嗅覚を失っていることを。

「ねえ、あたしのこと愛してる？」

と女は言った。

男はしばらく黙ってその女を見つめた。男は確かにその女を知っていたし、愛してもいた。しかしそれが過去のことなのか現在進行形のことなのか、男にはそれがどうしてもわからない。いやおそらく現在のことなのだろう。この女は今、自分の愛を求めている。

時折窓を叩くようにして風が通り抜けて行く。それ以外には、街の雑音だとか住人が織りなす日常のリズムだとか、そういった常に辺りを満たしていたものたちの声は全く聞こえて来なかった。部屋はただ静かにそれらを受け入れるようにして静寂を保っていた。

男は女を見つめたまま、嗅覚を失うということについて考えを巡らせていた。それは必然の行為だった。自分の現状を知りたかったし、何より女が求めているものの答えを出すにはそれが必要だったのだ。嗅覚を失うということはどういうことだろう。その前にどうして嗅覚を失うことになったのだろう。男は思い出した。二人の男にここまで連れて来られたことを。いや違う。自分で決断してここまで来たのだ。そして嗅覚を失うこととなった。それも自分で決断したのだ。

男はここまで来たいきさつを徐々に思い出していった。

「少し時間をくれないか？」男は女にそう言った。

女は黙ったまま男を見つめている。

「君の質問にちゃんと答えたいんだ。それには少し時間がかかる」男は言った。

「どうして？」

「例えば…そうだな」男は少し躊躇したが、「君は嗅覚を失ったことはあるか？」そう言った。

女は少し考えてから「ないわ」と言った。

「嗅覚を失うことについて考えたこともないだろ？」

女は首を横に振り「あるわ」と答えた。

男は驚いた。今この世の中でこれだけ真剣に嗅覚について頭を悩ませているのは自分だけだと思っていたからだ。

「どうして？」男は言った。

「犬よ。あたしの飼っている犬。ある日その子を見ていてふいに浮かんだのよ。この子が嗅覚を失ったら生きていけないんじゃないかって」

「犬か」男はため息まじりにそう漏らした。

犬は、というよりも動物全般的にその嗅覚は人間よりも勝っている。彼らはいろんなものを嗅覚で判別している。食べられるもの、そうでないもの、敵、味方、それ以外にも色々あるのだろう。そうやって判別しながら危険を回避したり、自分のテリトリーを獲得して生きている。だから彼らにとって嗅覚とは生命線のようなものだ。それを失ったら生きていけない。

「ねえ、それがあたしの質問とどう関係あるの？」女は言った。

男は自分が嗅覚を失っていることを話すべきか迷った。口止めされているわけではない。話したとしても別に問題はないだろう。しかし失った経緯をどう話せばいいかもわからなかったし、何より女がそれを理解してくれるとは思えなかった。

「何でもない」男はそう言った。

女は少しの間男を眺めたのち、「それで？」と言った。

「それであなたはあたしのことを愛しているの？」

「わからない。今はうまく答えられないんだ」男は言った。

「その気持ちならわからないこともないわ。でも…それでも答えて欲しいの」女はそう言った。

「どうしてそんなに求めるんだい？」

「あら愛を求めている人なんていないわ」女は続けて言う。

「相手の真意がわからない時、それを確かめる為にあなたならどうするの？ただずっと黙ってそれがわかるのを待っているとでも言うの？」

「じゃあ仮に、今ここで君に愛していると答えたとしよう。しかし一体そこに何の真意があるのだろう。『言葉とは人の心を隠す為にある』これはゲーテの言葉だ。言葉なんてそんなもんさ」男は言った。

「あら、それもただの言葉よ」女は少し微笑みながらそう言った。

男は何だか自分が嘲笑われているように感じた。こんなものは茶番だ。そう言ってすべてを投

げ出したい気持ちになった。しかしそうすることが出来ない、そうなることを求めている自分がいた。それが上着の裾を掴むようにして男を少しだけ冷静にした。

窓の外では雪が降り始めていた。女はその雪を眺めている。男はどうしてこんなことになってしまったのか、こんな話しをする為にここまで来たわけじゃない。愛を明確に表現する為にここまで来たのだ。男はそう自分に言い聞かせるようにして女と同じように外を眺めた。雪はただ静かに、その白い羽を広げて街へと降り立つように降り続いていた。

「誰だって怖いよ」女は雪を眺めながらそう言った。

「あなたはあたしに愛を求めて来ない。それは恐れているのか満たされているのかのどちらか。あたしはあなたをからかったり試したりしたくて言っているんじゃないの。ただ時々ものすごく不安になるの。あなたを見ていると」

そう言った女の横顔には深い悲しみが刻み込まれていた。それを見て男は悲しくなった。その純粋な血が巡った女の横顔に見覚えがあるものの、その時抱いていた情感が蘇ることなく通り過ぎて行くことに。そして再び抱いたこの悲しみもいずれは忘れてしまうということに男は悲しくなり、そして後悔した。嗅覚が記憶を吸い尽くすようにして消えてしまった今、男は不安で仕方なかった。ちょうど赤ん坊が親の胸元で安らいで眠るように、動物たちが安全な場所を確保するように、匂いとは安らぎでありぬくもりそのものであった。男は自分の選択が間違っていたことに気がつくものの、結局それはどうしようもないことだったと悟った。残せるのはひとつと決まっていたし、遅かれ早かれそれは男にとって失うもののひとつであった。そして男は今まで自分がいかに満たされていたのかにも気付いた。それを知るにはあまりにも大きな代償であった。

「これ以上話すことがあるかしら」

女は男を見つめてそう言った。

男は黙ったまま女を見つめた。これ以上話すことはない。女にそう言われているような気がした。もしそうでなくとも、男には返す言葉が見つからなかった。

「今度会う時は、もし会うことがあったなら、本当のあなたに会いたいわ」そう言って女は立ち上がり、

「さようなら」

そう一言だけ言って、男が入ってきたドアとは違う方向にどこかぎこちない足取りで歩いて行ってしまった。

扉が閉まる音を聞き、男は肩を落とした。吐き出したため息は、室内の空気に混ざること無く宙を彷徨っている。

散々だったね。背後から誰かの声が聞こえた。

茶番だ。また別の声が聞こえる。

男はすぐにそれが誰の声か察した。男が後ろを振り向くと、

だから言っただろう、慎重に選べってさ。細身の男は振り向いた男の肩に手を当てた。

オーマイゴーツ。太っちょは額に手を当て、嘆くようにそう言った。

少なくとも俺なら嗅覚を最初に選ばない。嗅覚は記憶と密接しているからね。医学的にもそれは証明されている。思い出がないのにこの先どうやって愛を表現出来るんだろうね。細身の男は

男の肩を二回叩いた。

ドンマイ。太っちょもそれを真似して肩を二回叩いてきた。

男は二人のその行動に腹が立ったが、それもこれも選択したのは自分だ。自分の浅はかな決断によって招いた事態だ。自分で何とかするしかない。そうやって自分をなだめた。ここで二人と揉めても仕方が無い。

そうチャンスはないぜ。細身の男は言った。

えっと、あと何回だっけ？太っちょはそれを指で数えるようにしている。

三回だ。男は口に出さずにそう言った。あと三回で見つければ...男はそこで思いとどまった。見つければどうなるんだ。男は急に不安になった。愛を明確に表現出来なければ、一体自分はどうなるのか。ここまで考えてこなかったことだ。すべてを失って頂上にたどり着き、空気のようなものになってしまうのか。それとも残念でしたと言って、もとの世界に帰れるのだろうか。そもそもこんなことになるとは思ってなかった。男はこの二人に騙されている気がしてきた。細身の男の言葉にうまく操られるようにしてここまで辿り着き、何かを明確にするということは何かを曖昧にってしまう、という理由で感覚まで奪われた。これのどこに好意があるというのか。男はわからなくなってきた。これも感覚を失ったからなのか。嗅覚を失い、平静を保てなくなってきているのも確かだ、男は何を信じたら良いのか、また信じ得るものがどこにあるのか、それすらもわからなくなっていた。

次は何にするか決まったかい？そんな男の様子を気にすることなく細身の男は言った。

どれにしようかな。太っちょはまたしても指を折り曲げ、子供のようにはしゃいでいる。

もしやめるなら今のうちだよ。気がつくまで細身の男は目の前のソファに座り、ポケットから煙草を取り出してテーブルの上に並べた。

今やめるなら、嗅覚を失うだけで済む。そう言うと、並べた煙草を吟味するかのようにつめ、そのうちの一本を手に取りそれに火をつけた。

何事にも代償はつきものさ。そう言って口から煙を吐き出した。

つきものつきもの。太っちょは服に付いた埃を手で払うようにしてそう言った。

男はその言葉で自分はもう引き戻せないということを悟った。もし仮に細身の男の言うようにここで断念するとしよう。そうすればこれ以上感覚を失わずに済む。けれどもそれは同時に、女も失うということだ。少し前であれば、それはしょうがないことだと男は思っていた。出会いがあれば別れもある。あの女とはその中のひとつの出来事に過ぎないと男は考えていたのである。しかし再びあの女と出会い、男の中にはある感情が芽生えていた。それはまだ若い芽であったが、その感情を育てていきたいという想いが男の中で燻っていたのである。何故なのか。今になってどうしてあの女に惹かれるのか。嗅覚を失ったこの状況だからこそ何かに気付けたのか。それはわからない。わからないからこそ知りたい。男はそう思い始めていたのである。だからここで断念するわけにはいかない。やめれば嗅覚を失い、女も失う。男は荒れ地を彷徨う野良犬を想像した。

触覚だ。男はそう言った。

細身の男は聞こえていなかったのか、もう一度という風に顔を近づけてきた。

次に失うのは触覚だ。男はちゃんと聞こえるようにはっきりとそう言った。

「第四章」

車内アナウンスが次の駅名を告げた。目の前の座席に座っている老人が僕の後ろの方を眺めている。僕もその老人の後ろに流れる景色を、心地よい揺れに身を任せながら眺めている。いつの間にか景観を損ねるように連なっていたビル群は形を変え、そこには開け放たれた空と平らになった家屋と、遠くの方には山が姿を現していた。僕は都会から出て山を発見すると、そこから先にあるものに対するイメージがぶつりと切れてしまう。山の向こうにもちゃんと世界は存在しているのに、それを遮断するようにそびえ立つ山々は良い意味でも悪い意味でも景色を完結化してくれる。まるでその先が見たいなら俺を乗り越えてみろと言っているようだ。

気がつけば車内にいる人もまばらになり、確認出来るのは僕と隣にいる歩美と目の前の老人、向こうの席で爆睡しているサラリーマン風の中年ぐら이다。歩美の「週末海に行きたい」という一言で始まった電車での小旅行も、ここから先は目的地まで穏やかに過ごせそうだと、僕は深く息を吐いた。そして小さく開けられた窓から香る初夏の風の匂いと、車内に流れる穏やかな空気を吸い込む。隣でその一連の様子を眺めていた歩美がおかしそうに笑っている。

「もう夏が始まるんだね」

そう言うと歩美もゆっくり息を吸い込んで、僕が見ている景色を隣で一緒に眺めた。

先日の合宿での一件が嘘のここのように、今日の歩美は明るい。努めてそう振る舞っているのか、気持ちが落ち着いたのか僕にはやはり判断出来ないが、歩美が笑っているのならそれで良いと、自然と僕も穏やかな気持ちになる。結局、あの時歩美は何を見たのか僕はずっと聞き出せずにはいたのだが、あまり詮索し過ぎると反って歩美の傷口を広げてしまうのではないかと思い、僕はそれには触れないでおこうと決めた。とは言うものの、気になっているのも事実で、結局僕はその両方の感情に板挟みのまま時を過ごさなくてはならなかった。だけど、いつかそれが彼女の口からなのかわからないが、明らかになるのではないかと前向きに考えるようにした。

「そういえばさ、沙織さんの言葉にまつわるストーリーって、高志知ってる？」

「知らない」

「実は沙織さんには子供がいるの」

「…！」

「やっぱり驚いた」

歩美は僕の反応を予想していたように、そしてその通りになったと得意げに笑っている。

歩美は急になんでそんな秘密話を打ち明けたのだろうか。僕はただ「そうだったのか」と言うことしか出来なかった。きっとそれは事実なのだろう。沙織さんには子供がいたのだ。けれど

僕にはそれがうまく受け入れることが出来なかった。子持ちの女子大生をうまく思い浮かべることが出来ないように。

「子供はいくつなの？」

「確か沙織さんが高校三年生の時に産んだらしいから、二歳ぐらいじゃないかな」

僕はそれについてのたくさんの障害について思い浮かべないわけにはいかなかった。高校生で子供を産んで、大学に進学。数々の困難があったに違いない。僕の乏しい想像力でもその困難を乗り越えるのは相当な覚悟が必要だということはわかる。そしてそれは僕の想像以上に険しい道りであることもわかる。

「相手の人は？」

「沙織さんのひとつ年上の先輩らしいんだけど、いろいろあって別れたらしいの」

人生にはいろいろなことがあるものだけれど、そのいろいろなことを分別出来るようになるにはまだまだ沙織さんも僕らも若すぎるような気がした。でも若すぎるからと言って、簡単には手放せないものが存在している。沙織さんはきっと真剣に命と向き合ったに違いない。そして自ら険しい道を選択したのだ。

「沙織さんは強い人だね」

「そうだね。でもね、沙織さんはその赤ちゃんがいたから強くなれたんだと思うし、強くなろうと決めたんだよ。私もその話を聞いた時、もっと強くならなくちゃって思ったの」

「母親みたいに？」

「そうじゃなくて、一人の人間としてだよ。そしてね、沙織さんはきっと辛いなんて思っていないよ。むしろ幸せだって笑って言った。それってすごくない？」

「すごいと思う」

沙織さんのすべてを包み込むような存在感の出生が明らかになって僕は思わず納得してしまった。人にはそれぞれのストーリーがあり、そのストーリーがその人を色付けている。それこそ目の前の老人にだって様々なストーリーがあるのだろう。老人は何を思ってこの移り行く景気を眺めているのだろうか。老人はずっと窓の外を眺めている。移る景色のその先にある、何か大切なものを見るような優しい眼差しで。

駅に着き、電車を降りてからも歩美は沙織さんの話しをしていた。「部長は沙織さんの高校の先輩なんだって」とか「いろいろ部長が助けてくれたって言ってた。あの二人の関係は深い絆で繋がっているんだよ、きっと」など、まるで自分のことのように話す歩美を見ていて、僕はこうして歩美と二人で過ごせることに幸せを感じた。僕はただ相づちを打つだけだけれど、それでもこうして歩美と何かを共有出来ることが僕に安心感を与えてくれる。僕の知らない歩美が存在するのは事実であり、そしてそれは誰の中にでもあることで、僕の中にも歩美の知らない僕がいる。それよりも今こうしてお互いと一緒にいるという事実が、僕は何よりも嬉しい。僕らは海までの道りを、照りつける夏の強い日差しが気にならなくなるほど、二人の時間に浸りながら歩いた。

気がつくと、上空を鳶が旋回していた。大きな翼を広げ海風を巧みに操るその様は、自分も自由になれる気がして、見ていてとても気持ちがいい。歩美は浜まで行きたいと言って、僕の先を歩いている。

波打ち際に辿り着くと歩美は海を眺めてゆっくり目を閉じた。僕は隣でそれを見ていたが何か話しかけてはいけないような雰囲気だったので、目の前の海を眺めることにした。そこには見事なまでに空と海とを分つ地平線があり、開け放たれた空はこの世界をドーム状に包んでいた。そして海はとても落ち着いていた。あまりにも穏やかだったので僕は落ち着いていない海を想像してみようとしたが、目の前に広がる雄大な世界がそれを許してくれなかったので断念した。浜に打ち上がる波の音が、僕の心にしっとりと流れ込んでくる。日常から離れれば離れるほど、僕の心は不思議な感覚に陥っていく。見たこともない景色なのに、どこか懐かしさに似た感情が芽生えてくる。この場に存在している自分が不思議でたまらなくなる。現実と非現実の狭間は、意外とこのような場所に潜んでいるのかもしれない。僕はいつの間にか歩美の存在を忘れるぐらいその景色に見とれていた。そして、その世界を優しく撫でるような声で歩美が話し始めた。

「私はね、海に来るといつも私の中にあるものをすべて波に浮かべてみるの」

歩美は海を眺めたままそう言った。

「それでゆっくりと目を閉じて波の音に耳をすませるの。何度も何度も浜に打ち寄せる波の音をね。空っぽになった私の中に波が少しずつ染み込んでいくのを感じながら。そうするとね、波が私の浮かべたものを浜まで運んでくれるの。ひとつひとつ優しく丁寧に浜に打ち上げてくれる。そしてそれを私は大事に掬い取って持ち帰るの。波がそうしてくれたように、私もひとつひとつ優しく丁寧に。浜に打ち上げられなかったものたちは波が沖に流してしまう。あの地平線のずっと向こうのほうまで。もう私の手が届かない世界まで。でも私が沖に流してしまいたいと思って浮かべたものたちは、いつも決まって浜に打ち上げられてしまう。そう祈りをこめて波に浮かべたとしても、私の意思とは関係無しに。偏った目を持たず、それをきちんと公正に判断するようにね。誰がそう判断しているかわからないけれど、結局私は、そういったものたちも掬い取って持ち帰らなければならないの。それはとても大変な作業だし、苦しいことなの。だって捨てようと決めて波に投げたものなのよ。どうして戻って来ちゃうのっていつも泣きそうになるけど、私にはそのまま浜に捨てておくことは出来ない」

「どうして？」

「どうしてって、もし私が浜に打ち上げられてきたとして、私じゃなくてもいいわ、その誰かを高志はそのままにしておくことが出来る？」

「出来ないね」

「それと同じこと。そのままにしておくことは、私には出来ない」

「うん」

「だから帰りはいつも憂鬱だわ。でもね、波の音を聞いている瞬間だけは、すべてから解放されるの。文字通りすべてからね。だから私は海が好きなの」

歩美は遠くの方を見ている。歩美が持ち帰らなければならないものは、きっとお兄さんのことだろう。その哀しみは、いつか海の深くまで波がさらってくれるのだろうか。もし波がうまい具合

にさらっていったとしても、結局この世界のどこかにその哀しみは存在している。たとえそれが海底何万メートルに沈んでいったとしても。

僕はまだ大切な人を失ったことがない。でも、僕は想像してみる。僕が歩美を失ったとしたら、歩美が目の前からいなくなってしまうたら、僕は…。僕は考えるのをやめた。歩美の気持ちをすべて理解することは出来なくても、言いたいことはわかる。それにまだ起きていないことを考えたってしょうがない。そんな哀しみで溢れた未来のことを考えるより、そうならないように今を生きることのほうが大切だ。しかし実際、歩美の目の前でそれは起こった。突然お兄さんはいなくなったのだ。僕は歩美を見つめた。そんな世界で歩美は生きているのだ。その哀しみを抱きながら、それでも笑っているのだ。人はそんなに強くないとうちの祖父が昔言っていた。

「いいか高志、人間は弱い生き物なんだ。だからみんな強くなろうと努力している。しかしどんなに強くなろうとも、その弱さが消えることはないんだ。だからもう泣くな。弱くたっていいじゃないか。また強くなれば」

そういつて祖父は優しく抱きしめてくれた。僕はまだ小さかったから、祖父の言っていることがわからなかった。でもその抱擁は今でも忘れない。祖父の愛がきっとそこにあったからなのかもしれない。

「どうしたの高志」

気がつくど、僕は歩美を抱きしめていた。

「急にどうしたの？」

歩美は笑っている。

「よくわからないけど、こうしていたいんだ」

「うん」

歩美の手がそっと背中に回ってきた。

このまますべてを波が連れ去ってくれればいい。自分の意志とは関係なく、そのすべてを。僕は歩美を力強く抱きしめた。そして僕たちは長いキスをした。その瞬間だけすべてから解放されるの、歩美の言葉が思い出される。僕は少し妙な気がした。今抱きしめている身体も、重ねている唇も、歩美のものであるはずなのに、そこにあるはずの歩美の感情が感じられなかった。歩美という皮を被ったもの。僕の想像が作り出した歩美という虚像。歩美自身も今日の前にある現実をどこか遠くから見ているような、そんな感じがして僕は妙な気持ちになった。ありのままの彼女はどこにいるのだろう。僕は彼女を抱きしめたまま、海の向こう側を眺めた。遠くに見える地平線のその先を。僕は、何故だか歩美がそこにいる気がした。

それからというもの、僕は歩美と会う度にどうすることも出来ない無力感を抱くことになった。彼女が抱えているものが何であれ、少しでも彼女の力になりたいと思う僕の想いは結局その使命を果たせず、報いとばかりに僕に重たくのしかかってきた。彼女は一体何を抱えているのか、僕は歩美を傷つketくなくかつたし、傷つけずにそれを聞き出すにはあまりにも繊細な試みのような気がして、僕にはそんな医者のような技術もなければ知恵もない。何が彼女の為になるのか、僕は歩美のことを考える時選択肢の最初の項目にそれを置いて考えるようにしていたのだが、そ

れすらも正しいかどうかわからなくなっていた。結局僕は彼女が自然に話してくれるのを待つしかなかった。

とはいえ、僕にはそれをゆっくり待っているほどの寛大の心を持ち合わせていなく、部長に何度も頼み込んでまたあの世界に入り込んでいた。そこで泣いていた歩美が、彼女を知る今唯一の手がかりのような気がしたのだ。

僕は目をゆっくりと開けた。目の前には部長と沙織さんがソファに座っている。

「やっぱりだめだ」

僕はもう一度目を閉じる。今日を閉じているのは、こっちの世界とあっちの世界を分離させて気持ちを落ち着かせる為だ。

「高志、あんまり自分を追い込んだらだめよ」

心配そうに見つめる沙織さん。そう言えば沙織さんには子供がいるのだと、僕は自然といつもとは違う角度で沙織さんを見ていた。どのタイミングでその話を聞いたらいいのかわからなかったのも特に触れないでいたのだが、こうして改めて見ると母が持つ独特の母性というやつが漂っている気がした。しかしその母性のせいで僕を心配しているのではないと気がつく。

沙織さんが心配するのにはわけがある。僕が僕の心を覗くことは、危険が伴うと沙織さんが言っていた。

「部長が見せてくれるのは、その人の本能なの。いわばその人の無意識の世界。そして部長は見せるだけで何一つとしてコントロール出来ないの。そこで厄介なのが自我の意識というもうひとつの意識。人の自我意識は他の生き物と違って本能にすべてを拘束されていないの。だから私たちは文化や習慣や知性によって本能とは離れたところに生活スタイルを持つことが出来る。文明の進歩もこの自我意識のおかげで可能になったから、言わなくてもその重要性は分かるわね。厄介だと言ったのは、この自我があまりにも本能から離れていこうとすること。普段は無意識がそれを阻止するように、自我意識を本能に呼び戻して私たちは日々暮らしているわけだけど、あまりにも自我が本能から離れてしまうと無意識が暴れ出すの。バランスが崩れて、この間の歩美のように無意識が自我意識を破壊し始める」

「歩美は本能から離れたがっているってことですか？」

「そうね、その感情は意図的でないにしても、彼女はそれを選択したがつているように私も思う。とにかくね、無意識の存在を明確にするということは、そういう危険が伴うってことをちゃんと理解して欲しいの」

僕は今の沙織さんの話しを飲み込もうと窓の外に目をやった。外では強い夏の日差しが有り余ったエネルギーを容赦なく地上にぶつけている。しかしそれは想像に過ぎなかった。実際は窓には蔭が絡まっていて、その全容を確認することは出来ない。けども僕にはそれが分かる。これも知識と経験が無意識的に判断させているのだろうか。僕が歩美を想うこの気持ちも、無意識的に形成され、僕はそれを選択しているに過ぎないのだろうか。そして僕はなぜ歩美を選んだのだろうか。僕はなんだか頭が痛くなってきた。

僕は部屋に視線を戻す。部屋の中ではクラシックが耳触りの良いボリュームで流されている。

何でも部長の趣味らしいのだが、クラシックを流すことで心に安らぎを与え、自然と無意識の世界に調和することが出来るのだと沙織さんは言っていた。あれだけ無口な部長と沙織さんは一体いつそんな会話をしているのだろうか、僕は不思議でたまらない。

「それにしても、どこを探してもあの階段が見つからないんですよ」

合宿中に見つけたログハウスの中の階段。あの時の階段が、合宿が終わってから一度も見つけれないでいたのだ。

「見つけようとするから見つからないのかもね」

そういうものなのよ、とでも言いたそうに沙織さんは机に置かれた僕のグラスに冷たい緑茶を注いでくれた。

自分の心の中でさえ覗けないのだから、歩美の中に潜んでいるものを見つけようとするなんてことは到底無理なんじゃないか。僕は大きくため息をひとつ吐いた。

部屋の中では、クラシックの曲がエンディングに向けてより一層ゆったりと壮大になっていた。何でも「亡き王女のヴァーナ」という曲らしく、部長が僕の為に流してくれたらしい。「亡くなった人を送る歌をなんでまた」と僕は聞いてみたところ、「これはそういう哀しい歌じゃないの。宮廷で小さな王女様が踊るような、そういう華やかな舞踏曲なのよ」と沙織さんが教えてくれた。僕はゆっくりと目を閉じてその小さな王女を思い浮かべてみる。豪華絢爛な宮廷でたくさんの貴族が曲に合わせて踊っている。そのステップは華麗で、ひとつも狂うことなく刻まれている。その中に一際綺麗な小さな王女が、上品な微笑みを浮かべながら踊っている。その幼さを漂わせるような踊りは、何処の誰よりも洗練された美しさを持っていた。僕は思わず見とれてしまう。美しさとは姿形から生まれるものではなく心から生まれてくる、そう感じさせるような踊りだった。僕はしばらく見とれていると王女の頬がきらきらと光っているのがわかる。僕はそれが何なのか最初わからないでいたが、しばらくしてからそれが何なのかわかる。王女は泣いていたのだ。

僕はふと我に返った。

僕の頭の中には歩美のことしかない。僕はそれが普通だと思っていたのだが、その異様なまでの執着心のせいで、何か大切なものを見落としていたのではないかと思い始めていた。オールを使って船を漕いでいる内に、前進させることに集中し過ぎて進行方向を見失う。僕もそれと同じように、この広い世界で何かを見失っているのではないだろうか。

「バランスが大事なのよ」

小さな王女がステップを踏みながらそうつぶやいている気がした。

辺りはすっかり暗くなっていた。今日はもう遅いからと、部長と沙織さんにお礼を言い一人部屋を出た後、僕は考えることを止めることにした。

人生にはわからないことが多すぎる。それが人生というものなのか、それをひとつひとつ解き明かして行くことが人生なのか、はたまたそれを追い掛け続けるその行為こそが人生なのか、僕にはよくわからない。ただ今の僕は、歩美の気持ちを知りたいという衝動をエネルギーにして動いている。そのエネルギーが切れたら動かなくなるのか、歩美の気持ちを知ることで僕の中の何

かが変わるのか、それはそこに行くまでわからない。本当にわからないことだらけである。ただひとつはっきりしているのは、僕は歩美が好きだということだ。愛というものがどういうものなのかはうまく言えないが、僕は歩美を愛している。それが事実だ。僕は彼女を救いたい。救いたいというと、どこか偽善のように聞こえてしまうが、彼女を何とか暗闇の淵から出してあげたい。しかしそれは結局僕の独りよがりだ、彼女は救いを求めていないのかもしれない。その淵にいることで平安が保たれているのかもしれない。ひょっとしたら僕は余計なことをしているのかもしれない。例えそうであったとしても、僕は歩美の本当の笑顔が見たい。僕らが初めて会った時のような、光と影も、喜びと憎しみも、すべてがひとつとなった笑顔をもう一度見たい。僕が歩美と過ごすことで幸せを見出せるように、彼女にもそうなって欲しい。そして僕がその横にずっといられるのなら、それは本当に最高のことだけど、彼女が彼女として芽吹くことが僕の今の願いである。

僕は夏の夜空を見上げた。都会で見られる星に限りはあるのだが、夏の大三角形だけはくっきりとその夜空に足跡を残していた。「久しぶりに星なんか見たな」僕は独り言のように思わず呟いていた。いろいろなことを考え過ぎて、その本質を見失うということはよくある話のだが、まさしく今の僕がそれだと、夏の大三角形が教えてくれているような気がした。

「バランスが大事なんだよ」

僕はまた一人でそう呟いた。

次の日、僕と竜彦は放課後に部室へと向かった。部屋には部長と伊藤先輩がいて、沙織さんも歩美も来ていなかった。

「華がないね」

「そうですね。今度花瓶でも持ってきてみましょうか？」

伊藤先輩と竜彦の会話はいつも噛み合っているのかそうでないのかわからない。要するに伊藤先輩は、男しかいない部屋に対して不平を言ったのだ。

「歩美は今日予定があって来れないって言ってましたよ。沙織さんは来ないんですか？」

「さあね」

そう言いながら伊藤先輩は『ルパン三世全解明』と書かれた雑誌を手に取り眺めている。

梅雨はもう終わったというのに、カビ臭い匂いが部屋に立ちこめている。部屋の換気でもすればいいのにと思いながら、他にすることもないので僕は窓に近づいた。

「窓なら開かないよ」

伊藤先輩は雑誌に目を通しながら僕の方に向かって言った。

「どうしてわかったんですか？」

僕は驚きというよりは興味があるというように伊藤先輩を覗き込んだ。しかし伊藤先輩はその質問に答える気がないのか、その必要がないといった沈黙を保ったままだった。僕はしょうがなく質問を変えた。

「どうしてあの窓は開かないんですか？」

「壊れているから」

僕はいろんなことに残念になりながらソファに座った。伊藤先輩は相変わらず雑誌に目を通して、竜彦もいつの間にか、そこら辺にあった本を読んでいた。部長も向こうの方で本を読んでいる。男だけになると話すこともないのか。この部屋は一気にむさ苦しい図書館のようになっていた。僕は本を読む気になれなかったので目の前の伊藤先輩の読んでいる本に目を向けた。

「伊藤先輩はルパンが好きなんですか？」

「好きだよ。むしろルパンになりたいぐらい。俺がもしそうなれたらルパン4世か」
自分の言ったことが可笑しかったのか、大声で笑っている。

「盗んでみたいものとかあるんですか？」

僕も冗談っぽく聞いてみた。すると伊藤先輩は真顔になって、

「あると言えばある」

と少し寂しそうな顔で呟いた。

あると言えばある、じゃあないと言えばないのだろうか。僕はそれが何なのか気になった。普通に「あるよ」と言ってくれれば「女ですか？お金ですか？」というくだらない会話の続きが出来たのだが、何かを含ませたような歯切れの悪い答えが返って来たので、それで会話が終わってしまった。伊藤先輩がふと見せた哀愁は、本当にルパンのようだった。そういえば、この前沙織さんの言葉にまつわるストーリーを聞いたけれども、伊藤先輩のストーリーが何なのか聞いていなかった。どうして伊藤先輩は『あいことば』に入ったのだろう。それが僕にはどうしても想像出来ない。そこで思い切って聞いてみることにした。

「伊藤先輩の言葉にまつわるストーリーって何ですか？」

竜彦がそれに反応するように見ていた本から目を離し、伊藤先輩の方に身体を向け直した。

突然後輩二人から見つめられる格好となった伊藤先輩は、困った顔をして部長を見た。

すると部長が僕らの方へ歩み寄って来た。

「これなんですか？」

おもむろに部長が手渡してきた写真に目を向ける。男女二人が写っている写真だ。そこには若い頃の、若いと言っても二、三年ぐらい前だろうが、伊藤先輩と女の人が写っていた。その女の人は、髪を上品に巻き上げ、胸元がぱっと開いた赤い派手な服を着て、ハリウッド女優のような派手さと上品さを兼ねそろえているとても美しい人だった。

「この隣の女性は誰ですか？」

「俺の昔の彼女」

僕と竜彦は目を合わせた。そこには誰もがわかるような信じられないという表情が交わされていて、それが伝わったのか、

「本当だから」

と伊藤先輩は恥ずかしがる様子もなく真剣に答えた。

「とても綺麗ですね。しかしどうして別れたんですか？」

竜彦には相手を思いやるという気持ちがないのだろうか。

「どうして別れたのか。それがわかれば俺はもっと楽に生きているだろうな」

生きるのが辛いとは言っていないが、僕にはそう聞こえた。少なくとも今日の伊藤先輩からは、

僕らを茶化して笑ういつもの幼い笑顔はなく、「荒野の用心棒」のイーストウッドのように映る世界を憂いの目で眺めている。常に明るく笑っている人ほど、寂しさを隠し持っているということなのだろうか。笑うことによって何かを紛らわす為に。

僕らの質問は続いた。

「今もその人のことを想っているのですか？」

「そうだよ。今も昔も変わらずね」

「それって辛くないですか？」

「どうして？」

「どうしてって……。なあ高志」

「あのね竜彦。相手を想うってことと相手から想われたいって思うことはとても似ているんだよ。そこにバランスは必要ないんだ」

そこにはやっぱりいつもの伊藤先輩はいなかった。彼女のことを話す時の先輩は、紳士のような、どこか気高い精神を持って過去に触れているような気がした。そのことを汚そうものなら、誰にでも反旗を翻しそうな様子だった。それだけ彼女のことを想っていたんだと、僕は伊藤先輩を少し見直した。

その後、伊藤先輩は記憶を辿るように彼女のことを話し始めた。

「ある日、何も言わずに彼女は俺の前から消えてしまった。海外に行ったという噂も流れた。友達に聞いても彼女の行方を知っているものは誰もいなかった。彼女の家に行っても、そこにはもう誰も住んでいなかった。近所の人も驚いている様子で、誰一人として彼女の、そして彼女の家族の消息を知るものはいなかった。どこに行ってしまったのか。どうしていなくなったのか。その前に彼女と会った時は、いつもと変わらなかったし、そんな予兆は感じられなかった。俺は何とか彼女を見つけ出したいと、いろんな人に聞いてまわった。行く先に心当たりはないか、何か不審な言動はなかったのか。しかし誰一人としてわからなかった。夜逃げするような状況でもなかったし、誰かに拉致されるような事件性も考えられなかった。ごく一般の家庭であったし、どちらかというとな経済的には裕福な家庭であった。だからこそ俺は納得出来なかった。しかし当時高校二年生だった俺に出来ることは限られていたし、彼女の行方を探す手立ても次第になくなり、俺は彼女を探すのを諦めた。彼女のことはもう忘れようと思った。そして去年、この大学の入試当日、俺は偶然彼女を街で見かけた」

伊藤先輩は部屋の壁にあるいくつかのシミを数えるように眺めながら、話しを続けた。

「あまりに突然の出来事だったから、俺はその場で固まってしまった。何も出来なかったし、何も言えなかった。そういったことを想定していれば、あるいは何か行動を取っていたのかもしれないが、俺は彼女を忘れようとしていた。ほとんど忘れていたも同然だった。その矢先の出来事で、俺はただその姿を見ていることしか出来なかった」

静まり返った部屋に伊藤先輩の声が染み込んでいく。僕と竜彦は窓の外に夜が訪れているのに気がつかないほど、伊藤先輩が語る物語に引き込まれていった。

「彼女は俺に気付くことなく、ただ目の前を通り過ぎる。どうしてあの時声をかけられなかったのだろうか。どうして彼女を追い掛けなかったのだろうか。俺はそのことに対してとても後悔した。

勇気がなかっただけなのか、あまりに突然の出来事で混乱していたのか、自分が動けなかったこと
の理由はいくつも挙がるのに、じゃあもし彼女に声を掛けていたら何と言ったのか、俺はどう
したのか、それに関しての答えは何も浮かばなかった」

先輩は腰をソファーに深く沈めるように座り直した。

「それから自問自答の日々が続いた。試験には無事に合格したが、少しも気持ちが浮かなかった。
あの時、彼女に声を掛けたとして、何と声を掛ければいいのか結局わからなかった。そんな
時、部長と出会った。部長は俺を見るや否や、『ちょっと話しませんか?』と言って俺をこの
部室に連れて来た。俺は当時やけっぱちになっていたから、恐怖心とか猜疑心とかそういう感情
が欠落していたんだろうね。とにかく俺はその誘いに何の疑問も感じず、部長の言われるままこ
の部屋に来た。そして俺は心の中にいる彼女に会った。本当に不思議な体験だったが、それと
同時に自分の気持ちにも気付けた。それから俺は彼女に会う機会を待ち続けているってわけさ」
伊藤先輩の顔には、長年に渡り漂わせてきた哀愁が自然と染み込んで、寂しささえも愛おしい
といったような、そんな優しい表情が浮かんでいた。

「好きな子の前だと俺はどうしてもつまらない男になってしまう。嫌われたくないんだよな結局
。だから俺は次に彼女に会った時の為に、かける言葉を探しているんだよ」

「別に言葉は必要ないんじゃないですか?」

僕は大事なのはそこではないと思った。

「高志、俺の場合は違うんだよ。俺は絶対に彼女を傷つけないんだ。それには言葉を慎重に
選ばないといけない。ひとつひとつ丁寧に摘み取らないといけない。ジェンガって知ってるか?
あれみたいなもんだよ。間違った選択をすると、すべてが崩れていく」

伊藤先輩は崩れたジェンガを想像するように苦い顔をした。

「そしてその慎重に選んだ言葉は俺に自信を与えてくれる。その心のこもった言葉は必ず彼女に
届いてくれる。俺はそう信じている」

伊藤先輩の初めて見せる真剣なまなざしに、僕も竜彦も言葉が出てこなかった。

「結局のところさ、やっぱり怖いのかもな」

伊藤先輩は最後にそう言って、寂しそうに笑っていた。

「みんないろんなもの抱えてんだな」

帰り道、竜彦は珍しく考え込んでいた。

「そうだな」

僕は高校の頃を思い出していた。竜彦はどんな時も笑顔の絶えない奴だった。いつも回りを巻き
込んで笑いを誘い、当時柔道部だった竜彦は、その大会中も、さらに言うと試合の直前までふ
ざけていた。だけどそれは、適当にやっていたわけではない。誰よりも真剣に柔道をやってい
たし、その情熱を誰もが知っていた。竜彦がみんなの緊張をほぐそうとふざけているのを、みん
ながわかっていた。だから顧問の先生もいくら竜彦がふざけていても怒らなかったし、一緒にな
って楽しんでた。片親で育った竜彦は、誰よりも優しく、誰よりも寂しさを知っている奴だ
った。しかし一度だけ、僕は竜彦の涙を見たことがある。あれは僕らの学校で開催された柔道の

大会の時だった。決勝まで進出した我が校は大変盛り上がり、休日だということにたくさんの人が集まっていた。僕も竜彦を応援しようと駆けつけた。その決勝戦。先鋒、次鋒と勝ったはいいが、その後の中堅、副将で連敗を喫してしまい、残るは大将戦だけだった。我が校の大將はもちろん竜彦で、場内はその日一番の盛り上がりを見せていた。僕もその歓喜の瞬間が訪れるのを楽しみにしていた。そして試合が始まった。

向こうの大將は、どう見ても強そうに見えなかったし、誰もが竜彦の勝利を疑わなかった。試合内容も圧倒していたが、竜彦は決め手に欠け、気がつく残り時間も僅かとなっていた。場内からは焦りの声が聞こえ、心もとない野次の声も聞こえた。僕はそれでも竜彦の勝利を信じていた。しかし、残り時間あと何秒というところで、竜彦は倒されてしまった。竜彦が汗でスリップした瞬間を相手が見逃さず、そのまま大外刈りで鮮やかな一本負け。静まり返った場内に、それでも竜彦は感謝の意を表すように何度も頭を下げていた。試合が終わり場内の清掃が始まった頃、僕は一言声を掛けてやろうと竜彦を探した。しかし竜彦の姿はなかなか見つからず、ちょうど三階の通路をうろうろしていたところ、開いた窓から「畜生！」という声が聞こえてきた。僕は窓から顔を出してみると、校舎の裏にある誰も立ち寄らないようなスペースで、壁に向かって悔しさを露にした竜彦を見つけた。僕はあの時の竜彦の涙を今も忘れない。だから竜彦がたまに寂しそうな表情を見せると、その時のことを思い出してしまう。

珍しく感慨深い様子の竜彦を見て、

「俺さ、歩美と付き合ってたんだ」

と、前々から竜彦にいつ言おうかとタイミングを見ていたのだが、何故か突然、僕の口から僕の意味とは関係無しに、そう言葉が漏れていた。

「知ってるよ」

当たり前だろ、とでも言いたげに竜彦は言葉を吐き捨てた。

「そうか」

僕がそれだけ言うと、「俺はお前の口から聞いたかったんだよ」と竜彦はさして残念がる様子もなく、可笑しそうに少しだけ笑っていた。僕は恥ずかしさと同時に、その言葉を待っていてくれた友がいるということを誇らしく思った。そして親友のその台詞は、僕の抱えている心配事も吹き飛ばしてくれた。

俺も歩美が話してくれるのを待とう

竜彦が僕を信じてくれたように、僕も歩美を信じようと、この夜、僕は固く決心した。

エレベーターの中で男三人が横一列に並んでいる。階数ボタンも開閉ボタンも無いからそうするしかないというように、男たちは視線を扉のドアに貼付けたまま、その到着をただ静かに待っている。

男には今エレベーターが上へ上がっているのか、それとも下に向かっているのかがよくわからなくなっていた。それはエレベーター内が静かだったからではない。自分の体が宙に浮いているような感覚だったからだ。両足は確かにエレベーターの床を捉えているのに、そこに感覚がついてこない。足を動かすことは出来ても動かしたという実感が出来ない。足だけではない。両手もそうだし、唇や脛もそうだった。きっと瞬きをしているのだけど、男には目の前に一瞬黒い影が通り過ぎていく感じにしか映らなかった。唇も開いているのか閉じているのかがよくわからない。脳からの信号は行き届いているものの、どれもこれも実感を伴っていなかったのである。しかし重力は感じる事が出来た。左足を持ち上げれば筋肉が軋んでいるのがわかるし、それを支える右足に掛かった負荷を感じることも出来る。それが感じられなければ歩けないし、動くことも出来なかったのであろう。触覚は皮膚の感覚を無くすだけで、身体の内側の感覚までは奪うことが出来なかったようである。男は一通り自分の感覚を確かめてから大きく息を吐き出した。

エレベーターは止まること無く進んで行く。もちろん男にはそれが動いているのかずっと止まったままなのか分からない。きっと進んでいるのだろう。そう思わないことには自分を落ち着けることが出来ないぐらい、男は動揺していた。それも当然のことである。男は今、嗅覚と触覚を失い、目と耳ですべてを感じなければならないのだから。

汗が出ているね。細身の男は男を見つめながらそう言った。男は試しに自分の額を手で拭いてみた。そしてその拭った手を見て、男は自分が思ったよりも大量の汗をかいていることに気がついた。温感までなくなっているのか。男はコートを慎重に脱ぎ、その行為事態はさほど難しくはなかった、自分の腕にコートを掛け、そのコートを知らぬ間に落ちてしまわないように腕をしっかり胸に引き寄せた。ひとつひとつを目で確認しなければ、今身体がどういう状況なのかを知ることが出来なくなっていて、男はすべてにおいて慎重にならざるを得なくなっていた。常日頃慣れ親しんだ行動にも信頼が置けなくなっていたのである。

次はうまく行くと良いね。細身の男はそう人事の様に呟いた。

大丈夫かな。太っちょがそれに続いて言った次の瞬間、エレベーターの扉が音も無く開いた。

男はエレベーターから降りた。自分の足が一步一步前に進んで行くのを目で確認しながらの作業だったから、それはとてもぎこちないものに映っていただろう。男が部屋に入るのを確認して

から、エレベーターは実にスムーズに扉を閉めたのだが、そのことに男が気付くはずもなかった。

男は部屋の中央のテーブルに目を向けた。そこには既に例の女がソファに腰掛けていて、じっと男の方を見つめている。男はさらに慎重に歩みを進めて女が座っているテーブルの所へと近づいて行った。最初女に悟られてしまわないかと心配したが、それを知られたところでどうすることも出来ない、女に近づく頃には少し自棄になっていて、女の前に辿り着いた今、その行為が自然と平静を取り戻す助けとなっていたことに男は気がついた。

「早かったのね」女は男の方を見つめてそう言った。

自分がここに辿り着いたのが早かったのか遅かったのかがよくわからなかったので、男はとりあえずうなずいた。そして女と対面しているソファにゆっくりと、自分の身体の位置を何度も確かめながら、ソファに腰掛けた。

目の前のテーブルには、以前あったはずのコーヒーが入ったカップが無いことに男は気がつく。

「ごめんなさい。コーヒーを切らして用意することが出来なかったの」女はそう言った。

男はそれにうなずき、「問題ないよ。喉は渴いていない」と言った。実際、喉が渴いているのかそうでないのかが男にはよくわからなかったから、それはどっちでも構わないという意味合いでそう言った。

女は男の後方を見つめている。男はそれが気になって後ろを振り向いたが、そこには誰もいなかったし、自分がこの部屋まで来たエレベーターの扉が見えるだけでその他に気になるようなものはなかった。一体女は何を見ているのだろうか、男は少し気になったが、再び女のほうに視線を戻した頃には女は既に違う方向を見ていて、男は杞憂だったと短い息を吐き出し、ソファに深々と身体を預けた。

女は外を眺めている。窓の外にはまだ雪は降っていない。きっとこの後降り始めるのだろうけど、そのことを女は知らないはずだ。自分だけがそのことを知っていて、これが何度目かは思い出せないけど、男はそれを女に話して少し驚かせてやろうかと考えたが、まもなく女が話し始めた頃には男のほうに驚かされてしまった。

「ねえ、まだ雪は降っていない？」女はそう言った。

「まだ降っていないよ」男は言った。

「でももうすぐ降るでしょ？」女は言った。

「どうしてわかるんだい？」

「知っているからよ。この後雪が降って、少しずつ街を白く染めていく。そしてあたしはこの部屋から出て行く」

男は言葉が出なかった。どうして女がそのことを知っているのか。女はさらに続ける。

「でもね、それをあたしは願っていないの。そうなって欲しくないからまたここであなたのことを待っていたの。それがどういうことかわかる？」女は男のほうに目を向けた。しかしそれはまたしても男の視線とぶつかることなく、今度こそはっきりと男の後方にその女の視線は注がれていた。

「どこを見ているの？」男は言った。

「あなたのことを見ているのよ」女は言った。

「でも実際、今君は違う所を見ている」

「そんなことは大した問題じゃない。あたしの目にははっきりとあなたが映っているもの」

「問題じゃない？」男はそう言った。

「ええ、大したことではない。問題なのはあなたがあたしのことを愛しているかということ。ねえ、それであなたはあたしのことを愛しているの？」

女の目は確かに何かを捉えているように感じた。大した問題じゃないのかもしれない。男はそれならそれで良かった。その女を眺めていると、自分の嗅覚や触覚がないことも気にならなくなっているからだった。

「君にまた会えて嬉しい」男は言った。

「それじゃ答えになっていないわ」女はそう言った。

「それなら君が求めているものとは一体なんだ。ここに来るまでよく考えてみたけど、それがやっぱりわからない」

「言葉よ」女はそう言った。

「それなら最初会った時に言ったじゃないか」

「あなたはまだわかっていない」女はそう言うと窓の外に目を向けた。

窓の外では雪が降り始めていた。淡々と窓を通り過ぎて行く雪は、以前よりも少し力をなくしている様に見えた。微細に震えながら、雪は街に降り続けている。

「どうやら雪が降り始めたようね」女は言った。

男はそれにうなずいた。実際うまくうなずけたかどうかはわからないが、視線が下に行き、そしてまた元の位置に戻ったから、きっとそれはうまく出来たのだろうと男は思った。

「そろそろ時間ね」女は言った。

「時間なんてたくさんあるじゃないか」男はそう言った、

「あなたは本当にわかっていないのね。時間は有限なのよ。そして人は時間に制限されている。どんなに願ってもそれを変えることは出来ない。でも愛は…」女はそう言って、その言葉の続きを飲み込むようにして喉を鳴らした。

「それはまた今度話しましょう。それと、今度はあなたからこの部屋を出て行ってくれない？」

「どうして？」男は言った。

「どうしても」女は言った。

「それは出来ない。まだこうして君と話しをしたいんだ」

「あなたは知るべきなのよ。ここから立ち去ることがどれだけ勇気のいることか」女はまた外に目を向けてそう言った。

男は動けなかった。それはうまく体をコントロールすることが出来なかったからではない。まだここを離れるべきではなかったし、次ぎ会う時はあまりにも多くのものを失ってしまいそうで怖かったのである。

「わかったわ。あなたがそうしないならあたしが出て行く」女はそう言って立ち上がり、

「さようなら」と言って、男とは反対の入口の方へ歩き出した。その歩き方は以前よりもさらにぎこちなく、そしてゆっくりとした歩き方だった。

「待ってくれ」男はそう言って立ち上がったが、バランスを崩してしまいその場に倒れ込んでしまった。あまりにも急ごうとしたせいか、自分が感覚を失っていることに気がつかなかったのである。男は何とか床に顔面をぶつけることなく両手で体を支えることに成功したが、再び立ち上がった頃には女の姿は扉の向こうに消えていた。

うん。難しいね。気がつく後ろで細身の男が立っていた。

でも実は簡単。太っちょが丸まった体を何度も揺らしながら細身の男の横で踊っている。

男はどうして駄目だったのか、どうして伝わらないのか、女と再び別れた今、そのことをとても後悔した。その一方でどうしてもわからないことがあった。男は言葉で愛を明確に表現出来るとはやっぱり思えなかったし、そもそも愛とはそういうものじゃない、お互いが感じ取るものではないのか、という考えが男の身体にこびり付いて離れないのだ。それが間違いなのか。男はもうそうとしか考えられなくなっていた。自分のすべてが崩れていくように感じてその場に座り込んでしまった。

次はどうするの？それを見て細身の男は言った。

決まったの？太っちょは腰に手を当てて頬を大きく膨らまし、男を見下ろすようにそう言った。

男は答えられなかった。次に感覚を失うものを選ぶ以前の問題で、男はもうどうして良いかがわからなくなっていた。

やめるならそれでも構わない。でもそれは君が決めるべきことだ。細身の男は煙草をポケットから取り出しそれに火をつけた。

今日何本目？太っちょはそれを睨むようにしている。

男は決断を迫られている。この先どうするのか。やるかやらないのか。確か細身の男が言っていた。最終的な問題はいつも二択問題だと。そしてその答えだけは決まっている。やるしかないのだ。ここで引き返すにしてはあまりにも多くのものを失い過ぎた。男は再び立ち上がった。さてどうしようか。男は残っている感覚を思い出す。視覚、聴覚、味覚。味覚は言葉を失うと言っていた。何も見えなくなるか、何も聞けなくなるか、何も話せなくなるか、そのどれかだ。

細身の男は煙草の煙を太っちょにわざと吹きかけ、太っちょはそれを煙たがりながらもその煙草を細身の男の口元から奪い取り、そのまま部屋の隅へと投げた。煙草は床の上で煙を上げて燻っている。二人ともそれをどうすることもなく眺めている。

男はまだ決められずにいた。男は一度ソファに座ろうと、慎重に足を運び、体をソファに預け、そしてソファの肘掛けに自分の肘を乗せその手で頭をしっかりと支えるようにして、男はいつも自分が考え事をする時の姿勢で考えをまとめようとした。

太っちょがそれを見て、さっきまで女が座っていたソファに大胆に体を預け、肘を肘掛けに置き、頭を手でしっかりと支え、男と丸きり同じ格好をして難しい顔を作っている。

そろそろ決まったかな。細身の男は二本目の煙草を取り出しそう言った。

俺たちは別にいつになろうと構わないけれど、君には待っている人がいるんだろう？細身の男

は二本目の煙草に火を付けた。

待っている人がいる。男は女のことを思い出した。次に会う時に何をどう伝えたら良いのか。またその為には何が必要か。男はしきりにその答えを考えた。自分は誰かの言葉に踊らされていやしないか、自分は見たものに惑わされていやしないか、また自分は言葉に頼り過ぎてはいないだろうか。そのこともしっかりと考えた。

そして男はその答えを細身の男にしっかりと告げた。

「第五章」

色のない葉がアスファルトを賑やかに駆け回り、そして土に帰っていく。少し前まではそこにあった熱狂的な街並も、ゆっくりとその色を落としていく。

「あの角を曲がると、金木犀の香りがするんだよ」

歩美はそう言って、歩く歩幅を変える。そして僕もそれに合わせるように歩幅を大きくする。大学への道のりの途中にあるいくつもの小さな幸せ。歩美はいつもそれを大事に掴まえて、僕に教えてくれる。

夏が終わっても一向に衰えない大学構内の熱気は、来月から始まる大学祭に照準を合わせるようにその熱を上げていた。

「うちのサークルは何やるんだろうね」

僕はどこか人ごとのようにそう投げ掛けると、

「やるんだろうねじゃなくて、やろうかでしょ？」と、歩美はもうすぐだというのにまだ何も決まってない我がサークルの現状に、その原因は一人一人のやる気にあると言うような素振りで僕にその不満をぶつけてくる。

「意欲の問題よ」

歩美の膨れた顔を横目に、部室に行ったら沙織さんにも言われるんだろうなと、それまで快活だった僕の足取りは急に重たくなっていた。

「みんな今日こそ決めるわよ。ちゃんと考えてきた？」

僕と歩美が部室に入るや否や、案の定沙織さんの先制パンチが飛んで来た。

「もちろんですよ、沙織さん」

その台詞が出て来たのは、歩美ではなく、意外にも竜彦からだった。

「よろしい。高志は？」

皆の目が僕に集まる。

「もちろんですよ、沙織さん」

僕はそう答えるしかなかった。完全なる脅迫だと、僕は顔には出さなかったものの、それが伊藤先輩に伝わったのか一人で笑っている。

「じゃあ、ミーティングを始めましょうか。お題はもちろん大学祭の我がサークルの企画について」

沙織さんはそう言うと、どこにあったのか、畳み一畳分はある大きさのホワイトボードを引っ張って来た。

「さっき俺が隣の部屋から持って来たんだよ」

竜彦がすかさず耳打ちしてくる。これから一人一人持ち寄った案を発表して、沙織さんがそれをボードに書き写す。そしてあのホワイトボードがある程度埋まった時、そこに書かれた案を選別して、さらにそれを執拗に吟味して決定するのだと考えると、果たしてそれは終わりのない旅のように思えてしかたがなかった。そんな僕の憂いを感知したのか、

「大丈夫よ高志、すぐに終わるから」

沙織さんはそう言うと部屋の電気を消した。

言うまでもなく、この部屋には窓というものがあるから、灯りを消した所で全くの暗闇が訪れることはない。ましてやまだ午後をちょうど過ぎたばかりだ。なのにどういうわけか、僕の想像を超えた暗闇が突然この部屋に訪れた。正確に言うと、沙織さんが引っ張ってきたホワイトボードの白さだけがくっきりと残り、後は真っ暗な闇になった。窓からは蔭を通り抜けた微量の光が見えるものの、この部屋の中央部までは届いていないように思えた。そのホワイトボードの白い光沢が他の色の識別を妨げるように、僕には部屋の隅々までの詳細をしっかりと確認することが出来なくなっていた。

「それじゃあ、今からこのボードに映像が流れるのでそれをみんなで見ましょう」

沙織さんはそう言うとソファに座った。その沙織さんが座るのを見計らうように、後ろからカチツという音が聞こえて、ボードには映像が流れ始めた。後ろを振り向くと部長が何かの機械のスイッチを入れた様子で、その機械がプロジェクターだとわかると、僕は今までの一連の出来事に合点がいき改めてボードに向き直る。そしてその白い光沢の正体がプロジェクターから発せられた光であることを確認した。

プロジェクターからボードに反映された映像は、どこかの教室のようで、何も書かれていない黒板だけが映し出されている。そしてそこに一人の女性が突如現れた。身を包んでいる白衣に何の違和感も感じられないことから、彼女が何かの専門的な職業であることがわかる。年齢は五十前後だろうか。見た目は若かったのだが、目から発せられる眼光の柔らかさと、その老練された立ち振る舞いから、六十にも七十にも見えたし、綺麗に手入れされた髪や化粧の感じは三十代と言っても不思議ではない美しさがある。そして彼女は僕たちがそこから見えているかのように話し始めた。

「高志君、竜彦君、歩美ちゃんこんにちは。私は麴町渚です」

「あっ」

歩美が異様な反応を隣で見せている。

「そう、私は学の母親です」

どうやら部長のお母さんらしかったのだが、まさかここで部長のお母さんが出てくるとは思わず、しかも部長と「学」を結びつけるのに少し時間が必要だったが、歩美は最初からわかっていた様子だった。

「私は臨床心理学と精神病理学を専門とした医師であり、またこの大学で時々講演などさせてもらっているから、歩美ちゃんなんかは知っているかもね」

そう言うと彼女は画面越しに優しく微笑んだ。僕は横目でちらりと歩美を見たが、彼女から先程以上の反応は見えず、どちらかというとも真剣なまなざしで映像に見入っていた。

「何故私が今みんなの前に立っているかと言うと…」

画面の彼女が話し始める。僕は興味深くその話を聞こうとするのだが、次第に彼女の声が遠くなったり近くなったりするのを感じるようになった。

「…為の…は予行…みたいな…」

プロジェクターの調子が悪いのだろうか。彼女の声が途切れ途切れに聞こえ、またその映像もぼんやりとしてきて、僕は後ろにいる部長のほうに振り返ろうと思った。しかし身体が言うことを聞かない。僕の思う通りにならないというよりも、僕は後ろを振り返ってプロジェクターの様子を見ているはずなのに、意識に焦点が合うと僕は以前のままボードの映像を眺めている。自分のやりたいことが映像として浮かぶだけで、気がつくとも何もやっていない自分がある。しばらくそのやりとりを繰り返すのち、僕は睡魔に襲われているのだということに気付く。プロジェクターの調子が悪いのではなく、僕の意識が途切れ途切れになっていたのだ。そしてその睡魔に対抗しようと力を入れてみるが、瞼は重たくなるばかりで、僕にはどうすることも出来なくなっていた。しかしそれは深い眠りに僕を誘うことはなく、意識の焦点がある種の一定のリズムを繰り返しながら、焦点が合っては離れ、合っては離れを繰り返している。そしてその意識の焦点が合う時だけ、映像に映る部長のお母さんの話している言葉が聞こえてくる。

「すべてはここ…耳から…済ませること…なさい」

そしてまた意識が遠くなっていく。目の前にある世界は、いつの間にか僕の想像へと変わっていく。僕は意識をはっきりとさせる為にソファから身を起こす。そうして全身を伸ばそうと大きく伸びをする。しかし次の瞬間僕は以前と同じ、ソファに座ったままボードをぼんやりと眺めている。どうして上手くいかないのかと思うと同時に言葉が耳に入ってくる。

「あなたたちが…知り…太古から…とは」

彼女の声が心地よく流れている。その言葉に耳を傾けようとした瞬間にまた意識が遠くなるのを感じる。僕はまたソファから立ち上がろうとする。そしてそれがまた叶わなかったことを確かめると、

「自ずから…時を越え…てくるでしょう」

また途切れるように彼女の声が聞こえてくる。次第に僕はその途切れた言葉が何かを意味しているように思い始めた。意識は断続的になるものの、ある種の連動性を保っているように感じ始めたのだ。

「すべてに…みみを…すませなさい」

彼女の言葉が厳選されるように流れ始める。やがて意識の境界線は薄れ、点と点を合わせることによって平面にあったものが立体的に見えるように、言葉が次第にその姿を現していく。

「あなたが…しりたいことは…おのずと…きこえてくるでしょう」

途切れていた言葉達が、ひとつの固まりとなっていく。僕はその言葉に耳をすませる。

「すべてに耳をすませなさい。あなたが知りたいことは自ずと聞こえてくるでしょう」
彼女は確かにそう言っていた。正しく言うとしたら、彼女は意図するようにその言葉を浮かび上がらせた。あるいは、僕がその言葉を選んで掬い取ったのかもしれない。どちらにしろ、僕の耳に届いた言葉達は、そういう形を築いていた。

僕はそれが何を意味するのだろうと、その言葉の意味を理解しようとしたが、それよりも先に部屋の電気が点いたので、僕の詮索は中断せざるを得なかった。

「部長のお母さん綺麗だったでしょ」
沙織さんは僕らの目の前に来るとそう言って笑った。

「これが今回の大学祭で私たちのやりたいことなんだけど、みんなどうだった？」
僕は沙織さんの言っていることがよくわからなかった。どこにそのやりたいことがあったのか、そして今起こったことは、不思議な体験というよりは、ただ睡魔に襲われたと言ってもいいくらいぼんやりとしたものだった。その反面、言葉だけは強烈に心に残っているけど、僕が勝手にそう解釈しただけであって、たまたまそういう風に聞こえただけなのかもしれない。だから沙織さんが何を指してそう言っているのかが、うまく飲み込めないでいた。他の二人に関しても同じじゃないかと僕は二人を覗き込むようにして見た。

竜彦は周りの状況さえ飲み込めないように、ひどく警戒しながら部屋を見渡している。歩美も同じような感じだったのだが、状況を飲み込めないというよりは、何か考え込んでいるかのように眉間に皺を寄せている。

一向に答えが返って来ないのを見越していたかのように、沙織さんが「これ、占いの」と、僕らにしたら驚くべき事実をさらっと言っただけ。

「占い……？」
「そう占い。占いと言うとみんなは手相だとか占星術だとかを連想すると思うけど、私たちがやろうとしているのはちょっとそれとは違うの」
「何が違うんですか？」

「簡単に言うと、今みんなが見ていた映像から、何かしらのメッセージが聞こえてきたと思うんだけど」

沙織さんは僕たちがそのメッセージをちゃんと受け取ったかどうか確認するように少し間を取った。僕らを一通り見渡して、そしてそれを確認し終わるとまた話し始めた。

「それは、実際には画面から聞こえたのではなくて、みんなが都合良く受け取ったメッセージなの」

「都合良く？」
「そう、都合良く。簡単に言うとみんなの中にある無意識が、都合良く言葉を選び抜いたの」
「ちょっと言っている意味がわかりません」とでも言いたいように竜彦が口を広げようとするのと、沙織さんがそれを手で制して、

「みんなの中にある無意識の存在は、この間確認出来たわよね。その無意識が自我意識に対して送ったメッセージ、簡単に言うとその本人に向かって伝えたいことを言葉で伝えたの」

「無意識が私たちに語りかけた」

「そう。今に向けてなのか、これからのことに対してなのかはわからないけれど、無意識があなたたち一人一人に対して何かを伝える為に、映像から言葉を紡ぎとった、そんな感じかな」

「それがどうして無意識の言葉だとわかるんですか？」

「それはあなたたちが一番よくわかっているでしょ？」

僕は思わず唖ってしまった。あれが無意識の言葉だとすれば、その無意識は僕に一体何を伝えなかったのだろう。

「どうしてそんなことが出来るんですか？」

竜彦はソファに預けていた身体を起こし、興味深そうに質問した。

「そうね。ちょっと雑な言い方になるけれど、部長がみんなの無意識を呼び起こせることはもう知っているでしょ。そして部長のお母さん、渚さんはこの流れた映像でも言っていたように心理学者なの。歩美は知っていると思うけど、その世界では有名な人なの。渚さんはいろんな活動をしていて、うちの大学にもたまに講義にいらっしゃるけれど、さっき見せたのは渚さんが行っている心理療法の一環で、催眠療法と呼ばれるものなの」

「じゃあ僕たちは催眠をかけられていたということですか？」

「そういうことになるわね。しかもみんな簡単にかかっていたわよ」

「お前ら素直すぎ」

その様子を眺めていたのか、沙織さんも伊藤先輩も可笑しそうに笑っている。

「それならそうと言ってくれればいいのに」

「言ったら警戒するでしょ」

「そっか」と竜彦は少し安心したのか、ソファにまた身体を深く沈めた。

「部長のお母さん、その渚さんが僕らに催眠をかけたというのは分かったんですが、部長のは催眠ではないのですか？何か二度手間のような気がして」

「うん、部長のも催眠の一種になるけれども、なんて言うのかな、現実とは少し離れた所、外部との交信が出来ない所とでも言うのかな、もっと深い場所に意識を連れて行くの。それに対して渚さんの催眠療法は、現実との交信がcaろうじて可能な場所、意識をぎりぎり保てるような状態にもっていくの。渚さんは患者との交信を可能にした状態で、その人の抱える心の問題を明らかにしていく。部長は無意識を呼び起こせる、渚さんは無意識に語りかける、この二人の力が合わさることによって、今回のようなことが可能になったの」

「要するにどういうことですか？」

「要するに…」

沙織さんが部長を見た。

「要するに～、無意識が言葉を持ったのですよ～」

後ろから聞こえてきた部長の声は、いつもよりも滑舌がよく、部長が珍しく興奮しているのがはっきりとわかった。

「無意識は喋れないからね」と沙織さんは部長のそれに付け足して言った。

「それに今回、渚さんが一日だけ予定を空けてくれて我がサークルの為に人肌脱いでくれるそうだから、みんな楽しみにしているね」

「本当ですか！」

歩美は目を輝かせている。

「それで、僕たちは何をやればいいんですか？」

「そうね、まずはポスター作りとこの部屋の掃除からかな。渚さんが来てくれるから、少しはまともなものにしなくちゃね」

僕は沙織さんのこの言葉で、入学当初の手書きのポスターを思い出した。あれじゃ人が集まらないのも無理はない。

「ということで、しばらくは忙しくなると思うけど、一年に一度、私たちが注目を浴びる時だからみんな頑張ろうね」

沙織さんの締めくくりに今日このミーティングは終わった。

それからというもの、沙織さんの言葉通り、学園祭の準備で追われる毎日が訪れた。僕はあの時間いた言葉、無意識が僕に語りかけた言葉の真意を汲み取ろうとしていたが、慌ただしく過ぎ去る毎日に追われ、いつの間にか考えることを忘れてしまった。そしてとうとう学園祭の日がやってきた。

僕は夢を見た。それが夢だとわかったのは、深い深い暗闇の中、壁に取り付けられた赤色灯が異常を知らせるように回り始め、辺りに鳴り響く警告音が実は携帯のアラームだったということに気がついたからだ。僕は重い身体を何とか動かし、携帯を探すように自分の部屋を見渡した。昨日の遅くまで最後の準備に追われていたものだから、いつも以上に寝覚めが悪い。僕は何とか携帯を見つけ出し、アラームを止めた。まだ意識がぼうっとしている。何の夢だったのだろう。僕は暗い洞窟のような場所にて、その洞窟内にある螺旋型に続く階段をひたすら降りていた。僕は確かにどこかを目指して降りていたのだが、それがどこなのか思い出すことが出来ない。それに、その階段は何処までも続いていた。僕は終わりのない階段をひたすらぐるぐる回るようにして降りていたのだ。そして気がつくと、壁に設置された赤色灯が慌ただしく回り始めたのだ。

「うん」

僕は今ちゃんと現実に帰ってきているかどうかを確認するように声を出してみた。

窓の外には、秋晴れの澄み切った空を縦横無尽に駆け巡る薄雲が、今日という日を謳歌するようにどこまでも伸びている。いつもより早めに設定されたアラームの余韻を耳に残しながら、僕は重い腰を上げた。

一階に降りると、リビングで難しそうな顔をして新聞を広げる父親の姿と、慌ただしくキッチン駆け回る母親の姿が確認出来た。

「あら、早いじゃない高志」

母親はそうやって僕の姿を確認すると、忙しそうにまたもとの作業に戻っていった。

「うん」

僕はそうやってリビングにあるソファに身を沈める。

「珍しく早いな。今日何かあるのか？」

新聞に目を通しながら父親が声を掛けてきた。

「うん」

僕はまだ自分が起きてから「うん」という言葉しか発していないことに気がつき、どうしたものかと天上を見上げた。

「やばい、寝坊しちゃった！」

千尋が階段から降りてくるのが聞こえてくる。

「なんでお兄ちゃんがいるの？」

千尋がリビングに顔を出す。僕が朝リビングにいることがそんなに珍しいのかと、千尋の方に目を向けた。

「お兄ちゃん今日学祭でしょ！そんなのんびりしていて大丈夫なの？」

「うん」

僕はまたしてもかたと少し自分にうんざりしながら時計を見た。アラームをいつもより早めに設定したからまだ余裕のはずなのだが、時計の針はそうは言っていない。僕は自分の勘違いだろうと時計をもう一度見た。確かにそこには、僕が予想していたより1時間ほど先の時刻を指している時計があった。僕はソファから身を乗り出し、急いで洗面所へ向かう。すべての準備を最短の時間で済ませ、その僕の一連の行動を口を開けるようにして見ていた家族を余所に、僕は家を飛び出した。

先日までまとわりつくように吹き抜けた風も、澄み切った空と呼応するかのよう僕に僕の身体をさらっと通り抜ける。そんな清々しい秋の一日の始まりを、僕はスムーズ機能という便利になった近代文明を呪いながら全速力で駆け抜けた。

大学正門を通り抜け、まっすぐにB棟を目指す。部屋に着いた時には、約束の時間を三十分もオーバーしていた。

「高志！遅い！」

部屋に入るや沙織さんから印刷された紙を手渡される。

「これ持って、正門で配ってきて」

そう言うや沙織さんは忙しそうに他の人に指示を出していた。もちろんみんな揃って、何かしらの作業を忙しそうにやっていた。

「あっ高志、隣の部屋から机と椅子を出して、入口にセッティングしておいて。受付の準備ね！」

部屋から出ようとした僕の背中が、叫ぶ沙織さんの言葉をキャッチする。

「わかりました！」

振り返ることなく僕は隣の部屋から椅子と机を持ち出し、急いで下の階へ降りた。

僕が再び正門に辿り着いた時には、たくさんの方が往来していて、自然と僕の気持ちも高揚してきた。正門を通り抜ける人にパンフレットを渡す。その反応が気になったが、流れてくる人が後を絶たない為、僕はその反応を確かめることが出来ないままパンフレットを配り終えた。それと同時に遠くから竜彦の声が聞こえてきた。

「お〜い高志！戻ってこい！」

僕はすぐさまB棟に戻り、受付の準備をしている竜彦の手伝いをした。

「俺と高志が受付係だってさ」

そう言うと、竜彦は用意された受付票と整理券を渡してきた。

「心理学部の連中のほとんどが来るらしいから、俺たちはずっと受付かもね」

竜彦は残念そうにそう呟いた。僕だってそうだ。遅刻したから偉そうなことは言えないけど、たくさんの方が催眠にかかっている様子を見たい。歩美と暇な時に変わってもらおうか、そんなことを考えながら準備をしていると、

「おはよう」

入口の方から女性の声が聞こえた。どこかで聞いたことのある声だと思い顔を上げると、そこには一人の中年の女性が立っていた。

「おはようございます」

僕は一目でそれが誰だかわかったのだが、「どちら様だよ」と隣で竜彦が小声で聞いてきた。それも無理はない。僕たちが部室で見た映像の中の白衣の女性は、花柄のワンピースを着用して化粧を施せば、この通り、なんとも美しい女性に変貌を遂げるのであった。それに、映像で見るとよりはよっぽど若く見えた。

「学の母親の渚です。高志君と竜彦君だよ？いつも学がお世話になっています」

軽く一礼をして優しく微笑むその女性の存在は、慌ただしく過ぎ去る朝の時間を止めてしまうほど、きらきらと輝いていた。

「こちらこそ部長にはいつもお世話になっております」

そう言って僕は恭しく頭を下げたのであったが、隣にいる竜彦はまだ何かと何かうまく結びつかないといった様子で、身動きひとつ出来ていない。

「部室まで案内しましょうか？」

僕は手にしていた整理券を机に置き、渚さんを部屋まで送ろうとしたが、

「大丈夫。場所はわかっているから」

と、渚さんは確認するように階段を見上げ、「今日はよろしくね」と言って階段を上って行ってしまった。

「おい竜彦、いつまでそうしているつもりだよ」

僕はその場で立ち尽くす竜彦を現実に戻すように声を掛けた。

「あれが部長のお母さん？」

竜彦は信じられないといった様子で、「うちの母ちゃんとは何から何まで違う」と、少し項垂れるようにして僕にそう呟いた。

「映像よりも全然綺麗だったな」

僕も竜彦の感想と同じく、自然と自分の母親を比較対称に持ち出していた。うちの母親が見せるよそ行きの態度とは明らかに違っていた渚さんの微笑みや振る舞いは、装いの類いではなく、彼女に深く染み付いていたように思えた。

「まさしく俺の鳥羽愛子像だ」

「何言ってんだよ」

「いや高志、俺は見たんだよ。ホテルの真っ赤なスイートルームで、渚さんのような美しい女性を。あれは鳥羽愛子じゃなかったのか」

「見たって、部長の・・・」

「そう。あの別荘の夢の中で見た女性は、今の渚さんのような質素で美しい微笑みをしていたんだ」

竜彦は未だ信じられないと言った様子で、入口から見える秋の情景にその記憶を反映させていた。僕も一緒になってその情景を思い浮かべようとしたが、入口に姿を現した在学生と思われる女子の団体によって、その試みは無残にも打ち消されてしまった。

受付を開始して少しした頃、歩美が上から降りてきた。

「もう準備出来たから、沙織さんが通してもいいよって」

歩美はそう言うと、僕らが書いた受付表に目を通した。

「もうこんなに来てるんだ。すごい数だね。しかも私の知っている人ばかり」

受付表をぱらぱらとめくりながら、「あっ早苗ちゃんだ」とか知り合いを見つけては喜んでいる歩美は、今日という日を本当に楽しんでいる様子だった。心理学を学ぶ者にとって、今日これから行われることは興味深い実験のようなものなのだろうか。そうでない者にしたって、これから起こることに興味津々なものだから、その心意は計り知れない。

「あとで落ち着いたら交代するよ」

そう言って歩美はまた階段を上って行ってしまった。

「落ち着くって、いつになったら落ち着くんだよ」

竜彦は早くもこの受付作業に飽きている様子で、僕もそれがいつになるのか見当もつかない現状に少なからず苛立っていた。その後も昼の休憩時間まで、ここに訪れる人は後が絶たなかった。

受付を終え、階段で三階まで上がり、部室の前から伸びた列に並ぶ。始めは少しどたばたしたせいもあるが、部室から伸びた待ち人の列は階段にまで達した。この受付のところまでその列が伸びてくるんじゃないかと少しハラハラしたが、その後テンポよく列が進み、結局一階まで人が並ぶことはなかった。占いを終え、帰っていく人たちの誰もが驚きを隠せない様子で、連れの友達とああだったこうだったと少し大げさなぐらい騒ぎながら受付を通り過ぎるものだから、僕と竜彦はそれを聞く度に今の自分たちの作業にうんざりしていった。受付表に名前を記入してもらい、整理券を渡す。あまり内容がわからない人には簡単な説明をする。詳しく話すと催眠が掛かりにくくなるからと沙織さんに釘を刺されていたから、ネタをばらさないように注意して説明する。特に難しい作業ではなかったが、気がついたらもう昼の休憩時間になっていた。

「二人とも昼ご飯にするから上がってきていいよ」

と、沙織さんが午前中に占いを出来なかった何人かの人達を引き連れて階段から降りてきた。

「やっと飯か」

竜彦は椅子に長い時間座っていた身体を伸ばすように立ち上がった。

三階の部室に戻ると、歩美と渚さんが昼食をテーブルの上に並べていた。渚さんからの差し入れがほとんどで、簡単な弁当になると思っていた僕と竜彦は目を輝かせるように席についた。

「とりあえず皆さん午前中はお疲れ様でした！」

沙織さんがそう言うと、みんなはお茶の入ったグラスを掲げて軽い乾杯をした。僕と竜彦と伊藤先輩は貪りつくように、机に並べられた惣菜やらおにぎりやらに手を伸ばす。沙織さんと渚さんは午前中の反省だろうか、もっとこうしたほうがいいんじゃないとか何か専門的なことを話している様子で、歩美もそれに加わるよう真剣にその話を聞いている。部長は軽く昼食をつまんだ後、少し離れた席で、本を読んでいるのか本を手にしたまま眠っているのかよくわからなかったが、身動きしないまま座っている。

「伊藤先輩は何やってたんですか？」

唐揚げを口にしながら竜彦が伊藤先輩に話しかけた。

「並んだ列の整理」

「大変でしたか？」

「結構可愛い子が来たから大変だったよ」

一体何が大変だったのだろうと、接点が決して合うことのない二人の会話を聞いて思ったが、僕は朝食を食べていなかったの、渚さんが用意してくれた昼食に夢中になっていた。

昼食が落ち着いた頃、すでに三十分が経っていた。休憩時間は一時間だから、あともう三十分あることになる。僕はずっと渚さんに聞きたいことがあったので、タイミングを見計らって渚さんに質問した。

「部長はなんであんなに無口なんですか？昔からそうなんですか？」

部長のことをあまり知らない歩美と竜彦も、それに関して興味を示すように渚さんを注目した。

「昔はよく喋る子だったのよ」

「へえそうなんですか。俺はてっきり昔から静かな人だと思っていた」

竜彦が意外そうな顔をして部長を見ている。

「あれはいつだったかしらね。あの子が泣きながら帰ってきたのよ。大きい肩をしょんぼり下げて」

「大きいのは昔からだったんですね」

「そう。それで、どうしたの？何かあったの？っていくら聞いても何も答えないのよ。そのまま部屋に入ったっきりその日は一度も顔を見せてくれなかったわ。それでね、後から友達のお母さんに聞いてわかったんだけど、どうやら友達に酷いことを言ってしまったらしいの。あの子にしたらそんな酷いことを言ったつもりもなかったし、その友達がそんなに傷つくとは思っていなかったから、その場で泣き崩れる友達を見て酷くショックを受けたんだと思うの。今にしてみれば、そんなに泣き崩れるほどのことじゃなかったのよ。でも実際、そんな些細なことでも人が傷つくということを知ったのか、あるいは友達を傷つけてしまったという事実がショックだったのか、それ以来大事な事以外喋らなくなってしまったの。私もお父さんも、最初はそんなことだとは思わなかったから、ケンカで傷ついてもすぐ治るけれど、言葉で傷ついた心はすぐには治らない。だから言葉で相手を傷つけるようなことをしたらだめよと叱ったの。でも実際聞いてみたら、先に悪いことをやってきたのは向こうの方で、学はそれが許せなかったらしく思わず悪態をついてしまったらしいの。うちのお父さんは、私は立派な仕事だと思ってくれるけども、世間では受け入れ

難しい人もいるのね。とにかくお父さんを悪く言われたのが許せなかったらしいの。そんなもんだから、私もお父さんも前言撤回の勢いで、学の機嫌が戻るように何とかしようと、いろいろやっただけど、結局変わらずで」

そう言うとき、渚さんは部長のほうを一度だけ振り返り、また僕たちに優しく笑ってみせた。

僕はその話しを聞いて少しがっかりした。僕が部長の言葉にまつわるストーリーを想像してみようと試みた時に、最初に浮かんだのは両親の存在だ。占い師と心理学者のもとに生まれた子供は、きっと普通の子供の生活は送れないと思っていた。子供の気持ちを完全に理解出来る親は少ないだろう。それは小さい頃であれば良いのかもしれない。自分の気持ちを説明しなくてもわかってくれる。だが幼少を過ぎ思春期が訪れ、自我が完全に芽生えてくる時に、自分の考えがすべて見透かされているとしたらどうだろう。秘密は秘密でなくなり、口はいつしか閉ざされてしまう。僕はそんなことを想像してみたのだが、その考えは完全に的外れに終わってしまったのだ。それどころか、渚さんを一目見た時に、それは絶対にないと確信した。占い師だろうが心理学者だろうが、親は親なのだ。それはどこに行っても変わりはないし、逆にそういう職業だからこそ、注意深く子供と接していたのかもしれない。普通の子に育てて欲しいと祈りながら。

渚さんの目からはそういう母親の愛が映し出されているように思う。暖かい春の陽射しのような、柔らかい愛が。

「そろそろ時間だ」

いつの間にかこんなに時間が過ぎていた。沙織さんが机の上を片付けようとしたのを合図に、午後に向けての準備を始める。沙織さんの口から午後の布陣が発表される。受付には歩美と伊藤先輩、列の整理係は僕と竜彦になった。

「ええ～中に入れてもらえないんですか～」

竜彦は不服を申し出るも、「注意が散漫になるから部屋は最小人数にしたいの。ごめんね」と渚さんが謝るものだから、僕らは何も言えなくなってしまった。

部屋の前に椅子を構えて、午前中に僕らが受付を済ませた人から部屋に入れていく。午前中は五人まとめてやっていたらしいのだが、それが良くなかったのか、午後は三人単位で部屋に案内していくことになった。

「高志、高志」

部屋の扉の両側に座る格好となった僕たちは、列を挟んで何かとやりとりをする。そして列の向こうから竜彦がひそひそ声で僕を呼んできた。

「何だよ」

「部屋少しぐらい覗いてもいいかな」

「だめに決まってるだろう。沙織さんに怒られる。それに、術中は危険が伴うらしいから、どう考えても俺らが干渉するのはよくない」

僕も小声でそう答える。竜彦は眉に皺を寄せ下唇を突き出してその不満を表した。僕も部屋の中から聞こえてくる音に耳をすませている内に、中の様子が気になって仕方がなかったが、渚さんがいるとはいえ、何かあったら責任を取れないのがわかっていたから諦めることにした。それにあまり耳をすませていると僕らが催眠にかかりそうな気がして、竜彦と列をはさんで何かやりと

りをしながら時間を潰した。

午前中に比べて午後は比較的落ち着いていた。来場者の数も減り、列もそんなに長くは続かなかった。他のサークルが盛り上がっているのか、単に大学に訪れる人が減ったのかわからなかったが、あまりにもやることがないので受付の様子でも見に行こうと、竜彦に声を掛けて席を立った。

三階の踊り場に出る。部屋から離れるとそこにはいつも通りの静けさが漂っていた。僕はふと窓を見上げる。蔦の間から見える空は灰色を帯びていて、僕らが部屋の前で誘導をしている間に、どうやら天気は悪くなっていったようだった。そして僕が階段の手すりに手を掛けると同時に、空を引き裂く音が館に響いた。

「雷？」

僕は急いで一階に降りる。受付を見たが歩美と伊藤先輩の姿がない。僕は不審に思ったが、入口のほうから突然鳴り響いた滝のような雨音と、

「これはすごいな」

という伊藤先輩の声を確認して、僕もその方に足を向けた。

「あっ高志」

歩美は僕の姿を確認するとまた空を見上げた。

「通り雨だといいいけど、止みそうもないね」

空は午前中とはすっかりその様相を変え、夏の夕立を思わせるような激しい雨を降らせていた。

「今日はもう終わりかな」

伊藤先輩はそう言うと受付に戻っていった。

「ちょっとみんな来て！」

竜彦が階段から顔を出すと、そう言ってすぐに上に戻ってしまった。

「どうしたんだろう」

いつもと違う竜彦の緊迫した表情に、僕らは顔を曇らせた。

「とにかく上に行ってみよう」

伊藤先輩を先頭に僕らは階段を駆け上がり、部室へと向かった。部屋の前にいる何人かがざわざわして落ち着かない様子で中を覗いている。

「ちょっとごめんね」伊藤先輩は群がった人を掻き分ける格好で部屋に入っていく。僕らもそれに続いて部屋に入ると、そこには一人の女の子がソファで横になっていた。

「どうした？」

僕はその近くであたふたしている竜彦に詰め寄った。

「さっきの雷の衝撃で女の子が倒れたらしい」

ソファに横たわる女の子。その近くに渚さんと沙織さんが心配そうにその様子を伺っている。

部長は何か準備をするようにして部屋を駆け回っている。

「意識が戻らないんだって」

竜彦はそう言うと沙織さんに歩み寄り「手伝うことはありますか？」と聞いている。

僕は状況をうまく飲み込めずにいたが、ただ事ではないというのがわかり、部長の手伝いをす

ることにした。

竜彦が廊下で騒いでいる人達と何かを話して、部屋のドアを閉めた。密閉された空間の静けさが、窓を叩く雨音をより一層力強く部屋に響かせた。

渚さんと沙織さんは何か相談し合っている。僕は部長が机の上に広げたノートと一緒にあって見ている。何か特別な記号や数字みたいなものが書かれたそのノートには、僕が理解出来るものは何一つなかった。わかるものと言え、両手を広げて書かれた人体図のようなものと、脳みそから伸びた神経の回路図のようなものだけで、それが何を意味するかは依然わからなかった。

気がつくときさっきまでソファのそばにいた沙織さんが目の前にいて、部長と何か話しをしている。

「やっぱりそうするしかないわよね。危険だけどそれが一番リスクが少ない」

部長は小声で話している為、その内容までは聞こえてこないが、沙織さんが話す内容から彼女に何かをするのは間違いないようだった。僕はどれくらい危険な状況にいるかわからないその女の子に視線を移す。

ごく普通の女子大生であり、特にその外見において気になることはひとつもなかった。倒れたというよりも、すやすや眠っているようにも見える。やがて話しが終わったのか、沙織さんが僕を見つめて言った。

「高志、ちょっとお願いしたいことがあるんだけどいいかな？」

「何ですか？」

いつもなら「いいですよ」と即答したに違いないのだが、状況が状況だけに僕は少し慎重になっていた。

「あの子を助けて欲しいの」

「僕がですか？」

何で俺なんですか？という意味で言ったのではない。僕にそんなことが出来るとは到底思わなかったもので、ついそう言葉に出してしまった。でも沙織さんはそんな僕の心境を理解するように、

「高志にしか出来ないことなのよ。正確に言うと、一番リスクが少なく彼女を助けることが出来るのは高志しかいないの」

「僕がですか？」

「そう、この中で一番無意識と接している経験があるのは高志なの。この部室で何度もやっていたし、そうでないところでも」

「そうでないところ？」

「とにかく細かい説明は後回し。高志、彼女を救ってくれるわよね？」

話しの展開が急すぎて僕には何のことを言っているのかわからなかった。だけど、未だ意識が戻らない彼女と、それを心配そうに見つめるみんなを見ていたらやらない訳にはいかなかった。

「それで僕は何をすればいいんですか？」

「彼女の無意識の中に入って、彼女を現実に連れ戻して欲しいの」

僕が彼女の口から身体の中に入って行って、彼女を引っ張り出してくる。僕にはそうとしか聞こえなくて、やっぱり言葉に詰まる。

「高志が自分の無意識の中に入るように、彼女も今自分の無意識の中にいる。それは自分の意志ではなく、さっきの雷の衝撃でそこから出られなくなってしまったようなの」
沙織さんは続けて話す。

「高志はいつも通り自分の無意識の中に入れていいだけ。彼女の中へと誘導するのは部長がするから」

「部長や渚さんが行けばもっとリスクが低いんじゃないですか？」

「確かに部長が出来れば話しが早いんだけど、他の人の無意識へと誘導出来るのは部長だけなの。そして今回彼女が無意識に触れることの要因となった渚さんは一番危険な存在。あの子自身が、雷が原因でそうなったとわかっていれば良いのだけれど、もしそうではなく渚さんのせいで閉じ込められたと思っていたとしたら、二人とも危ない」

沙織さんは彼女を見るようにしてソファーに視線を移した。

「僕が危険に会うことはないんですか？」

「だから話した通り、高志が一番リスクが少ないのよ」

この言い方からすると、危険があるということになる。ひよっとすると僕も戻って来ることが出来なくなるかもしれない。すると部長が僕の背中を叩くようにして、

「大丈夫～夫。ここにはみんながいるから」

そう言うとき目を細めて僕に微笑みかけた。僕はその微笑みが、渚さんの微笑みと同じだということに気が付き、何とも言われぬ安心感に包まれていった。

「わかりました、やってみましょう」

僕は横たわる彼女の隣に座った。部屋の中には部長と渚さんだけが残り、後のみんなは外に出て行ってしまった。

「高志君心配しないで。何かあった場合は必ず私が助けに行くから」

渚さんが優しく微笑んでくれる。この緊迫した状況の中でこれだけ優しい笑顔が作れる人は一体どういう過去を乗り越えてきたのだろうと思うぐらい、それは暖かい笑顔だった。僕は恐怖というものを全く感じなくなっていた。

「彼女はね～、きっと出たがらないと思うよ～。それからいろんなものに惑わされないでね～」
部長がそう忠告してくれた。僕がそのいろんなものを想像していると突然部屋の電気が消えた。何かと突然の出来事が多いなど、しかしその突然のことが簡単に受け入れられるようになってきた自分に少しうんざりしながら、僕は目を閉じ、またあの暗闇の世界に入っていった。

暗闇の中にノイズが走っている。いつもの無音の暗闇とは違う別の暗闇。それは何かの電気音にも聞こえたり、枯葉がアスファルトをこする音にも似ていた。僕はその中で集中して自分の意識を取り戻す。苦しいとか楽しいとか痛いとか、そういう感情も含めて、僕は僕の存在を取り戻す。この作業をやらぬことにはどこにも行けない。そして僕はすべての作業を終えるとき目をゆっくり開いた。

目を開けた途端、僕は突風にさらされた。そして次の瞬間、大粒の水滴が僕の全身を打ちつけ

るようにして襲いかかってきた。僕はたまらず目を閉じた。僕はどこに来てしまったのだろうか。突然のことに慣れてきたと思っていた僕を嘲笑うかのような強襲に、これはないだろうと僕は顔をしかめた。とにかく落ち着こうと僕は今の状況を頭の中で整理する。受け入れないことには先に進めない。僕は立っているのもままならない状況で、両足を踏ん張ってなんとか堪えている。少しでも気を抜けば吹き飛ばされてしまうだろう。瞼を開けば、「待ってました」と雨が僕の両目を潰そうと襲いかかってくる気がして、なかなか目を開けられない。両手は崩れたバランスを取り戻そうとするようにして、前後左右その位置を巧みに変えている。僕は何かすべてを吹き飛ばしてしまうような激しい嵐の中ポツンと一人取り残された案山子を想像していた。両手は支柱に固定され、両足、と言っても一本だが、その足は地面に固定されている為どこにも行けない。しかし僕は違う。僕はその想像を振り払い、目をつぶりながら何か掴めるものはないかと両手を伸ばす。手が何かに触れた瞬間、それはとてつもない痛みへと変わっていった。何に触れたのだろうかと薄く目を開く。その手の触れた先には、いくつもの枝が伸びていて、その枝からは無数の棘が伸びていた。痛みを感じた手を広げてみて見ると血が流れていた。どうやら普通の棘ではなさそうだ。

僕は仕方なく前方を見つめる。相変わらず嵐のように吹き荒れる風と雨は、僕を容赦なく叩きつける。かろうじて開けた目の先には、先程触れた棘付きの枝がずっと続いている。その棘付きの枝を分つように、一本の小径が伸びている。どうしてこんなところに来てしまったのだろうか。引き返そうにも引き返せない。選択肢は限られている。ここでずっと雨風に晒されるか、先に進むかだ。僕はしかたなく先に進むことにした。地面にはごつごつした岩が転がり、僕の歩みを妨げる。僕が風に負けてしまえば、そこに待っているのは棘地獄。目を見開こうとする度に雨がそれを邪魔する。どうやら歓迎されるどころか、非難囂々の嵐だなど、僕はうんざりしながらも一步一步その歩を進めていく。彼女の無意識が僕の干渉を拒むかのように、歩を進めるごとにその嵐は激しさを増し、棘付きの枝に囲まれた道は狭まっていく。聞こえてくるのは耳の空洞を凄まじい勢いで通り抜ける風と、打ち付ける雨の音。そして、「そう簡単に彼女は取り戻せないわよ」と、その雨風の合間を縫って誰かが叫んでいるように聞こえた。僕は今試されているんだ。僕はそう強く念じた。そうでもしないと簡単に吹き飛ばされてしまいそうだったからだ。気がつくとも棘付きの枝が僕の上腕部分に食い込むようになった。一本に伸びた小径が狭まっているのか、棘付きの枝がどんどん浸食してきているのかよくわからないが、とにかく身体に痛みが走る。こんなことならあの暗闇で痛みという感覚を置いてくれば良かったなど後悔した。実際そんなことが出来るのかはわからなかったが、僕はそう思うことで、意識と感覚の距離を離そうとしていたのだ。痛みという感覚を意識から離していく。それがどこか遠い世界で起こっていることのように。そう思うようにしたら、幾分痛みが和らいだ。しかし次の瞬間、また別の痛みが襲ってくる。僕はそれを繰り返しながら、大きくなった岩の固まりの上でバランスを取り、一步一步進む。枝はいつしか目の前を遮るようにして僕の行く手を阻んでいる。それを両手で掻き分け一步一步進む。顔をしかめながら僕は枝をなぎ倒すように進んで行く。当然両腕に激痛が走る。しかし身体がその刺激に慣れてきたのだろうか、僕は突然痛みを感じなくなってきた。それとも痛みがある一定以上のところにくるともう感度はそれ以上上がらなくなるのか、そんな不思議な感覚

に陥っていると目の前の枝が急にその手を引っ込めるようにして、代わりに広い空き地のような場所が姿を現した。

それが目に飛び込んでくると同時に、雨風が収まり、辺りには突然の静寂が訪れた。僕はその景色に何とか波長を合わせようとするが、耳に残る狂飆の余韻がなかなかそれを許さない。岩場でごつごつしていた地面は芝生のような柔らかい地面へと姿を変えていた。僕は身体に教えようとするように、何度も地面を踏みつけた。後ろから首筋を撫でるように暖かい風が吹き抜ける。疲弊し切った身体を癒すように吹き抜けたそれは何とも気持ちがよかったが、僕は後ろを振り向かなかった。後ろを振り返った途端、またあの豪雨が襲ってくるのではないかと、僕はその甘い誘惑を振り払うように足を踏み出した。先程まで棘のついていた枝には新緑の若々しい緑の葉が茂り、花こそ咲いていなかったが、緑で統一された森のようなそれは、とても綺麗だった。頭上を見上げるとそこには暗闇しかなく、それが空なのか、何かで覆いかぶされた天井なのか、うまく見分けることが出来なかったが、周りを照らしているのは空の光じゃないと、僕はもう一度注意深く周りを見渡した。そうすると空き地の真ん中辺りに小さな泉のような池が姿を現した。水面から発光された光がこの広場を照らし出していたのだ。僕はその泉へと近づいていく。僕はその時そこに彼女がいるのだとわかった。なぜわかったのかはわからないが、人に備わっている直感とでも言うのだろうか、果たして僕の直感通り彼女はその泉の中に半身浴のような格好で水に浸かり、僕をじっと見つめていた。

「君は梅村有子さんだね」

「あなたは誰？」

泉の中の彼女は衣服を身に着けていなく、綺麗に整った乳房を露にしていた。そして食い入るような目で僕を見ている。

「僕は塚本高志と言います」

僕はバカ正直なほうではないけれども、その彼女の唐突な質問に虚を突かれそう答えていた。もしかすると不安と恐怖があったのかもしれない。そこで彼女の機嫌を悪くして、またあの嵐のような雨風に晒されるのだけは避けたかった。僕の本能が危険を避けようと咄嗟に反応したのだろう。とにかく僕はそれが何だか少し的外れな気がしたので、急いで付け加えるように、

「ここから早く出よう。みんなが外で待っている」

そう言って僕は手を伸ばした。

「ここから出たくない」

彼女はそう言うと、身体を水に沈めて、顔の半分、ちょうど目が見える位置まで潜ってしまった。

「どうして出たくないの？」

「どうしても出たくないの」

わがままな子供のような言い分に少し面倒くさくなかったが、僕は外にいるみんなのことを思い出し、根気よく引っ張り出そうと考えた。

「こんなところにいると風邪を引いてしまうよ」

「どうして？こんなに暖かいのに。あなたのほうこそ風邪を引いちゃうよ。早くこっちにおい

だよ」

そう言うとまた彼女は恥ずかしげもなく上半身を露にして、今度は僕に手を伸ばしてきた。

僕はその手を取り引き上げてしまおうかと考えたが、彼女の力が僕より強く、僕が泉に引き込まれたらおしまいだと思い、僕は手を引っ込めた。

「ここにいるとね、もう何にも気にせずになれるの。自分の思うがままに生きられるの。そんなのって素敵じゃない？」

どうやら彼女はこの世界が気に入っているらしかった。

「みんなにもう会えなくなってもいいの？」

「会えなくなる？みんなにはすぐに会えるよ。私がかいいたいと思う時に。それでね、ここにいるみんなはとても優しいの。私を傷つける人なんて誰もいないの。だから私は毎日笑って過ごせる。ほら、だからあなたもこっちに来てよ」

彼女はもう一度手を伸ばす。僕は部長の言葉を思い出していた。彼女はきっと出たがらぬと部長は言っていた。まさにその通りじゃないか。僕はその後の部長の言葉を思い出そうとしていた、すると右手が何か強い力に引っ張られるのを感じた。次の瞬間、さっきまで泉の真ん中にいた彼女が僕の目の前に姿を現し、僕の手を強く引っ張って泉に引きずり込もうとしていた。

「おい！」

僕はその力に抗えず、身体半分まで泉に浸かる格好となった。僕は必死にその手を振りほどこうとしたが、いつのまにか彼女の姿は消えていて、僕は右手から沈み込むようにして泉に引き込まれていった。彼女に引っ張られているのか、泉に吸い込まれているのか、もう訳がわからなくなりながら、僕は部長の言葉を必死に思い出そうと目を閉じた。

「いろんなものに惑わされないでね～」

どこか遠い所から部長の声が聞こえた気がした。僕は目を閉じたまま感覚を研ぎすまそうと集中した。顔に水しぶきが掛かるのを感じ、次の瞬間、僕の頭は完全に泉に取り込まれてしまった。全身に水の圧力を感じながら、それでも僕は全身に神経を注いだ。水の浸入を許した耳からは籠った音が聞こえるだけで、他には何も聞こえてこない。手は未だに何かに強く引っ張られている。どれくらい潜っているのだろうか。息は出来るのだろうか。このまま僕はどうなってしまうのだろうか。いろいろな邪念が僕を邪魔してくる。僕は必死にその邪念を振り払おうと、水の中で首を何度も振った。惑わされたらダメだ。僕は自分に言い聞かせる。あの嵐も、泉のある森の広場も、この泉もすべて僕を惑わせるものだ。疑念も誘惑も、自分の身に降り掛かっている恐怖も何もかも捨て去ろうと僕はその引力に逆らうのを止めた。気がつくとも僕は全身に力が入らなくなっていた。力を抜いたというよりも、力の入れ方がわからなくなっていた。僕はそのまま死んでしまうのかと不安が頭をよぎる。一番少ないリスクだったはずの僕がだめだったら、誰が彼女を救えるのだろうか。捨てきれない邪念も何もかも、そんなことは次第にどうでもよくなってきた。苦しいという感覚も、むしろ気持ちの良い気分になってきた。このままここにいるのも良いのかもしれない、そう思うようになっていた。僕は静かに目を開けた。するとそこには、先程とは違う、衣服を身に着けた彼女が、水底で何かに足をとられるような格好でもがいているのが見えた。

僕は水で歪んだ彼女をしっかりと見ようと目を細めた。彼女は手を伸ばして何かを言っている。何かを必死に伝えようとしている。僕はその言葉を聞き取ることは出来なかったが、それが何を意味しているのかはすぐにわかった。彼女は助けを求めているのだ。彼女の手を取ろうと僕は両手を伸ばした。すると突然水が渦を巻き始め、僕の身体は彼女から離れていく。僕はそれに必死で抵抗しようと両手両足を交互に動かしていく。もう少し泳ぎの練習をしていれば良かった。僕は冷静さを保とうと、意識と感覚の距離を測り直す。そして目一杯手を伸ばすと、彼女の手が当たったのがわかった。その途端、またしても水流に押し戻される。両足を力強く交互に蹴り、何とかそれに耐える。水の抵抗を減らす為に身体を一直線にして、僕はもう一度訪れるであろうタイミングを見計らった。すると彼女の手が一瞬伸びたのが見え、僕は勢いよく両足で水を蹴り彼女の方に手を伸ばした。水はさらに勢いを増したが、僕は何とか彼女の手を取ることに成功した。彼女の手がしっかりと僕の手を握るのを確認すると僕は残りの力で彼女を引き寄せるようにして腕を引いた。水流が今までにないくらいの勢いで僕らを引き離そうとするが、僕は彼女の身体を完全に抱きかかえていたし、彼女も僕の身体を必死で掴んでいた。僕らは水流に逆らうことなくどこまでも流されていく。この泉はこんなに深かったのか。もう一人の僕が呟くのを聞いた。

「この泉はこんなに深かったのか」

目を開けるとそこには渚さんの顔があった。どうやら僕は自分の寝言のような独り言で目を覚ましたらしかった。

「おかえり」

渚さんはいつもの優しい微笑みで僕を出迎えてくれた。

「どのくらい寝てましたか？」

「十分くらいかな」

夢の中の時間軸は本当によくわからない。そんな風に僕がうんざりしていると、隣で寝ていた彼女も起きてきた。

「ここはどこですか？」

彼女はそう言って僕の姿を見つけると、泣き出してしまった。

その後、渚さんが彼女にいろんなことをちゃんと説明して、彼女も心理学部だったということもあり、何とかその場は無事に収まった。帰り際、渚さんが彼女に名刺を渡し、「何かあったら私の所に来てね」と直通の携帯番号まで手に入れた彼女は嬉しそうに帰っていった。もう少し感謝の言葉があっても良いのに、いつのまにか僕の必死の救出劇もどこかに追いやられてしまった様子で、僕はまたしてもうんざりしたようにため息をついた。そんな僕に気付いたのか、

「高志お疲れさま」

と、その歩美の何気ない一言で、僕の努力が幾分報われた気がした。

夕方五時を知らせるチャイムの音がどこかから聞こえてきた。窓をふと見ると、夕日のオレンジが鮮やかに部屋を染めている。沙織さんの「さあ片付けを始めましょうか」という一言を合図に、僕らの長い一日が終わりを告げようとしていた。僕は肉体的にというよりは精神的にひどく疲れているように思えて、実際はどうかかわからないが、その鉛のように重たくなったと感じる

身体をなんとか動かして片付けをした。みんなが掃除を終え、再び部屋に戻ってきた頃には辺りはすっかり闇に覆われていた。僕らは各自の荷物を持ち、B棟を後にした。

「みんな今日は一日ご苦労様でした。いろいろあったけど、とにかく無事に終わって良かったわ」

渚さんはそう言って、朝と何一つ変わらない笑顔を一人一人に向けていた。僕は今日の出来事を振り返る余力さえなかったのも、その笑顔に伝えるだけで、他には何も言わなかった。

「高志大変だったな」

隣で竜彦が肩をポンと叩いて僕の心中を察してくれている。向こうでは部長と沙織さんと渚さんが何かを真剣な顔で話している。先輩のこういった探究心やら向上心やらにはいつも感嘆させられる。僕が別れを告げようと何気なく近づいた時、

「歩美ちゃんからしばらく目を離さない方がいいわ」

と、渚さんが二人に言っているのが聞こえた。僕はその言葉にふと足が止まる。沙織さんがそれに気付いたように、

「高志今日は一日お疲れ様。今日無事に終わられたのも高志のおかげよ。ありがとう」

そう言って、三人は話しを中断して僕の方に振り返った。僕はその話しの内容が知りたかったのだが、早く家に帰りたいという欲求に勝てず、特には何も突っ込まないで別れを告げた。

そして学園祭が終わって数日後のことだった。歩美が二日間学校を休んだ。最初は風邪だろうと、みんな特には心配していなかった。僕は歩美に何通かメールを送ったのだが、返事が返ってくることはなく、三日目も学校に来ていないことを知り、いよいよ慌て出した。

家にはもう二日ほど帰ってきていないと、歩美の家で雇われている家政婦の友江さんも、僕が顔を出すとその心配を露にし慌てふためいている。携帯も家に置きっぱなしになっているらしく、僕の送ったメールも当然開かれていない。友江さんをお願いして、両親と警察に連絡してもらった。僕は歩美の行きそうな所を当たってみたが、彼女はどこにも見当たらなかった。歩美がいなくなって四日目、僕は渚さんがあの時言っていたことはきっと徒労に終わるだろうと、少し楽観視していたこともあり、学園祭後もそのことに特に触れないでいた。こんなことになるのなら、歩美から目を離さないでおけば良かったと今になって後悔した。彼女は一体どこに行ってしまったのだろう。もう学校どころではない。部長も沙織さんも伊藤先輩も竜彦も、みんなでとにかく行きそうな所を手分けして当たろうと、必死になって彼女を捜した。歩美の両親が家に戻って来たのは五日目の朝。以前姿が見当たらない歩美を警察と連携して探すも、有力な手がかりは何一つ挙げられないでいた。そして六日目の朝、僕は沙織さんからの電話で目が覚めた。部長の別荘の前で発見された歩美は、僕らの知っている歩美ではなかった。

「ある男の話／吹きかけた息と最後の時」

「ねえ、そこにいるの？」目の前から女の声が聞こえてくる。

「いるよ」男はそれに答えた。

「君はそこにいるのかい？」男は女がいると思われる方に向けてそう言った。しかし返事がない。女がそこにいるのは確かだと思う。声は確かに目の前から聞こえてきたのだ。

男は完全な暗闇の中にいた。外の光も部屋の明かりも、その男が抱えた暗闇を照らすことは出来ない。そして自分の目もまた、そういった光を捉えることなく、暗闇だけを映し出していた。

男は先程から注意深く辺りの音を聞いていた。探っていたと言ったほうがいいのかもかもしれない。視界が遮られた今、頼れるのは耳だけで、あらゆる情報を耳から得ようと神経を集中させていた。その情報によると、女は確かに目の前にいるのである。

「ねえ、あたしに息を吹きかけてくれない？」

「息？」男はどうしてそんなことを言うのか不思議に思ったが、女の言う通りに、女がいると思われる方に向けてふっと息を吐いた。

「ああ、やっぱりいるのね」女は言った。

「どうしてそんなことをする必要はあるの？」

男は女に向けてそう言った。

男は女の答えをしばらく待ったが、いくら待ってもその返事は返ってこない。男は試しにもう一度息を吹きかけた。

「ふふ、あなたは今あたしに話しかけても返事が来ないと心配になったのね」女は微笑みながらそう言った。もちろんそれは男の推測だが。

「あたし耳が聞こえないの。それから目も皮膚もその機能を失ったの」と女は言った。

男はその事実に驚いた。女もまた自分と同じように、いくつもの感覚を失っていたのだ。

「驚いているかしら。それとも気付いていた？まあ、それはどちらでもいいわ」女はそう言った。

「あたしはどうしてもあなたの愛を知りたかったし感じたかったの。でもその為にはたくさんのものを失わなければならない。そういう覚悟でここまで来たわ。そして実際にたくさんのものを失った。あたしはもうあなたの声を聞くことも出来ないし、肌であなたのぬくもりを感じることも出来ない。そしてあなたの姿も。でもね、それらはすべて感じる事が出来るの。不思議でしょ。感覚はすべて失ったのに、あなたの顔も思い出す事が出来るし、ぬくもりを感じるこ

とも出来る。あなたが何をどう考えているのかもだいたいわかるわ」女はそう言った。

男にはうまく女の顔や匂いやぬくもりを思い出すことが出来なかった。しかしその声だけは覚えていた。とても優しく暖かい声だった。

「あなたも同じでしょ？そうね、あなたはきっと今、耳だけであたしを感じている。そしてあなたは言葉を捨てきれなかったはずだから、あたしのことが見えていない。ねえ、当たってる？」

男はそれに答えるように女に息を吹きかけた。

「正解ってことね」女は笑いながらそう言った。男は女が笑う声を初めて聞いた気がした。

「あたし上手く話せてる？耳が聞こえないからそれがよくわからないの」

男はまた女に息を吹きかけた。

「それなら良かったわ」女は微笑んでそう言った。それは男にはっきりとわかった。

「ねえ、あたしのこと愛してる？」女は男にちゃんと伝わるように、一言一句丁寧に優しく包み込むようにそう言った。

男は少し考えたのち、息を深く吸い込み、優しくそしてゆっくりと息を吹きかけた。どこまでも続くように。息が尽き果てるその時まで、長い時間を掛けて男は女にそれを伝えた。

女はそれを男と同じようにして長い時間をかけて吸い込んだ。その深い呼吸が男にはしっかりと聞こえてきた。

「うん。伝わってきた」女は優しい声でそう言った。

男は、ドン！という突然鳴り響いた音に驚いた。それは耳元で何かが破裂するような、そんな音に聞こえた。そして男はそれが窓を叩き付けた風の音だとすぐに気がつき、そろそろ雪が降る頃だなど、男は少し前に女が言った時間は有限だという言葉思い出した。

「雪はもう降ってきた？」そんな男の異変に気がついたのか、女はそう言ってきた。

男は女に短く息を二回吹きかけた。

「まだなのね」女は胸を撫で下ろすようにそう言った。実際そうしていたのかもしれない。

「あなたはもう気付いた？あなたがいかに今まで満たされていたかということ」女は言った。

男はうなずき、それを伝える為に女に息を吹きかける。

「それでもあなたはまだわかっていないわ。その証拠にあなたは言葉を捨てきれなかった。それはあたしも同じことだけど」女はそう言って続けた。

「あたしもあなたともっと話していたいし、あなたの考えていることを確かめたいと思っているの。そしてあなたに伝えなくてはならないことがまだまだたくさんある。だけどその為には多くの時間が必要で、それには限りがある。すべてを伝えることはきっと出来ないし、すべてを知ることもしつと出来ない」

女は自分を落ち着けるように少しの間を置き、再び話し始めた。

「あたしね、あれからずっと考えていたの。あなたが言った言葉を。言葉は人の心を隠す為にある。確かにその通りかもしれない。あたしたちは言葉に頼り過ぎていて、いつのまにかそれはただの飾りようになっていたのかもしれない。でもね、あたしはそれでも言葉が大切だと思うの。その意味がわかる？」

男は女の言っていることを理解しようとした。それをちゃんとわかり合いたかった。しかし男

は女に息を吹きかけることが出来なかった。

「もしね、もしもの話しよ。あなたが…そうね、病気だと辛過ぎるから、老衰で間もなく死んでしまおうとしましょう。その時に、あなたはその死ぬ間際、どうやって大切な人に愛を伝えるの？」

男は自分が死ぬところを想像してみた。自分の余命を悟り、病室のベッドで、それは自宅でも構わない、あともう少しで息絶える時、自分はどうやって大切な人に愛を伝えるのだろうか。大切な人を目の前に、息を引き取るその瞬間、何を残せるのだろうか。男は女の言っている意味がだんだんわかってきた気がした。

「それは逆の立場でもいいわ。あなたがあたしの最後の瞬間に立ち会い、もうすぐ息を引き取ろうとするあたしに向かって、あなたはどうやって愛を伝えるの？それは言葉でなくてもいいわ。だけどそこにはきっと、涙であったり、思い切りの笑顔であったり、きちんと明確に愛が表現される。そしてあたしは息を引き取り、あなたはあたしのいない世界で過ごすことになる。その中であなたの中に残っているものこそが、明確に表現された愛なのよ。あなたの心に深く明確に刻まれたあたしの愛が、その後もあなたと一緒に生き続けるの。あたしがずっと言ってきたのはそういうことなのよ」

女はそう言うと、ソファから立ち上がり、

「次会うのがきっと最後よね。さようなら」

そう言って女は静かに目の前から姿を消した。

「第六章」

窓の外には強い雨が降り続けている。部屋で一人佇む歩美には、その雨は漆黒の闇に降り続ける黒い雨に映る。時間が味方をしてくれているからこの長い夜を一人で耐えられる。時間が解決してくれるものなんてひとつもないのだけれど、そばにいてくれるだけで歩美には充分であった。

隣の部屋からは時折狂ったような怒号と、壁に何かがぶつけられた鈍い音が聞こえてくる。

「はぁ……」

歩美はため息をついた。もし時間さえも味方をしてくれなくなったら、私はきっと生きていけない。歩美は壁に立てかけられた時計を見つめる。秒針がひとつ動くたびに、その時計の存在価値が失われていくような気がした。その時計が伝えるのは時間の経過だけであって、この長い夜の終わらせ方を教えてくれるわけではない。時計がなくても時間は経過していくのである。

暗闇に佇んでいた夜が、秒針に呼応して息を吹き返してくる気がした。高校二年生になったばかりの歩美には三つ年上の兄がいた。歩美はその兄が大好きだった。そしてとても誇りに思っていた。全国模試では常に上位に位置しており、武術にも精通していて、もちろんそれも全国クラス。というような兄だったのなら、歩美は兄をすごいとは思っても、尊敬はしなかっただろう。歩美が兄を好きな理由は、自分のピンチの時に必ずそばにいてくれていたからだった。小学校の時に近所の犬に襲われそうになっているところ、兄が助けに来てくれたというようなヒーロー伝説ではない。悲しい時、寂しい時、歩美は決して表情には出さない。両親がほとんど家にいないということもあり、兄の負担にはなりたくなかったからだ。しかしそういう時に必ず兄は自分を助けてくれる。歩美は兄のそういう鼻にかけない優しさが好きだったのだ。ヒーローと言えるほど格好良くもないし、背だってそんなに高くない。でも歩美がピンチの時には必ず兄が助けてくれる。それは両親の愛が足りない歩美には、宝のような存在だった。兄にしてもそうだったに違いない。歩美が笑えば兄も笑う。そういった感情の共有も、親とではなく兄と築き上げていったのだ。歩美がまだ小さい頃、兄がかけている眼鏡は人の心が覗けるんじゃないかと思っていた。兄は私の気持ちを理解してくれる。ずっとそうやって暮らして来た。しかし、その兄が今、隣の部屋で狂人と化しているのであった。

都心の高級住宅街に住む吉岡家。両親ともに多忙な仕事をしており、父親の毅は株式投資のトレーダーだ。朝の7時から米国株式市場やニューヨークダウ株価情報の終値を調べ、その他の海外マーケットの概況もチェックし、日本経済新聞でNY円相場や、債券の金利、原油金価を調

べる。8時には、トレーダーズウェブの外資系動向、投資トレーダー社の寄付前外国証券注文状況、シンガポール日経先物の値等をチェックする。東京市場が開いてからは、ドル円チャート、ユーロ円チャート、アジア市況、中国株投資情報など、世界の動きをチェックしなくてはならない。そして東京市場が閉じる3時過ぎには、東京証券取引所で裁定取引の状況確認、さまざまなチャートでの日経平均株価を分析、夜の8時にはその日発表された企業業績やシンガポールの取引所の先物の夜間取引価格を調べ、明日の準備をする。だから帰るのはいつも深夜になる。週末も、東証一部全銘柄のベータ値をチェックしなくてはならないし、インターネットで週刊株式マーケットを見て、その次の週の動きを考察し準備する。要するに、一週間、常に情報、資金の流れをチェックして、次の一週間に備える、そしてまた一週間と寝る時以外は仕事漬けである。そしてそのことに熱意を燃やし、利益を得ることが家族の為とやりがいを感じているのである。母親のひとみはインテリアデザイナーで、東京のインテリアデザイン専門学校卒業後イタリアへ渡り、インテリアコーディネーターとしての腕を磨いた後、帰国し自身の会社を立ち上げ、コーディネーターとしてもデザイナーとしても世界中で評価されている。年中海外へと飛び立っているのだ。だから、必然的に歩美はいつも兄の高貴と共に過ごしてきたし、学校での出来事、友達関係、悩みなど、普通の家庭では親とする会話を、高貴に話し、そしてお互いの感情を共有してきた。高貴も両親に負けじと勉学に励み、私立の有名進学高校に入学。しかし高校に入学してからは、思うように学校の授業について行けず、悩み苦しんだ。親から直接言われたわけではないが、何でも一番を目指す両親を見て来て、次第にそれがプレッシャーとなったのだ。妹の歩美には、家族で頼れるのは自分しかいないと弱みを見せず、幼稚園に入る前から我が家に給仕している家政婦の友江さんとも家族同然の付き合いをして、何とか日々を乗り越えて来た。そんな矢先である。学校の期末試験で、ほとんどの教科で赤点を取ってしまった。高貴にとっては、順風満帆とまではいかないが、いままで赤点なんてとったことがなかったものだから、その自分の現状を目の当たりにしてひどく落ち込んだ。気がつけばいろいろなものを背負い過ぎて、精神と肉体が追いついていかなくなっていたのだ。ひとつの物事がうまくいかなくなると、それと連動するように、他の物も崩れて行く。ひとつのことを投げ出してしまうと、他のことも投げ出してしまいたくなる。次第に、学校に行くのが億劫になってくる。これは登校拒否の初期状態だ。まわりのみんなは、風邪を引いたのだろうか、気分が優れないのだろうか、いつも気丈に振る舞う高貴を見ていたから誰もそこまでの心配をしなかった。高貴の愚痴や、不満や、憤りを聞いてあげる人がいなかった。そんな高貴の気持ちに誰も気付いてあげることが出来なかった。常に一緒にいる歩美にしてもだ。さらには当の本人でさえ気付いていない。それは潜在意識で反応し、その行動を無意識にとっていたのだ。そして一度登校拒否をしてしまうと、さらに学校に行くのが億劫になる。一日休んだことで、さらに他の生徒との差が開いてしまうと思い込んだり、今まで風邪の時でさえも学校を休んだことがなかったから、両親や歩美や家政婦の友江さんに、その姿を見せたくなかった。常に完璧な兄であり、完璧な息子でいたかったのだ。と同時に、その自分に課せられた使命感が崩れていくのを止めることも出来なくなっていた。大雨が降り、川の水量が増え、いつもは動くはずのない岩石がその勢いで崩れだす。そして斜面に堆積された土と砂と水がその衝撃に飲まれていき、まるで雪だるまのようにだんだんと大きくなり、気がつけば土石

流になっていた。時間が経てば経つ程、タイミングが遅れば遅れる程、その土石流は崩れるスピードを上げ、やがてすべてを飲み込む。自然の脅威にさらされるように崩れていく自分のその様を、高貴はただただ見ていることしか出来なくなっていた。それが今度は不登校に繋がる。さすがに歩美も友江さんも、なかなか部屋から出て来ない高貴が心配になり、たまにトイレなどで部屋から出てくる高貴を見かけては、大丈夫？とか、いつも無理をしすぎなんだから、こういう時くらいゆっくり休みなよと声を掛けていた。しかし、その声掛けが実は逆効果だったとは誰も気付かなかった。高貴にとってはそれがさらなるプレッシャーとなり、自分は大丈夫じゃないんだと認識し始め、部屋に引きこもり始めた。もうこの姿は見せられないと自分で自分を追い込むようになった。誰も高貴が登校拒否を始めた原因に気付いてあげることが出来なかった。不登校が続き、友江さんが両親に報告をした。この時点でもう遅いのだが、遅かれ早かれ、父親の毅然も、母親のひとみも家にいることが少なく、今まで手のかからなかった高貴に対して部屋の扉越しに一言声を掛けるぐらいだった。そしてその一言で、高貴の心の病は進行していく。部屋の外で物事が大きくなって行っているのを感じ、それが恐怖に変わり、自分の意志で部屋から出ることが出来なくなる。歩美は毎日ドア越しから声をかけ、食事置いておくねとか、早く元気になってねとか、本当に兄を心配しての言葉だったが、高貴にとっては、それもまた重荷にしかなかった。引きこもりが始まり、学校の方でも高貴が心配になり、家に担任が尋ねて来たりもした。ますます高貴は物事が重大になっていると感じる。担任がドア越しから声を掛ける。「大丈夫か。みんな心配しているぞ」と。担任はもちろん、高貴の同級生も心配はしていた。

何人かの同級生も訪れたりした。しかし高貴にとっては学校ではこの状態が知れ渡っているだろうという事実を突きつけられたにしか過ぎないのである。ある程度大人になれば、引きこもりに対しての認識も深まり、大人な対応が出来るようになるものの、学生にとって引きこもりとは病そのもので、下手をしたら近寄りたがたい存在になりうる。それがいじめに発展することも少なくない。自分のことでいっぱい進学校ならなおさらだ。もう学校には行けない、皆に合わせる顔がない。高貴の引きこもりはさらに重度になっていく。部屋の扉を開けるのが怖くなり、食事以外で開けることは無くなった。排泄も部屋のなかにあるペットボトルの中や、新聞を広げてするようになり、汚物が溜まり、部屋からは異臭が漂い始める。それに気付いた友江さんは両親に報告し、今度は家に精神科のカウンセラーを連れて来た。多忙を極める両親は、そういうのは専門家に任せた方がいいということで決まったのだが、その選択は間違いではなかった。下手に声を掛けるよりよっぽど良い。しかし、高貴の胸にはぽっかりと穴が開いたままだった。高貴が欲していたのは、何より両親の愛だったのである。小さい頃から家にいない両親に変わり、友江さんが愛情をもって育ててくれた。年の近い妹は慕ってくれていた。けどそれだけでは満たされないものがあったのだ。カウンセラーが扉を叩いた時には、高貴の中で何かが弾け飛ぶように壊れた。それは今までどんなに辛いことがあっても手放さず、誰かに何を言われようが信じ、高貴が大切に守って来たものだった。カウンセラーが自己紹介を始める。高貴は思う。『両親に見放された』と。歩美にとってその時の高貴の声は忘れられないものとなった。カウンセラーが自分の名前を名乗り始めると、部屋から突然、地鳴りのような音が鳴り響いた。それは大木を鋭くえぐる雷のようでもあったし、大地を揺るがす振動でもあった。歩美は高貴に対して

初めて恐怖を抱いた。その声は昼夜構わず続いた。特にカウンセラーが訪れた時はその勢いが増した。人ではない野生動物特有の威嚇の声にも似ていた。もちろん家の中でそれだけ響くとなると、外にも音が漏れている。敷地が大きく家と家が隣接していない高級住宅街とはいえ、さすがに夜間のその咆哮のような声には近隣の住民も驚き、不安を隠しきれないでいた。町内会の会長が歩美の家に訪れることもあった。歩美にしたって、不眠の原因となり、眠れない日々が続いた。友達にも相談出来ず、両親は不在。友江さんとどうにか高貴を支えて来たが、それもいつしか限界になりつつあった。頼みのカウンセラーに至っては、ただ辛抱強く声を掛けるだけだと、部屋の前に居座るだけだった。歩美は日増しにかすれていく兄の声をもう聞いていることが出来なくなった。今度は歩美の精神が壊れ始めた。そしてある日その出来事は起こった。近隣の住民からの苦情も増え、睡眠不足で自分の理性を保つことが出来ず、歩美は高貴の部屋に向かった。いつもは優しく、高貴を刺激しないよう声を掛けていたが、もう我慢の限界だった。

「お兄ちゃんもう止めて！そんなのお兄ちゃんじゃない！」

歩美は扉越しにそう怒鳴った。絶え間ない怒号、何かをかきむしるような音、壁を殴る鈍い振動、そのすべてが歩美の一言でぴたりと止んだ。歩美は自分の声が届いたんだと思った。また高貴を止めることが出来るのは自分しかないと思っていた。だからその声が止まった時は、歩美の中に達成感に似た感動が巡って来た。友江さんもやっと声が止んだと声を弾ませた。吉岡家に久しぶりの静寂が訪れた。また始まるのではないかと、二人とも気が気じゃ無かったが、時間が経過してもその静寂は保たれた。歩美は声を掛けるのを止めた。友江とこれ以上刺激しないほうがいいと判断したからだ。下手に刺激してまたもとの状態に戻るのだけは避けたかったし、高貴自らが部屋から出てくるのを待とうと二人で話し合った。そして夜になった。台所の冷蔵庫の機械音、蛇口からシンクに水が落ちて弾ける音、近所の野良猫の独り言、それ以外の音は聞こえなかった。もう何日も忘れていた夜の静けさ。歩美は今までの睡眠を取り戻すかのように深い眠りについた。友江も同様に、深い闇に沈み込むように寝ていた。そして朝が訪れた。昨日から高貴の部屋からは何も物音が聞こえなくなっていた。二人は逆にいつもと違う状況に不安を抱いたが、私達同様高貴も疲れたのだろうと、その日のカウンセラーも断り、そっとしておこうと決めた。翌日、心配な顔をして母親のひとみが帰って来た。ロンドンからパリへの飛行機をキャンセルして、急遽日本に帰って来たとのことだった。歩美は、昨日から高貴が叫ぶのを止めたと、自分の一言で改善に向かっているのだと、母親に伝えた。ひとみは、「一度見てくる」と高貴の部屋に向かった。歩美は母親が帰って来た安心感からか、それまでの緊張で強ばっていた身体から力が抜けていくのがわかった。母親が階段を上がって行く音が聞こえる。友江も安堵の表情でその様子を見ている。そして、吉岡家にひとみの、それが母親の声であると理解するまでに時間がかかる程の、声高で空気を切り裂くような鋭い叫び声が響いた。歩美はなぜか一発でそれが何を意味するかがわかった。今まで聞いたこともないような母親の甲高い叫び声が、事態の緊急さを表していた。歩美は急いで高貴の部屋へと向かった。磨かれたフローリングに足を滑らしそうになったが、何とか持ちこたえ、力の限り走った。この狭い空間じゃ自分の特技でもある走力を活かそうもなかったが、それでも懸命に高貴の部屋へ向かった。途中、2度程母親の叫び声を聞いたが、その緊急信号は歩美の足を止めるには至らなかった。むしろより歩美の足を早めた。

高貴の部屋の前に辿り着く。その場に崩れるように座り込む母親、その先には高貴の部屋の扉。そしてよく見てみると、その扉の下の隙間から赤い泥水のような液体が顔を出していた。それは流れることを止め、固まることに集中している個体にも見えた。歩美は叫んだ。自分の脳が声帯に信号を送るより先に、歩美の声帯は震えだした。自分の意志とは無関係に出された声は、母親のそれとよく似ていた。途端に目の前が真っ白になった。目の前の世界が、鏡が割れた時のように、いくつかの破片となり砕けていった。歩美はもう一度叫んだ。しかしその叫び声は、歩美の意識の外から聞こえた。歩美の意識は、身体よりも先に下へと沈むように落ちていき、声はその頭上の方から聞こえて来た。次の瞬間、暗闇が訪れた。

歩美が次に覚えているのは、青い空と筆で薄く伸ばしたようなかすれた白い雲。身体は空中を彷徨うようにふわふわしている。頭の上の方から「大丈夫か」と声が聞こえる。見上げると、白いヘルメットを被った男性がしきりに声を掛けている。「大丈夫か。自分の名前が分かるか」

その声自体も、朧げでふわふわしているように思えた。身体が自由が利かない。下を見ると、身体に白い布が掛けられている。身体が動かないのか、何かに固定されているのかはつきりしない。とにかく、世界全体が綿で包まれたかのようにやさしく揺れていた。そして、もう一度目の前の空を見る。青い空と、かすれた雲。次の瞬間、またしても暗闇が訪れた。

気がつくやうに、騒がしい声が聞こえてくる。左の方から、年寄り独特の噛み合わせの悪いしゃがれた声。

「早く出しておくれ。もうどこも悪くないんじゃ」

そしてそれを包み込むような、おおらかでありながらどこか事務的に聞こえる声。

「わかってる。でももうしばらく辛抱してね」

テレビの音も聞こえてくる。どこかの政治家がまた出来もしない公言をしている。右のほうからは暖かい光を感じる。そしてゆっくりまぶたを開ける。白い天井。差し込む光。自分がどういう状況かを噛み締めるという信号が送られてくるまで、その白い天井を見続ける。どれくらい経っただろうか。時間の経過さえも認識出来ないでいると、ふとそこに、知っている顔が覗き込む。

「おばさん、おばさん、歩美が目覚めましたよ。」

「第七章」

東の空がひっそりと朝を連れてきたように白んできたのが見える。深夜三時に沙織さんからの携帯で飛び起きた僕は、まだ人気の少ない駅のホームで始発の電車を待っている。

「歩美が見つかった」

沙織さんのその一言以外の記憶がほとんどない。電話の内容をはっきりと覚えていないのだ。僕が無意識のうちに必要でないものを振り分けて捨ててしまったのか、沙織さんはそれしか電話で話さなかったのか、結局のところ覚えていないのだが、この数日間、歩美の搜索で泥のように重たくなった脳みそを起こすには、その一言で十分だった。

電車がまもなく到着しますというアナウンスが聞こえてくる。閉まり切っていない冷凍庫から漏れた冷気のような風が、時折側を通り抜ける。僕は電車が到着して扉が開くのと同時にたまらず車内に飛び込んだ。電車の出発時刻までまだ時間があるようなので、僕ははやる気持ちを抑えようと、まだぬくもりのない冷えた座席に軽く腰掛けた。

焦っても仕方がない、僕は自分に何度も言い聞かせていた。電車は定刻通りにしか出発しないし、何かトラブルでも起きない限り、定刻通りに目的地に到着する。そういうルールであり、そしてそれは同時に、誰もそこからはみ出すことが許されないということを告げていた。それがルールというものなのだ。だからこそ信頼が成り立っている。僕はそういった事実を一通り確認して、深く息を吐いた。

車内から見える空は、その風貌を徐々に明らかにしていた。そこにルールはない。むしろ予報士の期待を簡単に裏切ることに楽しみを見出しているというように、刻一刻とその表情を変えていく。何度も言うようだが、そこにルールはない。それが自然というものなのだ。

僕は偶然ポケットに入っていた飴玉を口に放り込み、もう何回目だろうか、ホームの電光掲示板で再度出発時刻を確認して、腕にはめている時計を見た。

さっき確認した時よりも、少ししか時間が経過していない。時間の流れがどうも悪いようだ。僕は他にやることがなかったので暇つぶしに時間の流れについて考えてみようと思った。僕は今どうして時間の流れを遅く感じるのだろうか。もちろん集中しているかしていないかということの違いなのだろうけど、時間の流れ自体のスピードは変わらない。でも僕は実際、時間の流れが遅くなっているのを感じている。その時僕の中で一体何が起きているのだろうか。僕は自分の中に流れていく時間のことを考えた。何がその流れを止めたりしているのだろうか。時間が通る管みたいなものがそこにはあって、その管に溜まった代謝物か何かがそれを邪魔しているのだろうか。

それともその先にある排水溝みたいなものが詰まったりしているのだろうか。そしてその排水溝に張られたフィルターに余計なものが溜まっているのだろうか。だから時間の流れが悪くなっているのだろうか。きっとそこに溜まった余計なものが時間の流れを悪くしているのだろう。僕の中に流れていく時間の中には実はいろんなものが混ざっていて、時間が僕を通り抜けていく前にそれらを分別するように排水溝フィルターがいろんなものを捉える。時間以外の余計なものはそこに溜まっていくシステムだ。そして当然、そこに溜められたものは誰かが掃除をしなくてはならない。でないと、時の流れは悪くなるばかりか、いつか止まってしまう。

僕は時間がまだあったので、その排水溝フィルターに溜まったものたちと、それを掃除する掃除夫について考えてみることにした。

時というものにはたくさんの種類があり、自然であったり、文化であったり、進化であったり、その姿は様々だ。自然であれば時の流れを悪くするのは言うまでもなく文明の発達であり、進化に関して言えば、僕らの抱える時間軸ではその時の流れを捉えることは出来ない。それにそんなことを挙げていたらきりが無い。掃除夫にしてもそうだ。白い顔をした掃除夫も入れば、黒人のような大柄な掃除夫もいる。性格も様々であるし、そんな一人一人のことを考えていたら一日はあっという間に過ぎてしまう。

僕は、僕の目の前にある時のことを考えることにした。

僕の今現在の時の流れを悪くしているのは、つまるところ、暇を持て余していることにある。出発時刻まで何もすることがないし、出発してからもそうだ。悠長に景色を眺めているような心の余裕もないし、歩美の心配をしまえば気が気でなくなる。もし僕に家を出る時に余裕というものがあったなら、何か本を持ってきたかもしれない。しかし、それを持ってきたところで、その内容は頭に入らなかっただろう。

ということは、僕の時の排水溝フィルターには現在、暇というやつがたくさん詰まっているのだろう。そしてもし僕が今読書が出来る状態であれば、読書家の掃除夫がやってきてそいつを取り除いて綺麗にしてくれる。夢想家の奴もいれば、妄想家の奴だっている。ただ単に掃除好きの掃除夫だっているだろう。しかし今の僕には、僕のところに掃除をしに来てくれる掃除夫は誰もいなかった。僕が持て余している暇を取り除ける掃除夫が見当たらないのである。

もしかしたら、掃除夫の待合室みたいなものが別なところであって、そこにいろんな掃除夫が待機しているのかもしれない。

そして構内アナウンスみたいなものが流れて、この暇を、僕が今抱えている暇を取り除ける人をアナウンスで募っているが誰も見つからないのかもしれない。

あるいは、やってみようと思える前向きな掃除夫がいて、それでもやっぱりダメだったと肩を落として帰ってきて、また同じようにして何人も試したが、今回のやつは誰も無理なんじゃないかという重たい空気が待合室に流れているのかもしれない。

肩を落とす掃除夫達。

何故だか僕もその待合室で無気力に覆われた空気を重たく吐き出しているように思えた。僕は歩美の排水溝フィルターに詰まったものを掃除出来ているのだろうか。最近僕はそういった無力感に襲われることが多いような気がしている。

待合室にいる僕は、アナウンスを聞いて彼女の排水溝に向かうものの、結局は何も取り除くことが出来ず帰ってくる。そしてくたびれた椅子に腰掛けて、天井を仰ぐようにして自分の無力さを噛み締める。そんな僕が容易に想像出来てしまう。

僕は何でこんなことを考え出してしまったのだろうと腕時計に目をやった。いつの間にか時間は発車時刻になっていた。そして僕がそれを確認するのを待っていたかのように発車を告げるベルが鳴り、電車は目的地に向けて出発した。

僕は大きなため息をひとつ吐いた。僕の中の掃除夫がきっちり仕事をしてくれたんだらうと、その功績を褒めてやるところなのだろうが、結局僕はまたその無気力のようなものを背負うかたちで時間が経過していたことにとっても残念な気持ちになった。

電車が発車してからも、僕は当然のことながらその掃除夫のことをずっと考えていた。歩美の排水溝を掃除する掃除夫のことだ。

彼らの中に、僕を含めて、きっちりと仕事が出来た人がどれくらいいるのだろうか。もしいたとしたら、どうやってその詰まったそいつを取ることが出来たのだろうか。また排水溝に詰まったそれは、一体何だったのだろうか。僕にはそれが見当もつかないし、もし待合室にその掃除夫が我が物顔して帰ってきたら、少なからず嫉妬の目で見ていただろう。そして、何で自分には出来ないんだらうと、待合室の壁をおもむろに叩いているのだらう。

ある時には僕の名前が構内アナウンスされることもあるかもしれない。部屋に取り付けられたスピーカーから僕の名前が聞こえようものなら、僕は勢いよく部屋を飛び出して行っただらう。僕の出番は、僕が信じるころ、誰よりも多いだらうし、責任感も人一倍持っている。しかし部屋を出て帰ってくる頃には、成功するしないに関わらず、何かしらの無力感を抱えて帰ってきたに違いない。そしてそれは僕だけでなく、他の人にも言えることだらう。そんな無気力感で歩美の中の待合室は満たされている気がする。一体、歩美のフィルターに溜まっているものとは何なのだろうか。最終的にいつもと同じ着地点に到着し、僕はまたしてもため息をひとつ吐いた。そして列車はいつのまにか目的地に着いていた。

駅を出ると、部長が待っているのが見えた。大自然をバックに全くひけを取らない部長の存在感は、その大きな身体だけが理由でないような気がしてならない。僕は部長の待つ駅の小さなターミナルまで駆け寄り、挨拶もそこそこにして、歩美の安否を尋ねた。

「大丈夫だよ～」と部長はいつもより低く屈もった声で言い、さらにいつもより小さくなった目で僕を優しく見つめた。最初から何も心配事がなかったかのように見つめる部長を見て、僕は一瞬何をしにこの地に来たのかを忘れそうになった。それぐらい部長からは不安の影が見えなかった。もしかしたら最初からこうなると部長にはわかっていたのではないかと、何かに圧倒されるようにして見つめる僕を背に、部長は乗ってきたハマーのジープの運転席にさっさと乗ってしまった。我に返った僕は、慌てて助手席に座りシートベルトを締め、車は別荘に向けて出発をした。

早朝の空いている一般道を猛スピードで駆け抜ける。部長の運転する車に乗るのは初めてだったのだが、マニュアル車を手早く操るその動作は、僕がいつも見ている部長からは想像出来ない

ほど正確で精密な動きだった。

一切の無駄を省いた部長のドライビングテクニックは、ある一定のルールのもと行われている気がした。信号機も曲がり角の場所も、すべて網羅されており、無駄にスピードを上げることもなければ落とすこともない。最短時間を目指す上で、守らなければならない決まり事のようなものを部長は淡々とこなしながら運転している。僕はなんだか話しかけてはいけない気がしたので、外の景色を眺めることにした。

平日の早朝だから空いているのか、紅葉のシーズンを終えた軽井沢はとてもひっそりとしていて、他の車も、道を歩く人影もほとんど見当たらなかった。歓迎する心を忘れたかのようにいくつもの建物はその門を固く閉ざしている。通り過ぎる景観も僕らに愛想笑いをすることもなく、冬の訪れに備えてその身を固くしている。陽もだいぶ上り、町はやわらかな陽光を受けているにも関わらず、冷ややかに一日の始まりを迎えていくようだった。

山道に入り、道が大きくうねり出したのを合図に、車は一般道から小道に逸れた。しばらくその小道を進むと、今度は舗装されていない砂利道が続く山道に入り、車体が大きく揺れ出した。僕は何とかその揺れに耐えようとシートベルトをしっかりと握りしめ、その揺れに身体が持っていけないよう全身に力を入れた。

しばらくすると小さな山小屋が見え、そこを曲がると同じく小さな駐車場が姿を現した。空きスペースに車を止め、サイドブレーキを上げると、部長はさっさと車から降りてしまった。僕は世界が少し回っているような感覚で、ふらふらと転がるようにして車を降りた。駅に着いてからというものまるで息をつく暇がないといったように、ようやく外の空気を大きく吸い込んで、僕は何ともまだ揺れている世界を安定させようと大きく息を吐いた。

夏に一度来ているから、だいたいのことは想定して来たが、秋の終わりの山道は恐ろしく冷たい風が吹き抜ける。僕は厚手のコートを持ってくれば良かったと後悔したが、先を急ぐ部長の姿が目に入り、そんなことを言っている場合ではないと、僕はその緩んだ紐を固く結ぶようにして気を引き締めた。

明け方の森の中はマッチの火が消えた後に上る煙りのような薄い靄で立ちこめていた。夜の間に溜められた静けさは、鳥の鳴き声を合図に拡散し、姿こそ見えないもののそこには確かに生命の息吹が感じられた。

部長はその呼吸に合わせるようにして前を進んでいる。テンポが良いというよりは、自然とうまく同化しているという具合に、駅で見た部長の存在感はすっかり姿を消していた。まるでそうしていないとこの山にはいられないといったように。部長のその姿を見ていると、がちゃがちゃと森の静寂を破るようにして進む僕はなんだかとても場違いな気がしてくる。森の聖なる朝の儀式の最中に、寝坊して遅れてきた旅行者のような、それはとても信仰を軽んじている愚者の行いとして、周りから冷ややかな視線が注がれる。どうやらさっきからずっと冷たい視線が送られているように感じたのは気のせいではなかったらしい。そして冬の始まりの冷たい風が一層僕を孤独にさせた。

それを感じてからというもの、僕は部長との離れた距離を取り戻そうとすればするほど、どこか禁を破っているような気がしてなかなか思い通りに足が進まなかった。しかし部長はそんな僕

を余所に、次第に細くなり険しくなっていく山道を器用に登っていく。僕はその姿を見失わないように、ひっそりと素早く歩かなければならなかった。存在を消しながら駆け上る。それがいかに難しいか言うまでもない。登山家でもアスリートでも、ましてや山の民でもない僕は必死になって息を潜めながら登っていく。しかし一旦それに集中してしまうと、森の儀式だとか存在だとか、そういった信仰的な概念は簡単に頭の中から取り除かれていた。僕はただただ通り抜ける風のように足を進めていった。

そうこうしている内に、拓けた場所が見えてきた。僕は最初、そこが部長の別荘のある広場だとは気がつかなかった。梅雨の時期にあった若木の勢いは衰え、老いを隠せない枝からは冷たい風が吹き抜けていた。自然とは一年ごとに生まれ変わるものだとして丁寧に教えてくれるように、森はその姿をすっかり変えていた。

部長はもう別荘の前に辿り着いていて、僕の到着を待っている。僕は森の束縛を振り切るようにして部長の元へと向かった。

別荘に辿り着くと部長は入口の扉の側に設置されている二人掛けのウッドチェアを指差して、「ここに歩美がいたんだよ～」と教えてくれた。

何ヶ月も放置され、枝葉をかぶったウッドチェアからは精気というものが全く感じられなかった。梅雨の時期に潤っていた素肌は、その瑞々しさを拭い取ったようにしてからからと乾いた風に吹かれている。

その姿は森と同化しないことには存在していけないというふうにも見えた。森の姿はそういうものたちを容易に飲み込んでいく。そしてその森の中にいた歩美もまた森と同化していたのだろうか、少し老いた歩美を想像してみたが、あまりにもそれは不条理なことなので、僕はその想像を払拭するようにして別荘の扉を開けた。

歩美はどうしてこんな場所まで来たのだろうか。どういう想いで険しい山道を登りこの場所に辿り着いたのか。歩美の心模様を今まで描けていたと自負していた僕は、少なからず動揺していた。文字通り、僕の心は揺れ動いていたのだが、僕はこの数日間揺れ動く心を安定させようと、冷静になることに努めていた。

自分の力でどうにか出来ることと出来ないことに分別を付けていたのだ。

それと同時に僕は、人の心を明らかにしていくことの難しさも知っていた。これだけ一緒にいるのに歩美の心を見抜けないでいた。この森のように、何かの感情とうまく同化するようにして潜んでいる本質を見抜くことは、とても困難で理解しがたい場所にある。山道のような論理的な道のりの途中に落ちていればわかるのだが、一度森の中に迷い込んでしまうと、その姿を見つけることはなかなか出来ない。森の中で落とした鍵を見つけるようなものである。

しかし僕は、その途方もない搜索にすでに乗り出している。それに対してひどく落胆している場合ではない。そして僕にはひとつの光がある。その光を指し示してくれたのは言うまでもなく部長である。部長の力があればきっと歩美の本心に辿り着けると信じているのだ。

玄関では沙織さんが僕らを待ちわびるようにして立っていた。

「高志、お疲れさま。大変だったでしょ。歩美はとりあえず二階で眠っているわ。というより、見つけた時からずっと意識がはつきりしないんだけど・・・」

意識がないわけではないと聞いて僕は少し安心した。決して安心出来る状況ではなかったが、死の匂いが僕の鼻をくすぐっていたのだから、僕にはそれが何よりも救いの言葉だったのだ。

「高志、電話で話したけど…」

僕はそこで初めて沙織さんの電話の内容を思い出した。

「わかっています」

僕はその覚悟をここに来るまで無意識のところまでしていたのだ。電車で落ち着いたのも、ここまで理性を保っていたのも、ある意味その覚悟のおかげだったのである。

「歩美を助けて欲しい。歩美を助けられるのは高志だけ。私たちではどうしても無理なの。だから始発の電車に乗って急いで軽井沢に来て」

確か沙織さんはこう言っていた。

僕はその記憶が確かであることを知っていたようにここまで来たのである。

「さっき歩美の両親と警察には連絡したわ。だからみんなが来る前に歩美を連れ出して欲しいの。でないと、歩美がどこに連れて行かれるか心配でたまらない」

沙織さんは悲しい顔をしてそう言った。

僕は歩美が何処に連れて行かれるかを何となく想像出来る。

きっとそうになってしまうと、歩美は僕らの手の届かない所に行ってしまうことになる。それだけはどうしても避けたい。沙織さんはきっとそう言っているのだと僕は思った。

「すぐ始めますか？」

「そうしてくれると助かる」

僕は歩美の手を握って目を閉じる。歩美を一階のリビングにあるあの小部屋に連れてきて、部屋に寝かせた状態で僕はその隣に座っている。部長の存在を背中を感じる事が出来る。僕は再びこの小部屋に来たことに、どこか心の片隅のほうで感謝していた。

僕の無意識に通じる階段を、この部屋でなら見つけられそうな気がしたからだ。

部長の手が僕の肩にかかる前に、僕はこの間の女の子のことを思い出していた。他の人の無意識に干渉しようとするればどういう目にあうか。このことを知っているのと知らないのでは、準備をするという意味において明らかな違いが出てくる。拒絶されることを知っていれば、それに対しての心の準備が出来る。ということは、ある種の冷静さを保てるということだ。どういう形で拒絶されるかまではわからないが、少なくとも心構えは出来るのだ。僕は静かにその訪れを待つ。

「それじゃあ行くよ～」

部長の一声とともに、肩に手が置かれた。そして僕は深い暗闇の中へと落ちていく。

火花のようにノイズが散っているのがわかる。線香花火に似たそれは、小爆発を繰り返してノイズを飛ばしている。ちりちりと分散していくノイズを、目でもなく耳でもなく、どこかもっと深い場所で認識しているかのように、僕はそのノイズを感じる事が出来る。そして僕はゆっくりと自分の身体を取り戻す。暗闇に溶け込んだ身体をひとつひとつ取り戻していく。どこかの伝

統的な作法であるかのように、しっかりとそれに倣って僕は僕を取り戻していく。その一連の作業を終えて、僕はゆっくりと瞼を開けた。

そこには激しく打ち付ける雨風もなければ、身体に突き刺さる棘の枝もない。僕が以前この小部屋で見た世界がそこにはあった。天は森が覆い被さるようにして塞いでいるし、足下からは一本の道が続いている。すべての色が存在しているかのように、花は恣意的にいろんな表情を見せ、誰かが造り出したような人工的な創作物ではなく、そこで生まれ育ったことを主張するようにして、花たちは生き生きと呼吸をしていた。

僕はその光景に戸惑うようにしてそこに立ち尽くしている。荒れ狂う嵐のような世界ではなかったからではない。ここは僕の無意識の世界であって、歩美の世界ではない。僕はなんでここに立っているのかがわからなかったのである。歩美の世界もこうして僕と同じような世界で成り立っているのだろうか。または部長が間違えて僕を僕の世界に送り出してしまったのだろうか。どちらともどこか説得力にかけているように感じて、僕はその問いの答えを必死に探すようにして立ち尽くしているのである。しかしその問いの答えは最初からはっきりしている。ここは僕の無意識の世界だ。とてもよく出来た模造品でも、作った本人にはそれが模造品だとわかるように、ここは間違いなく僕の世界なのである。そのことについていくら考えても無駄なので、とにかく僕は広場を目指し歩き始めた。

足を一步踏み出せば、あとは自然と僕を広場まで連れて行ってくれる。僕の意識は相変わらず身体から少し離れた場所にあり、僕はそれを静かに見守っている。

広場に辿り着くと、僕の視界に白いワンピースを着た一人の少女が姿を現した。

小さな切り株に座ったまま、少女は僕のほうを見ている。その姿はとても自然であった。その切り株は始めから少女の為に用意されたものであるかのように、大きすぎることもなければ小さすぎることもなかった。まるで高さも幅も少女の身体のサイズに精密に合わせられているようだった。

僕はその少女の元へと足を向け歩き出す。白いワンピースを着た少女は嬉しそうに足をばたつかせ、僕が辿り着くのを待っていた。

僕が辿り着く前に少女は僕を指差し、

「あ、橋のお兄ちゃんだ」

と言って微笑んでいる。

「ずっと待っていたんだよ」

そう言ってその少女はひよいとその切り株から身体を軽く浮かせるようにして立ち上がった。

僕はその少女に見覚えは全くなかったのだが、とても懐かしい妙な気持ちになった。僕の記憶の中にその少女の面影は見当たらなかったし、もし子供の頃に出会っていたとしたらそれはとても曖昧な記憶であり、僕はその曖昧さというものに懐かしさを感じているのかもしれない。結局のところ、僕はその少女のことを知らなかったし、「橋のお兄ちゃん」と呼ばれたことも初めてのことだった。

「橋のお兄ちゃんって僕のこと？」

僕はその少女に尋ねた。

「そうだよ。あそこの橋を架けたのはお兄ちゃんでしょ」

そう言って少女は広場の向こうの方を指差した。

僕はその方向に目をやる。確かにそこには、広場を囲む木々がある一部分だけ綺麗に切り取られ、その間から橋の袂が顔をのぞかせていた。

「あれはお兄ちゃんが架けたの？」

僕は自分を指差して言った。

「変な質問」

少女は笑っている。そう言っている本人も変な質問だと思っているのだから、全くその通りである。しかし、僕にはその事実関係をしっかりしておく必要があった。

「あの橋を架けてくれたから私はここまで来られたんだよ」と少女は言った。

「君は何処から来たの？」

「だから」少女はさっきから続いている僕の質問攻めに少し呆れるようにして、「橋の向こうから来たんだって」と頭の固い大人を諭すようにしてそう言った。

僕は外見の未熟さからは想像出来ないほど大人びたその少女にとっても好意を抱いていることに気がついた。僕はきっと自分が今抱いている感情に親近感みたいなものを覚えたのかもしれない。

「橋の向こうには何があるの？」

そう言ってから僕はまたしても質問をしてしまったことに気がつき、少し自分が恥ずかしくなったが、少女は今の質問は適当だったというように、

「橋の向こうはね、とても暗くて寒い場所なの」と顔を少ししかめて橋の向こう側を見た。

僕も同じようにして橋の向こう側を見たが、ちょうど扇状のようになっている橋の半分から向こう側は暗くてよく見えない状況だった。

「でもそこに行かなきゃいけないんだね」僕は言った。「そこにお姉ちゃんがいるから」

少女はそれには何も答えないで、ずっと橋の向こう側を見ている。僕には歩美がその橋の向こう側にいることが何となくわかった。何となくというと、何かぼやっとしたイメージがあるが、僕にはそれが確信的であったけどその確信には理由がない、という意味で橋の向こう側に歩美の存在を感じていたのだ。

「君の名前は何て言うの？」

「私の名前？」

少女は少し考えてからそう言った。

「お兄ちゃんが思い出せないなら呼び方なんて何でもいいわ」そう言うと少女は微笑んだ。その幼さと円熟さを保った微笑みを僕はどこかで見たことがある。僕はそれを思い出そうと試みるが、一向にその少女の正体を暴けないでいた。

「キミちゃんでも良いかな」と僕は言った。「もちろん思い出すまでの間」

「うん、いいわ」少女はうなずき、「思い出すまでの間」と言った。

僕はとりあえずひとつの問題が片付いたように大きく息を吐き出した。問題はまだまだ山積み

であったが、僕にはこれが長い旅になりそうな気がしていたので、大丈夫、少しずつわかってくるだろうと、少しでも気を楽にしようとそう思うことにした。

「じゃあ行こうか」

僕は少女に手を差し伸べた。

少女はその手をぎゅっと握って、「お兄ちゃんは怖くないの?」と聞いてきた。

「僕だって怖いさ」

僕だって怖い。橋の向こう側に何が待っているのかわからないし、人の本心を知るといのはとても怖いものなのだ。ましてや歩美のことならなおさらだ。

僕は果たしてそれを受け止めることができるのだろうか。支えることができるのであろうか。

この森も、隣にいる少女も、吹き抜ける風も、その答えは教えてくれない。

これは僕一人の戦いであり、また歩美自身の戦いでもある。二人それぞれが何かと戦い、それを打ち破ることによって二人の距離は近づいていく。それが愛というものなのか。その答えもまた誰も教えてくれない。

僕は少女の手を引き、橋の袂から一步を踏み出した。

僕らが渡ろうとしている橋には欄干が付いていなかった。橋自体はとても精巧に作られていて、ケヤキ独特の美しい木目が何列にも並べられ光沢を放っている。この橋の重要性を主張しているかのように、その橋は存在感を露にしているのだが、僕はそれならばどうして欄干を付けなかったのかが不思議であった。この橋を架けたのが僕ならば、それは僕に問題があるということだ。僕の不安を象徴しているのか、ただ単に時間がなかっただけなのか、とにかくそこには僕らを危険から守ろうとする善意のようなものが感じられず、橋を渡すことだけに的を絞ったような作為が感じられた。

しかし僕はそんなことに不服を言っている場合ではなかった。橋が架かっているだけで有難かったのである。もしここに橋が架かっていなかったとしたら、少女もここにはいないだろうし、僕はまたしても途方に暮れるしかなかった。

少女の手を握ったまま、僕は橋の中央からはみ出さないようゆっくりと歩き出した。両側に手すりがない橋を渡るというのは、飛び交う銃弾の中を防弾チョッキ無しで歩くのと同じような気がした。もちろん銃弾が飛び交う戦場に出たことなんて無かったが、僕は無防備という点でそれに近い気がしたのである。

僕はそんな戦場を歩く兵士のような面持ちで、一步一步慎重に歩いていく。

今もし突風が吹こうものなら、簡単に橋の両側にある奈落の底に落ちてしまう。橋の両側は真っ暗な暗闇になっていて、どのくらいの深さがあるのかはわからないし、それを知りたいとも思わない。その下に何があるのかわからず、僕は落ちるわけにはいかなかった。

少女の手に力が入る。しかしそれは、恐怖というより覚悟のような力強さを感じた。僕はそれに応えるように少女の手を握り返し、着実に歩を進めていった。

橋の中腹辺りに差し掛かると、ようやく向こう岸の景色が徐々に明らかになり始めていた。

橋の向こう側の世界の空は、どうも黒く淀んでいて、雲と呼べるかわからないほどの黒い渦を巻

いたものが上空に幾つも張り付いていて、まるでそれは黒い沼地が空に浮かんでいるようにも感じた。もしそれが上空に無ければ、空とは呼ばなかったであろう。天地の感覚がなくなるほど、それは奇妙な光景だった。もしかしたら本当はそれは空ではなく、もうひとつの地上なのかもしれない。地上と地上が向き合うようにして成り立っている世界。仮にそういう世界だったとしても、それに対して僕は執拗に驚くことはしないだろう。何かそういったものに対して諦めに近い感情が芽生えていた。今までの経験がそうさせているのか、結局何が起きようとも僕のやることは変わらないのだ。

僕は少女の手を握ったままさらに歩を進めていく。

地上には建造物といったものが一切なく、月の表面のような灰色の大地がただ広がっていた。所々に灰色の石灰岩のような固まりが隆起している以外、そこには何かを象徴するようなものがない。僕はこれからこの無限に広がる灰色の大地で歩美を探さなければいけないのか、果たしてそれは僕が予期していた長い旅になりそうだったのだが、僕はそれに対しても何か不服を言うつもりはなかった。僕のやることは変わらないのだ。

少女は橋を渡っている最中、一言も口をきくことはなかった。橋に欄干が無いことも、僕が隣にいることも忘れていくかのように、ただ黙ってその灰色の大地を見渡していた。その目からは警戒心を強めるような厳しい視線が注がれていた。僕も少女のように警戒心を強めて何度もその大地を見渡したが、白と黒を対等に混ぜ合わせたような色の平らな大地と所々にある爆発寸前の泡のように小さく盛り上がった瘤のようなもの以外何も見えなかった。

向こう岸の橋の袂に辿り着くと、僕の左手が何かにひっかかるのを感じて、僕は後ろを振り向いた。

少女が僕の手を引っ張っていたのだ。

「お兄ちゃん、橋を降りる前に約束して欲しいことがあるの」

「約束？」

「そう大事な約束」

そう言って少女は僕の手を離した。

「これから何が起きても後ろを決して振り返らないで走って欲しいの」

「走る？」

「うん。向こうの方に小さな洞穴があって、そこまで一気に走り抜けるの」

僕は部長の別荘に来るまでに、森のしきたりというやつに付き合わされて、ほとんどの体力と精神力を使ってしまっていたのでとても不安になった。少女は僕のその懸念を感じ取ったのか、

「大丈夫二十分ぐらいだから」

「二十分」

僕は二十分という数字が何を意味するのかを考えてみた。どうも時間という概念がこの世界にいるとおかしくなってしまうのだ。

僕はそこでどういう訳か、二十分と聞いてパスタのことを頭に浮かべていた。僕はパスタが大好きで、学校の無い日曜日の昼間はだいたい自分でパスタを作っていたのだ。大きな鍋を用意し

てそこにたっぷりの水を入れる。ガスレンジに火をつけ、鍋に入れた水が沸騰する間、パスタに入れる食材を切り分けておく。オリーブオイルをたっぷりとフライパンに入れ、包丁で潰したニンニクを入れる。あまり火が強すぎると焦げてしまうので、弱火でニンニクの香りが出てくるまで炒める。ニンニクの匂いがキッチンに広がり始めたらそこに食材を入れていく。火の通りにくい肉や野菜を入れ、最後にエリンギやしめじを入れる。隣の鍋が沸騰してきたらそこにパスタの麺を入れる。僕はアルデンテが好きだから、だいたい五分くらいで火を止め、ざるには上げないで直接トングでフライパンに麺を入れていく。仕上げに再びオリーブオイルを麺に絡ませたら完成だ。この作業がだいたい二十分。要はパスタを作る行程分走るというわけだ。

「わかった。後ろを振り向かないで二十分走り続ければいいんだね」

「お兄ちゃん何度もごめんね。もう一度言うけど、何があっても後ろを振り向かないでね」

「後ろは振り向かない」僕は念仏のようにその言葉を繰り返した。

「ちなみにだけど、もし後ろを振り向いてしまったらどうなるの？」

「それが私にもわからないの。ずっとそう言われてきたし、私も振り向いたことがないから何が起こるのかわからない。でも大事なのは、後ろを振り向いて何が起きるかということではなくて、振り向かないで走ることなの」

「わかった」

僕は少女自身もその何かに怯えている様子だったので、これ以上それについて問い詰めることはやめにした。

もうあと一步を踏み出せばそこは灰色の大地だ。

「お兄ちゃん行くよ」

「うん」

少女は僕のその言葉を聞くと勢いよく走り出した。僕もそれに続いて灰色の大地へ一步踏み出した次の瞬間、勢い良く後ろ足を蹴り出し、少女の後を追った。

僕はなるべく息を切らさないようある一定のペースを保ったまま走ることを心掛けた。たかが二十分といえど、走れば相当な距離になる。僕はマラソンランナーのそれに倣うようにして、上半身はぶらさず、下半身と腕の振りだけで走って行く。地面は思ったよりも走りやすく、大きな石も無ければ、滑りやすい感じも無い。僕の靴の底面は的確に地面を捕らえ、そして勢い良く突き放す。そのリズムに合わせるようにして呼吸を吸って、それから吐き出す。その一定のペースに心臓をならしていく。このペースを保てれば何とか二十分は走り抜けられそうだ。

前に行く少女はそんな僕を嘲笑うかのように、フォームもペースもむちゃくちゃで、その様子は一面に草原が広がる小高い丘から勢い良く斜面を走り抜ける子供のようなようだった。後先を考えず無我夢中で駆け抜けるその少女の姿を見て、彼女は二十分走り続けることが出来るのか僕は少し心配になった。そんな僕の心配を余所に少女は黙々と全身を使いながら走って行く。

しばらくすると、もう十分は走っているだろうか、周りに小さな丘のような隆起物が姿を現し始めた。かまぐらのようにして穴を掘れば二人ぐらい入れそうなその丘は、僕らの進行を邪魔するようにしてランダムに目の前に立っている。少女はその小さな丘の間をすすると通り抜けて

いく。目の前をひとつの丘が塞いでしまうと、その後ろの様子がまるでわからないはずなのに、少女にはすべて見えているのか、その動きに無駄は無い。僕も少女が通ったルートをうねるようにして進んで行く。

次第に僕の息が上がり始めた。最初に定めた呼吸のリズムは、その小さな丘が作り出した湾曲した道のせいで狂い始めていたのだ。呼吸のリズムが乱れてくると、それまで感じられなかった身体の重みが、その存在を明らかにするようにして全身にのしかかってきた。両手両足に鉛を巻き付けて走っている感じだった。それでも僕は走るペースを何とか保とうと、重たくなった分力を入れて走り続ける。少女はペースを落とすこと無く走っている。沙織さんが子供のエネルギーにはいつも驚かされると言っていたが、僕はこの時ばかりはそれに同感した。僕自身まだ若かったから、子供には負けないとずっと息巻いていたのだが、そもそも子供と比べるのはおかしいと沙織さんによく言われていた。僕はただ、若さと柔軟さという点で誰にも負けなくなかったのである。しかし実際、僕の目の前を走る少女を見ていると、若さと柔軟さの衰えを感じずにはいられなかった。体力にもそこそこの自信があったし、走ることの知識もそれなりにあった。当たり前ではあるが、そういう面ではきっと僕の方が優れているだろう。けれども、少女はそんな僕を一蹴するかのようにして次から次に現れる小さな丘の側面ぎりぎりを走り抜けていく。僕はそれに倣って付いていくのがやっとであった。

そんな風にして、何回目だろうか、目の前に現れた丘の側面を触れるか触れないかぎりぎりのところで走り抜けると、少女の姿が消えていることに気がついた。僕はここに来るまで、少女との間隔をずっと一定に保ってきた。その姿を見失うのが怖かったからである。僕にはこの世界のこと、その洞穴の場所も何一つわからない。少女がいなければきっと僕はこの灰色の大地をずっとさまよっていたのだろう。それを考えるとどうしようもない恐怖が沸き上がってきたので、ずっと少女を目で追える位置にいたのである。それがどういうわけか、ひとつの丘を抜けた途端、少女の姿が消えていたのである。僕は胃の底の方から恐怖が沸き上がってくるのがわかった。それと同時に今まで抑えていた汗が、一気に体中の毛穴から漏れ出しているのも感じられた。彼女はどこに消えてしまったのだろうか。僕は少女との約束を果たす為、止まることも後ろを振り向くこともしないで、次の丘の側面を駆け抜けていく。僕は少女と約束したのだ。

ひとつ、それからまたひとつと、目の前に現れた丘を通り過ぎていく。僕は今まで少女と通ってきたルートを逆算して、次に少女が選ぶだろうルートをたたき出して、それに従って走り抜ける。不安と恐怖は食道まで上ってきていて、顎からは汗が滴り落ちている。僕はこのままどうなってしまうのだろうか。先が真っ暗な状態で走るといのは本当に勇気がいることなのだ。僕はここで初めて知ったのかもしれない。先程よりも一段と重たくなった両手両足を、肩関節や股関節から持ち上げるようにして振り続ける。走っているという感覚はすでに失われていて、僕はその関節から先の部分を強引に持ち上げるという運動を先程から繰り返しているように感じた。そして僕が走る行為を止めないでいられるのは、少女との約束があったからなのであるが、その中で少女は二十分という時間を示してくれた。距離ではなく、時間なのだ。僕は二十分走り抜ければいいのか。もちろん正しいルートあっての話ではあると思うが、少女の姿が消えた以上、僕を支えてくれるのはそのことだけだ。

そして僕はパスタのことを思い浮かべた。今どの辺りだろうか。パスタの麺がちょうど芯が軽く残るくらいの、いい固さで茹で上がる頃だろうか。僕は恐怖の進行を食い止めようとひたすらパスタのことを考えていた。

目の前にはさらに丘が続く。僕は何ともなしにそれを通り抜ける。次の瞬間、丘の裏側に黒い影みたいなものが見えた気がした。僕は丘を通り抜ける頃には次の丘を見つけていないと、最短ルートを決める時間がなかったものだからずっと前を見ていたのである。その僕の視界の脇に、黒い影が横切ったのだ。僕は最初それは気のせいだと思っていた。しかし次の丘を抜けるとまた同じようにして、僕の視界の隅を黒い影が横切った。それは丘の裏側に潜むようにして立っていたのである。

次の丘が見えてきて、僕はその側面を沿うようにして走り抜ける。僕はその影を捕らえようと、目線を横にずらして丘の裏側を見た。

そこには、上空のどす黒い泥を被ったかのような人影があった。丘の裏側に隠れるようにして僕を待っていたのである。その証拠に僕が通り過ぎると、その影も僕の方を見つめていた。それは一瞬の出来事であったが、僕にはそれがはっきりとわかった。その黒い影はそこで僕が来るのを待ち構えていたのである。

先程まで止まっていた恐怖が、一気に舌の付け根の辺りまでのし上がってきたのがわかる。僕はその恐怖を大声と一緒に出してしまいたかったが、何とかそれを堪えて先を進んだ。次の丘を越えるのがとても怖かったが、足を止めたらもっと怖い目に合いそうだったので、僕はなるべく側面から離れて通り抜けることにした。

そして次の丘が見えてきた。僕は丘の側面からちょうど人ひとり分くらいのスペースを空けて走り抜けた。すると僕が通り抜けるのを待っていたかのように、その黒い影が僕を捕らえようとして手を伸ばしているのがわかった。もしかしたら少し触れていたかもしれない。僕はその触れられた部分を確認するように顔を横に向けた。

「振り返っちゃダメ！」

僕の左耳の三半規管を突き刺すようにして突然何者かの声が響いた。僕は横に向けられた顔を再び前に戻し、次の丘を目で捕らえる。その声の主は間違いなくあの少女であるということはわかった。少女は僕の左側をずっと走っていたのだろうか。僕はさらに続く丘から、今度は二人分のスペースを空けて通り過ぎた。黒い影は再び僕を捕らえようと手を伸ばす。僕はそれを辛うじてかわす。少女が近くにいるという事実が幾分、僕の気持ちを落ち着かせてくれた。身体はとうに限界を超えているはずなのに、痛みだとか疲労感だとかそういったものは不思議と感じられなかった。恐怖のせいなのだろうか、僕はただ重たくなった両手両足を前に運ぶことだけを考えていた。息は完全に上がっていたが、息苦しさみたいなものはない。もうどれくらい走っているのだろうか。パスタの麺は、そろそろフライパンに移してもいい頃合いである。僕は次の丘を通り過ぎる時、さらにそのスペースを空けた。僕は意図してやっているわけではない。恐怖が僕をコントロールしているかのように、それは自然な形で行われた。ひとつの丘を越える度、どんどんその黒い影の手が近づいている気がしたが、僕は構わず走り続けた。問題は距離ではなく時間なのだ。パスタはもうフライパンに移されている。

さらに丘を越えると、前方にこれまで見た丘の中では一番大きいと言える穴の空いた丘が見えた。

「あそこよ！」

少女の声が左側から聞こえてくる。

僕はその洞穴に向けて最後の力を振り絞った。身体に残っていたエネルギーは、その高まった高揚感のようなものに触発されて小さく爆発した。僕はどこにそんな力があつたのか驚くぐらいのスピードでその洞穴に飛び込んだ。飛び込む寸前に、僕の背中にぞっとするような感触がいくつもあつたが、洞穴に入るとそれは無くなっていた。僕はすべての力を使い切ったようにしてその場に倒れ込んだ。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

僕は自分が大丈夫かどうかをまだ確認していなかったのに、その彼女の問いには何も答えられない。

「何とかぎりぎり逃げられたようね」

逃げられた？僕たちはこの洞穴を目指して走ってきただけではないのか。二十分という決められた時間走るだけで良かっただけではないのか。そもそも僕らは何から逃げてきたのか。僕は彼女の問いのひとつひとつに、過剰な反応を示さなくてはならない自分が嫌になった。どうしてもっと楽に答えられる質問をしてくれないのだろうか。しかしそれよりもまず自分の安否を確認する方が先だ。僕は倒れた身体を起き上がらせようと両腕に力を入れた。手のひらに若干の痛みが走ったが、上半身は簡単に持ち上がった。それから片膝を立てるようにして膝を折り曲げる。右膝からも痛みが走る。それは、ナイフで切り込みを入れたオレンジの厚い皮を指で裂くような、そんな感触が痛みとともに右足の膝から伝わってきた。どうやら洞穴に飛び込んだ時に右足の膝がぱっくりと切れたようだった。手のひらも擦りむいたらしい。しかしその痛み以外、身体の方から異常を知らせる信号は送られて来なかった。立ち上がることが困難な状況では無い。僕はそれを確かめると両足に力を入れ身体を持ち上げるようにして立ち上がった。

「とりあえず大きな怪我はないみたい」

僕は彼女にそう言うと、外から漏れた光に頼りなく照らされた洞穴の内部を見渡した。

洞穴というぐらいだから、僕はてっきり胚胎する岩石やらでゴツゴツした壁や天井を思い浮かべていたが、僕が倒れ込んだ地面以外はすべてコンクリートで舗装されていた。それはもはや洞穴ではなく、どこかに通じている入口そのもので、水流や火山によって溶解されたような自然的作用で作られた痕跡は感じられず、誰かが意図的に作り出した人工的なものであった。そういえば、ここに来るまでに見たいくつもの小さな丘も、どこか人為的に作られていたような気がした。形も高さもすべて同じように見えたし、その並びを上から見たら、ある一定の法則のもとに並べられていたのではないかと思うぐらい、そのいくつもの小さな丘は均等の距離を保って立てられていた。

そして僕はそのコンクリートで舗装された壁に手を触れてみる。それはとてもひんやりしていて、つるつるとした質感を残していた。まだ塗られてから間もないのか、ラッカーのつんとした匂いが鼻を刺すようで、辺りは新築のマンションのような香りが充満していた。

「お兄ちゃん、足から血が出てる」

彼女はそう言うと、自分のワンピースの裾を大胆に引きちぎり、その切れ端を包帯代わりにして

、ぱっくり割れた僕の膝の傷口に巻いてくれた。

「ありがとう」

「歩ける？」

「なんとか大丈夫みたい」

僕は傷口のあるほうの膝を何度か曲げたり伸ばしたりしてみて、その重度を確かめてみたが、歩くことに支障がないのを確認すると彼女にそう言った。

「これからどうするの？」

「うん」

彼女は僕の無事を確かめてからそうなずき、コンクリートで舗装された壁を伝いながらその内部へと歩き出した。

僕は彼女の後に続いて歩いていく。外からの光が徐々にその効力を失っていくように、辺りはどんどん暗くなっていったが、その効力が切れる前に前方の方から明かりが見えてきた。後ろからぼんやりと照らされていた内部を今度は前からぼんやりと照らすように明かりの位置が入れ替わり、それは僕らがこの通路を歩く為の最小限の光のようでもあった。おかげで僕らは全くの暗闇に一度も遭遇すること無く、その通路の終わりまで歩くことが出来た。仮にもし奥に行くに従って明かりが失われていったとしても、僕は前を歩く小さな少女がどうにかしてくれるだろうと思っていたから、特に大きな不安を抱くことはなかった。僕は一人ではない。そのことがこんなにも心強いことであると同時に、ここに至るまでの道中で彼女への信頼感が高まっていることを感じずにはいられなかった。ここに来るまでの彼女の功績がそれぐらい大きかったことを象徴するかのよう、ついさっき会ったばかりのその小さな少女を、僕は思い切り頼りにしているのだ。

「あその扉の向こうに階段があるの」

彼女がそう言うのと同時に通路の終わりが見えてきた。そしてその行き止まりに、行く手を阻むようにして構えた大きな扉が見えてきた。

それは扉というよりも、通路を遮断するように上から差し込まれた金属の板のようで、彼女が扉と言わなければ、そこはただ金属で出来た壁にすぎなかった。

僕はその悠々と構えた扉を隈無く見渡した。塗装されたメタリックの光沢が辺りを重々しい雰囲気に変え、不審者を睨みつけるようにしてその金属板は堂々と道を塞いでいた。ドアノブのような取っ手も何も付いていない完璧な一枚の板。扉の前に立っても自動ドアのように開くことはなかった。僕がどうすればいいのか困惑していると、

「ここに手をかざして」

そう言って彼女が通路の壁に取り付けられたセンサーのようなものを指差した。

A四サイズぐらいあるそのセンサーは、黒曜石で作られているかのように黒光りしていて、それもセンサーだと言われなければ、壁に埋め込まれた装飾品のようには見えなかった。

「僕の手でいいの？」

「お兄ちゃんじゃないと開かないのよ」

「わかった」

僕はそう言ってその黒曜石で出来たセンサーにそっと手を当てた。

しかし扉は開くどころか、辺りの静けさを一層引き立たせただけで、何かが動き出す気配のようなものが一切感じられなかった。

「駄目みたいだね」

僕はそのセンサーから一旦手を離し、少女の反応を確かめるようにして振り返った。

「お兄ちゃん、ここはお姉ちゃんの心の扉そのものなんだよ。そして今それを開けられるのはお兄ちゃんだけなの。私はここから出ることは出来ても再び入ることは出来ない。お姉ちゃんとの思い出も無ければ、話したことも無いから」

彼女は寂しそうにそう言ったと思えば今度は真剣な顔つきになって、

「ねえお兄ちゃん。誰かの心の扉を開ける為には何が必要だと思う？」

僕の目を真っすぐ見て彼女はそう言った。そこには照れや恥ずかしさは無く、彼女の目は真剣そのものだった。

「愛、とかかな」

僕は自分でそう言いながらも、何でそういう言い方になってしまったのか、少し恥ずかしくなった。愛という言葉を使ったからではない。僕はその答えがあったにも関わらず、どうしてそうぼやかせるような言い回しをしてしまったのかということに恥じていたのだ。何もそんなに恥じることはない。答えは決まっていたのだからはっきりそう言えばいいのだ。しかしそれは同時に、僕の中にある愛というそのもの自体を象徴しているかのようであった。僕の中にある愛というものの定義がひどくぼやけていたからである。地表に上る陽炎のように、その熱は確かなのだがうまくピントが合わない。空に浮かぶ雲のように、風に流されその形を保つことが上手く出来ない。そんな印象があった。

「私もそうだと思うよ」

そう言いながら彼女は片手をそのセンサーの方に差し出した。

僕もそれに促されるようにして手をセンサーにかざす。しかし、僕にはいまいちピンと来ないものがあつた。彼女の心の扉を開けるのが愛だというのなら、僕はそれをどう表現すればいいのだろう。試しに心の中で念じてみる。

(歩美を愛している)

しかし扉は開かない。僕はまたして恥ずかしくなった。そんなことをしてもこの扉を開けることは出来ないと心のどこかでわかっていたにも関わらず、そういう上塗りの言葉で何か大切なものを汚してしまったような、ものすごい悔いが残る恥ずかしさだった。このまま僕はどうしたらいいのだろうか。この扉を開けて歩美を早く救い出したいのに、その方法がわからないのだ。愛というものをどう表現すればいいのだろう。表現しようとするほど陳腐なものになってしまいそうで、僕はしばらくそのセンサーに手をかざしたまま何か心の中にある愛というものの取っ掛かりみたいなものを探していた。

その作業はどこか、水の中に手を突っ込んで落とした鍵付きのキーホルダーを探す作業によく似ていた。落とした場所はわかっている。手を伸ばせば水底にも手が届く。後は手をかき混ぜるようにして辺りを隈無く探していれば、その五本の指にキーホルダーの穴が引っかかるような気

がした。

僕はかき回す手の水流で鍵が流されてしまわないように慎重に探していく。そうしているうちに、僕の中に、ある記憶が舞い降りてきた。僕は知らない間に、記憶の中に手を突っ込んでいたのだ。

ここはどこだろう。白い壁、白いカーテン、白いベッド、白いシーツ。すべてが白で包まれているこの場所は、確か病院だ。僕は今、遠い記憶の中にいる。目の前のベッドには女の子が目を閉じて寝ている。その横には、点滴が吊るされた長いポールが立っており、その点滴から伸びた一本の細い管がその女の子の腕と繋がっていた。カーテンが風でなびくたびに、その隙間から顔を出すようにして、太陽の光が女の子の顔をやさしく照らしている。その女の子は歩美だった。僕は思い出す。この場所は、歩美のお兄さんが亡くなった翌日の病院だった。歩美が倒れたと、家政婦の友江さんに聞き、僕は学校を休んで病院に駆けつけたのだ。僕は心配そうに歩美を見つめる。太陽の光が時折、その彼女のやつれた頬に影を落とし、僕はその度に彼女の身に起こった悲劇を痛感させられる。このまま彼女が目を覚まさないとしたらどうしよう。僕はその時、そんなことばかり考えていたような気がする。カーテンが脱力するようにならして元の位置に戻り、再びその身を翻すようにしてこの病室に太陽の光を届ける。その時、歩美の瞼が微妙に動いたような気がして、僕は立ち上がった。

「歩美、歩美！」

僕は彼女の側に近寄り名前を何度も叫んだ。病室の外の廊下では、家政婦の友江さんが担当の医者と話し込んでいた。僕はもう一度叫ぶ。

「歩美！」

その声に反応するようにして歩美の瞼が動いている。それは確かな反応だった。彼女の瞼の下の眼球が何かに反応しているようだったのだ。僕は手応えを感じてもう一度叫んだ。

「歩美！」

どこかでカチリという音が聞こえてきたと同時に、僕の意識はまたあの洞穴の中に戻っていた。僕の手はセンサーにかざされたままだったが、横から今までなかった空気の流れのようなものを感じる。僕はその方向に首を向けると、さっきまでそこを塞いでいた金属の板は跡形もなく消え去っていて、その向こうにはここと同じような通路が続いているのが見える。扉が開いたのだ。

「お兄ちゃんやったよ！」

隣で少女がその興奮を抑えきれないといった様子で飛び跳ねて喜んでいる。僕はそのセンサーから手を離し、それからその手のひらを確かめるようにして見つめた。センサーに手をずっと押し当てていたからなのか、僕の手は妙に白かった。あの後僕は、患者に衝撃を与えないようにと、担当医から歩美に触れることを止められていたのにも関わらず、僕はこの手で歩美の肩を揺さぶり続けた。彼女の名前を何度呼んだかわからない。そして歩美は目を覚まし、僕は大声で友江さんと呼んだ。その時の記憶も、歩美のか細い肩の感触も、病室の壁に付いたシミの位置も、すべて鮮明に思い出すことが出来る。僕にとって、あの時の出来事は忘れることの出来ないものであ

ったし、僕はあの時ほど誰かの名前を叫んだこともなかった。それは彼女の意識に呼びかけたというよりも、彼女の魂そのものに呼びかけていたように思える。僕は周りのことが気にならないぐらい叫び続けた。歩美が目覚ますきっかけになるのであれば何でも良かった。他の患者が僕の叫び声にびっくりして発作を起こしてしまおうが、僕の発した音響で窓ガラスが割れてしまおうが構いやしなかった。それぐらい身勝手な叫び声だった。しかしその身勝手な叫び声が歩美の意識を呼び起こしたのだ。そして今このメタリックな分厚い金属の扉を動かしたのだ。

僕はもう一度その扉の向こう側に目を向けた。あの扉がなければただの長い廊下だったように、その向こう側はここと同じ様相を呈していた。少女はまだ隣で喜んでいる。

僕は少女の言ったことを思い出した。ここの扉を開けるのに必要なのは愛だと、彼女は確かに言ったし、僕もそう言った。しかし僕自身、その愛そのものが依然不明確であった。はっきりこれだというようにして扉を開けたわけではない。僕は古い追憶の中において、その記憶を辿っただけである。そして気がつくとも扉が開いていたのだ。もしかすると、僕が歩美の名前を叫んだその叫びこそが愛だったのか。または、記憶を追従することが愛だったのか。どちらかといえば前者であろうと思うのだが、結局のところ僕は愛の所在を決めきれないでいた。いずれにせよ、扉は開いたのだ。僕はとりあえず、ここでそんなことを永遠と考え込んでいるわけにはいけないので、少女に「行こうか」と促して再び歩き出した。

扉の向こう側の通路も、それまでと同じく地面だけが舗装されておらず、所々飛び出した岩や泥の固まりが転がっていてとても歩きにくい。どうして地面はそのままにしてあるのだろうか、僕はここの設計をした人の意図を汲み取ろうとしたがさっぱりわからなかった。荒廃した土地に上からすっぽりと設計した模型をただ被せたような建物内の様子は、野外に設営されたプレハブ施設のような感じだった。そして簡易的ではあるものの、先程のメタリックな扉といい、天井に設置された蛍光灯は、半透明の亚克力板で保護されている。蛍光灯の光力を緩和させようとする意識があるのであれば地面もしっかりと舗装するべきではないのであろうか。それとも地面を露出しなければいけない何かがあるのだろうか。もし仮に光に弱い生物がこの建物に存在しているとするのであれば、天井に設置された亚克力板の意味はわかる。しかしそれは同時に目が弱いということでもあり、そんな生物がこの通路を転ばないで歩けるとは到底思えない。

しかし僕がいくらそんな不平や疑問を抱こうが、この通路が急に綺麗に舗装されるわけではなかったし、僕は今そんなわけのわからない生物の心配をしている暇はなかった。隣にいた少女は目的地がはっきりしているようなきびきびとした足取りで歩き出していた。僕は転んで右膝の怪我が悪化しないように、慎重に少女の後を追っていく。

しばらく歩いていくと、通路が緩やかなカーブを描き始めた。地面と建物の一体感がないものだから、僕は曲がるというよりは、斜めに道を進んでは方向を調整してと、直線的にしか方向を捕らえることが出来なくなっていた。ある種の方向感覚が損なわれているようだったのだ。僕が何度かその方向調節を行っていると、前方に人影が見えた。その人影はどうやら男の子のようで、彼女と同じ白い服とズボンを履き、両手で黒いボーリングの球のようなものを持って、僕たち

と同じ方向に歩いていた。

「あの子は何してるの？」

僕は前を歩く少女の背中越しにそう話しかけた。

「彼は掃除を終えて部屋に向かっているの」

「掃除？」

僕は彼女にそう聞き返したのだが、聞こえなかったのかその答えは返ってこなかった。

僕は今にも何かが発火しそうな気分だった。少女に聞きたいことが山のように積もっていて、とうとうそれが堰を切ったかのように噴火しそうだったのだ。あの少年は何者なのか。なぜ彼は君と同じような服を着ているのだろうか。彼は何を掃除してきたのか。あの黒い玉は何なのか。彼が向かっている部屋とは何なのか。どこにあるのか。そこに彼は住んでいるのか。この建物は何の為に立てられているのか。僕たちはどこに向かっているのか。外で襲ってきた黒い影は一体何者なのか。挙げ出したらキリがない。僕は少女の腕を掴み、彼女の歩みを止め、すべてを一気に解決したい気分だった。すべての謎が解明されれば、もう少しまともに歩けそうな気がしたし、僕がここで出来ることの可能性を熟考することも出来たであろう。しかし僕にはそんな時間はなかったのである。両親や警察がこの別荘に到着してしまう前に歩美を救出しなければいけないのである。部長や沙織さんが言うように、もしそれが叶わなければ歩美は本当に手の届かないところに行ってしまう。その為に僕はここにいるのだ。僕はその堰を切りそうな疑問の山を落ち着かせる為に、その中のひとつだけを取り出して彼女にぶつけてみようと思った。それは多分噴火の先送り程度にしかないのだろうけど、僕は今そうする必要のあるくらい限界を迎えていたのである。

「僕たちは今どこに向かっているの？」

僕はその疑問の山から選出に選出を重ね、一番大きそうな疑問をぶつけてみることにした。少なくともそれが分かれば、今よりも少しは視界が広がるような気がしたからだ。

「あの子と同じ部屋に向かっているのよ」

と少女は言った。

「その部屋には僕みたいな部外者でも入れるの？」

僕は彼女とのコミュニケーションが途切れないう慎重に言葉を選びながらそう言った。

「大丈夫よ。お兄ちゃんは特別なもの。でもちゃんと手続きをしないといけないけどね」

「手続き？」

僕はそう言ってから、しまったという風に口を手で塞いだ。しかしそれはもう遅かったのである。再び少女は口を閉ざしてしまった。おうむ返しのような質問に価値はないとでも言うように彼女はすたすたと歩いている。その前を歩いている少年も僕らの存在には全く気付いている様子がなく、黒い玉を大事そうに抱え、その部屋とやらを目指して黙々と歩いている。僕も仕方なく彼女らに従って黙って歩くことにした。それは何とも奇妙な静けさだった。僕の中ではいろんな疑問が浮かび上がってそこら中をざわつかせているのに、辺りは妙にしんとしているのである。それは彼女が答えるに値しない疑問たちだけが、僕に向かって不平を言って騒いでいるようで、全く落ち着かない。しかも僕はその疑問たちを払いのけるのに精一杯で歩くことにさえうまく集中

出来ないのである。

僕がそんな風に、うなるような顔をして歩いていると、前方から少女が「部屋が見えたわよ」と言って前に行く少年のさらに前方を指差した。

彼女がそう言うのとほぼ同時に、少年が歩みを止める。そして壁と直面するかたちで身体の向きを変えた。僕が見たところそこに扉なんて見当たらない。少年は黒い玉を胸に抱きかかえたまま動かない。僕らとその少年との距離がどんどん縮まっていく。僕は何度も辺りを確認したが、やはりそこに扉というものはなく、一定の秩序を保ったままの壁がずっと続いていた。そこに何かか乱れるといった気配は毛頭なかった。

あと十歩ぐらいだろうか、その少年の横顔が明らかになり始めたちょうどその時、壁の一部が自動ドアのようにして勢いよく開いた。少年は開いたその空間の中へと入っていく。そして壁は空いた空間を塞ぐようにして元の通りに戻った。それは本当に一瞬の出来事だった。音らしい音もしなかったし、空気の変動もなかった。急に壁が開いて、少年がその中に入り壁が閉じる。自動ドアのように、安全性を考慮して作られた扉ではなく、それはひとつの障害物のような、危険性を伴った扉の閉まり方だった。もしタイミングを見損なってしまったら、身体ごと引き裂かれそうな勢いがあった。僕はその一瞬の出来事を、一瞬の出来事としか捉えることが出来なかった。

その証拠に、僕の口から「あっ」という声が漏れたのは、扉が閉じて少し経ってからだった。僕はその扉の前に近寄ってみる。そこには真っ白な壁があり、扉と壁を見分ける境目のようなものはなかった。彼女たちは一体どこでこのただ真っ白な壁と扉を見分けているのだろうか。何も知らない来訪者に対しての気遣いが全く感じられない。現実の世界では扉は扉という存在感を示し、胸にプレートを掲げ自分の存在価値までも示してくれている。だから僕らは迷わずに目的地に辿り着ける。しかしここではプレートどころか、扉さえも見分けられない。扉に対する概念さえも簡単に覆される。僕は壁と向き合ったまましばらく動けなかった。そこにあるはずの扉を見つけられなかったからではない。僕の頭が急に真っ白になったからだった。脳は重たくずっしりとそこにあるだけで、何も反応しない。機能を促すことさえ出来なかった。僕の目の前には白い壁があり、僕はその壁を見ている。その見ているという意識もどこかあやふやな感じがして、とにかく僕はその場で立ち尽くしていた。

「お兄ちゃん、その扉は開かないよ」

少女はそう言って、その先の壁の前に立って僕を見ている。

「私たちはこっちの扉から」

そう言うと少女の目の前の壁が勢いよく開いた。

「お兄ちゃん早く」

少女はそう言いながらその壁に現れた空間に足を踏み入れる。僕は何とか身体を動かそうと、意識を呼び戻すことに集中した。僕の脳はオーバーヒートでも起こしたんじゃないかと、僕は僕に言い聞かせる。何でもいからその状況に原因を与えないことには動けないような気がしたからだ。原因と結果はいつも固く手を握りしめている。身体が動かないのが結果であるように、そこには必ず原因が存在している。僕は方程式を解き明かすようにして脳に言い聞かせた。そうし

て僕は身体の自由を取り戻すと、急いで少女が入った壁の空間に身を投げ入れた。

僕がその部屋に入ると、そこは六畳ぐらいの部屋だったのだが、後ろの壁はすぐにその空間を塞いでしまった。僕は少しホッとして辺りを見渡す。そこにはラブホテルの受付口のような小さな窓口と大きな扉がある以外は、外の通路とほぼ同じ作りになっていた。その小さな窓口のガラス戸は開いていて、そこから少女が向こう側にいる人に何か話しかけている。

「いつもは入れてくれるじゃない！」

少女は窓口に向かって叫んでいる。

「時間がないのよ」

どうやら話しが折り合わないようだ。

少女が僕の存在にやっと気付いたらしく、

「この人は本当に融通が利かないんだから」と今度は僕にその不平をぶつけてきた。

「どうしたの？」

「あのね、ここの扉を開けるのは私には無理なんだって。いつもは簡単に開けてくれるのに、今日に限っては駄目らしいの」

彼女はそう言って僕の手を掴むと窓口まで引っ張っていった。

「連れてきたわよ。これで文句ないでしょ」

そう言うと彼女は一歩下がってしまった。僕はその窓口を覗いてみる。

中に人がいるのは確認出来るが、窓口が小さい為、中の人の顔までは確認出来ない。すると窓口の人が、

「塚原高志様ですね。認証しますのでここに手をかざして下さい」

と言って、どこかで見たことのあるA四サイズの黒光りした石を差し出してきた。出窓の向こうにいる受付の人は、そこに僕が手を置くのを待つかのように、それっきり黙ってしまった。

僕は一度少女の方へ振り向いた。少女はそれを見ると大きくうなずいた。それしか方法はないのと言っているようだった。僕は仕方なくその窓口のほうに向き直り、手を前に差し出す。

そこには先程壁にあった黒曜石のセンサーと全く同じものが置かれていた。そして僕はその時少女が言ったことを思い出す。ここの扉もまた、歩美の心に通じているのだ。僕はとても不安になった。さっきはたまたま昔を思い出ただけで、今回もそううまくいくとは限らないのだ。僕は本当の意味で鍵を探さなくてはならなかったのだ。僕の心の中にある鍵を。

黒曜石にゆっくりと手を乗せる。手のひらにひんやりとした感触が伝わってきた。僕は目を閉じてゆっくりと息を吐いた。僕の中にあるだろう歩美の心に通じる何かを探さなくてはならないのだ。その漠然としたものがさらに僕を不安にさせる。見つけられなければこの先には行けない。つまり歩美を救い出すことが出来ないのだ。僕は意識を集中させようとするが、なかなか上手くいかない。もう一度息を大きく吸い込み、ゆっくりと吐き出す。歩美のことを思うだけでいい。これにやり方というものはないのだ。自分にしっかり言い聞かせる。そして僕は先程同様、水中の中に意識を沈めるようにして手を伸ばしていく。いくつもの波紋が水面に広がり、僕はその微睡みの中へと沈んでいった。

目を開けるとそこには一軒の住宅が立っていた。一見、どこにでもありそうな二階建ての住宅なのだが、鋭く突き出した屋根とアーチを描いている窓、そしてパームクーヘンのような色合いをしたその住宅は、洋館の香りを漂わせていた。僕はこの家を知っている。歩美の家だ。僕は今歩美の家の前に立っている。朝日が僕の顔を強く照らしている。どうして朝日と夕日の光りの照らし方は違うんだろう、そう歩美が言っていたのを僕は思い出していた。僕はその答えを探そうと朝日に照らされた住宅街や空を見ていた気がする。僕は学校の登校時間ぎりぎりまで歩美の家の前にいた。病院を退院してから一ヶ月を過ぎても歩美は学校に姿を現さなかった。僕はやがて心配になり毎朝登校前に、歩美の家に寄るのが習慣になっていた。僕は彼女に話しかけるわけでもなく、ただそこに立っていた。二階の歩美の部屋が見えるこの場所に。歩美に一日でも早く学校に来て欲しかったが、彼女になんて声を掛けたらいいかわからなかったし、また声を掛けたとしてもそれが扇情的になりすぎて、返って歩美を混乱させてしまうのではないかと思い、僕はここに立っていることしか出来なかった。もちろん毎日そこに立っただけではない。僕の中でいろいろな葛藤が繰り返されていたし、何度も玄関のチャイムを鳴らそうとした。しかしいざ玄関の前に立つと何かが僕を思い止まらせ、また僕は歩美の部屋が見渡せる元の場所に戻っていく。その結果の話である。

僕はその間、本当にいろいろなことを考えていた。歩美とお兄さんの関係についてや歩美の両親のことについて。そして歩美の立場になることなんて出来なかったのだが、なんとかそこに近づけるよう、彼女の気持ちになって考えた。その結果、僕は毎朝暗い気持ちになったのだが、僕が感じているものは仮想のものであり、歩美はそれを実際に身を以て体験しているのである。そこには雲泥の差があると自分にいつも言い聞かせていた。僕の妄想癖はこの頃から始まっていたのかもしれない。

そして僕はこの日学校を遅刻することになってしまうのだが、その道のりがこれまでにないほど希望で満ち溢れていたのを覚えている。いつものように登校時間ぎりぎりまでそこに立っていた僕は、時間を確認してからその場を後にしようと歩き出した。表面的にはいつも通りの行動であったが、内面的にはいつもより少し暗い気持ちだった気がする。彼女は僕がここにいることを知っているのだろうか。僕はその時心配になっていたからである。僕は彼女に気付いて欲しいからここにいるのであったのだが、いつしかそれは邪念という認識に変わり、彼女が気付こうが気付くまいがそんなことはどうでも良い、僕は自分で決めてここにいるのだと、僕は自分が傷つくのが怖くなり、都合の良い大義名分を自分に与えていた。しかしやはりそれは間違いで、僕は僕の存在を彼女に気付かせる為にここにいるわけであって、自分の為に行っているわけではないと気付く。そんな堂々巡りみたいなことを延々と繰り返していたのを覚えている。

僕がその場を離れようとする、歩美の家の玄関の開く音が聞こえた。僕が振り向くと、玄関の前に歩美が立っていた。僕は一瞬息が止まりそうになった。二ヶ月近く音信不通だった彼女は、以前よりもやせ細り、その表情には暗い影を落としていた。僕は歩美に近寄ろうと踵を返し、ゆっくりと歩美のもとへと近づいていく。彼女は僕の存在に気付いてくれていたのだ。普通であれば大喜びして駆け寄るところなのだが、その時の僕は何故かひどく困惑していた。彼女が家から出て来たのはいいが、僕は何て声を掛けたらいいのだろう、突然の出来事に対処出来なかったの

である。

僕は戸惑うようにして歩美に近寄る。頭の中は真っ白だった。いざ本人を目の前にしてみると、それまで周到に準備していたものなど簡単に吹き飛んでしまった。もし歩美が僕に気付いて家から出てきたら何て声を掛けてあげよう。僕がそんなことを考えていないわけがない。僕が歩美の家に来るようになってから、そのシュミレーションは綿密に繰り返されてきた。暖かい気持ちで迎えてあげようと、雨の日も風が強い日も、僕は平静を保ってその場に佇んでいた。そういったものたちが嵐に連れ去られるようにして吹っ飛んでしまったのである。僕は歩美の目の前に立ち、彼女の目を見た。彼女の目はからからに乾いた鶉の卵のようになっていて、涙の痕はとうの昔に枯れ果ててしまったかのように、大地の裂け目のようになった皺が目尻に浮かんでいた。僕は彼女の痛みや哀しみを想像出来る限り知ろうとしていたが、すでに哀しみというものはすべて流れ尽くしてしまい、僕の知る哀しみの跡はそこにはなかった。家族を亡くしたことの無い僕に分かるのはそれだけで、それから彼女がどう過ごしていたかなんてことは、僕の想像を限りなく超えていた。それでも僕は彼女から目を逸らさなかった。正確に言うと、目を逸らせなかったのである。彼女のからからに乾いた目には微かな光りが宿っていて、僕はそこに何かしらの希望を見出していたのかもしれない。もしかしたら、希望を見出していたのは彼女だったのかもしれない。そして僕は彼女を見つめたまま、自然と口が動いていた。言葉が口から漏れてきたという感じがした。

「学校に行こう、みんなが待ってる」

カチリ

扉が開く音がしたと同時に、僕は目を開けた。さっきまで眼前に立ちはだかっていたぶ厚い扉は、裏側の細部が見渡せるほど開けっ放しになっていて、数分前まで保たれていた威厳はもうそこにはなかった。その扉は誰かに開けられることを望んでいたのか、それとも拒んでいたのか、無防備に開かれたその鉄の固まりの口は堅く閉ざされたままだったが、少なくともここに二人、その扉が開いたことで喜んでいる者がいた。

「お兄ちゃん、やったね」

少女は偉業を成し遂げた人を褒め讃えるように、大げさに喜んでいる。

僕はというと、やはり何か漠然としなかった。確かにその扉を開けられたこと自体は嬉しかったのだが、先程同様何か達成感みたいなものがまるでなかったからである。僕は実存する鍵でその扉を開けたのでもなければ、暗証番号のようなパスワードを解き明かし、壁に設置されたセキュリティシステムに数字を打ち込んだわけでもない。漠然とした意識の中で過去の記憶を辿っただけに過ぎないのだ。しかも辿っていた歩美との過去の記憶も、確かに印象的ではあったが、どちらかというとなんなことあったなという程度である。それよりも彼女がその後学校に来るようになって、しばらくみんなと距離を置くようにしていたが、何日目だったのだろうか、いや何ヶ月目かもしれない、初めて彼女がその事件後に笑ったことのほうが僕にとっては印象的だったし、誰よりも喜んでいたのを覚えている。

「お兄ちゃん、行くよ」

少女が扉の中へ入っていく。

「ふう」

僕は大きく息を吐き出し、少女の後に続くようにしてその扉の向こう側に足を踏み入れた。

「作業員各位にお知らせします。本日の作業は終了しました。繰り返しお知らせします。本日の作業は……」

僕が扉の向こう側にある部屋に入ると、どこからかそういったアナウンスが聞こえてきた。

「尚、明日の作業開始予定時刻は今のところ決まっておられません。作業員各位はそれぞれの部屋で待機して下さい。繰り返します。明日の作業予定時刻は……」

「これは何？」

「これってこのアナウンスのこと？」

先に入っていた少女は、その部屋の隅に置かれた長いベンチに腰掛けていた。

「これは何をアナウンスしてるの？」

「今日の仕事が終わったことを知らせてるのよ」

「仕事？」

僕がそう言うと、その部屋の別の扉から何人かの少年が姿を現し、僕が通り抜けた扉から出て行ってしまった。

「ほら、みんな仕事が終わったから部屋に帰って行っちゃった」

少女はその少年たちの後ろ姿を眺めながらそう言った。

「今の子たちは？」

「みんな作業員よ」

「ふう」

僕はとりあえず少女が座っているベンチに歩み寄って、大きく息を吐き出しながら腰を下ろした。

「どうしてみんな同じ服を着て、同じ顔をしてるの？」

僕は今日の前を通り過ぎていった少年たちを一通り見ていたが、確かにみんな同じ顔をしていた。

「ここに個性というものは必要ないからよ」

少女はそう言って、ベンチから足を放り出すようにして、地面に辿り着かない両足をぶらぶらと遊ばせていた。

「ここでみんなどういう仕事をしているの？」

「みんな掃除をしているのよ」

少女はそんなことも知らないの？という目つきで僕を見つめている。

「掃除」

「そう掃除」

「何を掃除しているんだろう」

「それはお兄ちゃんがよく知っているでしょ？」

少女はそう言って笑っている。

僕が知っている？少女は何を根拠にそんなことを言っているのだろう。僕が隣で不思議そうな顔をしているのを見て、少女はさらに可笑しそうに笑っている。僕は少女が何を意図してそんなことを言っているのか、頭を少し整理する為に天井を見上げた。天井には半透明の亚克力板に守られた蛍光灯が力なく部屋を照らしている。部屋に置いてあるベンチも壁もすべてが白く染められていて、白で統一されたその世界はすべてをぼんやりとさせていた。そしてその世界を見つめれば見つめるほど、僕の浮かべたもの達もすべてぼんやりとしたものになってしまった。

「お姉ちゃんのこと好き？」

意識までもぼんやりとし始めた僕は、その少女の一言でふと我に返った。

「お姉ちゃんのこと愛してる？」

僕は少し戸惑いながらも「うん」と答えた。

「じゃあ、お兄ちゃんにこれを見せてあげる」

少女がそう言うと、突然部屋の電気が消えた。

目の前の白い壁に光が灯されている。白い壁がスクリーンとなり、僕の後ろから放たれた光は、暗闇を長方形の形にくり抜いてそこに投影されている。いつか深夜のテレビショッピングで「ご自宅に作れる映画館」と紹介されていたプロジェクターを思い出した。あの時は、部屋にこんなのがあったらいいなと思っていたが、今まさにその小さな映画館が目の前に出来上がっていた。

僕も少女もその光を黙って見つめている。そこに何が流れるかを知っているのは少女だけで、僕は何も知らないし、見当もつかない。そしてそれは本当に唐突なことだったから、僕はそこに期待を投げかけることも出来なければ、そこから何かを見出すことも出来ない。不安と緊張感があったのだが、ここに来るまでずっとそうだったから何か感覚が麻痺しているように、いろいろなものがまたぼんやりとしてきた。僕はここで何をしているのだろう。僕がそう思い始めた時、突然映像が流れ始めた。

そこに映っているのは歩美の部屋だった。僕は一度歩美の部屋に入ったことがあるからそれがわかったのだが、窓の外から漏れている外灯の光があまりにも弱すぎて、そこが歩美の部屋とわかるまで少し時間がかかった。部屋は夜の帳に隠れるようにして真っ暗だった。その映像のカメラは先程からずっと壁に向けられていて、未だ動く気配はない。窓は閉められているにもかかわらず、外から大粒の雨がアスファルトを乱暴に叩き付ける音が聞こえてくる。その音以外は何も聞こえてこない。雨の音が他の音を打ち消しているのか、歩美の家がただ静まり返っているのか、僕には判断が付けられないでいた。すると映像が鋭く左に動き、壁に立てかけられた時計を確認すると、また元の部屋の壁が見える位置に戻った。僕はそれがあまりにも一瞬の出来事過ぎて、何時だったのかを確認出来なかった。時計の短針は右に針を向けていた気がするが、それが確かであるかわからない。これを映しているカメラマンは今の時間を僕らに教える気は全くないようであった。ただ自分が今の時間を確認する為にカメラを向けた、そんな自己満足で完結し

た世界がそこに溢れていた。これはいつの映像なのだろうか。部屋の壁には高校の制服が掛けられているが、それ以外の情報というものがなかった。雨はさらに強さを増し、アスファルトでは満足出来ずその怒りの矛先は部屋の窓にまで向けられていた。部屋は黒く淀んでいて、どこか緊縛した空気感をその映像はリアルに映している。僕はその映像が映すりアリティに、ただならぬ不安を抱き始めていることに気がついた。もしかしたらこれは歩美の目線じゃないのか。僕がそれに気がつくと同時に、雷が落ちたような激しい衝撃音が部屋に響き、それに合わせるようにしてカメラの解像度が上がった。僕が突然の出来事に驚いて目を見開いただけのことだったのかも知れないが、確実にその映像は最初よりも鮮明に部屋を映していた。再び沈黙が訪れる。幾分外の雨音が遠ざかったような気がする。

映像が上下に揺れている。雨の音に混ざって犬の遠吠えのような声も聞こえてくる。しかしそれは鮮明な映像とは反対に、ひどくぼやけた音になっていて、意識の外から聞こえてくるようにも感じた。画面はまだ揺れている。そして再び時計を確認して、元の位置に戻った。今度ははっきりとそれを僕は確認することが出来た。時計の針は二時を指していた。そんな深夜に歩美の部屋で一体何が起きているのだろうか。そしてこの映像は僕に何を伝えようとしているのだろうか。その映像には不安や恐怖が克明に刻まれていた。僕はその映像の動きと同じようにして、心拍数が上がってきているのがわかった。集音マイクはどんどん内側に入っていきようにして、外の音を一段と鈍くさせていく。雨の音や何かの咆哮は、夢の中に干渉するようにして外からその身を刷り込ませてくる。

「お兄ちゃん」

歩美の声だ。その声は一人で立っているのがやっとなというように、今にも崩れてしまいそうな声だったが、内側にセットされた集音マイクがその声を確実に捉えていた。

すると画面が突然動き出した。

歩美が立ち上がったのだ。歩美は立ち上がるとすぐに部屋の扉に向かい、勢い良くその扉を開けた。

歩美の呼吸が乱れているのがわかる。低酸素の部屋で必死に酸素を集めているようだった。歩美は間髪入れずに廊下を通り抜け、隣の部屋の扉の前に辿り着くと同時に、

「そんなのお兄ちゃんじゃない！」

という歩美の悲痛な叫び声が響き渡った。完全に音が割れている。映像は止まったまましばらく動かない。荒くなった歩美の呼吸は幾分静まったように思える。歩美を震え上がらせていたのは、お兄さんだったのだ。その事実をカメラは切実に伝えている。しかし僕はそのストーリー展開にどうしてもピンと来なかった。僕が歩美から聞いていたお兄さんのイメージとあまりにもかけ離れていたからだ。

歩美は僕と話す時によくお兄さんの話しをしていた。そこには揺るぎない信頼感があり、美しい兄妹愛があった。僕が歩美の話しをもとに作り上げたお兄さん像は、気がつくとき非の打ち所の無い完璧な像になっていた。僕はお兄さんに一度も会ったことが無いのに、歩美があまりにもお兄さんの話しをするものだから、その像はきっと本人よりも完璧な姿をしていたに違いない。両腕を復元したミロのヴィーナスのように、創造力を枯渇させるような完璧さを僕は映し出して

いた。

映像は再び歩美の部屋に戻り、暗い夜の静けさを捉えている。

お兄さんの身に何があったのか。僕にはわからない。完璧という名の壁の向こう側には何も存在しないのだ。歩美はどうして僕に相談をしてくれなかったのだろう。僕はその映像を見ながら少し寂しい気持ちになった。

映像はしばらく部屋を映したのち、ぷつんと途切れるようにして、長方形の黒い影だけを壁に映していた。

その映像から僕が読み取れたのは、歩美のお兄さんがお兄さんじゃなくなり、歩美がそれによって苦しんでいるということだけだった。お兄さんの自殺について、当時僕は僕なりに考えては見たものの、障害のない海のだ真ん中で深海に沈んでいる船を思うようなものだった。自然的な災害に見舞われたのか、人為的に秩序が破壊されたのか、生存者がいなければ真実は海中で眠る。

「まだ続きがあるよ」

少女がそう言うと映像が再び動き出した。

翌日の朝の映像だろうか、僕はそれをただ黙って見ていた。歩美が目を覚まし、一階のリビングに下り、しばらくしておばさんが帰ってくる。そしておばさんが二階に上がり、悲鳴が上がる。歩美はそれを聞いて急いで二階に上がる。それは僕の浅はかな思考など簡単に吹っ飛んでしまうほどの映像だった。歩美がお兄さんの部屋の前で倒れるまで、僕はまるでその場にいるみたいな緊張感に包まれていた。

「お姉ちゃんは誰にも言えなかったの」

少女はその映像が終わると話し始めた。

「家族にも友達にも誰にも。お兄ちゃんにさえ話せなかった。何度も言おうとしてたのよ。でも結局は蓋をしてしまうの」

「蓋？」

「うん。お兄さんを殺してしまったという事実には蓋をしたの。何度も何度も悩んだ末にね。そうやってお姉ちゃんは秩序を保とうとしてきたの。でも完璧な蓋なんて無い。どんなに頑丈に蓋をしたとしても、それは結局は蓋なのよ。再び開ける為に存在している。扉と同じね」

僕はこの部屋の扉を何となく見つめていた。

「秩序が乱れるとどうなるの？」僕は少女に聞いた。

「お兄ちゃんも見たでしょ。この洞穴に入る前に襲ってきた黒い影。みんなここの掃除夫だったのよ、もともとは」

「掃除夫？」

「お兄ちゃんは本当に何も知らないのね」

少女は少し苛立っているように感じた。

「私も、さっきこの部屋から出ていった子達も、みんな掃除夫なのよ」

少女は続けて話す。

「さっきの廊下にいた男の子を覚えてる？」

僕はうなずいた。

「あの子が持っていた黒い玉。お姉ちゃんの秩序が乱れると、あれに飲み込まれてしまうのよ。私たちはそうなる前にそれらを掃除しなくてはならない」

「ちょっと待って。もう少しわかりやすく説明してくれないかな」

「わかりづらい？」

少女は首をかしげて僕を見た。

「うん。少なくとも僕にはわかりづらい」

「そうだ、まず僕が知っていることから話すよ。僕は歩美を助ける為に、今歩美の無意識の世界に来ている。ここにいる歩美を外の世界に連れて帰らなければならない。そして他人の無意識に干渉すると、どういう目に合うかもわかってる。一回経験したからね。自分の家に部外者が来れば、当然追い出そうとするのと同じように。でも今回僕は部外者じゃない。と僕は思っているし、実際にキミちゃんと出会えた。キミちゃんと出会えたから、今僕はここにいる。それはとても感謝しているし、僕とキミちゃんの目的も一緒だと僕は思っている。だけど、あの黒い影も空も玉も、あの少年達も、その掃除夫という仕事のこと僕にはわからない。この世界がどう成り立っているか全くわからないんだ」

僕は立て続けにそう話すと、少しすっきりしたようにベンチに寄りかかった。

「じゃあ私からもいい？」

少女はそう言うと、ベンチから立ち上がった。

「この世界はお兄ちゃんが作ったものなのよ」

「僕が？」

「正確に言うと、お兄ちゃんから見たお姉ちゃんの無意識。つまりここの創造主はお兄ちゃんなの」

「僕が想像している歩美の無意識ってこと？」

「そういうこと。お兄ちゃんの意識がこの世界に反映して、あの架け橋も、黒い影も、掃除夫も、みんなお兄ちゃんによって作られたものなのよ」

僕はまだうまくその話しを飲み込めなかった。

「本当に覚えがない？」

「覚えが無いこともない」

僕は曖昧に答えた。覚えはあるのだ。掃除夫は僕が別荘に来るまでの暇つぶしに考えたものだ。架け橋もなんとなくわかる。僕は歩美を現実に戻したというある種の達成感があり、少し烏滸がましいけど僕は歩美の架け橋になっていると感じていたのだ。そしてあの黒い影も、何となく歩美の中に潜んでいる暗い影を僕が映し出したのだろう。確かにそう言われればそうだと思うのだが、僕はそれと現在を上手く結びつけることが出来ない。だからとても曖昧な表現しか出来なかった。

「でも私にはこの世界のあり方何てどうでもいいわ。私には他にやるべきことがあって、そして知っているの。私にこの世界を変えることは出来ないことを」

「僕より歩美のことを知っているのに？」

「だからよ。お姉ちゃんのことを知れば知るほど、私は無力さを噛み締める。私に出来ることはお姉ちゃんを苦しみから一時だけ解放させること。私の役目なんてそれだけよ。それがどのくらい辛いかわかる？お姉ちゃんが苦しまないで私の存在意義は無くなるのよ」

少女は何か押し潰されそうな、そんな表情をしていた。僕は何とか彼女を励まそうとしたが、その励ましの言葉はさらに彼女を苦しめそうな気がしたので、黙っていることにした。

「でもお姉ちゃんがどうして苦しんでいるか、何と戦おうとしているかがわかったでしょ」
そう言うと少女は先程少年たちが出てきたドアの前まで歩き出した。

「この先にお姉ちゃんがいるわ。準備はいい？」

僕はまだ心の整理がついていなかった。心の整理というよりは、何かがまだうまく結びついていない感じだった。歩美の今までの言動と、その映像から読み取れる歩美の心情がうまくはまらない。その映像が真実だと確信付ける証拠がない。そういった感じだった。でも少なくともこれを成立させるには、ある程度の時間が必要だった。一週間だろうか、一年だろうか、どのくらいの時間が必要かはわからない。もしかしたら現実にいる歩美を見て、すべてが明らかになるかもしれない。とにかく今は早く歩美を救わなくては。僕はとりあえずいろいろなことをバッグに詰めるようにしてベンチから腰を上げた。

「行こうか」

僕はこの部屋に漂う無力感のような空気を思い切り吸って吐き出し、少女のもとへ向かった。

そこには愛を知らない老人が座っていた。

僕と少女が扉を開けると、そこはひとつの部屋になっており、木製の椅子に腰を掛けた老人が僕らを迎えていた。彼は手にプラカードを抱えていた。I don't know love.そこにはそう書かれていた。

「彼はどうしてここにいるの？」

僕は少女に聞いた。

「あの人がどうしてここにいるのか私は知らない。私が掃除夫としてやってきた時にはもうこの部屋にいたし、それからもずっとここにいるの」

僕はその老人に近づいてみた。僕の様子に気付いていないのだろうか、その老人は僕に視線を移すこと無く、一点を見つめている。眼球は白く濁っていて、視界が明瞭かさえもわからなかった。

僕はその老人が見つめている場所、ちょうど僕の背後に当たる、その場所を振り返ってみた。そこには当然僕らが入ってきた部屋の入口があるはずなのだが、僕が振り向いた時には、その扉も壁もなく、老人が座っている椅子と同じような木製で出来た階段が現れていた。

僕は瞬きを繰り返して、それが幻でないことを確かめた。

「どうしてここに階段が・・・」

そこには僕がずっと探していた階段があったのだ。

僕が初めて自分の無意識に入った時に見つけた、あのログハウスの中にあった階段が、あの時と同じようにしてそこに存在している。木の疲れ具合も、流線型の手すりのデザインも全く同

じだった。僕はこの階段のことは熟知しているから、それがその階段だと一目でわかった。

「早く行きなさい」

愛を知らない老人がそう呟いたような気がした。僕は再び老人のほうに振り返った。先程よりも幾分かやわらかな表情を浮かべているように思えた。僕は小さくうなずいて、老人のもとを離れ、少女の手を取りその階段に足を掛けた。

階段はどこまでも続いていく。どこまで続いているのか、終わりが来るまでそれはわからない。確かなことは、この階段には終わりがあり、僕らが目指している場所へと連れて行ってくれるということである。夢で見るとような終わりのない階段でもなければ、赤色灯で危険を知らせる装置も無い。そもそもこの階段に危険は存在しない。僕が足を踏み外したり転倒することはないのだ。なぜなら僕はこの階段を熟知しているからである。例えどんな暗闇が襲ってきたとしても、現に今そうなのだが、僕が階段を転げ落ちることはないのだ。それは少女にも同じことが言える気がした。先程から少女と手を繋いでいるが、僕に頼るような動きは感じられない。僕の手にその小さな手を添えているだけという感じで、その手からは恐怖だったり不安のような気配は一切感じなかった。

階段はなおも続いていく。今の僕らに必要なだけの深さがあり長さがある。その階段はある一点と他の一点を結ぶ為だけに存在していて、そこに向けて一直線に伸びている。利便性と最低限の安全性を追求したような都会の地下に続く階段とは違い、計画性を伴った複雑さは一切ない。とてもシンプルで、だからこそ迷わず進める。そして僕らの意思も不思議とこの階段のようにシンプルになっていく。僕らを惑わすものは何一つない。それこそがこの階段の存在意義なのではないかと、僕も少女も一步一步踏みしめて階段を下っていく。

その中で僕は先程の老人のことを思い出していた。あの愛を知らない老人のことが、階段を下りている今も頭から離れなかったのだ。

僕が見た老人は、少なくとも、愛を知っている老人であった。あの老人が大事そうに抱えているプラカードにそう書かれていただけで、彼がその主であるとは書かれていない。僕が見た老人は、僕に際立った洞察眼があるとは思えないが、愛を知らない老人には見えなかった。

「あの老人は本当に愛を知らないのかな」

僕は隣にいる少女に聞いた。

「僕にはそうは見えなかった」

「矛盾してるってこと？」

「そう、それだ」

さっきから頭の中がモヤモヤしていたのは、その矛盾が原因だと僕は気付いた。

「愛を知らない人があんなことを言うだろうか。愛を知っているからこそ言えるんじゃないかな」

「そうとも言えないわよ。愛という言葉を知っていても、その本質を知らない人だっているわ」

「そうかな」

「そうよ。じゃあお兄ちゃんはクリケットって知ってる？」

「聞いたことはある」

「それと一緒によ。聞いたことはあるけど、それが何なのかうまくイメージ出来ない。愛の無い環境で育った人は、当然愛を知らない」

「そういう人はどこで愛を知るのだろう」

「出会うのよ。一生に一度はみんな愛に出会ってる」

「でも愛を知らない人はわからないんじゃないかな。それが愛だって」

「愛を知っている人だってわからないわよ。愛はとてもぼやけているものなもの」

「ぼやけている」

「そう。霧の立ちこめた草原の遠くにそびえ立つ山のように。一面雲で覆われた空に隠れている太陽のように」

「それじゃ見えないじゃないか」

「あら、お兄ちゃんには愛が見えるの？」

「…見えない、かな」

「うん。だから感じるのよ。そこに愛があるのかを」

「なんだか難しいね」

「難しいと思えば難しいものなのかもね。決して簡単ではない。だから私はその為に言葉があるような気がするの」

「言葉」

「うん。愛のある言葉は、その愛の輪郭を作り出す」

少女は続けて言う。

「でも言葉だけじゃすべてを伝えることは出来ない。だから私たちは想像するのよ。そこに秘められた愛を。そして信じるの。それが強さとなり大きな力になる」

「僕にはよくわからないや」

「何が？」

「愛するということ。愛そのものについて」

「あら、お兄ちゃんをよくわかっているじゃない。だってお姉ちゃんがいるでしょ」

「確かに僕には歩美がいる。僕は歩美のことを愛していると思う。でもよくわからないんだ。何が正しいのかが」

「ふうん」

少女の低くたれ込めた声が暗闇に染み渡る。

「でもね、私もあのおじいちゃんは愛を知っていると思うわ」

「本当に？」

「うん。だっていつも私たちを見守っていてくれるもの。それにね、私もお兄ちゃんと同じく、あのおじいちゃんを見る度にいろいろ考えたし悩まされたわ。愛とは何なのか、ということにね。それでね、きっとあのおじいちゃんは、『目先のものに騙されるな。自分の目を、心を信じる』っていうことを私たちに伝えたいんじゃないかって思うようになったの」

「自分の目を、心を信じるか」

「そうしたらなんかとても気が楽になったの。あのおじいちゃんがそこにいなかったらそんなこ

とを思わなかったし、悩まされもしなかった。何を聞いても答えてくれないしね。大事なのは、あのおじいちゃんが何を言っているかではなくて、自分が何を信じるかということ」
暗闇の中で少女の声が弾んでいる。

「そこにあるものすべてが正しいとは限らない。疑うことから真実は見出されるの」
少女の声はこの暗闇全体から響き渡るようになって聞こえてきた。あるいは僕の耳元から。気がつく握っていたはずの少女の手の感触がなくなっていた。僕は暗闇の中を何度も見渡したが少女の気配を感じることは出来なかった。彼女はこんなところに僕を残して一体どこに行ってしまったのだろうか。すると遠くの方で僕を呼ぶ声が聞こえてきた。

「お兄ちゃん」
少女の声だ。だいぶ下の方からみたいだ。

「もうすぐ着くよー」
少女の声を聞いて僕は少しホッとした。暗闇の中で一人取り残されることには慣れているが、最初から一人なのと後で一人になるのとはだいぶ違いがあるように思えた。覚悟の違いなのだろうが、取り残されたほうの気持ちを少しは考えて欲しい。

「早くー」
少女の急かす声が響き渡る。先に行くならそう言ってくれればいいのに。僕はため息をひとつ吐き出してから階段を駆け下りた。もしかしたら歩美も今の僕のように暗闇で一人取り残されていたのではないか。そんな考えが急に僕の頭の中を巡り始めた。頼っている人がいなくなる喪失感、進むべき道を灯していた明かりを消していく。すぐそこにあった華やかな街道は、月明かりさえ届かない暗闇で覆われていく。そこに取り残された歩美は何を思っていたのだろうか。そして僕はその暗闇の街道を再び照らす明かりになれているのだろうか。僕は自分が何だか頼りない街灯になったような気分だった。僕の明かりはどれだけ先の道を照らし出せるのだろうか。もしかしたら僕の明かりが弱すぎるため、歩美はずっと立ち止まったままなのではないだろうか。その見えない街道を目を凝らして見つめている歩美。それが容易に想像出来る。僕はもっと強い明かりで街道を照らしてあげたいと思うが、それがうまく想像出来ない。もしかすると、歩美自らが手に明かりの点いたランプを持ち、僕の明かりが届かない場所へともう歩き始めているのかもしれない。今まさに歩美が苦しんでいるのは、ランプを持ち歩くその暗い街道で後ろから来た車に轢かれたせいなのかもしれない。そういうことだって十分あり得る。だから僕は、その場所まで、歩美が倒れている場所まで明かりが届くように僕が出来ることを精一杯やろうとしているのだろう。頼りない街灯は決して太陽になることは出来ない。でもすべてを照らす太陽のようになりたいと願うことは出来る。鳥のように大空を自由に飛び回りたいと願った人類が、今その大空を自由に飛び回っているように。

気がつく薄明かりに照らされた少女の姿と、階段の終わりが見えてきた。どうやら僕が歩いているこの街道は、少女によって今照らし出されているのだろう。それがどうあれ、僕はようやくここまで辿り着くことが出来たと、最後の階段を勢いよく飛び降り、大きく息を吐いた。

飛行場にある格納庫ぐらいの大きさだろうか。階段を降りると僕の目に飛び込んできたのは巨大な地下空間だった。大型の飛行機が三台ぐらい入りそうなその地下空間は、天井にある水銀灯で青白く照らされ、すべてを確認するには暗すぎるが人が歩き回るのには支障がないという具合に光が調光されていた。地面は白いコンクリートで舗装され、天井には補強する為の巨大な鉄のプレートがいくつもの編み目を作り出していた。爆撃されてもきっと簡単には崩れなさそうな気がするぐらい、その作りは頑強そうであった。そして何より、僕をこの場に立ち止まらせているのが、中央部分にある大きな井戸のような建物だ。円形の高く黒い壁に囲まれたそれは、大きな風呂釜のようにも見え、この施設はそれを守る為にあるのだと言わんばかりに、その風呂釜からは圧倒的な存在感が放たれていた。

「お姉ちゃんはその中にいるわ」

少女は言う。あの中とはその大きな風呂釜の中だろうか。

「もうお姉ちゃん一人の力では、あそこから這い上がって来ることは出来ない。私も何度も助けようとしたけど、結局お姉ちゃんを助けることは出来なかった」

少女は自分の無力さを噛み締めるように、口を固く結び、その風呂釜を見つめている。

「あそこまで一体どうやって行くの？」

僕はその大きな円柱の最上部分を指差した。

その先端部分はもう少しで天井に届きそうなくらいの高さがある。あまりにも高い為、頂上の様子を確認することは出来ない。僕は出来ればもう階段を使いたくなかった。今やっとの思いで階段を下りたばかりで、ここからまた上るということになるのなら、一度何かで気持ちをリセットする必要性を感じていた。しかしそんな僕の願いも、

「脇に階段があるの」

という少女の一言で簡単に弾き飛ばされてしまった。これだけの設備を整えていながら、エレベーターのひとつも用意出来ないのか。僕は誰に当たるでも無く、一人その形にならない不満を辺りにぶちまけ、もうすでに歩き出していた少女の背中を追い掛けた。

その地下空間は僕が想像していたよりもずっと広く、天井はかなり高くなっていた。

近づく度に肥大しているように思えて、僕は少し奇妙な感じになったが、振り返るとその倉庫に続く道のりは軽い下り坂のようなスロープになっていることに気がついた。

僕が再び顔を前に向けると、そのスロープは終わり、巨大な風呂釜のような建物が僕の目の前にそびえていた。

「あそこの階段を上るの」

少女がそう言って指差した階段は、風呂釜の側面に巻き付くようにして続いていた。

「ずいぶん大きいね。そして高い」

僕は壁に蛇のように巻き付いた階段を見上げる。何段あるだろうか。一番上はビルの十階ぐらいの高さがありそうだ。

「お兄ちゃん、そんな所にいないで早く上らないと」

少女はもう階段を上り始めていた。僕も急ぐようにして階段を上り始める。

一段一段上る度に、鉄製の階段のキンとした甲高い音が一面に響き渡る。手すりはざらついていて、触れると手の平に赤茶色のサビが斑点のように広がった。そこに体重を預けると簡単に壊れてしまいそうなほど脆く見えた。

左手には建物の側面がある。

黒々とした壁にはぼこぼこした凹凸があり、玄武岩質の溶岩石で作られたような荒さがあるが、どんな衝撃にも耐えられそうな作りをしていた。

「ここも僕が作り出した世界なのかな」

僕は先を行く少女に届くような大きな声で言った。

「違うわ。ここはお姉ちゃんの最も深い深層世界なの。誰にも作り出すことは出来ない場所になるの」

少女も僕と同じくらい大きな声で話している。でないと、上る度に響く金属音にかき消されてしまうからである。

「じゃあ僕はよそ者ってことだね」

「そうね。お姉ちゃん以外の者はそういうことになるわ」

僕は何だか居心地の悪い気分になってきた。こんなことを聞かなければ良かったと後悔した。聞かなければ、少なくとも、こんなに心細くなることはなかったのではないか。プロ野球選手やサッカー選手がアウェイの地で戦うように、プレイすること以外の障害が重くのしかかってくる。僕はとにかく精細を欠くことだけは無いように注意しようと思った。些細なことを見落とせば歩美を救い出すことは出来ない。僕は渚さんが映ったビデオを思い出していた。

「すべてのものに耳をすませなさい」

僕は何も聞き漏らさないようにと意識を集中させる。それを邪魔するように僕らの鉄の足音は一定のリズムを保って鳴り響いている。僕は、その後渚さんは何を言っていたのかそれを思い出そうとしたが、突然天井の方から大きな低い音が唸るように鳴り響き、それと同時に辺りがぐらぐらと揺れ出し、それどころではなくなってしまった。

「何だ!？」

僕は揺れる階段から転げ落ちないように手すりを持ったが、みしみしと手すりが崩れていくのを感じ、そこから急いで手を離した。

「降ってきたのよ!」

少女も同じくバランスを保つのに必死で、何とかそう叫んだといった感じだった。

「何が降ってきたんだよ!」

左の壁にもたれかかるようにして僕も叫ぶ。

「後で説明するわ！今はとにかく一刻も早く上に上がらないと」

少女はそう言うと、激しく揺れている階段を勢い良く上り始めていた。

手すりやぐらぐらと今にも下に落ちそうな勢いだった。僕は少女に遅れを取らないよう足を踏み出すが、バランスを保つことに気を取られると足を運ぶことが上手く出来ない。結局、前と左程変わらない速度で進むのが精一杯だった。

建物の中腹に差しかかる頃には、揺れもだいぶ収まり辺りは落ち着きを取り戻しかけていたが、手すりは先程の衝撃に耐えきれず、ある部分が崩壊すると、それに引きつられるようにして中腹辺りから下の手すりはすべて下に落ちてしまった。運良く残った上層部の手すりも、もはや手すりとしての機能を完全に失ったように斜めに項垂れていた。

僕は何とか少女に追いつき、そこからは離れないように壁に寄り添うようにして頂上を目指していた。

一体さっきの衝撃は何だったのだろうか。

天井から低いなり声を上げた何かは、この建物に鈍い衝撃を与え辺りは一瞬にして地獄と化した。僕は次に備える為にその正体を知っておく必要があると思ったが、少女が後で話すということはそういうことであり、僕もそれを信じて上ることにした。もしかしたら今はまだ知らないほうがいいのかもわからない。僕よりこのことを知っている彼女がそう言うのだから、きっとそうなのだ。余計な詮索は悲劇を招く恐れがある。僕は上ることに意識を集中させれば良い。しかしその僕の意を決した一步目を嘲笑うかのように、再び鈍い衝撃が僕らに襲いかかってきた。

「お兄ちゃん危ない！」

少女がそう叫んだ時には、僕の身体は宙に浮かんでいた。

その衝撃によって僕の身体が浮かんだのなら、着地を何とか成し遂げれば良いだけの話である。しかし僕が踏ん張ろうと力を入れた足底は、いつになっても階段を捉えることはなかった。

「お兄ちゃん！」

少女の声音が僕の頭の上を無情に通り過ぎていく。そして僕は気付く。僕が階段を捉えられなかったのではなく、階段が僕を捉えることが出来なかったのだ。僕の目の前の景色が天に昇っていくようにして通り過ぎていく。僕は自分の身に何が起こったのか、まだうまく掴み切れていない。階段を捉えられなかったこの足のように、僕の意識もまた空を切っている感じだった。しかし僕の目の前の景色は刻一刻と流れていく。僕は無意識に両腕を目一杯伸ばしていた。条件反射というやつだ。気がつくまで僕の目の前で流れていた景色は止まり、僕は何かにぶらさがるような格好で突然開けた空間を見つめていた。

「お兄ちゃん大丈夫？」

少女の声音がだいぶ上の方から聞こえてくる。僕の両腕は何かを捉え、僕はそれによってこの場所に留まっている。僕は僕が掴んでいるものを確認するように頭を上にあげた。僕が掴んでいたのは階段だった。両足で捉えきれなかった階段は脆くも崩れ去り、代わりに両腕が残った階段を捉えていたのだ。僕はそれに気付くと両腕に力を入れ、身体を持ち上げた。階段はみしみしと悲鳴

を上げながらも何とか僕の身体を支えてくれていた。

上半身が上がり切ると、次に階段に片足を掛け、地面を這うトカゲのような格好で、僕は階段に倒れ込んだ。

両腕は痙攣を起こしていて、しばらくは力が入らないような感じだった。

「良かった」

少女が僕の頭の上のほうで安堵のため息を漏らしている。

「お兄ちゃん次が来る前に上り切らないと」

少女は僕の身を起こす手伝いをしようとするが、少女のか細い両腕では僕の身体を持ち上げることは出来なかった。僕はしばらくこのままでいたかったが、次が来たら本当に耐え切れなれないと思い、全身に残っている力を振り絞り何とかその身を起こした。そして少女に「急ごう」と言って、再び階段を上り始めた。

そこから僕の記憶は曖昧になっていく。覚えているのは、足下に次々に現れる階段の段と、それをひとつひとつ捉えていく僕の両足の映像だけだった。決して早くはなかったが的確に階段を捉えている両足が、自分の足ではなく誰かの足のように思えて、僕はその映像をただ眺めている、そんな感じだった。そしてその足が階段を踏み外すと、僕の身体は前に放り投げ出されて、地面に全身を強く打った。その痛みが僕の意識を呼び覚まし、僕は階段を踏み外したのではなく、階段がもう無かったことに気がつく。僕が倒れ込んだ場所は、僕らが目指していた風呂釜の最上部だった。

「…わかってる」

僕の視界の端っこで少女が誰かと喋っている姿が映った。少女は四つん這いの格好で、地面に空いた穴を覗き込んでいた。少女は一体誰と話しているのだろうか。僕の位置からではその会話の全文を聞き取ることが出来ない。

「…もうすぐ終わるから」

会話の切れ端が耳に届く。僕は少女の姿をしっかりと捉えようと首を動かすも、左頬に激痛が走った為、それを断念した。どうやら倒れ込んだ際に左の頬を強打したようだった。地面のひんやりとした感触が心地よかったが、ずっとそうしているわけにもいかないので、僕はひとまず起き上がろうと両腕に力を入れた。再び激痛が走る。今度脳に届いた信号は手の平から発せられていた。階段を掴んだ時に手を切ったらしい。僕は自分の手の平に出来たぱっくり開いた口のような傷跡を確認すると、身体は異常だが脳は正常に働いていると、少しホッとした。いつだろうか、確か僕がまだ小学生だった頃、近所の公園に向かっている途中で事故に合い、僕は初めて脳も正常性を失うということを知ったことを思い出していた。

その日僕は、学校が終わると急いで公園に向かった。放課後に友達と公園で遊ぶのが日課となっていて、急ぐと言うよりは、待ちきれなくてしょうがないといったように、夢中で公園へと続く道のりを走っていた。数人の友達を引き連れて、みんながみんな笑い声を上げながら走っていた記憶がある。

そして公園までもう少しという所に、長い下り坂があった。夢中になって走っていた僕は、当

然速度なんて落とすことなく、下り坂をトップスピードで駆け下りた。他の友達も、僕は後ろを振り返らなかったのどどのようにして下り坂を下ったのかはわからない。何人かの足音は聞こえていた気がする。そこら辺は記憶が曖昧になっている。僕と同じくらいの速度で駆け下りたのか、危ないからと速度を緩めたのか、とにかく僕は夢中で走っていたので周りの状況を確認している余裕なんてなかった。ただただ目の前に見えてきた公園に心を奪われていたのである。下り坂を全速力で駆け下りるということは、大きくなればみんな分かることだが、自分の限界速度以上で走るということである。当然それに肉体が付いていけるはずもなく、僕は自分の身体をコントロールすることが出来なくなる。制御不能というやつだ。まだ小さかった僕には、そのスピードを殺せる筋力もなければ、危険を回避するような知恵もなかった。とにかく僕は前方に転がっていくのを避ける為に、全身を使ってバランスを取るのに精一杯だった。

速度は衰えることなくさらに勢いを増していく。

僕は止まらない足を何とか踏ん張って抑えようとする。

でも実際、とっくにバランスなんてものは失っていた気がする。本当にいつ転がってもおかしくない状況だった。

そんな中僕の目は坂の終わりを捉えていた。坂は終わりにかけて傾斜を緩くし、やがて平らな道になる。あと少しだ。しかし僕の目はそこにある他の障害物も同時に捉えていた。信号機だった。坂の終わりには横断歩道が丁寧に敷かれていたのである。しかも信号は赤だった。下り坂に書かれた「とまれ」という字も見える。僕はその時のことをよく覚えていた。

全身から大量の汗が吹き出し、体全体で危険を訴えているようだった。車の交通量こそ少なかったが、僕の目は数台の車が横行するのを捉えていた。このまま行けば僕は赤信号の横断歩道に突っ込むことになる。しかし、その時の僕にもう選択の余地はなかった。転がりながら横断歩道に飛び込むか、スピードを緩めず走り抜けるかのどっちかだ。僕は転んで痛い思いをするのが嫌だったので、身体は転ぶことを望んでいたが、そのままのスピードで横断歩道に突っ込んだ。

次の瞬間、僕の身体は宙に浮くでもなく、交差点を駆け抜けるでもなく、横断歩道の手前で止まっていた。

僕は何が起きたのかわからなかった。

とてつもない衝撃が身体を走ったかと思ったら、僕はその場に倒れ込んでいたのだ。

僕はショック状態に陥っており、何も聞こえなければ、何も喋れない。しかし目だけはいろんなものを捉えていた。心配そうに見つめる友達の顔と見知らぬ大人達の顔。後で聞いた話によると、ちょうど僕の前を通り抜けた車に思い切りぶつかったらしい。車が僕に衝突したのではなく、僕が車に衝突していたのだ。それにも関わらずその時の僕は痛みというものを感じなかった。痛みだけでなく、視覚を除いたいろんな機能が失われていた。僕の鼻骨は拉げていて、あとで相当痛い思いをすることになったのだが、どうして僕はその時痛みを感じなかったのだろうか。

僕はショック状態で、脳の機能までも狂わせていたのか。反対に、脳が僕には耐えきれない痛みだと判断して機能を停止したのか、わからない。

もしかしたらどちらでもないのかもしれない。しかし僕は確かにその時、脳が正常でないこと

を認識したのである。

僕はすべてを遮断された無意識の中で、現実を見ているような感覚だった。

しかし今僕は無意識の世界で無意識の世界を見つめている。非現実だけど、ちゃんとそれも理解してここにいる。痛みも感じ取ることが出来る。だから僕はホッとしたのだ。僕はその痛みを抱えながら、重たくなった身体を何とか持ち上げた。他に痛みがないか確認したが、それを知らせる信号は脳には送られてこなかった。僕は再び少女の姿を捉え、そこに向けて歩き出した。

僕が起き上がるのを見て、少女も立ち上がった。一体少女は誰と話していたのだろう。視界の隅で捉えていた少女は確かに誰かと話しをしていた。井戸の中を覗き込むように、その中にいる何者かと。

「良かった。大きな怪我はないみたいね」

僕は両手を広げて見てみた。手の平にぱっくりと開いた傷口が不気味な笑みを浮かべている気がした。ズキズキと痛む。これが大きな怪我でないとしたら、何をもって大怪我というのだろうか。僕は手の平の傷口を彼女に広げて見せて「大怪我ですよ」と、腹話術のように訴えたかった。左の頬もまだ痛む。

「またあれが落ちて来たら、今度こそ無事じゃすまないわ。その前にお姉ちゃんを救い出さない」と

「ちょっと待って。その前にさ、少しでも教えてくれないか。さっきのあれは一体何だったんだい？」

僕は少し慌てていた。このまま何が何だか分からないまま歩美を救うのだけは避けたかった。もちろん救えると決まっているわけではないが、少なくとも僕はこのままでは歩美どころか自分さえも救える気がしなかった。酸素ボンベも無しに海底を探索するようなものだ。

「そうだよ。ごめんねお兄ちゃん。あまり時間がないから、本当に簡単になってしまうけど…」

「簡単で構わないよ。きっと現実に戻ったらこの傷も無かったことになるんだろうけど、今実際こうして僕は痛みを感じているし、体中が重たくて歩くのがやっとの状態なんだ。そこにさっきみたいなのがまた襲ってくるのであれば、僕はもう耐えられる自信がない」

と僕は言った。実際本当のことだ。

「わかった。さっきの衝撃は、空から降ってきたものがこの穴に落ちたことで起こったの。お兄ちゃんもここに来る時見たでしょ？」

と少女が言った。

僕はあのドス黒く渦を巻いた空を思い浮かべた。僕らが空と呼んでいるものはすべて飲み込まれてしまったように、それは隙間無く空を黒く淀ませていた。

「あの空はお姉ちゃんの心の闇を象徴しているの。罪の意識だとか後悔だとか、決して吐き出すことの出来ないもの達があそこに溜まっていく。そしてある一定まで溜まるとそれが地上に降り注いでくる。ある一定とは、お姉ちゃんが一人で処理出来る限界値みたいなもの。それが出来なくなると雨のように、いやあれは雨とかの類いではないわ。大きな水道の蛇口が空にあるような

もので、それは突如堰を切ったように落ちて来るの」

「空に大きな水道の蛇口」

「言いたいことはわかるでしょ」

「わかると思う」

もし空に大きな水道の蛇口があったら、僕らは夜も落ち落ち寝ていられないだろう。一滴あの破壊力なら、それは相当な大きさだ。

「私たちは何とかそれをこの場所に降らせるようにしたの。そうでもしないと收拾がつかなかったし、この世界の秩序が崩壊してしまうから」

「それがこの釜だね」

「そう。この中に集めることで、私たちの効率も上がっていった。お姉ちゃんが処理し切れなかったものを私たちが処理する。それが私たちの仕事であり、存在意義なの」

「掃除夫としての」

「掃除夫として。私たちにはそれぞれの役割があって、決して万能ではないけれど、一人一人がスペシャリストなの。組織化された清掃員とは違うわ」

「何だかそれを聞くと頭が痛くなってくる」

「お願いだから一緒にしないで。あの人達はそこら辺のゴミや埃を掃いて終わりなのよ。見た目が綺麗になればそれで良いの。でも私たちは違う。そこに根付いている、簡単には取れないものまでも綺麗にする。人の心に住み着く悪のようなものまでも。それは決して楽な仕事ではないわ。社会の古い体制を壊すことが簡単ではないように、そこに深く染み付いたシミは簡単には落とせない。でもそれが私たちの誇りなの」

僕はうなずいた。

「話が逸れちゃったわね。とにかく私たちはそこに溜まったものを掃除する。簡単に言うと、そこに溜まったものを掬い取って部屋に持ち帰るの」

「さっきの少年みたいに？」

「そう、さっきの彼みたいに。そしてそれを部屋で保管するのよ」

「どうして保管する必要があるの？」

「あら、その質問は適当でないわ。だって思い出は忘れることが出来ても捨てることは出来ないもの。それと同じで痛みや悲しみもそう。一度傷ついてしまえばそれを簡単に拭い去ることなんて出来ない。そして時にはその傷跡はさらに大きく開いていく」少女は天井に空いた穴を見上げながらそう言った。

「私たちはあの部屋でそれが消えていくのをただ待つことしか出来ない」少女の顔は険しい表情へと変わっていた。

辺りはとても静かだった。しかし僕の目には、それはひと時の沈黙のように映った。やがてやって来る嵐に備えた島に、突如訪れたひと時の沈黙のように。そこには島民が抱えるべく抱えた共通の怯えみたいなものが蔓延り、建物内の空気に緊張感を与えていた。

「とにかくお兄ちゃん。今は一刻も早くお姉ちゃんを助けなきゃ」

そう言う少女は、風呂釜の中央にぽっかり空いた大きな穴を指差し、「あそこにお姉ちゃんが

いるわ」と、その穴に向けて歩き出した。

僕も少女の後について歩き始める。膝に負った傷の痛みは幾分ましになったが、僕の歩みはとてもぎこちないものになっていた。さっきの恐怖で足がまだすくんでいるのだろうか。それともここまでの疲れが一気に両足を襲うようにしてそうさせているのか。僕は、どこかふわふわした足取りで少女の背中を追い掛ける。頂上の地面は舗装されたばかりの道路のように、まだその熱を冷まし切れていないようにも感じた。実際柔らかいかはわからないが、僕の目はその奇妙な感覚の原因を探すようにして、自分の身体や辺りの状況を探っている。建物内は、先程の衝撃によって建物自体に損傷はないものの、どこかやつれたようにぐったりとして見えた。

そんなことをしている間に、僕らはその風呂釜に空いた大きな穴まで辿り着いていた。

風呂釜の中央にはきれいにくり抜かれた穴が見事な真円を描き、それは乗用車一台は楽に飲み込める程の大きさだった。

「ちょっと覗いてみて」

僕は少女に言われるがまま膝の傷が開かないようにゆっくりしゃがみ込み、穴の中を覗いた。先程僕がいた場所からここに来るまで、頂上の広場は緩やかな斜面を描いており、僕はこうしてしゃがんでその穴を覗かないことには、その穴に吸い込まれるようにして落ちてしまうじゃないかという恐れがあった。だから僕は慎重に身体をその場に定着させてから、その穴を覗き込んだ。

穴の中は黒く淀んだ液体が生き物のように波打って溜まっていた。ついさっきの衝撃の余波がまだ残っているのだろうか、波は小さくうねるようにして、そしてその動きは採掘されたばかりの原油のようにどろどろとしたものであった。

「お姉ちゃんはその中にいるの」

後ろから僕の耳元に囁くようにして少女はそう言った。

「この中に？」

僕はもう一度じっくりとそのどろどろとした黒い液体を眺めた。何一つ見逃すことのないように、釣り人が波に浮かべたオモリの穂先の動きを見つめるように、僕は神経を磨り減らしながら波間に浮かぶ一瞬の光明を探し続けた。しかし、それが訪れることはなかった。その気配すらない。

僕は試しにそこに溜まった黒い液体に手を伸ばした。

「ちょっと待ってお兄ちゃん」

後ろで少女が僕の動きを止めた。

「その液体に触る前に言っておきたいことがあるの」少女はさらに続ける。

「さっきも言ったけど、それはお姉ちゃんが抱えた罪や悲しみを具象化したものなの。それに触れば少なからずお兄ちゃんにもその影響は及んでくる。お姉ちゃんの痛みがそのままお兄ちゃんの心を覆い尽くしてしまうわ。それがどういうことかわかる？そのエネルギーはお兄ちゃんの想像を遥かに超えるほどの力があるの」少女はそれから僕にしっかりと伝わるように、暖かみのある緊張感を言葉に乗せて言った。

「もし触るのなら、心をクリアにしなければならないわ」

「クリアにする？」僕は言った。

「そう、その言葉通り曇りのない心にする必要があるの」少女は続ける。

「でもそれは邪念や疑念を振り払うということではないわ。それに打ち勝つということでもない。今お兄ちゃんが抱えているものをすべて受け入れるのよ。邪念も疑念も、そしてお姉ちゃんを救いたいという気持ちも。だってそれはすべてお兄ちゃんの心なのよ。お兄ちゃんが抱いたものはすべてお兄ちゃん自身なの。それは振り払えるものじゃないし、もし仮にそう出来たとしても、それはお兄ちゃんが勝手に描いたお兄ちゃんの姿でしかない。だから受け入れるのよ。そういった邪念も疑念もネガティブな思考もすべて受け入れて、これが自分なんだと自分に認識させるの。それが心をクリアにするということ。そうすればお姉ちゃんの抱えた闇もお兄ちゃんの心を浸食することは出来ない。真っ平らな地面に影を映すことは出来ないように」

少女はそう言うと、やってみなさいと言うかのようにして後ろから僕の肩に手を当てた。

それから僕は自分の抱えた闇を受け入れようとした。そもそも僕が抱えている闇とは何なのだろうか。次第にその足跡が忍び寄ってくる。僕は歩美に対していくつもの邪念や疑念を思い浮かべていた。僕は歩美のことを信じていたし、疑おうとしたこともなかった。もし疑ったとしてもそれはお兄さんのこともあったから仕方がないと思い込んでいた。いや違う僕は歩美の抱える闇と向き合うのが怖かったのだ。僕の知らない痛みや悲しみが僕を襲ってきそうで、またそのことで歩美を失ってしまうのが怖かったのである。歩美の抱え切れない闇を僕自身が放り投げてしまったり、そんな弱い僕を見て歩美が離れて行ってしまったり、その見えない闇が僕らの未来までも飲み込んでしまうのを恐れていたのである。次第にそれは確実に僕を捉えようと近付いてくる。

僕は歩美がお兄さんのことを話してくれないことに憤りを感じていた。どうして僕に相談してくれなかったのだろう。どうしていつもそれを簡単な言葉で片付けようとしたのだろう。どうしてそう一人で全部を背負いこんでしまうのだろう。僕の中に闇がどっと押し寄せてくる。勝手にすれば良い。僕は歩美と何かある度にそう考えていたことを思い出す。塞ぎ込みたいのなら勝手にすれば良い。一人で苦しみたければ勝手にすれば良い。僕には言えないことを裏で他人に相談しているのなら勝手にすれば良い。僕は眠れない夜、そういった邪念と何度も戦ってきた。そして僕はその邪念を何度も振り払ってきた。自分が卑しい人間に思えてとても嫌だった。そんなことを考える自分にとっても悲しくなった。僕はその長い戦いを終える時、そんなことを考える自分が間違っている、ただ精神的に疲れているだけなんだ、自分はそんな人間じゃない、と自分に言い聞かせなだめることによって眠りを誘っていた。明日も笑顔で歩美を勇気付けてやろう、歩美のほうが大変なんだと、自分の抱えている闇を朝日と共に葬り去ろうと、その闇を受け入れることなく何度も朝を迎えてきた。そして今、僕を再びその闇が覆い尽くしている。

僕は大きく息を吸い込んだ。辺りに散らばった僕にまだ降り掛かっていない闇をも吸い込むように、僕は肺がすべていっぱい満たされるほど大きく深く息を吸い込んだ。そしてその闇を受け入れた。僕の身体の隅々まで染み渡るように、長い時間を掛けてその充足の時を待った。そしてゆっくりと息を吐き出した。それはとてもすっきりとした、実に明快な景色だった。

それから僕はその黒い液体にそっと手を伸ばし、包み込むようにしてそれを掬い取った。黒い液体は僕の手で救い上げられると、黒い球体へとその姿を変えていった。

僕はその黒い球体を眺める。それは本当に普通の黒い玉で、ボーリングの球のような艶を出し、しかし重さは全く感じられなかった。そして自分の心の変化や異常なども全く感じられなかった。僕はその黒い液体が個体になる様子に違和感を感じたものの、その他には何も感じていなかったのである。

「きみちゃんたちはずっとこうして歩美の闇を掬い取っていたんだね」

「そう。少しはわかってくれた？」少女は微笑むようにしてそう言った。

僕はしばらくその黒い玉を見つめていた。そうすることで自分の中に染み込んだ闇が身体に少しずつ定着するのを感じ、その余韻に少しばかり浸っていた。そしてそれがある程度終わると、少女に言った。

「どうしたら歩美を救い出せるの？」僕はいよいよ本題だと、準備は整ったと、そこから立ち上がり少女を振り返ろうとした次の瞬間、背中に鈍い衝撃が走るのを感じた。

その衝撃はそれほど強いものではなかった。痛みもない。しかしそこから僕をこのぼっかりと空いた穴に突き落とすだけの力は十分にあった。僕は後ろを振り返ることもなく、前のめりにそのどろどろとした黒い水たまりに身体から落ちていった。

気付くと目の前は真っ暗で、僕はそこから必死に水面を探った。天と地が逆さになったような感覚で上と下の区別が付かない。僕はようやく上下の判別が定まり、水面に向けて身体を引き上げるようにして手足を動かした。

水面に何とか辿り着き、僕は不足した酸素を補うように大きく息を吸い込んだ。全身が黒い液体で覆われていたが、思ったよりも粘り気はなく、どちらかという水に近いさらさらとしたその黒い液体を顔から拭き去り、僕の落ちたであろう場所、少女のいる方に目を向けた。

少女はそこから僕を見下ろすようにして、悲しげな表情で話し始めた。

「ごめんね、お兄ちゃん。でもこうするしかなかったの」少女はそう言った。

「お姉ちゃんをここから出すことは出来ない。それは同時に私たちの存在意義が無くなるということなの」少女は何かを論ずるような口調で話し続けた。

「お兄ちゃんにはわからないわ。例え今こうしてお姉ちゃんの闇を受け入れたとしても。お姉ちゃんの苦しみや痛み、そしてその葛藤を。お姉ちゃんがどれだけ苦しんだと思う？どれだけ自分を傷つけたと思う？お兄ちゃんにはそれはわからない。これからはきっと。それをわかってあげられるのは私たちだけ。私たちがいることでお姉ちゃんは平安を保てるの。だからお姉ちゃんには私たちが必要なのよ！」少女は泣き叫ぶようにしてそう言った。

「もし仮にお兄ちゃんがお姉ちゃんをここから救い出したとしても、またここにお姉ちゃんは帰って来ることになる。お兄ちゃんがしていることは無駄なことなのよ！」

「それは違うよ、きみちゃん」僕は両足をばたつかせ、何とか水面から顔だけを出しながらそう言った。

「君の言っていることはおかしい。そうやって君が歩美を縛り付けているんだ。確かに心に痛みを抱え、自分を傷つけることは苦しいことかもしれない。でもそれはここから飛び出すことに比

べたらそんなに大変なことじゃない。さっき君は平安が保たれると言った。けどこれだけは言える。ここに歩美が望んでいる平安なんて何一つない！」

僕は何度も顔に襲ってくる黒い波に堪えながらそう叫んだ。

「違う！違う違う違う違う違う！」少女は首を左右に激しく振り、僕の言葉を振り払うかのようにして叫んだ。

「わかっていないのはお兄ちゃんのほう！私は間違っていない！間違っていない！」

次第に首が拉げるぐらいに頭を振り回す少女の様子がおかしくなってきたことに僕は気がついた。

「お姉ちゃんを救えるのは私だけ。私がいなくともお姉ちゃんは生きていくことさえ出来ないの。ここに私がいるからお姉ちゃんは生きていける。正しいと思うことがすべて正しいわけじゃない。わたしはまちがっていない。そうわたしはまちがっていない！」

気がつくとも、少女の身体から黒い液体が滲み出しているのが見える。その黒い液体は徐々に少女を覆い尽くしていく。

「わたしはおええちゃんのいちぶなのよ。そんなわたしにどうしてそんなひどいことをいうの？わたしにもっとやさしくしてよ。もっとあいをそそいでよ。あんたのあいはそんなものなの？たりないわ。たりない、たりない、だりない！」

少女の身体は今や完全に黒い液体で覆われようとしている。その姿は外の灰色の大地で見た黒い影とそっくりの格好をしていた。

「たりない、たりない、たりない！あいがたりない。もっとあいをちょうだい！」

その黒い影は既に人の形を失い、水面に溶け込むようにして近付いてくる。

「ねえおにいちゃん。おねえちゃんのことあいじているんでしょ？それならそのあいをわたしにちょうだい！」黒い液体となったそれは僕に語りかけてくる。

「おねがいおねがいおねがい。あいをちょうだい」

「違う！君は歩美じゃないし、そもそも愛は求めるものじゃない！僕には愛のことはよくわからないけど、それだけは間違っている！愛は誰かにそっと渡すようなものだ！」

それはもう目の前まで来ていた。水面をうねるようにして進んでくるその黒い液体の固まりは僕を飲み込もうとしていた。

「少しは人の話を聞けよ！どうしていつもそうやって一人になろうとするんだ！僕には君の悲しみを知ることは出来ない。でもわかってあげることは出来るはずだ！ひとりぼっちになったって悲しいだけじゃないか！それは君が望んでいることじゃないはずだ！おい！コラ！話を聞けって！」

僕は僕を飲み込もうとする黒い液体を振り払おうと必死にもがいた。しかしもがけばもがくほどその黒い固まりは身体に絡み付いてくる。

「そうやってたくさんの人が痛みを抱えて、それでも生きているんだ！君だけじゃない！君はちっとも特別な存在なんかじゃない！ちっとも不幸な人間なんかじゃない！だってこれだけたくさんの人が君を想ってこうしてここまで君を助けに来たんだ！少なくとも僕はそうだ！この世界に一人、そんな人間が今こうして目の前にいるんだ！目の前で君と真剣に向き合おうとしている

んだ！だから話しを聞けって！」

その言葉と同時に、僕のすべてが黒い影で覆われ、それに抗う術はなく、僕はそれに巻き込まれるようにして黒い水の中へと、自分の身が沈み込んでいくのを感じることに出来なくなっていた。

僕は今、水の中を、それも真っ暗な水の中を、何十メートルあるかわからない水底へと、その到着を待つかのようにただ身を沈めていく。僕の身体はもう動かない。僕はこれからどうなってしまうのか。歩美を救い出すことも出来ず、この大きな風呂釜の底でさっきの黒い影のようなものへと変わってってしまうのだろうか。もはやそれでも良い。もう僕に抗う力は残っていない。そこで歩美の痛みや苦しみを知って、それを分かち合えるのならそれはそれで良いのかもしれない。そんなことを思うようになっていた。僕の身はどんどん沈んでいく。

どれくらい深くまで来たのだろうか。僕はまだ自分の身が水底にまで達していないのを確認するものの、何をもって水底と言えるのだろうかがよくわからなくなっていた。身体が何かに当たればそれが水底なのか。もしかしたら、ただ側面に背中が当たっただけでそこは水底じゃないのかもしれない。僕の目は暗闇しか捉えられず、方向感覚というものが著しく欠如しているということにさえ気付かない。

そんな時、遠くで誰かの声が聞こえてきた。

すべてに耳をすませなさい。あなたが知りたいことは自ずと聞こえてくるでしょう。

誰の声だったっけ。僕はそれがうまく思い出せないが、その言葉だけははっきりと耳に聞こえてきた。

僕はもう一度それを心の中で繰り返す。そして僕はその言葉通りにそれを受け入れた。今ならわかる。そのすべてがどういうものかを。邪念も疑念も嫉妬も、そういった自分が心に抱いた想いすべてが自分であり、僕はそのすべてにゆっくりと耳をすませる。

僕は歩美のことが好きだ。

その想いは歩美と出会った時から何一つ変わっていない。当時のそのままの姿で僕の中にずっと残っている。その唯一変わらなかったものが今も僕の中で輝きを失わずにいる。僕は何故か、それがこの先もずっと消えずに心の中に残るのだろうと思った。何故だかはわからない。でもはっきりとそう言える。僕はその言葉に耳をすませる。それはとても清らかで優しい言葉だった。僕はその言葉に酔いしれるわけでもなく、それを素直に受け入れる。すると、右手に何か当たったのを感じた。気のせいかと思い、もう一度僕は手が当たったと思われる辺りを探るように右手を動かし続けた。そしてまた右手から何か当たったような感触が返ってきた。僕は今度はそれを掴もうと手に力を込めた。しかし右手がその何かを捉えることは出来なかった。僕は気のせい

かと思い右手に入れた力を弱めた時、その何かが今度は僕の右手を捉えてきた。僕もそれに応えるよう再び手に力を入れる。それはとても柔らかいものだった。僕は感覚だけでそれを見極めようと、右手に意識を集中させた。そしてそれが人の手だと気がついた時、僕は我に返った。

その手は確かに歩美の手だった。僕があの日、引きこもっている歩美を自宅から連れ出したあの時のか弱い手の感触。歩美が初めて涙を見せてくれたあの日を重ねた温かい手の感触。僕はそれが歩美の手だと分かり、一気に目が覚めてそれを力一杯引き寄せた。

歩美もそれに応えるように手に力を入れ、僕は近付いた歩美の身体を両腕で抱きしめ、歩美も僕の身体を抱きしめた。暗闇でもわかる。そこにいたのは確かに歩美だった。

僕らはしばらく、何度も確認するように抱きしめ合った後、ここからどうしたらいいのか、どうしたら助かるのか、それがわからず途方に暮れていた。

歩美を見つけたは良いが、どこに水面があるかもわからなかったし、その感覚はここに落ちた時からずっと続いていた。水面もわからなければ、どこが上か下かもわからなかった。僕らはずっとここでこうしていることになるのだろうか。でもそれは一人でいることよりもずっと希望に溢れていることのように思えた。それならそれで良い。僕はまたしてもそう思うようになっていた。またそれは歩美も同じであるように思えた。彼女もまたどうすることも出来ないまま、ただ僕を抱きしめているという感じだった。

その時である。僕の身体が何物かに引っ張られるように、一瞬何が起きたのかわからないほど力強い引力で僕を捉え、気がつくまで僕と歩美は水面に顔を出していた。

「お前ら何やってんだよ」

そこにいたのは竜彦だった。

「二人仲良く抱き合っちゃって。もうやだよ」

竜彦はそう言うと、泳ぎながら水面の淵へと辿り着き、そこから身を乗り上げ、身体にまとわりついた黒い水を手でしきりに払っている。

「一体これは何なんだよ」

竜彦は手で払った黒い水滴が固まりになっているのを見てそう言った。

「その仲良しさん、早く上がって来なよ。みんな待ってるぜ」

そう言うと満面の笑みで僕らを見下ろした。

僕は何が何だかよくわからなかったが、竜彦のその笑顔を見て泣き出してしまいそうになり、必死にそれを堪えて歩美を抱えたままその黒い水面から上がった。

「どうしてここに竜彦がいるんだよ」

「どうしてって、お前らが心配だったんだよ。それに違うだろ。恩人に対して言う最初の言葉か？それは」

竜彦はそう言って笑った。

僕は「ありがとう」と言い、ここまでどうやって来たのかを聞いた。その時、竜彦はただ笑って「俺の天使の案内があったからだよ」そう言って話しをはぐらかしたが、その時僕はその天使が誰なのか、何となくわかった。僕はその人にも感謝するように、心の中で「ありがとう」と、天井にぽっかり空いた穴から見える空に向けてそう言った。穴から見える空にはたくさんの星た

ちが輝いていた。

僕が目を覚ますと、そこには部長と沙織さんと伊藤先輩と、それから渚さんまでもが心配そうな顔で見つめていた。その光景を僕と同じように見た歩美は泣き出していた。これまで抱えた悲しみや苦しみや、こうして集まったみんなに向けての感謝も込めた、それはとても長い長い涙痕となった。そしてその涙の源泉は、きっとたくさんの人の愛だったのだと僕は思った。

わかっていると思うけどこれが最後だ。細身の男は名残惜しそうにそう言った。

お別れだね。太っちょは満面の笑みを浮かべて男の顔を覗いた。きっとそうやっているに違いない。視力を失った今でも、二人の姿だけは目に焼き付いている。

確認だけど、今君に残っているのは、聴覚と味覚だけだ。つまりは、俺の話は聞こえているし、それに答えることも出来る。こっちにしてみればそれはとても助かる選択だったよ。細身の男は悪びれる様子もなくそう言った。

ありがとう。太っちょはきっと深々お辞儀しているのだろう。

結局ここでも二択問題になってしまったな。細身の男はそう言った。

本当だ。太っちょの声は弾んでいる。

それでもう決まったのかい？

決まっているさ。

男は二人の言う通り、もう決まっていた。だからその二人の問いに答えることが出来なくなっていた。そして男はゆっくりとうなずいた。

そうか、そっちを取ったか。まあ当然の選択だろうな。細身の男は淡々と話す。

これで本当に最後になるけれど、そんな俺たちから君にプレゼントがある。

プレゼント！太っちょが飛び跳ねる音が聞こえてくる。

そんな大したものじゃない。いや君にとったら大したものなのかな。君が今まで失ってきた五感、すなわち視覚、嗅覚、味覚、触覚のいずれかひとつをここで君に返して上げるよ。

サプライズ！太っちょはありったけの声でそう叫んだ。

どれを選んでもいい。もちろん選ばなくてもいい。聴覚だけで構わないと言うならそれはそれで結構だ。けどね、これは俺たちの好意だ。好意は素直に受け取ったほうがいいぞ。細身の男はそう言った。

ありがとうございます！太っちょはわざと渋い声でそう言った。

男は素直に受け取ることにした。そして言葉で伝えることが出来なかったので、頭の中で自分が必要とする五感のひとつを強く念じてみた。

わかった。確かに伝わったよ。細身の男は耳元でそう呟いた。

さあ着いたぞ。これで本当にお別れだ。まあなんだ、君の成功を心から願っているよ。そしてここまでありがとう。細身の男はそう言うと、男の背中に手を当て、男が歩くべき先へ促すように、そっと力を込めた。

元気でなあ。太っちょの悲しみに満ちた声が聞こえてくる。もしかしたら本当に泣いていたのかもしれない。

男は耳元で圧力が変化するのを感じた。きつともう部屋に入ったのだろう。男はそこで一度大きく息を吸い込んだ。

冬独特の冷たく濁いた空気が体中を駆け巡る。それと同時に、それに関するありとあらゆる記憶が蘇っていくのを男は感じた。

雪が街を白く染め、辺りはしんと静まり返り、空からはいくつもの氷の結晶が降り注いでくる。子供たちは沿道ではしゃぎ回り、それを心配そうに、そして懐かしそうに眺める大人たち。歩道に残ったいくつもの足跡、不格好な雪だるま、煌々としてどこか切ない、寂しくも白く輝いた情景をいくつも男は思い浮かべることが出来た。

男はもう一度息を大きく吸い込んだ。今度は別の情景が蘇ってくる。

街灯に照らされた降雪のもと、コートの際を引き寄せかじかんだ手を何度も暖めて過ごした長い冬の夜のこと。目が覚めて窓を開け見た白銀の世界。それを伝えたくて、早朝にも関わらず長電話した冬の朝のこと。男は自然とその光景を今も目にすることが出来る。そしてそこにはいつも君がいた。

男はその懐かしい匂いが記憶の中だけでなく、現実にもすることに気がついた。男はその匂いのするほうへ歩いて行く。

「遅かったのね」

男はその柔らかく暖かい声のする方へさらに歩いて行く。すると男は何かにぶつかるようにしてその歩みを止めた。

「大丈夫。あたしはここにいるわ」

男はもう一度息を鼻から吸い込む。安らぎが心の中に傾れていくようにして、やがてそのすべてを優しく包み込んだ。

女は男を強く抱きしめた。何度も何度もそのぬくもりを確かめるように、女は男にずっと寄り添い、そして二度と側を離れることはなかった。

「あなたに無いものをあたしは持っている。そしてあたしに無いものをあなたは持っている」女はそう言った。男はそれにうなづく。

「あら、泣いてるの？」

女は男の頬を優しく拭った。

「あたしが覚えているのはこのぬくもりだけ。でもそれでいいの。だってあなたはもう思い出せるでしょう。あたしがあなたに言った言葉や、あなたがあたしに言った言葉を」女はそう言うと男の耳元にキスをした。

「言葉はね」女は今まで話したどの言葉よりも愛情を込めるようにして、ゆっくりと男に伝えた。

「言葉は、形を持たない愛を明確にしてくれるの。そしてその言葉の数だけ、愛が存在する」

男は静かにうなずいた。

「だからもう恐れなくて。あなたが大切に綴った言葉なら、あらゆるものを明確に出来る」

男は暗闇の中、天空に輝く星たちを思い出していた。今度もし、この目で星を見ることが出来たなら、その時はその星たちを結んでみようと、心の片隅でそう誓った。

「第八章」

それから一年の月日が流れた。

あれからというもの歩美の笑顔には、僕が始めて見た頃のような、たくさんの表情を持った歩美のすべてが刻まれていた。作られてもいない。飾られてもいない。歩美のそんな眩しい笑顔が見られて僕も嬉しくなった。歩美の抱えている過去は何も変わらない。歩美の抱えた闇もまた変わらない。だけど彼女はそれらと共存することを選び、そして今もその悲しみや苦しみを抱えている。それでも彼女は心から笑っている。僕にはそれが良くわかる。歩美の失踪事件以来、それは結局警察が介入するという事態に至ったが、それがあつたおかげで歩美の家族もまた変わりつつあつた。娘まで失いたくない、そう思ったのだろう。歩美の父親も母親も以前に比べると遥かに在宅していることが増えたと歩美が言っていた。もちろんいないことも多かったが、そんな時は僕や沙織さんにその不満をぶついたり、伊藤先輩や竜彦をからかったり、そうやってストレスを発散させていた。歩美が感情を露にする度に、僕はとても幸せな気分になった。あの日海で見た、地平線の向こう側、そんな遠い所にいる歩美はもういなかったのである。そして活発になった歩美は部長のお母さんの渚さんとまめに連絡をしたり、時には渚さんの講演会に付いて行ったりと、心理学を学ぶ為にあらゆる努力をしていた。僕はそんな歩美を微笑ましく眺めるものの、少し寂しくなったりした。違う意味で遠い所に行ってしまうような、そんな予感がしていたのだ。

一年が経過した我ら『あいことば』のサークルには、もちろん新生が入部していた。新生は二人しか入らなかつたが、それでもうるさいと言っていい程、部室は毎日騒がしかった。男だけになると図書室化する部屋も、どこか懐かしい記憶である。

部長も四年生となり、渚さんの意思を受け継いだのか、自分の能力を活かす為に心理カウンセラーの道を歩んでいくことにしたらしく、相変わらず会話は少ないが、慌ただしい毎日を過ごしていた。

就職活動組の沙織さんと伊藤先輩も、それに追われるようにして、部室に入ってくればその愚痴や不満を僕らや下級生に呟いていた。

沙織さんは子供を持つ親の役に立ちたいといった明確な目標を持ちそれに邁進していた。その一方、伊藤先輩は特に何か目標を持つということに固執していない様子で、どこでも良いからと、就職するだけでも大変なんだからと言って、なかなか決まらない自分の未来に不平をぶつけていた。そんな伊藤先輩にも朗報はあつた。例の元彼女と再会することが出来たと、ある日伊藤先輩は嬉しそうに僕らに話してくれた。僕や竜彦が、「何て声を掛けたんですか？」といくら聞い

でも彼女に伝えた言葉は教えてくれなかったが、その顔はとても幸せそうに見えた。「いいか、高志、竜彦。言葉はいろんなことを曖昧にする」と、意味深なことをその度に僕らに言っていた。後で沙織さんに聞いたところ、「結局何も言えなかったらしいわよ」と、まあ当然ねと言わんばかりの言い回しで僕らにそっと教えてくれた。それでも伊藤先輩が幸せなら良いかと、僕らはそんな先輩達を微笑ましく眺めていた。そして僕と竜彦がそんな顔をして部室に座っていると、「あんたたちそんな呑気な顔してたら現実ですぐ振り切られちゃうわよ」と、よく沙織さんに窘められた。

そんな僕と竜彦は、同じ学部だったのもあるが高校の時と変わらずよく一緒にいた。歩美と過ごす時間よりも多かった気がする。そして僕は、いつだったか、あの日部長の別荘で起こったことを竜彦に聞いてみた。

「あの時どうやって歩美の無意識に入ってきたんだよ」僕は竜彦にそう聞いてみた。

「お前らがあの小さな部屋にいたろ？その隣にちょんって座ってすつとだよ」

「それじゃわかんねえよ」

「俺もわかんねえからそうとしか言いようがないんだよ。俺が座ると部長が手を翳して、目を開けると灰色の大地にいたわけ。空はなんか黒い変なものが浮いているし、辺りからは黒い影みたいなものが俺のことを追ってくるし」そう言って当時を思い出した竜彦は顔をしかめた。

「よく捕まんなかったな」

「それがさ、俺が逃げ回っていると、遠くのほうで声がしたんだよ。その声は俺を確かに呼んでいて、俺はその声のする方に向けて全力で走って行った。あれは相当疲れたね。そしてそこで会ったんだよ」

「誰に？」

「鳥羽愛子さんだよ。俺が無意識で見た愛子さんは、俺が近寄るとすぐにひとつの小さな丘を指差して、あそこに行きなさいと教えてくれた。俺はその通りにして、そして事ある度に助けてくれて、気付いたら大きな風呂釜みたいなものがある建物に辿り着いていた。そしてお前らを見つけたんだよ。それも愛子さんが教えてくれたんだけど」

「そうだったのか」僕はあの時竜彦が来てくれなかったらどうなっていたのだろうか。たまにそのことを考えると怖くなったが、結果竜彦がこうして来てくれたからここで笑って過ごせているんだと、その度にこの悪友でもあり親友でもある竜彦に感謝の気持ちを表さずにはいられなかった。

「あんなことがあったなんて未だに信じられねえよな」

「そうだな」

僕も竜彦と同じように、あの時起きたことを未だに信じられずにいた。

「でも良かったよ。歩美やお前がこうして戻って来てくれて」

「お前のおかげだよ」

「そうか？」

「そうだ」

「何か気持ち悪いな」

そうやって僕らはその話しをする最後には笑っていた。笑って吹き飛ばさないことには、あれだけ過酷で不思議な体験が僕らを現実から引き離そうとしてくるからだった。僕らはあの時のことを未だに鮮烈に覚えている。そしてそれは大木に刻まれた年輪のごとく、ずっと僕らに残るだろう。だから僕らはそれをたまに共有して、思い出話のひとつとして笑うのだ。

そんなこんなで一年が目まぐるしく過ぎ去り、僕はこの大学に来て二度目の冬を迎えることになる。それは十二月のとても寒い日だった。僕はまたしても歩美の「海に行きたい」という一言で、今その目的地へと連れて行ってくれる電車を、平日で人もまばらなプラットホームで身体を震わせながらその到着をまだかまだかと待っているのだった。

「マフラーを持ってくればよかったな」隣で同じようにして身体を縮こまらせている歩美に向けて僕は言った。

「だから言ったじゃない。冬の海は寒いから、暖かい格好をしてきてって」

「こんなに寒いとは思わなかったからさ」僕はぶつぶつ不平を言うように、時たま吹き抜ける凍てつくような風にその不満をぶつけていた。

空にはそのすべてを覆い尽くすような灰色の雲が広がっていて、雨がいつ降り出してもおかしくない天気だった。

「傘も持ってくればよかったかな」僕は言った。

「あたしは折りたたみ傘を持ってきたけどね」そう言って歩美は空を眺めた。

僕は歩美の横顔を眺めていた。僕が初めて歩美を見た時と同じようにして空を眺めているものだから、僕は当時の歩美と今の歩美がリンクして、しばらくその様子に見とれていた。

「何？あたしの顔に何か付いてる？」歩美は可笑しそうに笑っている。

「うん」僕はそう言って、ちょうど今歩美の頬に付いた白い埃みたいなものを払おうと手を伸ばした。そしてその埃に触れた瞬間、

「雪だ」そう言って歩美は僕より一足先に、その埃の正体を暴いてしまった。

「本当だ」僕も歩美に倣って空を見上げた。

空からはもう目で数えきれない程の小さな雪が降り始めていた。

「今年初めての雪だね」

「そうだな」

僕も歩美もしばらくその雪を眺めていた。

都会で降る雪はいつもだいたい小さくて細かい雪だった。雪山で見るような、大きくて柔らかい雪とは違い、少しみぞれまじりの氷に近い雪だった。もちろん都会にだってそんな大きくて柔らかい雪は降る。だけどそんなことは稀で、この季節は雪疑惑のかかる雨の方が多かったりした。

僕はまたしても、空から降る雪を眺めている歩美を見つめた。

僕はそこで気付いた。

自分はなんでこんなに歩美の顔を確認しているのだろうと、今日ここに至るまで自分でさえも

そう何度も自分に問いかけていた。そこにはいつもと変わらない歩美がいたし、特に不自然な点を見つけることは出来なかった。しかし今、こうして僕は歩美を見つめながらその原因に気付かずにはいられなかった。

歩美が話す言葉の中には僕がいなかった

僕はそれを何度も確認する為に歩美を見ていた。それは無意識に行われた行為だった。そしてその無意識がようやく僕の意識にそれを伝えられたというように、僕の意識が今それを確認している。そして僕はそれを確かに感じていた。

歩美が話す言葉には僕の姿がない。

それはどういうことなのだろうか。うまく説明することが出来ない。でもそれは明らかだった。明らかだと僕が判断しているに違いないが、僕はこれまで歩美とは何度も会話をしてきた。それは例の事件から一年の間、今まで以上に歩美とは本当の意味で会話をしてきた。だからきっとそれは僕にしかわからないことなのかもしれない。彼女の話す言葉の隅にはいつも僕がいた。それも僕が存在が見えない今だからこそ気付けたことで、僕はその事実には驚愕し、またそれをうまく受け入れられないでいた。

歩美はそんな素振りを見せることもなく、空から落ちてきた雪を手にとって僕に笑いかけて見せた。手のひらでは生まれたての小さな雪が、初めて人の温もりに触れたような、そんな柔らかい表情で横たわっていた。

「どうかした？」

歩美はもう一度僕に笑いかけてそう言った。

「な、何でもない」

僕は思わず歩美から目を逸らし、

「電車来ないね」と、到着時刻を確認するようにして電光掲示板を見つめた。

雪はそれから絶えず降り続けている。十二月にこれだけの雪が降るのは本当に珍しい。僕と歩美は車内の窓から見える白く染まりつつある街と、渡り鳥のように訪れた雪がその街に舞い降りていく様子をただ眺めていた。

僕はその後車内で何度も何度も確認していた。歩美の言葉の隅にいるはずの僕を見つけるように、特に大した会話ではなかったが、それでも僕は歩美と話すことを止めなかった。止めてしまえば、何かが堰を切ったように流れ出しそうだったからだ。そして僕は希望を持って歩美と会話をしていた。自分の勘違いだと、それを立証する為に歩美に話しかけた。歩美はそんな僕の様子に気付く素振りも、また自分が話す言葉の中に僕がいなかったことに気付いている素振りも見せず、僕の話しに耳を傾けてはそれに応えていった。周りから見たらきっとそれはとても賑やかな光景に映っていたのであろう。しかし僕は違った。僕は少しも賑やかじゃなかった。いや、僕の心の中は賑やかだったのかもしれない。僕は必死で僕を捜そうとしていた。歩美が話す言葉の中に。しかし、それも空しく電車は終着点に着き、僕らの会話は一旦そこで断ち切られること

になった。

駅から海までの距離を僕は今度は無言で過ごすことになった。電車の中で喋り過ぎて疲れたというのもあったし、僕は一旦冷静になる必要があったし、そして何より話題がもう無いということでもあった。海風が肌を突き刺すように通り抜けていく。雪はいつの間にかすっかりとあがっていたが、冬の海は歩美の言った通り、いやそれ以上に冷たい風を突きつけてきた。僕はその必要以上の寒さにただ耐えるようにして海までの道のりを黙々と歩いた。

海に辿り着き歩美は例のごとく、波打ち際まで行きたいと言って、僕は波が打ち寄せるそのすぐ側まで、人気のない雪でぐしゃぐしゃになった浜を通り抜けて、そして海を眺めた。

海は思ったよりも穏やかだった。空の天気とは対照的に、ついさっきまで降っていた雪を静かに受け入れているように見えた。

僕は隣にいる歩美を見つめた。歩美は目を閉じたまま黙っている。歩美が海に行きたいということはそういうことなのだ。きっと今海に自分の抱えたいろんなものを浮かべているのだろう。そして海がそれを判別して大切なものだけ返してくる。波打ち際に打ち上げられたそれらを歩美はまた持って帰る。そうでないものは沖に流されてしまう。あるいは海底に。

僕はそこにももちろん僕も入っているのだと思っていたけど、歩美がどういう気持ちで僕をそこに浮かべているのかがものすごく気になった。僕はどんな形にしろ波打ち際に打ち上げられてくる。そう強く願った。歩美の中にいる僕を応援した。仮に沖に流されたとしても死に物狂いで帰ってこいと、僕は地平線にいるかもしれない僕にエールを送った。

気付くと歩美が目を開けていた。そして僕がそれに気付くと同時に歩美は泣き出してしまった。あまりに突然のことで、僕はしゃがみ込んで泣いている歩美に何も言ってやれなかったが、とにかく僕も一緒にしゃがみこんで、歩美の肩を優しく握った。大丈夫だよ、大丈夫だよと、言葉ではなく手でそれを伝えるようにそして寒さで歩美が参ってしまわないように、ぬくもりを伝える為に肩を何度も撫でた。

「やっぱり駄目なのね」歩美は泣きながら何度もそう言っていた。

「何が駄目なの？」僕はそう尋ねたけど、歩美はそれに応えてくれなかった。

「お兄さんのこと？」僕は歩美に向けてそう言った。

「違うの。そうじゃない。そうじゃないの」歩美はしゃがみ込んだ膝に埋め込んだ顔を起こさずにそう言った。

それから僕は歩美が泣き終わるのを辛抱強く待った。僕はその時よく堪えられたと思う。今にも「僕のこと？」と言ってしまいそうだったのだ。そして歩美がそれに頷く。そうになってしまうことがとても怖かった。それでも聞きたいと思った。聞きたいというより、それを確認しないことには逆に耐えられないといった気持ちだった。しかし僕はそれを聞かなかつた。何故聞かなかつたのか。僕はそれでもやっぱり怖かった。歩美を失うことが何よりも怖かった。だから僕はそれを聞けなかった。そしてそのことしか僕は歩美が泣き出した理由を見つけられなかった。だから僕は歩美が泣き終わるのを待つ間、ずっと海を見ていた。もちろん他の理由がそこから発見出

来れば少しはましだったのだが、それは見つかるはずもなく、僕はこの海にどういう気持ちで浮かべられたのだろうか、遠くに見える漁船をただ眺めていた。

気がつくともまた雪が降り始めていた。そして歩美はまだ泣いていた。涙はとっくに流し終えて、鼻水を啜る音しか聞こえて来なかったが、顔を上げないということはそういうことだ。僕はそんな歩美に優しく話し掛ける。

「歩美、雪が降ってきたからもう行こう」

僕がそう言うとも歩美は素直にうなずいて、

「急に泣き出してごめんね」と言って立ち上がった。歩美の目は腫れていたが、涙はすっかり干上がっているようだった。

「何でもないから。気にしなくていいから」

言葉を話すと悲しみがまた溢れてきそうなのか、歩美の目には再び涙が溜まっている。

「うん。わかってる。大丈夫」

僕は全然大丈夫じゃなかったが、それを悟られないようずっと優しくそう話しかけた。

歩美はそれにうなずくと、瞳に溜まった涙を拭いた。

そして僕は歩美の肩を抱いたまま海を後にした。僕の手は歩美の肩を強く抱くことが出来なかった。歩く歩美の肩にそっと手を添えているといった感じだった。手を離せば歩美が離れていってしまう。逆に強く抱けば歩美に拒まれてしまう。そんな感じがして、僕にはそうすることしか出来なかった。それから僕らは特に会話をすることもなく家路に辿り着いた。

歩美を家まで送り、僕は一人冬の夜空を眺めながら今日の出来事を振り返っていた。

空にはいくつもの星が、雲の隙間から顔を出したり引っ込めたりしていた。僕らが海から戻って来る間にすっかり天気は回復に向かい、昼間雪が降っていたことは嘘だったかのようにどこにもその痕跡は見当たらない。

僕はどうしたらいいのだろうか。

僕は帰りの電車からそのことがずっと頭を離れなかった。

僕はこの先どうしたらいいのだろうか。

答えは雲に隠れた星のように、出て来ない。

答えってなんだろう。もう一人の僕が言う。

そんなもの決まっている。僕はいつだって歩美の幸せを願ってきた。

歩美にとっての幸せって何？

それがずっと僕だと思っていた。

それは僕じゃないの？

わからない。

それが僕じゃないとしたらどうすれば良いの？

わからない。

僕は気がつくとき自問自答を繰り返していた。

じゃあずっとこのままで良いの？

そんなに言うのなら、僕の幸せはどうなる？僕が歩美とずっと一緒にいたいという願いはどうなる？僕の幸せは考えてくれないのか？

もう一人の僕はそれには答えてくれない。

僕の中は歩美で溢れている。それが空っぽになったらどうやって生きていけばいいのさ？

夜の闇に沈んでもう一人の僕はそこで僕をじっと見つめたまま何も答えない。

歩美の中にいたはずの僕は一体どこに行ってしまったのだろうか。

僕は昼間見た海を思い出していた。今度は僕があのだ地平線の向こうに、そして海底の暗く淀んだ深い深い場所に行ってしまったように感じた。僕は存在するも、その姿を確かめることは出来ない。僕はとても寂しくなった。何かを呪おうにも、その対象は限りないものだった。人の力ではどうすることも出来ない。そんな巨大な何かが目の前に立ちはだかっているように思えた。

僕は答えの見つからない質問をずっと一人繰り返しながら、家までの道のりを歩いていた。

昨晩は全然眠れなかった。家に帰ってベットに入り、目を閉じても誰かが僕にずっと話しかけているような気がしたし、実際いろいろと質問を投げかけてきた。僕はそれに答えを出せず、または出そうとせず気がつくとき朝が訪れていた。

僕はそんな重くなった身体を起こし、トイレに行くついでに冷蔵庫から水を取り出し、コップに注ぎ、台所にあるテーブルにそれを置き、飲むこともせずそこにある椅子に腰掛けた。

頭がうまく働かない。僕はここに何をしに来たんだっけ？その答えももうわからなくなっていた。

「あら高志、早いじゃない」

母親はもう既に起きていた様子で、エプロンを片手に台所に入ってきた。

「うん。眠れなくてね」

「ふうん」

不貞腐れたような、そんな僕の様子に気遣うこともなく母親は忙しそうに朝食の準備を始めている。

「母さんはさ、父さんと何で結婚したの？」

僕はぐらぐらする意識の中、自然とそう口にしていった。

「え？どうしたの急に。やだね〜」そう言って少し照れたように、母親はヤカンに水を注いでいる。

「母さんは父さんとどうして結婚しようと思ったの？」

僕は微睡む意識の中、そう言った。

「う〜ん、どうしてだろうね。忘れちゃったわ」

母親は笑いながらそう言った。

「理由を忘れるぐらいの結婚だったってこと？」

僕は自分が自然と語気が強くなっていることに気がついた。

「そんな適当な結婚で僕らは生まれたの？」

何故自分がそんなに執拗になるのか、僕はよくわからなくなっていた。

「適当なんかじゃないわ。あなたたちは生まれるべくして生まれたの。それにあなたと話していたら何か思い出してきたわ。私がお父さんと結婚した理由を」

母親はそう言って、ヤカンをガスレンジに乗せ火を付けた。そして僕と向かい合う形で、テーブルにゆっくりと腰掛けた。

そして目の前に座る僕を優しく見つめて、それから両手を机の上で遊ばせるように、今度はそれを見つめると「いつだったけかなあ」と母親は当時を振り返るように話し始めた。

「一度お父さんとは別れているのよ、実はね。お父さんの仕事が急に忙しくなり始めて、お父さんと母さんはすれ違うことが多くなった。お父さんはもともと器用な人じゃなかったから、仕事と恋愛の両立が出来なかったのね。次第に連絡も少なくなって、母さんは何か心にぽっかり穴が空いたようにその隙間を埋めることが出来なくなったの。特に趣味もなかったし、それは寂しい毎日だったわ。でも、それでも週末になると必ずお父さんから連絡が来てたわ。会える日は会って、その寂しさをなんとか埋めてきた。それでもそれだけじゃ埋めきれない程、その穴はどんどん大きくなるばかり。そしてそれをお父さんのせいにしたわ。私よりも仕事が大事なの？って。当時の私はまだ若かったから、いろんなものの分別がうまく出来ていなかったのね。そしてお父さんに言ったの。もう一緒にいられないって。別れましょうって。お父さんはそんな母さんに何度も謝ってきた。ごめんね、ごめんねって何度も」

母親は荒れた自分の手を見つめてながら笑っていた。

「それから、お父さんと別れてから、母さんは以前よりも寂しくなったわ。そしていろいろ考えた。寂しくなるのが嫌だったから、仕事もたくさんしたわ。そうすればその寂しさも少しは和らぐと思って。でも結局その穴は埋められなかった。これは何だろう。この穴は何なんだろうって、ずっと考えた。そしてそれはきっとお父さんも同じだったんだって気がついた。埋められないでいるのは私だけじゃないんだって。それはとても深い後悔だった。でもどうすることも出来なかった。お父さんと寄りを戻したいと思っても、思うだけで何も出来なかった。あれだけお父さんを傷つけたのに、それは何か虫のいい話なんじゃないかって。例え戻れたとしてもまたお互いが傷つくんじゃないかって。そんな日々がしばらく続いたわ。そんな時お父さんから連絡が来たの。仕事が落ち着いたから一度会いませんか？って。母さんそんなだったから、それに返事を返せなかった。自分に罰を与えるみたいに、お父さんを傷つけた代償を払うかのように」

僕は気がつく、その当時の二人が今目の前にいるような、そんなリアルな映像に引き込まれていて、さらにその話しに没頭していく。

「当時は携帯なんてなかったから、手紙がね、お父さんからの手紙が毎週届くようになったの。母さんにまたあの悩ましい日々が訪れた。どうしたら良いのか。どうするべきなのか。そんな自問自答の日々が。でもその時の母さんにはわかっていたの。お父さんの書いた手紙はとても簡潔

なものだったけど、それを物語っていたの。お父さんにも同じ悩ましい日々が訪れていることを。お父さんもまたたくさんの後悔と罪を抱えて日々を過ごしていることを。そしてお父さんからある手紙が届いたの。山の景色が映った写真とここで会いませんかっていうお父さんの言葉が綴られた手紙が。その山は、あなたたちも行ったことがあるけれど、お父さんと母さんの思い出の場所だったの。その手紙を見たらその当時の初々しい記憶がぱっと蘇ってきて、そしたら自分が抱えていた悩みも一気に吹き飛んで。母さんはお父さんに返事を書いた。お父さんから来たその手紙は今も大事に取ってあるわ」

コンロに乗せたヤカンが音を立て、母親は思い出したようにガスを消しに席から立ち上がった。そして再び席に戻ると話し始めた。

「当日、お父さんと山の麓で待ち合わせて、それからその山を登り始めた。特に会話をする必要もなく、二人は黙々と山を登っていったわ。何か恥ずかしかったし、二人とも照れていたのね。久しぶりの再会だったし、まだ子供だったから。お父さんと母さんはただ黙って山を登った。そこにはたくさんのお父さんと母さんの思い出が落ちていたわ。もしかしたらそれを拾うことで精一杯だったのかもしれないわね。そうしてやっとの思いで頂上に辿り着いた。お父さんと母さんはまたしても黙ったまま、しばらくその頂上から見える景色を見つめていた。その景色は今も忘れないわ。世界が急にパノラマになって、たくさんの街が小さく映って。空が見渡せると世界がこんなに大きく見えるんだって。そしたらお父さんがぽつりと言ったの。本当にぽつりよ。私がちゃんと聞けなかったら山頂に吹く風に簡単にさらわれちゃうぐらい小さい声で、僕はこの景色を君とずっと見ていたいんだって言ったの。それは結局プロポーズの言葉になるんだけど、母さんは、はいとだけ答えて、そしてまた二人はずっとその景色を見ていた。お父さんはどうだったか知らないけれど、母さんにはそこに未来がしっかりと映っていたの。ああこの人とこれから一緒に生きていくんだって。それが母さんとお父さんが結婚した理由。どう？参考になった？」

母親は笑ってそう言うと、もう一度ヤカンに火をかけ、朝食の準備に取りかかっていた。

僕は黙って頭の中に浮かんだその山頂の景色を眺めていた。僕は確かに両親に連れられて何回かその山に登ったし、だからこそその景色をリアルに思い浮かべることが出来る。そこに二人のそんな思い出があったんだって、記憶の中に映った山の景色をずっと眺めていた。

僕の抱えているこの葛藤を、歩美もまた同じようにして抱えているのだろうか。海で見せた涙はそういうことなのか。本当はそうじゃなくて、僕がただ寂しくて、僕の悲観的な目がそう映していただけではないのか。どっちにしろ歩美は今悲しんでいる。そして苦しんでいる。吐き出せない想いを抱えながら生きている。それを見た僕もまたそうだ。

僕はこれからどうしたらいいのだろうか。何が正しくて何が正しくないのだろうか。僕が思う正しさとは一体何なのだろうか。またそうでないものは何故そうでないのか。頭の中ではお題はあるものの全く討論されない会議が開かれていた。僕はその席に座って早く答えを出したいのに、話しは一向に進まない。

父さんはどういう気持ちで母さんに手紙を送ったのだろうか。父さんもまた僕と同じように堂々巡りをしていたのだろうか。そうに違いない。巡り巡って結論を出しのだろうか。どっちにしろ結論を出さないことにはやっていけなかったはずだ。それは母さんも同じこと。僕はすべてのこと

に結論を出すことが正しいとは思わない。結論が義務付けられているわけじゃないし、結論を出さなくて良いこともある。でも僕と歩美に関しては、そうじゃない。僕と歩美にはあるひとつの結論が必要だ。そこに向かって僕らはもう歩き出している。僕は何だかそんな気がした。

しかしそうは言っても、僕はそれを出すのが怖くて仕方がなかった。僕が今見ている道の先には何もない。正確に言うと、その道の先には誰の目にも留まるような大きな標識が立てられていて、その標識を最後に道が途絶えている。そして僕はその道で立ち止まり、少し離れた場所でそれを眺めている。眺めが良いからではない。ちょっと進んではまた元の位置に戻っているのだ。そんな風にしてあっという間に一月が経った。

新年が明け、周りは心機一転の雰囲気だったが、僕は少しもそんな気にはなれなかった。僕と歩美は正月も共に過ごしたし、それからも会っている。しかしそこには何か吐き出しきれない淀みみたいなものが溜まっていて、僕らの会話はよく止まっていた。その淀みに足を取られるようにして、無言の時間が増えていった。普段ならそんな気にならなかったのかもしれない。年中喋っている恋人同士というのも何か変だ。それに会話が止まっていると言ったが、それは何かに止められたという感じがした。会話が進んでいくとその先にあの標識が見えてくる。どんな道を通ろうが必ずそこに行き着く。そこから先に道はない。そしてそこで立ち止まり、またしても考えなければいけなくなる。まだ駄目だと、もしかしたら他の道があるんじゃないかと道を引き返す。そして見つけた新たな道を歩いても結局は最後にその標識が姿を現す。そして選べる道はもうそんなにないかもしいと僕は思い始めていた。

どうして大切な人とずっと一緒にいられないのだろうか。

幸せを願っているはずなのにどうしてこんなに苦しまないといけないのだろうか。

大切な人の悲しみを知りたいのにどうして自分の悲しみしか受け入れられないのだろうか。

その人の幸せが自分の幸せだと言う人がいるけれど、その人はその人がいなくなった世界で果たしてそう言い切れるのだろうか。

相手を思いやることと自分を思いやることにどうして矛盾が生まれてくるのだろうか。

伝えたい想いと吐き出した言葉にどうしてこんなにも距離があるのだろうか。

人は愛し合い傷つけ合いながら一体何を手にするのだろうか。

僕が今手にしているものは、さよならの言葉だった。

僕はそれをどうしても言えなかった。僕は僕が愛と思える言葉を歩美に何度も伝えてきた。けれどそれが歩美の為だったとしてもどうしてもそれを吐き出せなかった。歩美を失いたくなかった。その言葉のもたらす大きな力に怯えていた。僕は何でそれを手にしているのだろうか。手を振り払ってもそれを振り払うことが出来なかった。もうひとつの手で違うものを掴もうとした。何度もいろんなものに手を伸ばした。でも結局そこにも同じものが貼り付いた。僕の幸せは一体どこにあるのだろうか。ずっと側にあった幸せはどこに行ってしまったのだろうか。そして僕は両の手に乗せた言葉をひとつに重ねた。寂しさや悲しみや憤りが身体から溢れてきた。でも重ねた手からは温もりや愛おしさが溢れてきた。僕はさらにそれをひとつに重ねた。

三月のある日、僕はひとつにしたそれを歩美に渡した。そっと優しく丁寧に。

「さようなら」

四月のやわらかな風が吹き抜けていく。僕は新学期が始まり、その初日、三度目の新鮮な匂いを吸い込みながら大学までの道を歩いている。昨日降った雪が道端にまだ積もっている。昨晚から降り続いた雪は朝方には止み、そこから一転、暖かくて穏やかな一日の始まりが訪れていた。まるで昨日までが冬、今日からが春と、しっかりと区分されたような移り変わりようだった。どうしていつもこんな急なんだと、僕は文句を言うようにして空を見上げた。そして歩美のことを思い出していた。

歩美はもう大学にはいなかった。学年が移り変わるのを機に歩美は海外の大学に留学をして

しまった。それは本当に大きな決意だった。渚さんも一緒に同行しているので生活の心配はしていないが、僕の心に空いた穴はさらに大きくなった。

通勤者で賑わう街道には早くも緑の新芽が芽生えて、その道に春の足音を響かせていた。僕が出した結論が正しかったのか、今もそれはわからない。でも間違っていないと思う。それによって歩美は新たな夢に進むことが出来たのだから。

あの後、沙織さんからいろいろと歩美の話を聞いた。歩美はずっと悩んでいた。日本でもその夢を叶えることは出来た。夢とは臨床心理士になることだった。きっとお兄さんを亡くしてからずっと抱いていたのだろう。自分と同じ境遇の人を助けたいと。その夢を海外で叶えるきっかけは言うまでもなく渚さんの存在だったのであろう。そこにもいろんな葛藤があったに違いない。でもそのことよりも一番悩んでいたのが高志のことよ。沙織さんはそう言っていた。海外に行けばしばらくは帰って来れない。それがお互いの足を引っ張ってしまうのではないか。何が正しい選択なのかわからなくなって何度も泣いていたそうだ。歩美も僕と同じように悩んでいたのだ。それを聞いて僕は少し心が楽になった気がした。悲しみや寂しさは残るものの、それを歩美も共有していたのだと知って心が軽くなったのかもしれない。

季節は着実に動き出している。

僕は吹き抜ける春の足音を聞きながら歩美のことを考えていた。

彼女が吐き出せなかった想いや打ち明けられなかった言葉たちを抱きしめる。何度も何度も、それが僕の心に染み渡っていくように。

風が耳元を優しく通り抜けた。

僕は注意深くそれに耳をすませる。

そうするとその風に混ざって確かに聞こえてきた。

歩美の言葉が。

愛の言葉が。

今僕の目の前を通り過ぎていく人達は、ちゃんと大切な人に大切だと、その想いを伝えられているのだろうか。それは言葉でなくてもいい。言葉である必要なんてどこにもない。でも言葉は…。

僕は目の前を通り過ぎる人の群れから離れるように、ゆっくりと大きく伸びをした。

言葉はいつでもしっかりと愛を、ひどくぼやけてつかみ所のない愛を形作ってくれる。季節が巡ってもそれを思い出させてくれる。僕は春になれば初めて出会った時の歩美と再会することが出来る。夏になれば澆刺とした声で笑う歩美に出会うことが出来る。秋になれば寂しそうに空を見上げる歩美に出会うことが出来る。冬になれば僕の胸で泣き崩れる歩美に出会うことが出来る。

僕は目の前に広がった雪解け道を見つめた。昨日の売れ残りのようなこんな雪解け道も、暖かい春の陽光が、風に乗った言葉たちが、それをきらきらと輝かせてくれていた。

そして僕は春の風に乗って届いた歩美の言葉に再び耳をすませる。

それは厳密に言えば言葉ではなかった。

それでも僕には聞こえてくる。

それでも僕には見える。

歩美が目を輝かせ歩いている姿を。

僕は大きく息を吸い込んで、それからきらきらと輝いた雪解け道を再び歩き始めた。

愛の言葉

<http://p.booklog.jp/book/64337>

著者：月之野 誠

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tsukinoyamakoto/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64337>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64337>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ